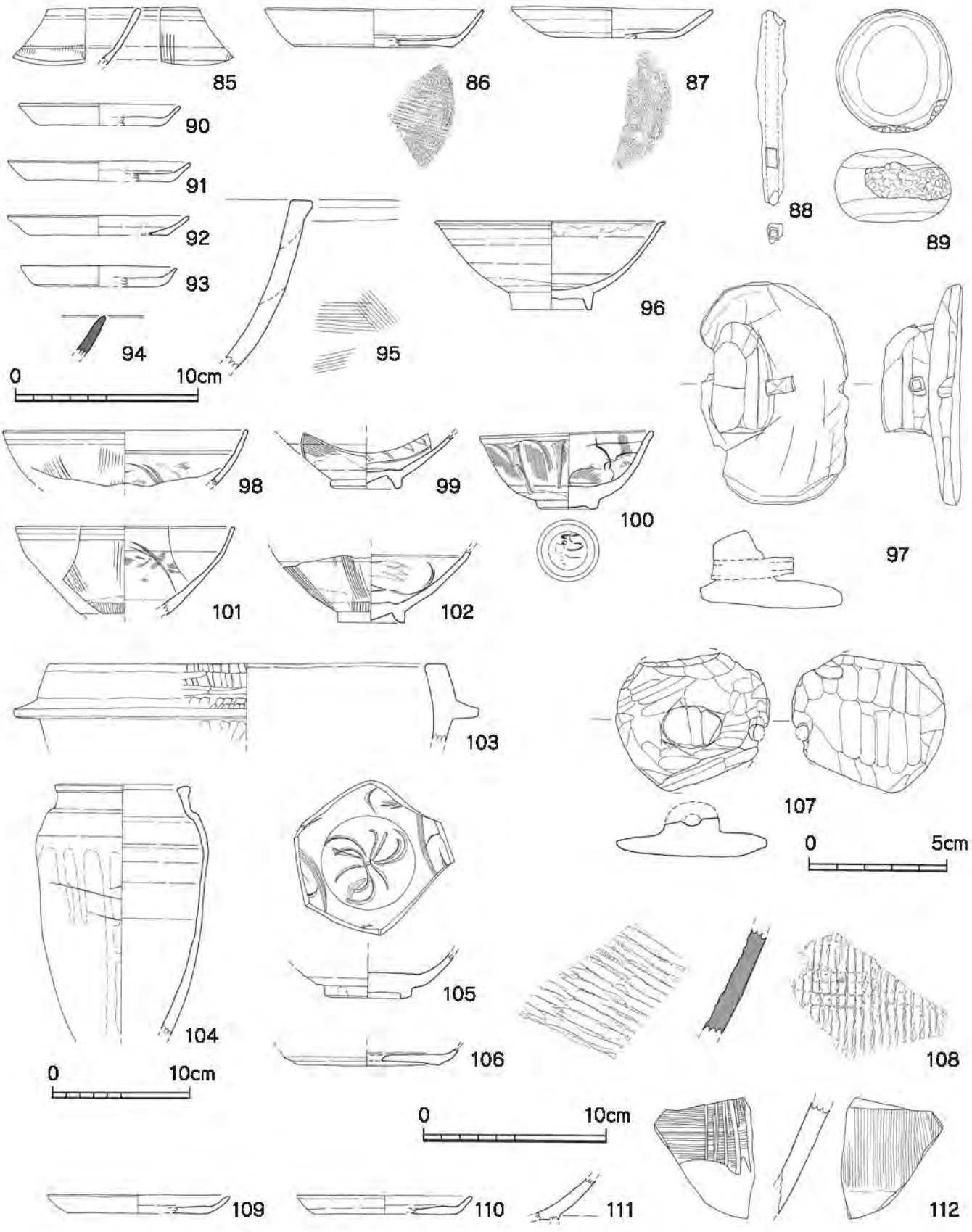
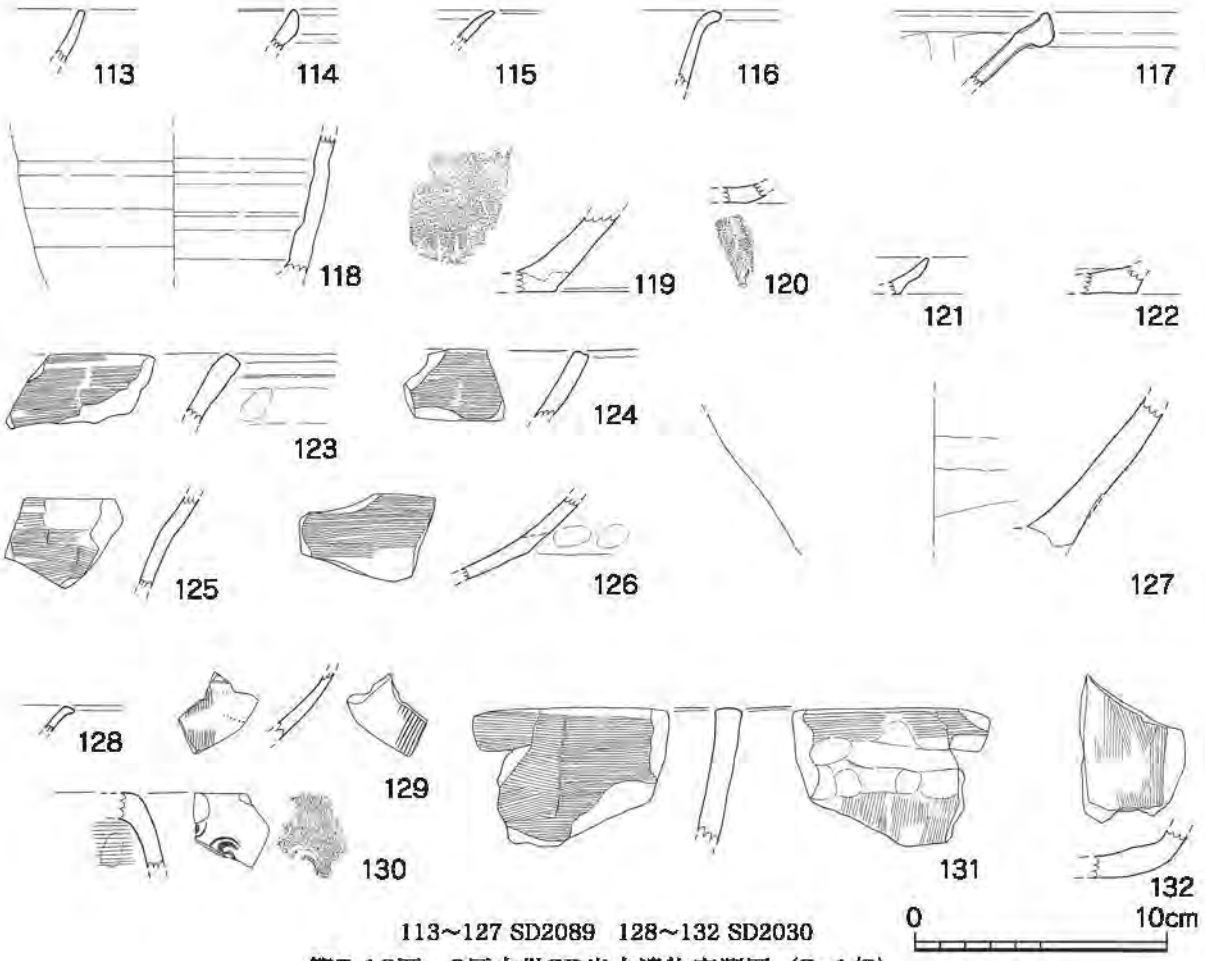


85 SP2095　86 SP2096　87 SP2060　88 SP2069　89・95 SP2087　90 SP2071
91・92・97 SP2073　93 SP2102　94 SP2107　96 SP2088　98 SP2056　99～104 SP2055　105 SP2054
106 SP2042　107 SP2077　108 SP2037　109 SP2065　110 SP2066　111 SP2045　112 SP2097

第7-15図　2区中世SP出土遺物実測図
(88・89・97・107はS=1/2、86・87・95・96・98～106はS=1/4、他はS=1/3)



113～127 SD2089　128～132 SD2030

第7-16図　2区中世SD出土遺物実測図（S=1/3）

119は14世紀代の瓦質の擂鉢底部で、内面にX字状の掻き傷が認められる。色調は内面が灰黒色、外面が淡灰色を呈す。**120**は土師器小皿の底部片で、底部外面に回転糸切り痕が認められる。**121**は土師器小皿片で、底部外面にわずかながら糸切り痕が認められる。**122**は土師器坏底部片で、底部外面に回転糸切り痕が残る。**123～126**は14世紀代の土師質の鍋で、内面はヨコハケメ、外面はヨコユビナデで仕上げる。**123**は口縁部である。**124**は口縁部で、外面にはススが付着する。**125**は頸部で、内面が橙色、外面が灰褐色を呈す。**126**は胴部である。**127**は土師質の鉢底部で、1/6が残存し、復元底径11cmを測る。細～粗砂を少なく含み、焼成はやや不良で器面の剥落が目立つ。その他、鉄滓が4点出土している。**161**（図版7-10-79）は小型の椀形滓で、下面は木炭のスタンプを残し、凹凸をなす。他の3点も、摩滅が強く判然としないが、椀形滓と思われる。

SD2030（第7-2・3・6図、図版7-1・4）　**出土遺物**（第7-16図、図版7-10）

2A区の西端を北北西に延び、2B区では削平により消滅している溝である。幅は1.8～2.4mで、断面形は中央よりやや西側が深くなっており、深さ16cmを測る。埋土は黄灰褐色シルト質粘土で、マンガンを含み、下部は灰色みが強い。溝の時期は15世紀代と考えられる。

128は11世紀後半～12世紀中頃の白磁碗口縁部で、色調は胎土がややオリーブがかった灰白色、釉はオリーブがかった淡灰色を呈す。**129**は12世紀中頃～12世紀後半の同安窯系青磁碗胴部で、胎土はやや黄味がかった灰白色、釉は透明でオリーブ黄色を呈す。**130**は15世紀代の土師質の火舎口縁部で、内面はヨコハケメ、外面には巴文のスタンプが施される。胎土は砂をあまり含まない精選土で雲母が目立ち、

色調はにぶい褐色を呈す。**131**は14～15世紀代の土師質の鍋口縁部で、内面と外面口縁部をヨコハケメ、胴部をタテハケメで調整し、口縁部下にヨコユビナデをめぐらす。胎土は細砂を含み、色調は内面が橙色、外面がにぶい褐色を呈す。**132**は、131と同質の鍋底部で、内面はハケメ調整で、ススが付着する。胎土は細砂をごくわずかに含む精選土で、色調は褐灰色を呈す。その他、小型の鉄滓が1点出土しているが、摩滅が強く形状等は不明である。

土坑墓　SR2041（第7-3・17図、巻頭図版3、図版7-5）　**出土遺物**（第7-18図、図版7-10）

2A区北側で検出した北北西軸の土坑墓である。平面形は隅丸長方形で、長さ132cm・幅60cm、底面は平坦で、深さは12cmを測る。埋土は、灰色シルト質粘土で、黄褐色土をブロック状に含み、マンガンが多い。鉄釘や棺材痕跡などは確認できなかったが、副葬品は床面から4～8cm浮いた状態で出土している。なお、遺構実測図に反映されていないが、刀子（140）と土師器坏（138）の間に砥石（139）が置かれていた（巻頭図版3-3）。時期は12世紀前半と考える。

133は、青磁碗口縁部片で、胎土は淡灰色、釉は薄く灰オリーブ色を呈す。**134**～**137**は土師器小皿、**138**は土師器坏である。いずれもほぼ完形で、色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色、摩滅による器面劣化が著しい。**134**は口径9cm・底径6.3cm・器高1.2cm、**135**は口径8.8cm・底径6.4cm・器高1.1cm、**136**は口径9cm・底径6.8cm・器高1.1cm、**137**は口径9cm・底径6.2cm・器高1.1cm、**138**は口径15.6cm・底径11.2cm・器高3.6cmを測る。底部外面の痕跡は、**136**が板状圧痕、**137**がヘラ切り痕、**134**・**135**がヘラ切り痕と板状圧痕、**138**が板状圧痕であり、いずれにも明確な糸切り痕は認められない。時期は12世紀前半と考える。**139**は細粒砂岩製の砥石片で、残存部分で長さ4.7cm・幅8.6cm・厚さ6.2cm・重量225.6gを測る。前面と右面が研面で丸みがあり、キメが細かく研ぎ方向などは不明瞭である。破断面には複数の割れ面があり、意図的に砕かれている。**140**は鉄製刀子で、切先と中子部分が破断しており、残存長8.5cm・幅2.8cm・厚さ0.4～0.55cmを測る。

土坑　SK2040（第7-3・17図、図版7-5）　**出土遺物**（第7-18図、図版7-10）

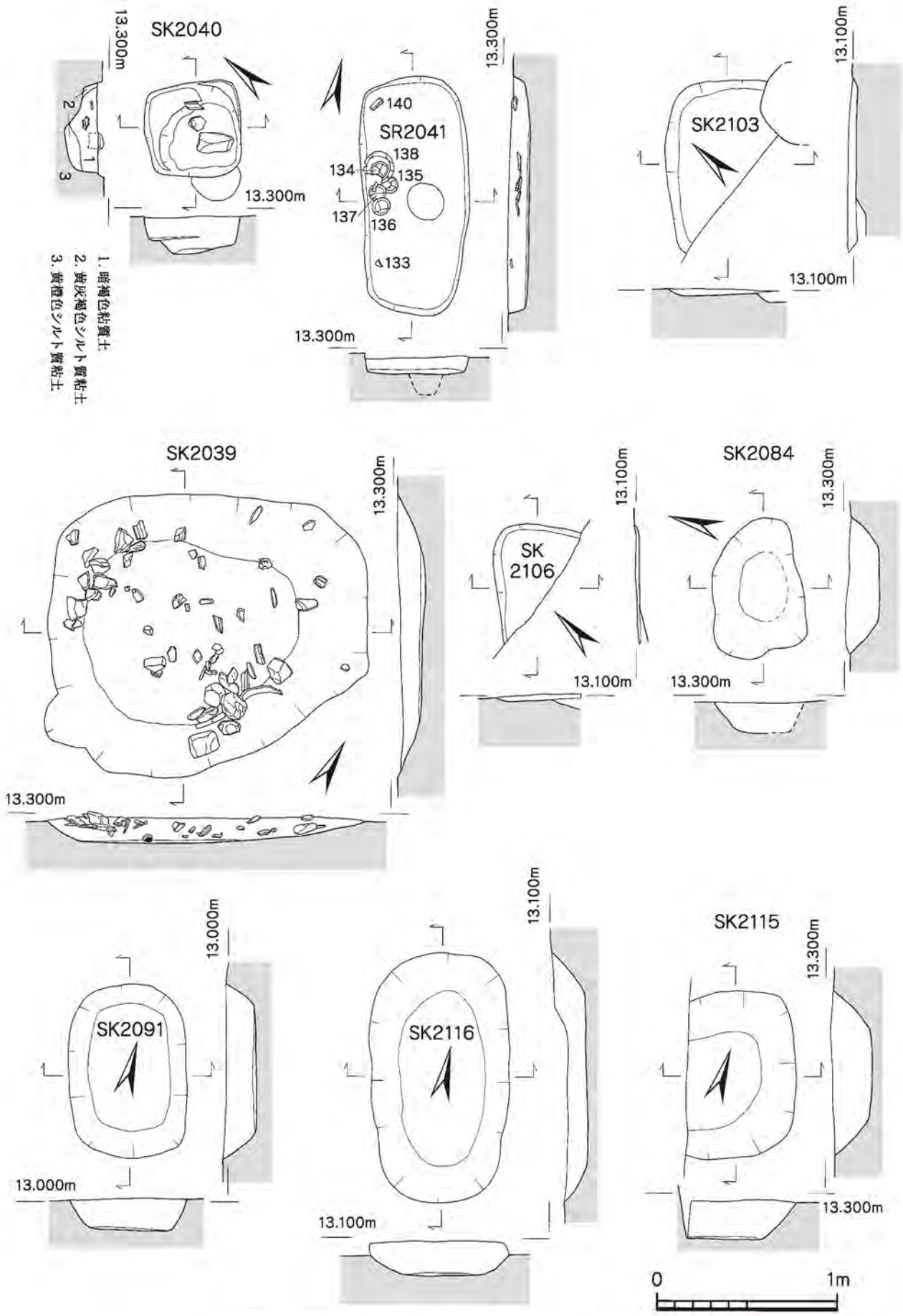
2A区北東で検出した小土坑である。平面形は幅54cmの方形、断面形は南側が一段深くなり、深さ20cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、黄橙・黄灰粘土小ブロックを多く含む。遺物の他には、径10～20cmの受熱痕のある花崗岩亜角礫が出土した。時期は12世紀前半と考える。

141は、白磁碗II類もしくはV類（C期：11世紀後半～12世紀前半）で、高台径5.8cmを測る。胎土は黄味がかった灰白色、釉はややオリーブ色がかった灰白色を呈す。外面は露胎で部分的に白化粧土が認められる。**142**は12世紀代の滑石製石鍋口縁部で、内外面にススが付着する。

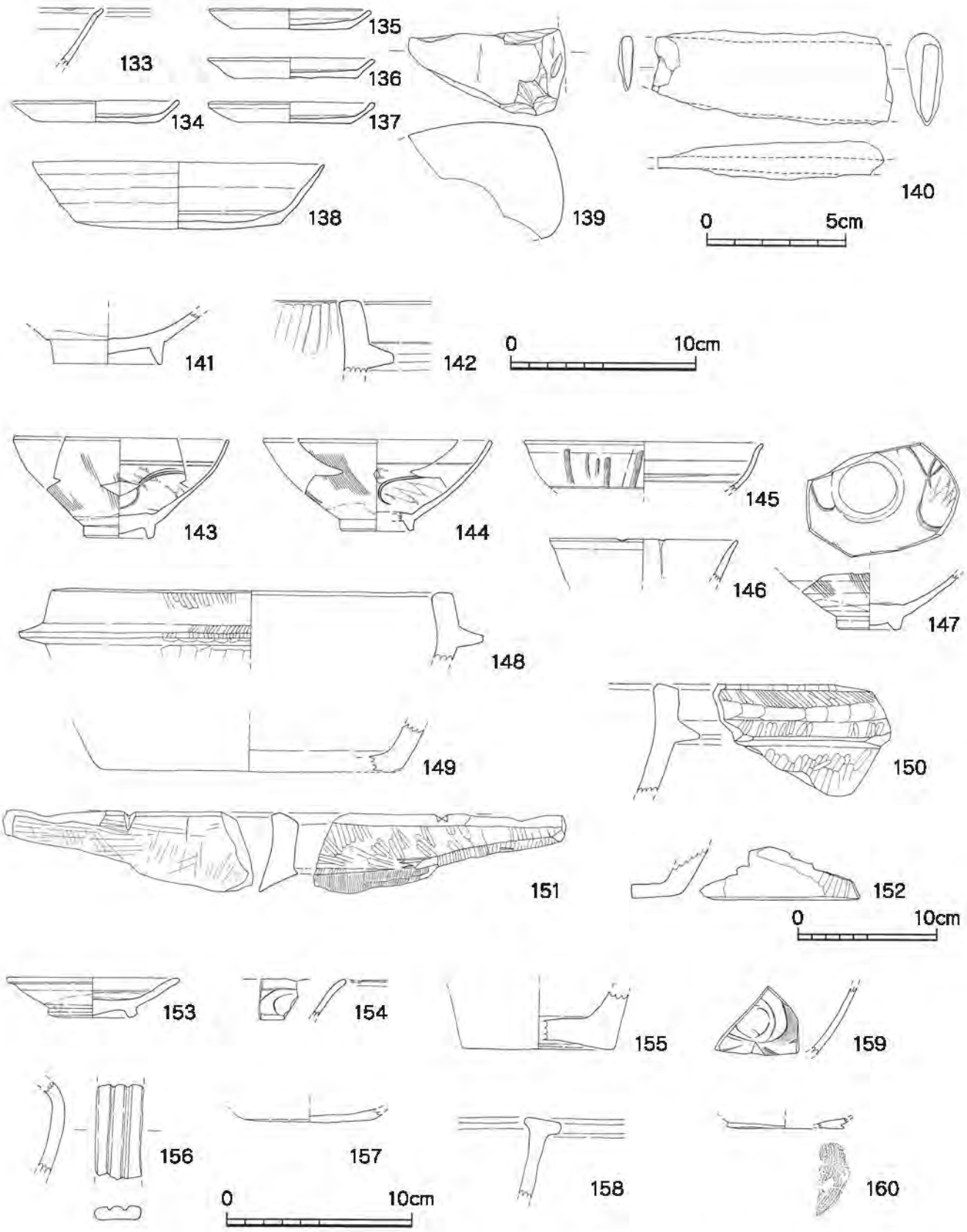
SK2039（第7-3・17図、図版7-5）　**出土遺物**（第7-18図、図版7-10）

2A区中央東側で検出した土坑である。平面形は略隅丸方形で、1.8×1.6m、断面形は擂鉢状で、深さは15cmを測る。埋土は暗褐色・黄褐色シルト質粘土の混土でマンガン粒を含む。遺物は土坑内で接合する状態で、完形品の一括廃棄というよりは、廃棄品の再廃棄という状況を呈している。時期は12世紀中頃～後半である。SB2121と同時存在であれば、合わせて竪穴付掘立柱建物となる。

143・**144**・**147**は同安窯系青磁碗 I-1b類（D期：12世紀中頃～後半）である。**143**は1/3が残存し、復元口径15.6cm・器高7.2cmを測り、胎土は灰色、釉は薄くムラがあり、オリーブ黄色透明ガラス質である。**144**は1/6が残存し、復元口径16.6cm・器高6.6cmを測り、胎土は灰色、釉は薄くムラがあり、灰オリーブ色透明ガラス質である。**147**の胎土は黄味がかった灰白色で、釉はオリーブ黄色透明である。**145**は同安窯系青磁碗 III-1a類（D期：12世紀中頃～後半）で、1/6が残存し、復元口径17.2cmを測る。胎土は淡灰色で、釉はムラがあり、オリーブ黄色透明である。**146**は龍泉窯系青磁小碗 I-3類（D期：12



第7-17図　2区中世SK・SR実測図（S=1/30）



133～140 SR2041　141・142 SK2040　143～158 SK2039　159 SK2106　160 SK2103

第7-18図　2区中世SR・SK出土遺物実測図（140はS=1/2、143～152はS=1/4、他はS=1/3）

世紀中頃～後半）で、1/6が残存し、復元口径13.7cmを測る。口縁は輪花で、内面を白堆線で区分けする。胎土はやや黄色がかった灰白色で、釉はやや厚く、灰オリーブ色透明である。内外面に大きな貫入が認められる。**148～152**は、12世紀代の石鍋である。**148**は上半部が1/3残存し、復元口径29cmを測る。鍔以下の外面にススが付着する。**149**は底部で1/6が残存し、復元底径22cmを測る。外面にススが付着する。**150**は上半部片で、内面と鍔以下の外面にススが付着する。**151**は石鍋口縁部の再加工品で、胴部の破断面を面取し、口唇部に切り込みを入れている。用途不明であるが、転用のための素材の可能性がある。**152**は底部の再加工品で、底部破断面を面取し、胴部外表面の一部を薄く削っている。用途不明である。**153**は白磁皿III-1類（D期：12世紀中頃）で1/4が残存し、復元口径9.4cm・器高2.2cmを測る。胎土は淡灰色、釉はオリーブ色がかった灰白色透明である。下半は露胎、内面は見込みと胴部の境で釉を剥いでいる。**154**は白磁浅形碗XIII類（C期：11世紀後半～12世紀前半）で、口縁は輪花、胎土は灰白色で、釉は灰白色透明である。**156**は陶器水注の把手で、幅2.6cm・厚さ0.7cmを測り、色調は灰色を呈す。**157**は土師器椀底部で、底径7cmを測る。底部外面には、回転糸切り痕・板状圧痕が認められる。**155**は陶器壺底部で、1/6が残存し、復元底径8cmを測る。色調は内面がにぶい橙色、外面が淡灰色を呈す。**158**は土師質の鍋口縁部で、口唇部がT字形をなす。胎土は細砂を含み、焼成は良好、色調は内面がにぶい橙色、外面はススけて黒褐色を呈す。肥前型鍋に類似するもので、時期は12世紀中頃～後半であろうか。その他鉄滓が1点出土している。

SK2103（第7-3・17図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-18図、図版7-10）

2B区南端で検出された北東軸の浅い土坑である。平面形は隅丸方形で、長軸長は約1m、深さは5cmほどである。埋土は暗褐色粘質シルトである。SK2106との類似性から12世紀中頃～後半と考えたい。

160は土師器小皿で、1/4が残存し、復元底径6.4cmを測る。底部外面には糸切り痕がみられる。

SK2106（第7-3・17図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-18図、図版7-10）

2B区南端で検出された北東軸の浅い土坑である。平面形は隅丸方形で、深さは3cmほど、埋土は暗褐色粘質シルトである。時期は12世紀中頃～後半である。

159は龍泉窯系青磁碗I類（D期：12世紀中頃～後半）で、胎土は灰色、釉は灰オリーブ色透明を呈す。内面に片切彫の劃花文を施し、貫入はみられない。その他、瓦器の小片が出土している。

その他土坑（第7-2～4・17図、図版7-1・5）

以下の土坑は、形態・埋土の特徴から中世と判断した。**SK2084**は、2A区北側で検出された東東北軸の土坑で、長さ78cm・幅51cm・深さ18cmを測る。埋土は暗褐色シルト質粘土で、図化に耐えない土師皿小片、弥生土器小片が出土している。**SK2091**は、2C区北側で検出された北北西軸の土坑で、長さ96cm・幅66cm・深さ17cmを測る。埋土は灰緑色砂質シルトで黄褐色シルト粘土（地山）ブロックを含む。**SK2116**は、2B区東側で検出された北北西軸の土坑で、長さ138cm・幅75cm・深さ17cmを測る。埋土は茶褐色シルトでマンガンを多く含む。**SK2115**は2A区西端で検出された北北西軸の土坑で、長さ93cm・深さ21cmを測る。埋土は灰色シルト質粘土と茶褐色シルト質粘土の混土である。

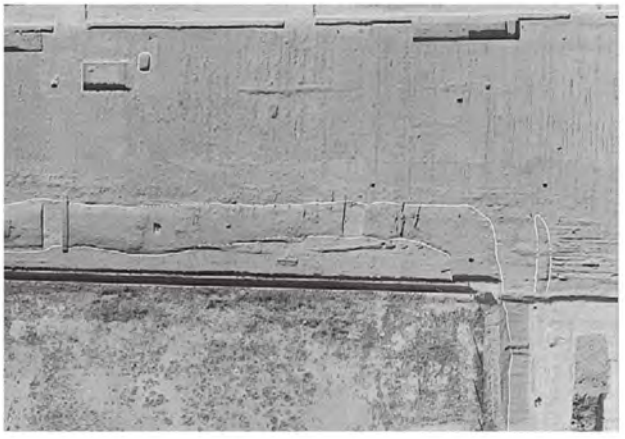
第3節　小結

2D区トレンチ1で弥生時代前期の遺物が出土したのは遺構面から80cmも下からであり、2区では砂礫層から遺構検出面まで、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物包含層が厚く堆積している。陸地化がすすみ、遺構が形成されはじめるのは弥生時代中期後半からである。中世の12世紀代には、屋敷墓SR2041と大中小の掘立柱建物が形成される。その後、13世紀代が空白となり、14世紀代に区画溝SD2089、15世紀代に溝SD2030が構築される。近世には現在の地割に平行した耕作痕跡が認められる。

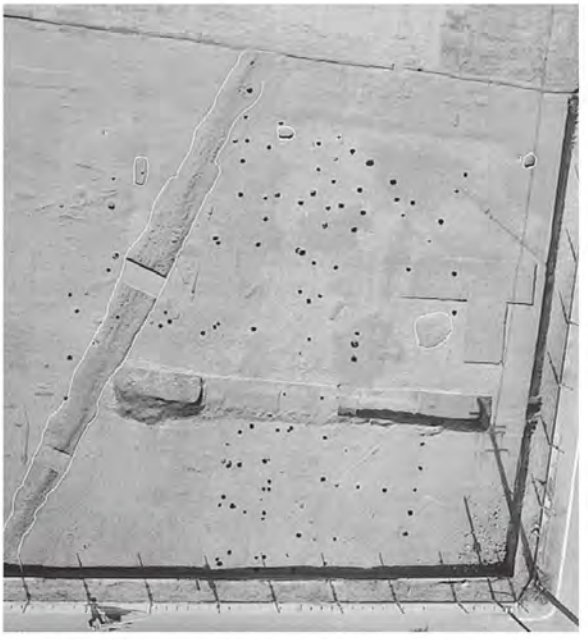
1．2D区全景（西から）

2．2区全景（南から）

3．2B区東部（南から）



4．2C区東部（南から）



5．2A区東部（南から）

図版7-2

6．2D区トレンチ1西壁土層

7．2D区トレンチ2西壁土層

8．2D区トレンチ4西壁・北壁土層

9．2D区トレンチ3西壁土層

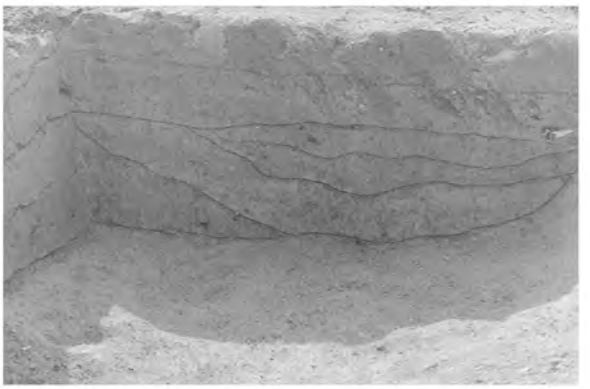
10．試掘トレンチ1東側北壁

11．SD2089土層C（東から）

12．SD2089土層D（東から）

13．SD2093土層B（北から）

14. 試掘トレンチ1西側北壁



15. SD2089土層E（東から）

16. SD2093土層C（北から）

17. 2C区トレンチ7（北から）

18. 2C区トレンチ6（東から）

19. 2C区トレンチ5（東から）

20. 2C区トレンチ1（北から）

21. 2B区トレンチ3（北東から）

図版7-4

22. SD2001（南から）

23. SD2031（南から）

24. SD2030（南から）

25. SD2031（北から）

26. SD2093（北から）

27. SD2089杭（南から）

28. SD2089（東から）

29. SD2089（西から）

30. SK2094（西から）

31. SK2040（北西から）

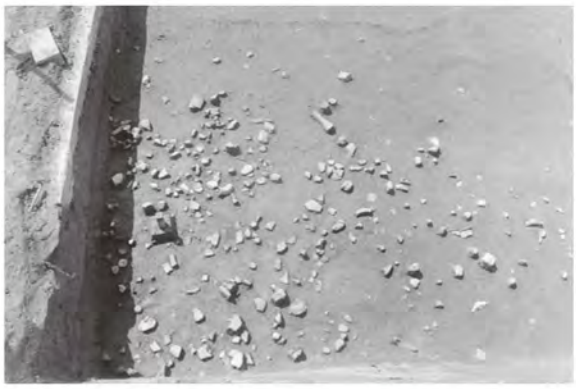
32. SR2041（南西から）

33. SK2039（南東から）

34. SK2091（西から）

35. 2D区トレンチ1　遺物14出土（東から）

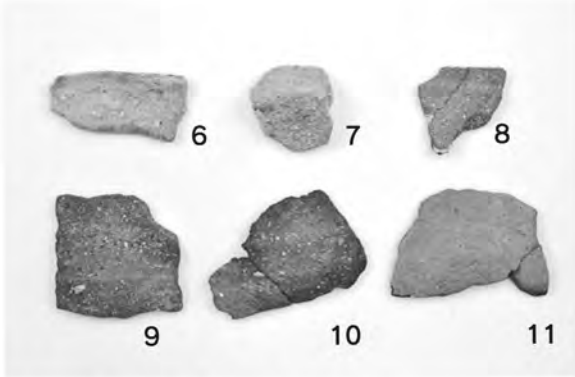
36. SD2093　遺物24出土（西から）



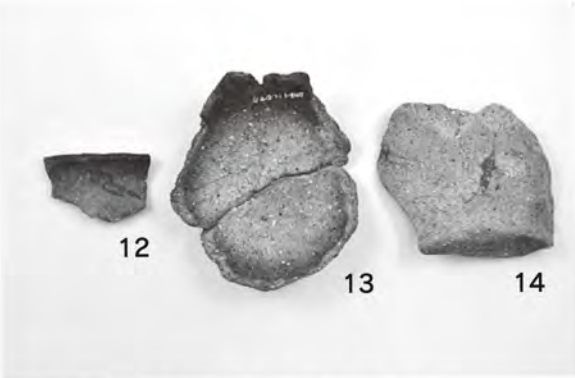
37. SX2032南区遺物出土（東から）

図版7-6

38. J-11区出土遺物



39. SX2099出土遺物



40. 2D区トレンチ1、5層出土遺物

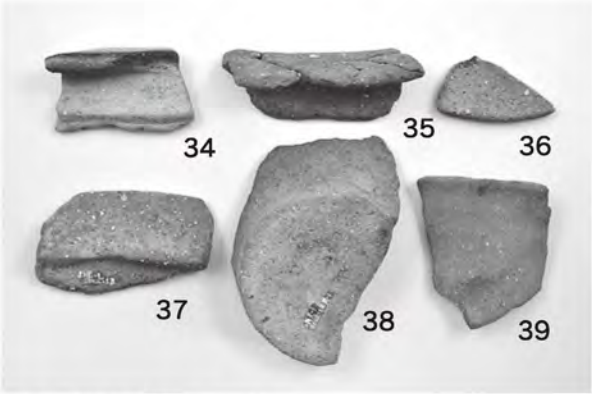
41. SX2090出土遺物

42. SD2031出土遺物

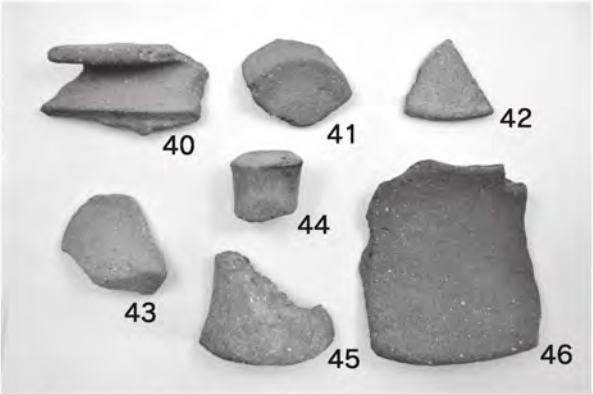
43. SD2093出土遺物1

44. SD2093出土遺物2

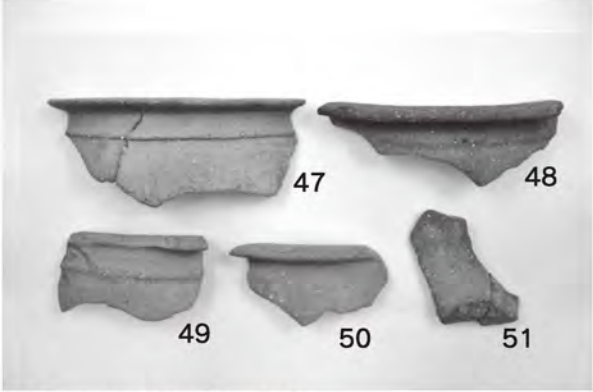
45. SD2061出土遺物



46. SX2002出土遺物



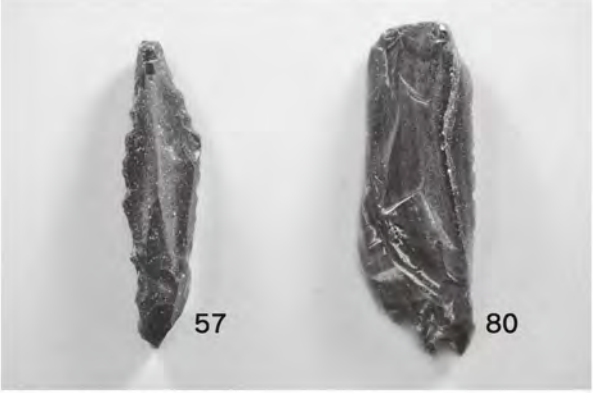
47. SX2032出土遺物1



48. SX2032出土遺物2

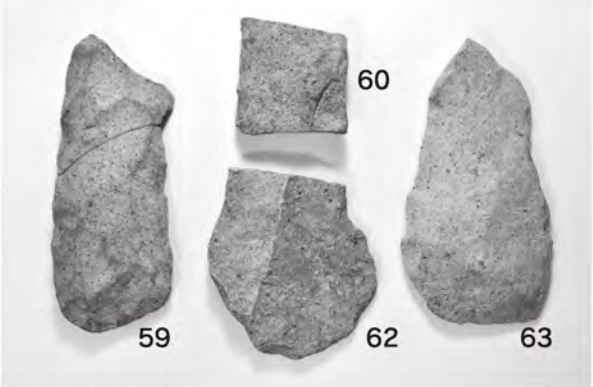
49. SX2032出土遺物3

50. 打製石鏃



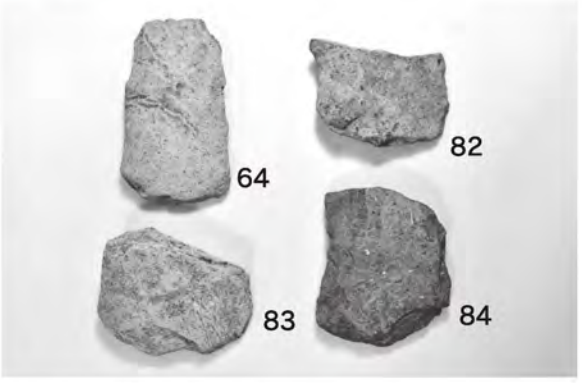
51. 縦長剥片

52. 磨製石斧・磨石・叩石

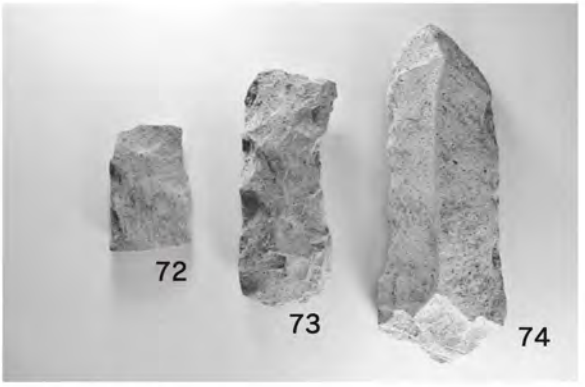


53. 打製石斧1

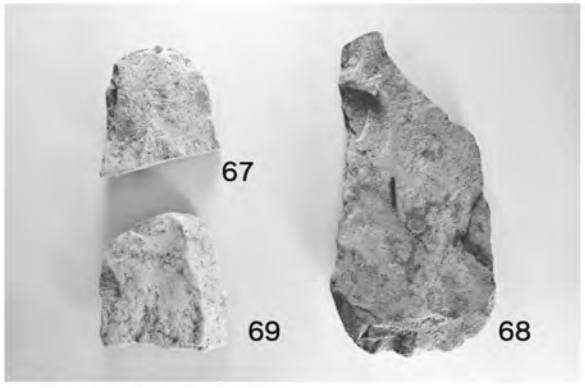
図版7-8



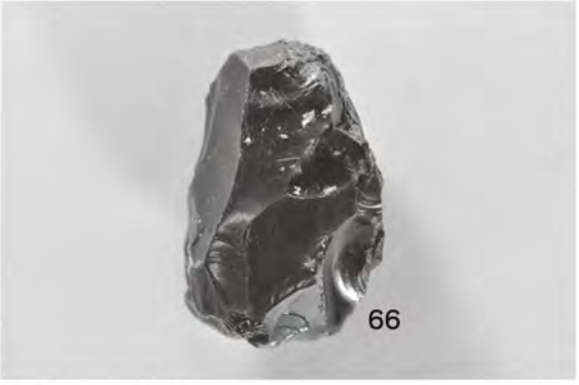
54．打製石斧2



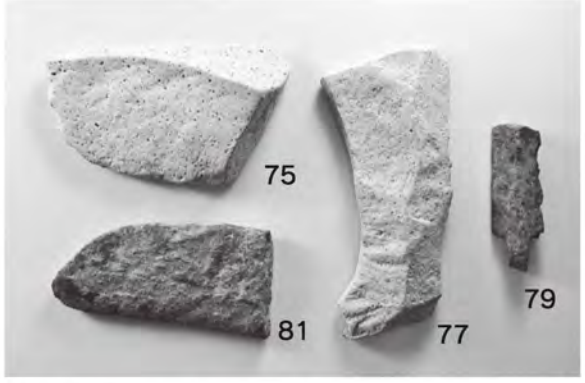
55．打製石斧3



56．打製石斧4



57．楔転用石核



58．横刃型石器・剥片・磨製石鏃・石鎌

59．SP出土遺物1

60．SP出土遺物2

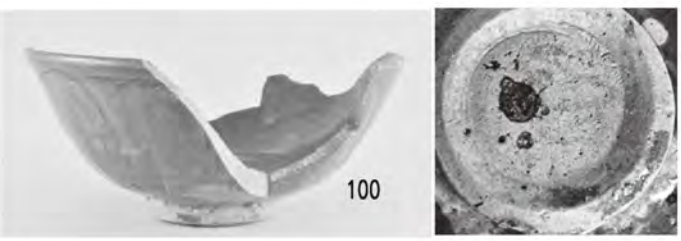
61．SP2087出土遺物

62．SP2088出土遺物

63．SP出土遺物3

64．SP2056出土遺物

65．SP2055出土遺物1



66．SP2055出土遺物2

67．SP2055出土遺物3

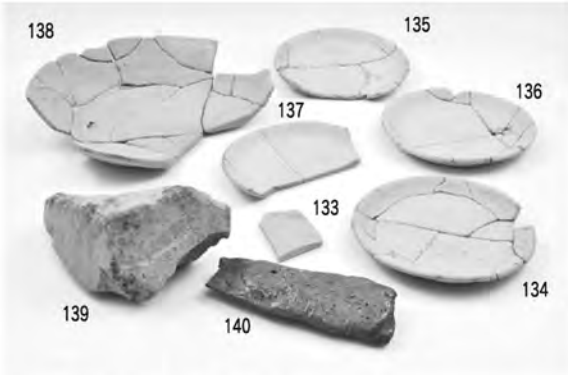
68．SP出土遺物4

69．SD2089出土遺物1

70．SD2089出土遺物2

図版7-10

71．SD2030出土遺物



72．SR2041出土遺物

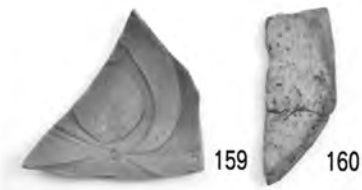
73．SK2040出土遺物

74．SK2039出土遺物1

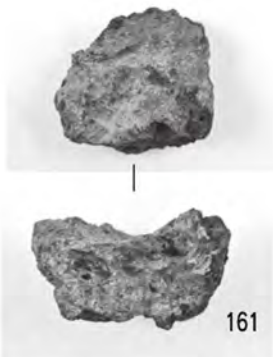
75．SK2039出土遺物2

76．SK2039出土遺物3

77．SK2039出土遺物4



78．SK2106・SK2103出土遺物



79．SD2089出土鉄滓

第Ⅷ章　千里遺跡第1次調査3区

第1節　調査の概要（第8-1・2図、図版8-1-1）

調査区は区画整理地西側に位置する。A～Cの小区を設定した。個人住宅用地（A・C区）と道路新設部分（B区）で、全体の調査面積は1,887㎡である。当初、C区南側は調査不要区であったが、調査で溝が続くことが確認されたので調査区を拡張している。調査は平成21年11月24日から重機で表土除去を開始し、12月14日～平成22年3月23日まで調査を実施した。遺構面迄の層序は東西で異なる。東側は上から0.5～0.8m程の造成土、約0.1mの水田耕作土・床土、0.05～0.15mの黄灰色粘質シルト、鈍い黄色細砂質シルト、砂礫の遺構面となる。この面の東側では溝を検出した。東側は旧河川また氾濫原であったようである。西側は0.2～0.25mの水田耕作土、約0.2mの暗灰黄色シルト質粘土（耕作土）、0.1～0.2mの黒褐色粘土、灰オリーブシルト質細砂（遺構面）、黄褐色粘質シルト、暗灰黄色砂礫となる。黒褐色粘土や遺構面中には縄文土器などを少量ではあるが包含する。検出した遺構は溝3条、土坑8基、大型の土坑状の落込み2基である。

第2節　遺構と遺物

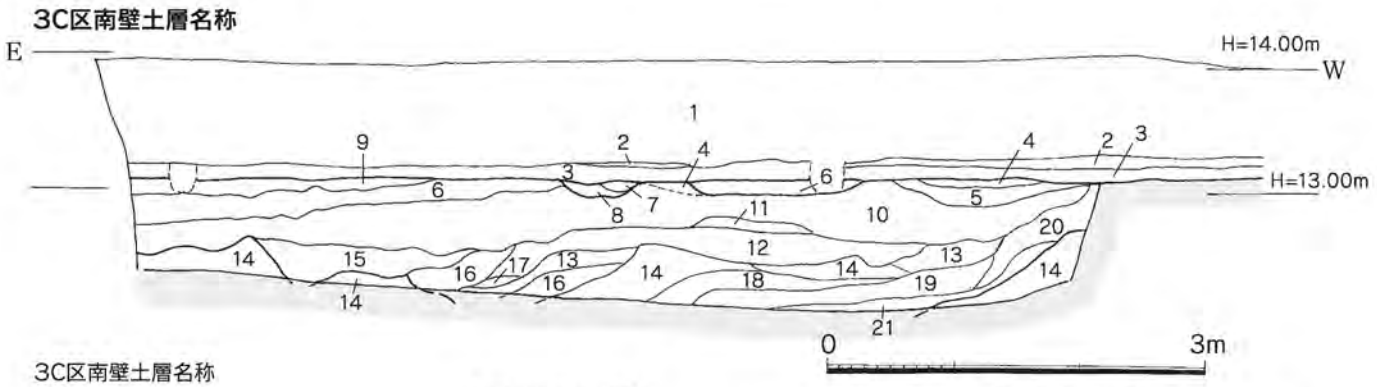
①　溝状遺構

3条検出した。

SD3001（第8-3・4図、図版8-1-2、8-2）

調査区東側で検出した主軸をN-14°-Wに取る南北溝。ほぼ直線的で、東側にSD3002と並行する溝であるが、切合い関係ではSD3002より新しい。現在の道路にもほぼ並行している。規模は確認長46.4m、最大幅2m、深さ0.6mを測る。溝断面は浅いV字又は逆台形で、底面には酸化鉄分が沈着している。埋土は暗灰黄色砂質シルト。この溝の南側で、取排水口と思われるSX3038が取り付く。埋土は暗灰黄色細砂で、この部分では東側のSD3002側に広がる。取排水口の北側部分では水の流れが頻繁だったのか、土壌の堆積が複雑化し、底面も凹凸が激しい。このことからSD3001は水田に伴う水路の可能性が強い。糸島の条里方向（真北N-20°-W）に近く、時期は古代以降であろう。

出土遺物　縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器の細片と黒曜石剥片などが小量出土。**1**は縄文土器精製の鉢の細片。摩滅し流入したものである。



3C区南壁土層名称

1.真砂土（造成土）
2.暗緑灰色土
3.褐灰色土（水田耕作土）
4.鈍い黄褐色粘質シルト（酸化鉄分・マンガン沈着）
5.10に4を混入
6.灰黄褐色粘質土で4ブロック混入
7.灰黄褐色土（やや粘性あり）
8.7と灰色細砂の混合
9.鈍い黄褐色シルト質粘土（表面酸化鉄分・マンガン沈着）
10.黄灰色粘質細砂（シルト質）
11.10で暗灰黄色粘土ブロック少量混入
12.暗灰黄色粘質細砂
13.10に近く粘性強い
14.灰色細砂
15.暗灰黄色粘質細砂
16.灰黄色粘土（薄く互層状に灰白色細砂挟む
17.灰黄色粘土（軟質）
18.明褐色砂と灰黄色細砂の互層
19.灰色粘質細砂（酸化鉄分やや含む）
20.褐灰色粘質細砂
21.灰黄色砂～粗砂（酸化鉄分含む）

第8-1図　3C区南壁土層（1/60）

SD3002（第８-3図、図版８-1-2、８-2-1・2）

SD3001の東側に近接して並行する南北溝で、主軸はN-16°-WとSD3001より西偏する。規模は幅1.20～1.55m、深さ0.4m前後で、SD3001より浅い。溝断面形はV字又は逆台形である。埋土は鈍い黄褐色粘質シルトで、底面には細砂または粗砂が堆積する。SD3001と同様に水路であろう。

出土遺物　縄文土器、弥生土器、古墳時代以降の土師器、黒曜石剥片などが少量出土。大半が細片で、図示しうるものは少ない。**2**は土師器の高坏脚部。器壁は摩滅するが、内面ヨコケズリ調整。焼成は不良。６世紀頃のものか。

SD3037（第８-3図、図版８-5-1）

調査区北東壁で検出した溝。試掘トレンチでは確認していたが、重機による表土掘削時に不注意で掘りすぎ消滅した。北壁土層で確認した規模は幅1.05m、深さ0.18mを測る。溝断面は逆台形。埋土は黒褐色砂質土。掘削時の削平が少ない調査区南側で延長は確認出来なかったので、もともと浅い溝であろう。遺物の出土はなかった。

② 土坑

SK3004～3007（第８-2図、図版８-5-6）

SK3026の上面で検出した薄い壁一つへだてて大小４基の方形の連続する土坑群。大きいものは5.4×3m、小は3.35×2mを測る。深さは最大0.4m程で浅い。底面はほぼ水平、埋土はいずれの土坑も同一で、暗灰黄色粘土と暗黄褐色粘土ブロックの混合に少量黒褐色粘土ブロックを混入。均一で一気に埋めた状況を示す。遺構の性格は不明、時期は出土遺物からは中世以降。

出土遺物　弥生土器や、須恵器、中世以降の土師器、瓦器の細片、黒曜石剥片が少量出土。図示出来るものがなく遺構の時期も不明。

SK3019（第８-5・12図、図版８-5-2、８-6-2）

Ｂ区西側北壁沿い、灰オリーブ色シルト質細砂面で検出した土坑。平面形は不整の楕円形で、確認規模は長軸長2.22m、短軸幅1.20m、深さ0.43mを測る。埋土は暗褐色粘土で炭化物を含む。底面は比較的平坦である。土器片や礫石などの遺物が南側から流れ込む状態で出土している。廃棄土坑か。

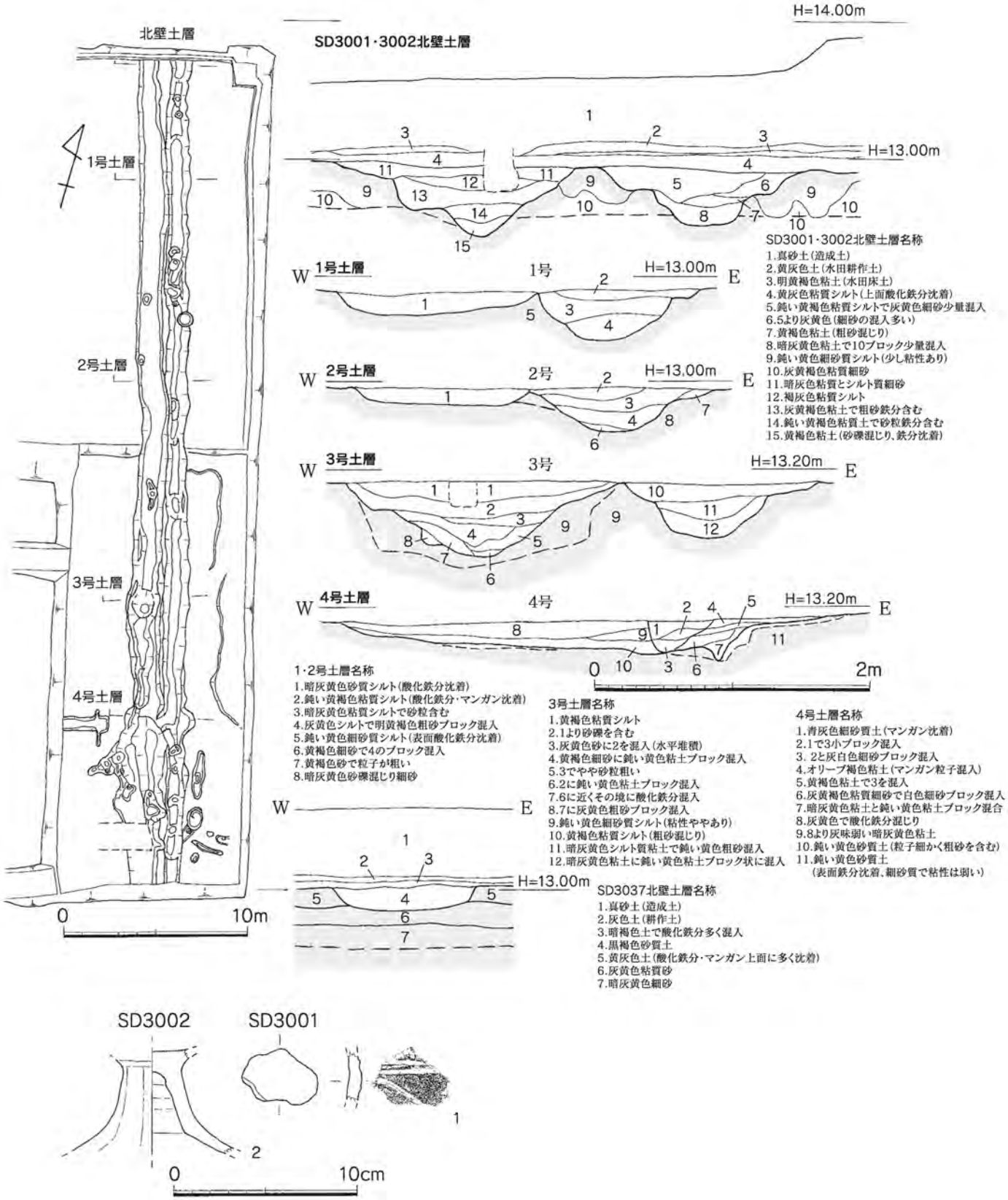
出土遺物　弥生時代中期初頭の土器が出土。底部が多い。**3**～**5**は壺底部。**3**は丸い膨らみを持つ底部。底径12.5cmを測る。器壁は摩滅が進むが外面はヨコヘラミガキ、内面は剥落がひどい。**4**・**5**は同形態の底部。**4**は底径14.0cmを測る。底部の厚さは2.7cmと厚い。内外面指押え痕残る。**5**は**4**よりやや小振りで、底径10.2cmを測る。外面ヨコヘラミガキ、内面は剥落がひどい。焼成はやや脆く不良。**6**・**7**は甕底部片。**6**は底径7.0cmを測る。外面細かいタテハケ目、内面はナデ。**7**は上げ底片。摩滅し調整不明。**51**・**52**は石鏃。**51**は平基の鏃で、先端と基部を欠損する。長さ1.5cmを測る。黒曜石の剥片に二次調整を加えている。**52**は先端を欠損する。長さ2.5cm、幅1.9cm、厚み0.3cmを測る。サヌカイトの剥片に細かい二次調整を加え成形しているが、表面はやや風化摩滅する。

SK3025（第８-5図、図版８-5-3）

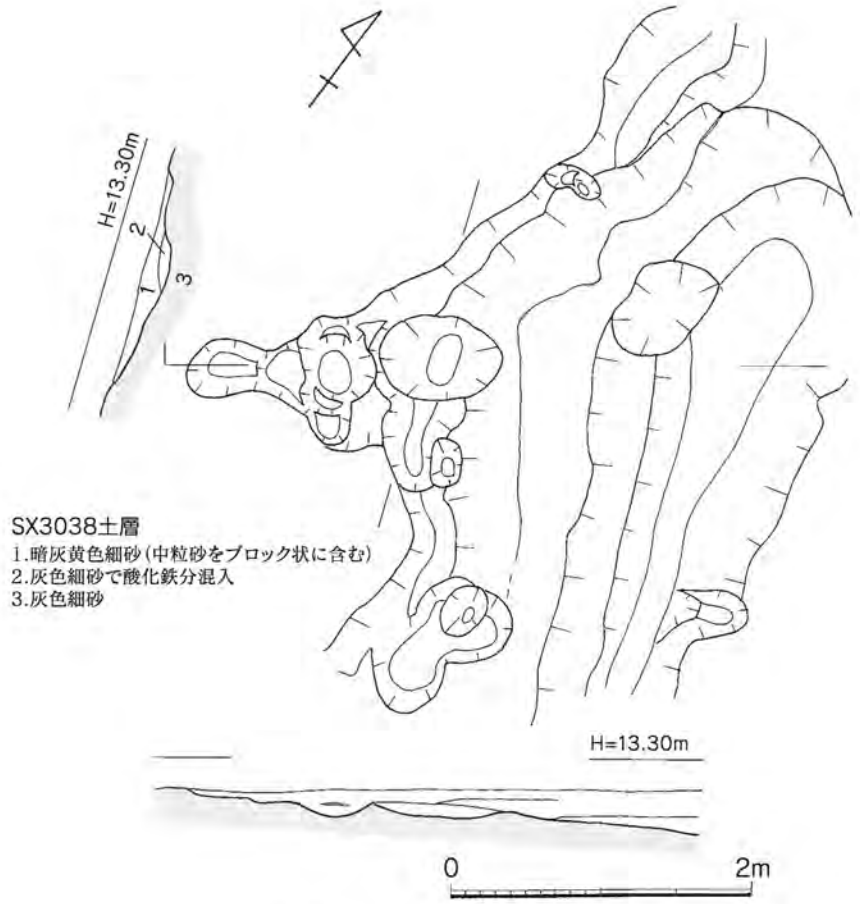
Ｂ区西側、SK3019南側で灰オリーブ色シルト面で検出した土坑。平面形は不整な長方形状の土坑。規模は上面で長軸長1.92m、短軸幅1.39m、深さ0.75mを測る。底面は南北にテラスを持つ二段掘りで、中央部が深くなる。埋土は軟質の暗灰黄色～暗灰色粘土で、中層で0.1～0.2m大の自然礫石が流れ込んでいた。**出土遺物**は弥生土器と思われる細片が2点出土。

第8-2図　3区遺構全体図(1/200)

※赤線は上面遺構



第8-3図　SD3001・3002・3037土層と出土遺物（1/300、1/40、1/3）



第８-4図　SX3038（1/50）

SK3033（第８-5図）

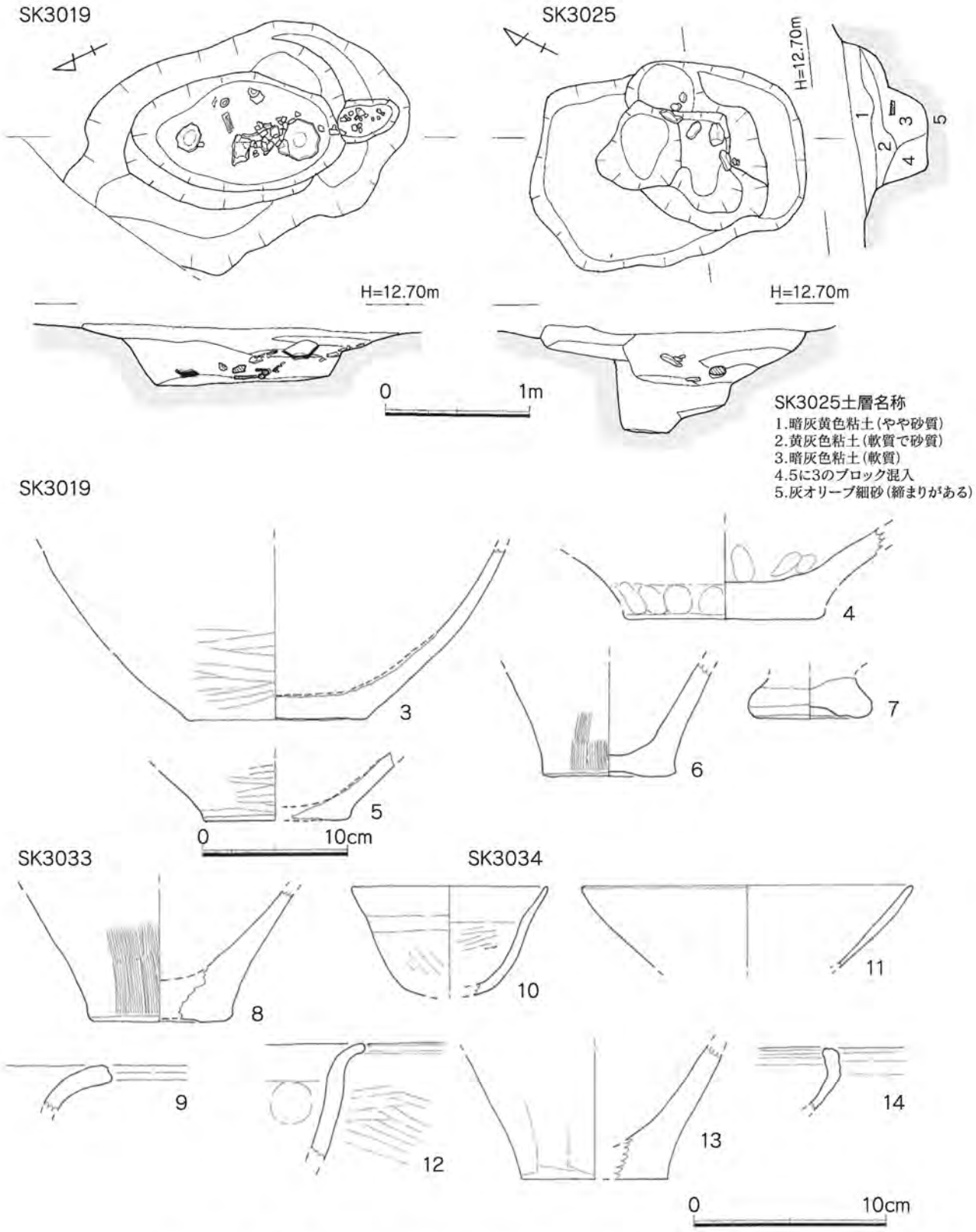
Ｂ区西側南壁で検出した平面形状は細長い土坑。規模は長軸長1.7ｍ、短軸幅0.45ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は締まりのある暗黄灰色粘質細砂である。この遺構の北側も溝状を呈し、北側の落込みSK3018に続く。

出土遺物　弥生土器片や黒曜石剥片が小量出土。**8**・**9**は弥生土器。**8**は甕底部1/3片。底径7.4㎝を測る。外面細かいタテハケ目、内面はススが付着する。**9**は広口壺の口縁部小片。内外面ナデ調整。須玖Ⅱ式のもの。

SK3034（第８-5・6図、図版８-3-1・2）

Ｂ区西側北壁沿い、SK3018西側で検出した大型の土坑。どちらかといえば自然の落込みに近い。確認規模は南北長4.6ｍ、東西幅（北壁で）7.1ｍを測る。底面は東側にテラスを持ち、西側が土坑状に深くなる。最大深さは0.95ｍを測る。遺構底は砂礫層である。埋土は上層が鈍い黄色から灰オリーブ細砂質粘土、中層が暗黄灰色粘土で薄い粗砂層を縞状に挟む。下層は暗灰色からオリーブ灰粘土で粗砂礫を多く混入する。全体に灰味が強い。流木や種実など自然遺物は残っていないが、水が溜まっていた可能性がある。

出土遺物　縄文土器、弥生土器、古墳時代前期の土師器、打製石斧片、黒曜石剥片などが少量出土。**10**・**11**は古墳時代前期の土師器の鉢。いずれも下層出土。**10**は1/4片で、口縁が僅かに屈折し外に開形態。口径10.2㎝、器高は推定で5.8㎝を測る。調整は外面ナデ、内面ケズリ後ナデ。**11**は口縁部1/6片



第8-5図　SK3019・3025と各土坑出土遺物（1/40、1/4、1/3）

で大きく開く形態。口径は17.2cmを測る。器壁は薄く、調整はナデ。外面部分的に黒化する。**12**・**13**は弥生土器。**12**は口縁が如意形に外反する甕の口縁部小片。調整は外面条痕か粗いナデ。内面は

ナデ。器壁の色調は全体に黒い。**13**は甕の底部1/3片。底径7.6㎝を測る。器壁は摩滅し調整は不明。**14**は縄文土器の精製浅鉢口縁部小片。器壁はやや摩滅するが調整はナデか。

③　大型土坑

SK3018（第８-6・8・12図、図版８-3-1・3、８-5-5、８-6-2、５-24-7）

B区西側北側で検出した平面不定形の大型土坑。南側と東側に水が流れ込んだような舌状の細長い張出しがある。上面規模は東西長約6.2ｍ、南北長約6.2ｍを測る。任意に設定した東西南北の土層から二時期の遺構の切り合いが確認でき、それぞれSK3018(新)、SK3018(古)とする。SK3018(新)は北側で確認したもので底面では不整円形状を呈す。規模は土層では東西3.6ｍ以上、南北3.7ｍを測る。SK3018(古)より一段深くなる。(新)の深さは最大で0.75ｍを測り、(古)の0.55ｍより一段深くなる。基盤は砂礫層である。埋土は(新)の上層が褐灰色粘質シルトか暗灰黄色粗砂混じり土、下層は褐灰色粘土で粗砂礫を交える。下層では植物を少し含む。(古)の上層は灰黄色粘土から鈍い黄色粗砂混じり粘質土、下層は褐灰色粘土と砂層。溜井のような遺構であろうか。

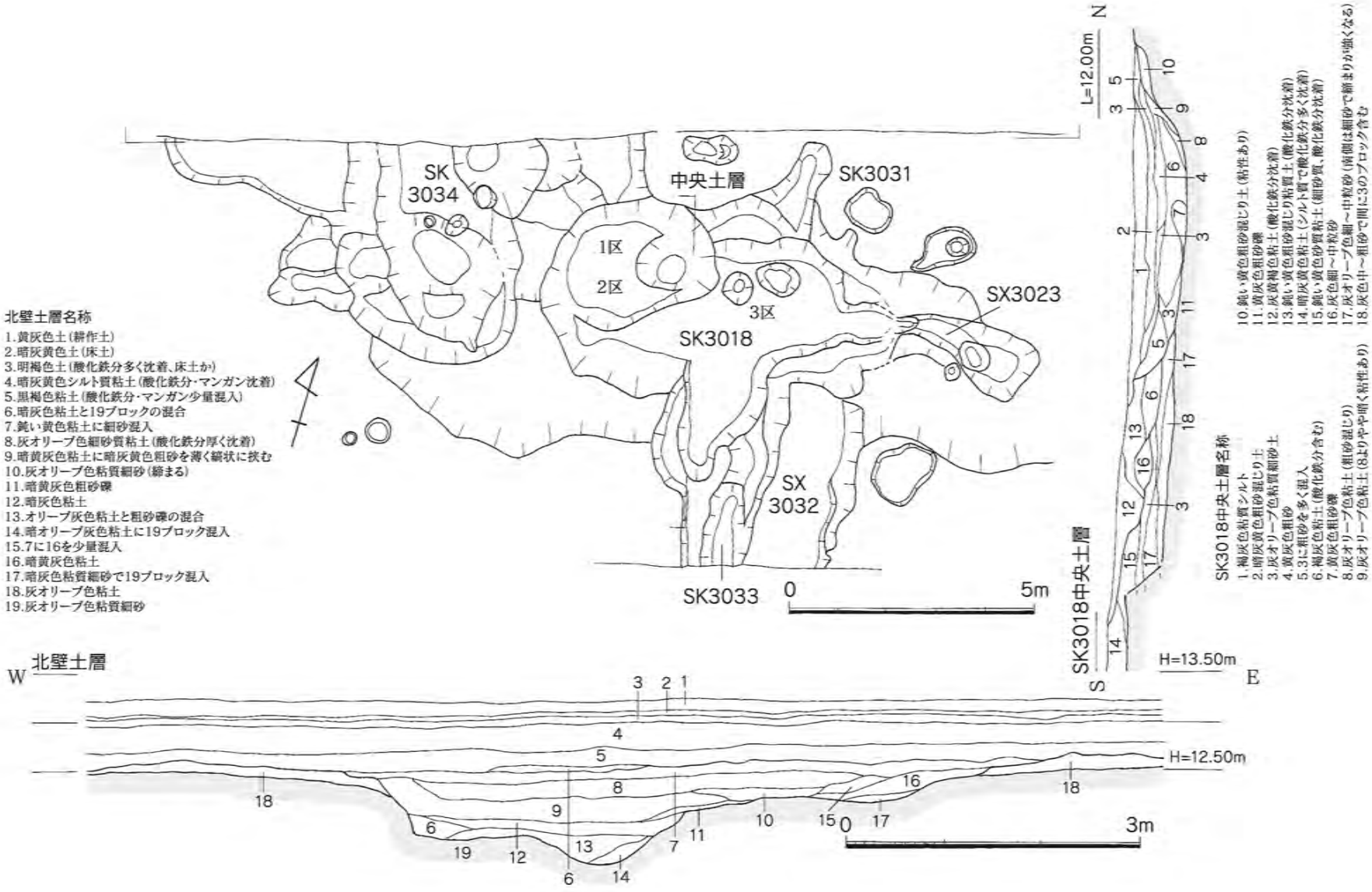
出土遺物　SK3018(新)を中心に縄文土器や弥生土器、石器や黒曜石剥片などが少量出土している。

15～**20**は弥生時代中期初め頃の土器。**15**は壺口縁部細片。城ノ越式である。内面粗いヨコハケ目。**16**～**20**は甕。**16**は口縁部が断面三角形を呈す甕。胴部に刻目突帯が1条付く。器壁は摩滅し調整は不明。**17**は金海式甕の口縁部細片。口縁部は肥厚し、口唇部に細い刻目が着く。内面はヨコハケ目。**18**は外反する口縁部細片。口唇部にヘラによる刻目が付く。調整はナデ。**19**・**20**は底部。**19**は壺か。底径8.0㎝を測る。摩滅し調整は不明。**20**は甕で底径7.4㎝を測る。外面ハケ目調整。内面に厚くススが付着する。**21**は(古)の中下層で出土。土器片利用の土製円板。直径は5.3×4.8㎝、厚さ1.0㎝を測る。**53**は磨製の扁平片刃石斧。欠損品で残存長5.7㎝、幅3.8㎝、厚み0.8㎝を測る。石材は頁岩。**60**は打製石斧。石材は玄武岩。**21**がSK3018(古)以外はSK3018(新)出土。

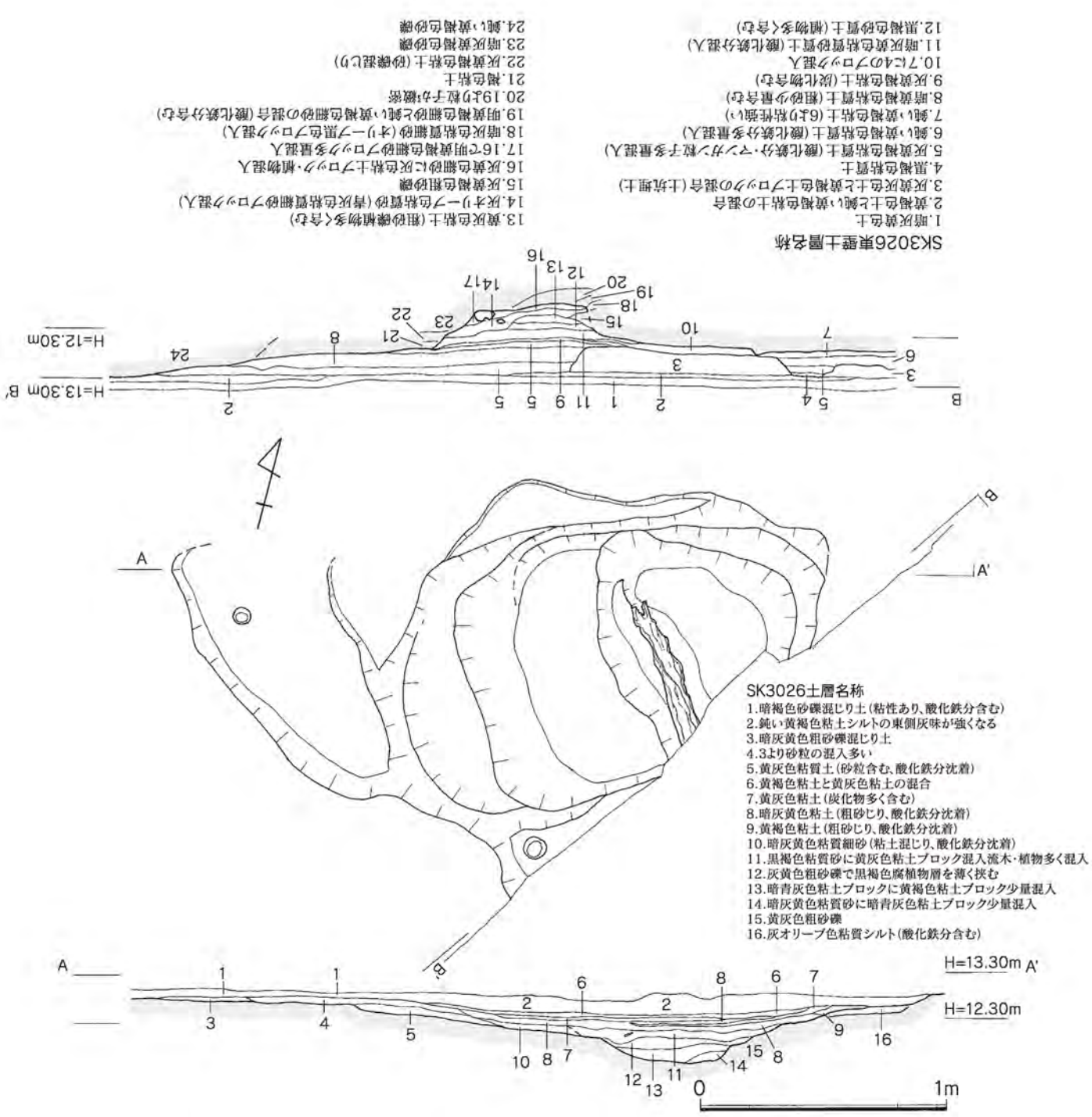
SK3026（第８-7・8・12図、図版８-4、８-5-4、８-6-2）

３Ａ区南東側で検出した大型土坑。西側高所部から緩やかに傾斜し、南東壁部分で深くなる。平面形は不整楕円形状を呈す。規模は長軸長9.95ｍ、短軸幅6.6ｍ以上、深さ1.2ｍを測る。堆積土は大きく３層に分かれる。上層は粘土層で、黄褐色から黄灰色、暗灰黄色粘土で炭化物を含む。中層は黒褐色粘質砂と粗砂礫でこの層には植物遺体を多く含む。下層は暗青灰色粘土ブロックの混合で粘質砂も含む。土坑底部は砂礫面で湧水がある。また土坑底から埋没した倒木が出土した。倒木の樹種はタブノキ属である。倒木は直径40㎝ほどで、端部は朽ちて無くなっており、元々枯れて朽ちていた木が倒れたものと思われる。倒木の炭素年代測定を行った結果、暦年較正年代3,555±20BP（1950年基準）と結果が出た。遺構の出土の遺物よりは古いので、埋没していた倒木が露出した可能性がある。中層から出土した種実はオニグルミである。湧水があることから井戸的機能を持っていたのか。

出土遺物　縄文時代晩期から弥生時代前期の土器や石器などが出土。下層から中層は刻目突帯文土器の甕・鉢など、上層は弥生時代前期板付Ｉ式土器があるが、量は少ない。**22**・**23**は上層出土。**22**は甕口縁部1/5片で口径21.2㎝を測る。口縁端部にヘラによる刻目、胴器壁はやや摩滅するが、外面はナナメハケ目、内面はナデ。**23**は深鉢口縁部小片。口唇部にナナメの刻目を付け、胴部の調整はヨコ条痕で、内面はナデる。**24**～**28**は中層出土。**24**・**25**は刻目突帯文土器口縁部小片。**24**は棒状工具、**25**

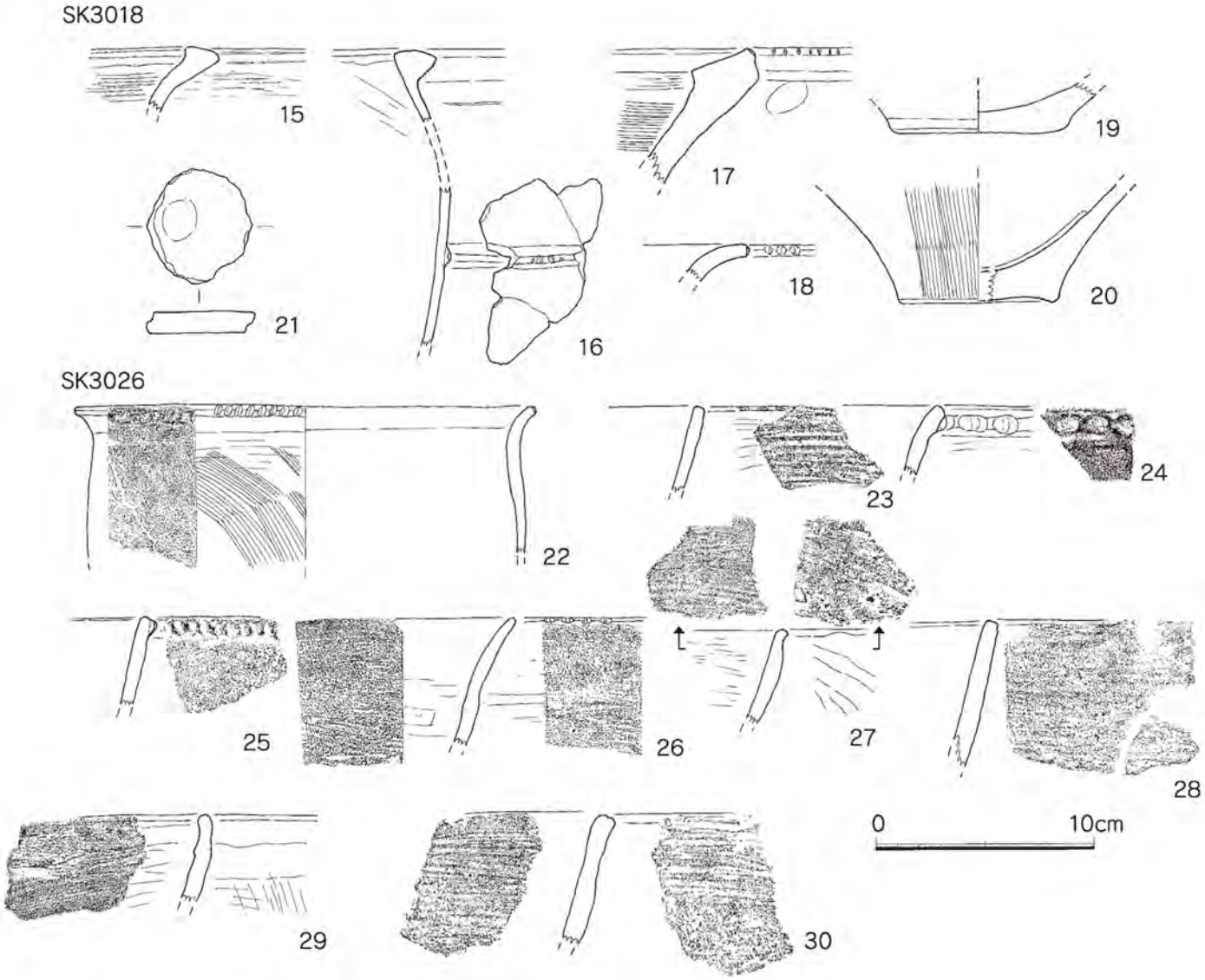


第8-6図　SK3018・3034と土層（1/120、1/60）



第8-7図　SK3026と土層（1/120）

はヘラによる刻目か。**26**は深鉢で口縁が僅かに稜を持って屈折し外反する形態。口唇部は細い棒状工具による刻目で、外面貝殻条痕か。**27**・**28**は鉢の口縁部小片。いずれも胴部の調整は条痕で、**27**は後ナデ、**28**の内面はナデ。胎土には石英・長石粒子以外に雲母粒子を含む。**29**・**30**は下層出土。**29**は口縁部が直立し、**30**は僅かに外に開く。調整は**29**が雑なナデで外面は条痕でナデか、**30**はヨコ方向の条痕。**54**～**57**は打製石斧。いずれも石材は玄武岩。粗割した剥片の素材に二次調整を加え石斧に成形している。**54**は基部を欠損する。残存長12.9㎝、幅5.6㎝を測る。刃部はやや細かい調整



第８-8図　SK3018・3026出土遺物（1/3）

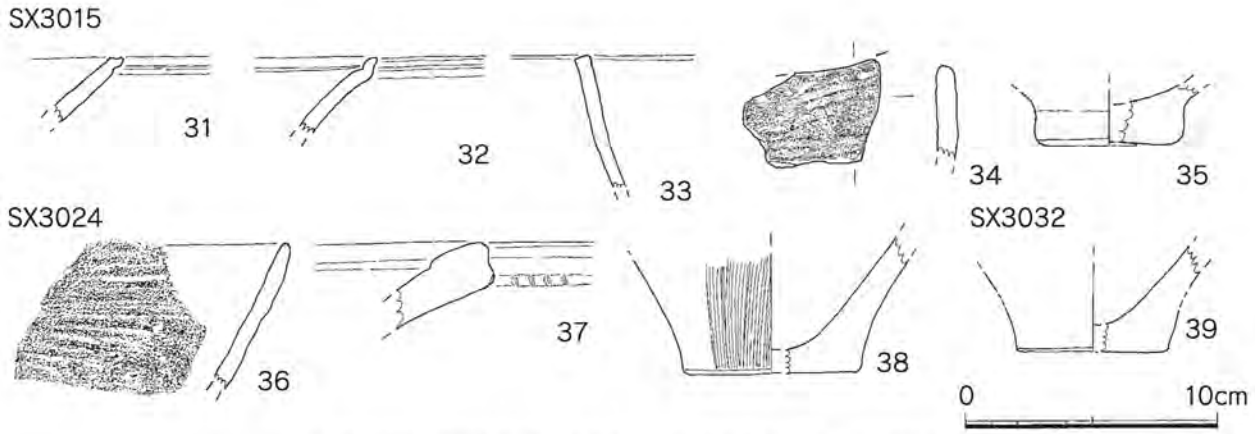
を加える。**55**は長さ11.5cm、幅5.3cmを測る。刃部は使用によるのか、擦れている。全体に風化が著しい。**56**は半損品。残存長8.4cm、幅6.3cmを測る。表面は風化が進む。**57**は剥片に加工を加えたもの。表面は風化が著しい。

④　ピット出土遺物（第８-12図）

58はSP3035出土の石鏃。先端を欠損する。石材は黒曜石。長さ2.4cm、幅1.5cm、厚み0.5cmを測る。表面は風化し、鈍い黒色を呈す。

⑤　その他の遺構（第８-9図）

包含層または浅い不定形の落込み状の遺構で、図化したものを報告する。**31～35**は３Ａ区の包含層SX3015出土。**31**・**32**はいずれも縄文時代晩期初めの広田式土器浅鉢。口縁部小片で、口縁内外に沈線または凹線が巡る。摩滅し調整不明。**31**の焼成は不良。**33**は口縁が内傾する深鉢の小片。調整は外面摩滅するがわずかに条痕が残り、内面はナデ。**34**は波状口縁部小片。調整は内外面条痕か。**35**は弥生時代前期の小型壺の底部か。器壁は摩滅し調整は不明。**36～38**は３Ｂ区SX3024出土。**36**は縄文



第８-9図　SX3015・3024・3032出土遺物（1/3）

時代晩期の鉢口縁部。**37**は弥生土器の肥厚する口縁部片で刻目が付く。**38**は甕底部。外面ハケ目。**39**は３Ｂ区SX3032東側落込み出土。弥生土器甕底部1/3片で底径6.0cmを測る。摩滅し調整不明。

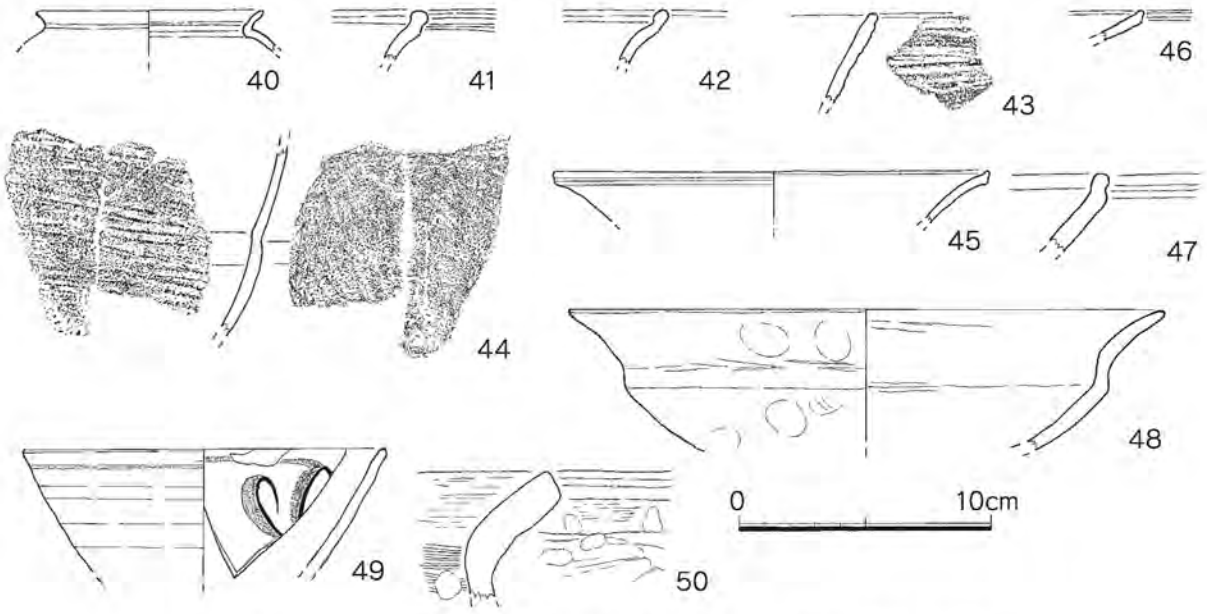
⑥　縄文時代包含層の調査（第８-10・11図、図版８-6-1）

３Ｂ区の遺構面中から縄文土器片が出土したため、下層に縄文時代の遺構の存在を確認するため、グリッドを設定し、確認調査を行った。グリッドは２か所設定した。1か所は東端Ｄ1区～Ｅ2区（Ａ区）、1か所はＤ5区（Ｂ区）である。

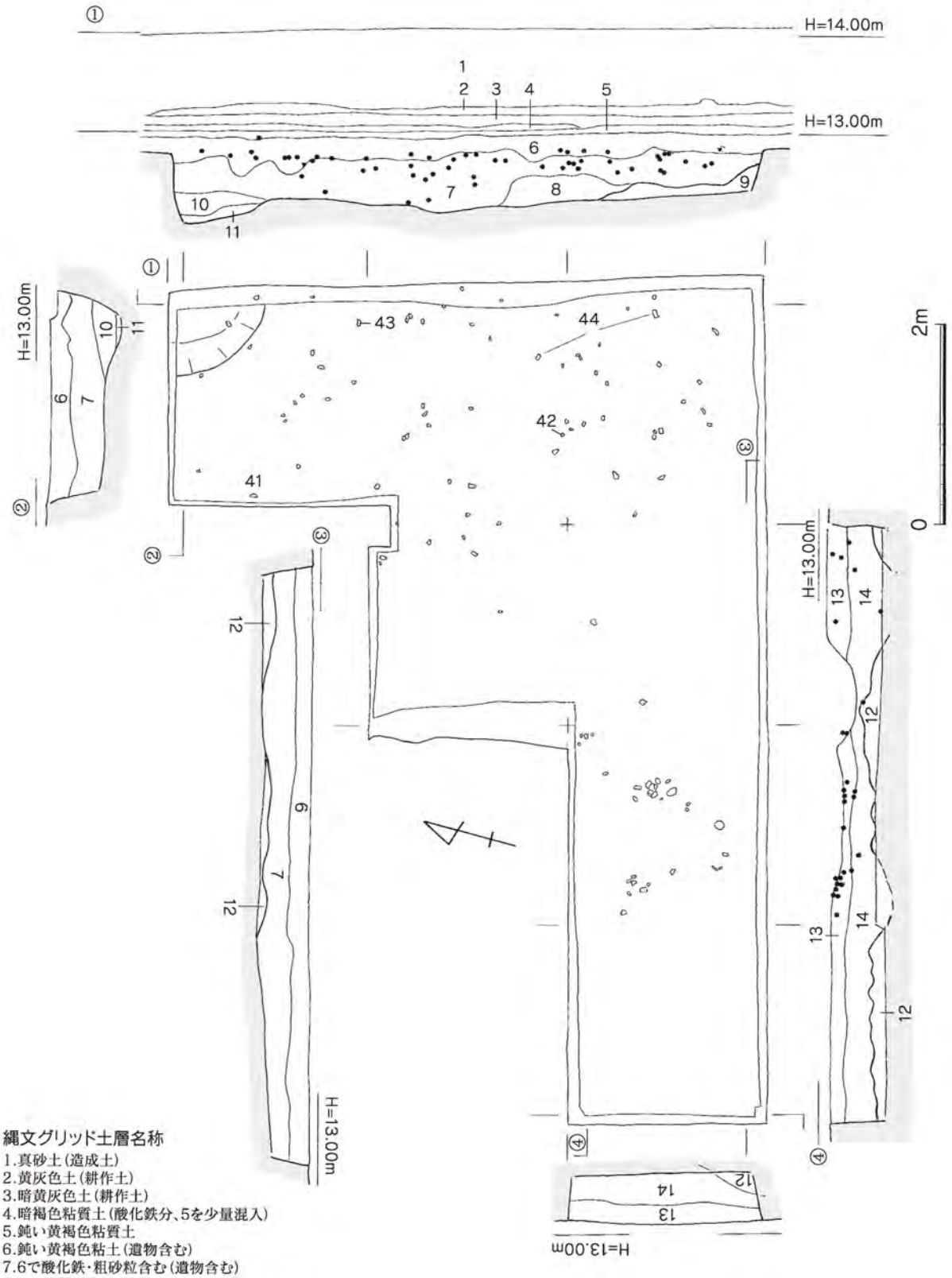
Ａ区　2mグリッドを６か所設定し、遺物の出土状況、遺構の有無を確認した。遺物は主に遺構面下0.3m程の鈍い黄色粘質シルトから灰黄色粘質細砂層で出土。遺物は細片が多く、形態が復元できるものはない。二次的に堆積した遺物であり、遺構は確認出来なかった。縄文土器が大半で、黒曜石剥片なども出土。二次堆積で土器は全体に摩滅を受けている。

出土遺物　**40**は古墳時代前期の土師器壺口縁部1/6片。口径9.0cmを測る。**41**～**43**は縄文土器の鉢口縁部細片。縄文時代晩期前半のものか。**44**は深鉢の胴部小片。器壁は摩滅するが、内面条痕か。

Ｂ区　遺物が特に集中する10.0×10.2mのL形の調査区を設定し、遺構面を5～10cm程掘り下げ遺物の取り上げを行った。縄文土器細片が全面から出土するが図示出来るものは少ない。黒曜石剥片、



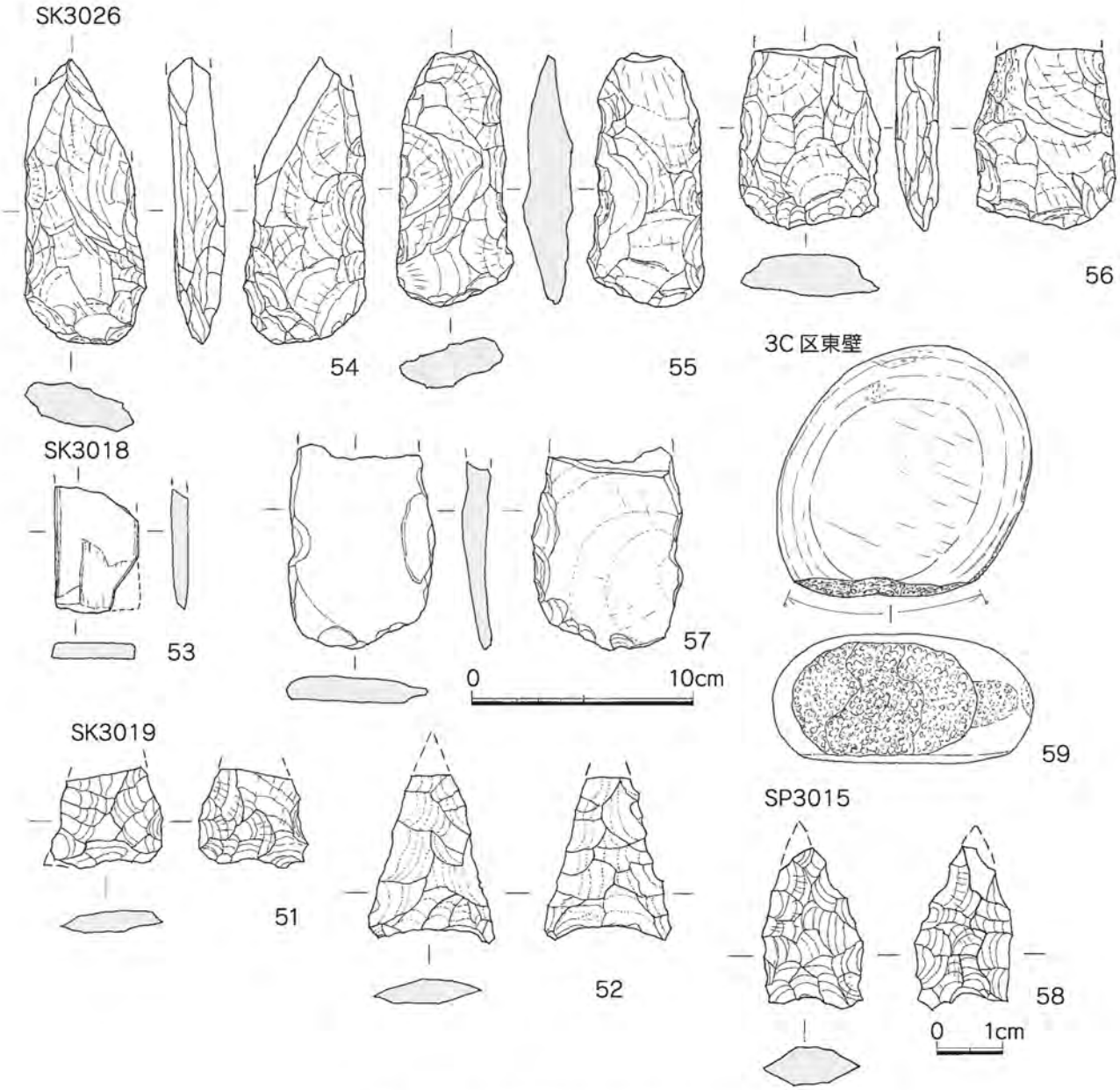
第８-10図　縄文グリッド・包含層・遺構面・表採出土遺物（1/3）



縄文グリッド土層名称

1.真砂土(造成土)
2.黄灰色土(耕作土)
3.暗黄灰色土(耕作土)
4.暗褐色粘質土(酸化鉄分、5を少量混入)
5.鈍い黄褐色粘質土
6.鈍い黄褐色粘土(遺物含む)
7.6で酸化鉄・粗砂粒含む(遺物含む)
8.6で砂質が強い(粘質砂)
9.灰黄色粗砂礫(やや粘性、上面に8を混入)
10.暗灰黄色粘質細砂
11.黄灰色砂質粘土
12.黄灰色砂～粗砂礫
13.鈍い黄色粘質シルト(酸化が強く赤み強い)
14.灰黄色粘質細砂(酸化鉄分多く沈着)

第8-11図　縄文グリッド (1/60)



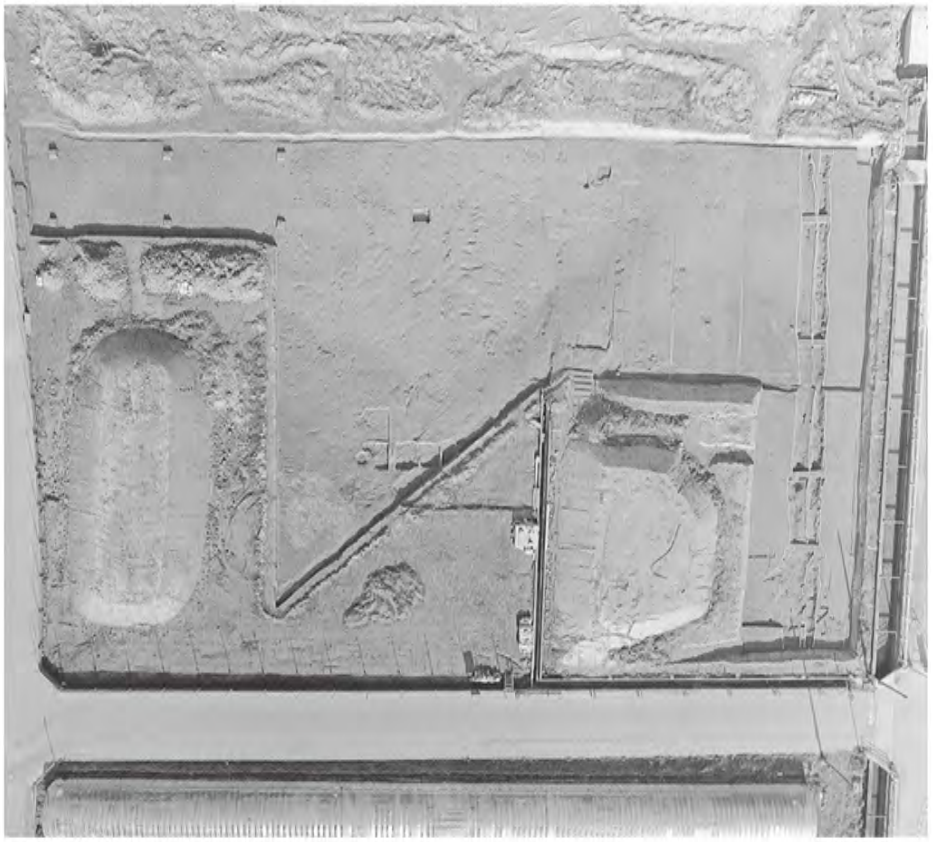
第８-12図　各遺構出土石器（1/3、1/1）

サヌカイト剥片も少量出土。遺構も確認出来なかった。二次堆積の遺物であろう。

出土遺物　**45**～**48**は縄文時代晩期前半の精製の鉢。**45**は浅鉢口縁部片。器壁は摩滅するがミガキか。**46**・**47**も浅鉢口縁部細片。広田式か。表面の調整はナデか。**48**は口径23.8cmを測る。内外面の調整は条痕後、ナデを加えるか。外面には指押え痕が残る。胎土は**45**～**48**まで微砂を含むが精良。**45**・**46**はＤ4区、**47**・**48**はＥ4区出土。

⑦　遺構面・包含層出土遺物（第８-10・12図）

49は龍泉窯系青磁碗口縁部1/7片。口径14.4cmを測る。オリーブ灰釉の施釉、内面片切りの花文。大宰府編年のⅢ類で、13世紀中頃～14世紀初めのもの。**50**は弥生前期末頃の甕口縁部小片か。口縁は肥厚し、調整はヨコナデと内面ハケ目。**49**は３Ｂ区表採、**50**は３Ｂ区遺構面下で出土。**59**は３Ｃ区東壁出土。敲石兼磨石。径11.7×11.3cm、厚さ5.9cmを測る。扁平な楕円形の石材の一端を使用面としている。明瞭な使用痕が残る。全面擦られて摩滅し滑らかである。石材は石英長石斑岩か。



1.3区全景（上から）

2.3B・3C区SD3001・3002（上から）

図版8-2

1.SD3001・3002（南から）

2.同 北壁土層（南から）

3.SX3038（南西から）

1.3B区西側、SK3018・3034検出状況（西から）

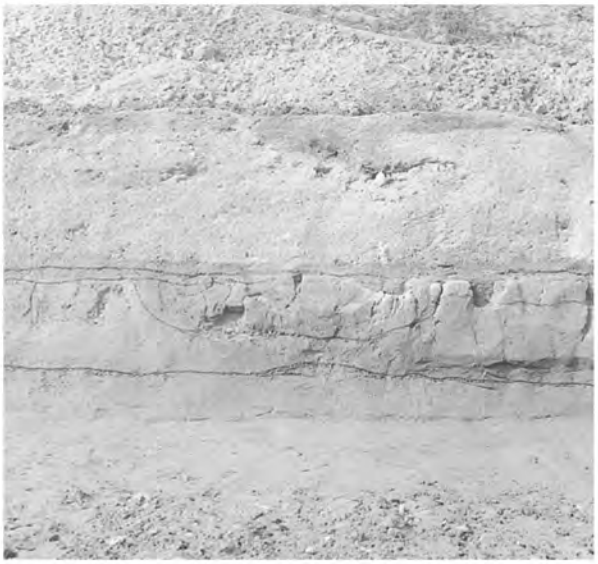
2.SK3034（南から）

3.SK3018土層（東から）

図版8-4

1.SK3026（北西から）

2.SK3026（南から）



1.SD3037 北壁土層（南から）

2.SK3019（北東から）

3.SK3025（西から）

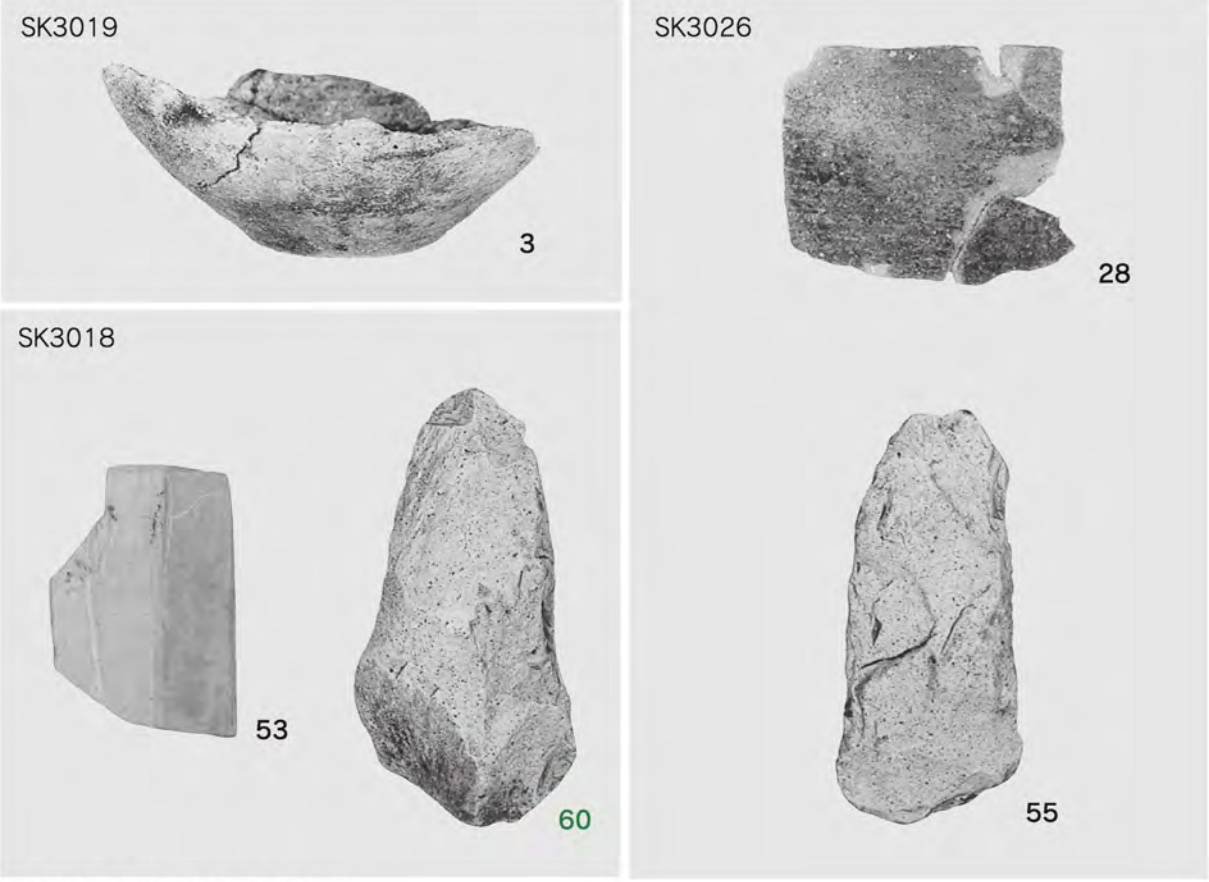
4.SK3026 倒木出土状況（南東から）

5.SK3018 遺出土状況（南から）

6.3A区上面 SK3006～3007（東から）

図版8-6

1.A区縄文グリッド（北東から）



2.各遺構出土遺物（縮尺不統一）

第Ⅸ章　千里遺跡第1次調査4区

第1節　調査の概要

現代の耕地造成によって遺構面は平坦に削られていた。調査区西側は縄文時代晩期の遺物包含層を検出面として縄文時代晩期～近世の遺構が広がり、東側では弥生時代～古代の遺物包含層上で中近世の遺構を確認した。東側については上面の調査後に、遺物包含層を人力と重機で除去し、下面でSD4190から東に遺構が広がらないことを確認している（第9-2図）。上面では、縄文時代晩期の溝3条、弥生時代の掘立柱建物5棟・溝7条・溜井2基、弥生時代後期中頃～終末期の祭祀土坑2基、古墳時代前期の溝2条・方形周溝遺構1基、古墳時代中期の落ち込み状遺構7基、古代の遺物包含層、中世の掘立柱建物7棟・溝2条・土坑墓2基・土坑3基、近世の水田遺構・柵、近代以降の柵列・溝を検出している。

第2節　遺構と遺物

1．縄文時代

SD4005（第9-3・9図、図版9-2・4）　**出土遺物**（第9-10・11図、図版9-10）

西側で検出した北北西方向の溝である。南側は幅1.2m、中央でやや北に折れ、溝幅が西に広がり、幅3.4mを測る。断面形は南側で逆台形、深さ32cmを測り、北側は緩慢な落ち込みで、東側がわずかに下がっており、深さ20cmを測る。埋土は灰色細砂で、下部には中砂とマンガン粒沈着がみられる。弥生時代中期後半のSD4009に切られる。時期は縄文時代晩期・黒川式期である。

1～11は黒川式土器で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調はやや暗い橙色、明赤褐色を呈す。**1**は深鉢口縁部片で、内外面から穿孔した補修孔が認められる。**2**・**3**は深鉢口縁部片である。**4**は鉢口縁部片で、内面上端に粘土紐を貼り付け、内面はヨコミガキ、外面は貝殻条痕後ナデで仕上げている。**5**は鉢口縁部片で、外面に貝殻条痕、内面上端部に沈線をめぐらす。**6**は浅鉢口縁部片で、内外面をヨコミガキで仕上げる。**7**は鉢の半切山形口縁部片である。**8**は浅鉢か鉢の口縁部片で、リボン状突起部である。**9**は深鉢底部で復元底径11cmを測る。**10**は深鉢底部で復元底径7cmを測る。**11**は浅鉢口縁部片で、外面にミガキの痕跡がある。**22**は黒曜石製の有脚剥片鏃で、長さ2.3cm・幅1.55cm・厚さ0.5cm・重量1.1gを測る。**23**は石英の玉石で、縁辺の一部に擦れてわずかに潰れた痕跡が認められる。長さは4.4cm・幅3.3cm・厚さ1.3cm・重量31.2gを測る。叩石かミガキなどの土器調整に使用された可能性がある。その他、黒曜石・安山岩片が比較的まとまって出土している（第13-2表）。

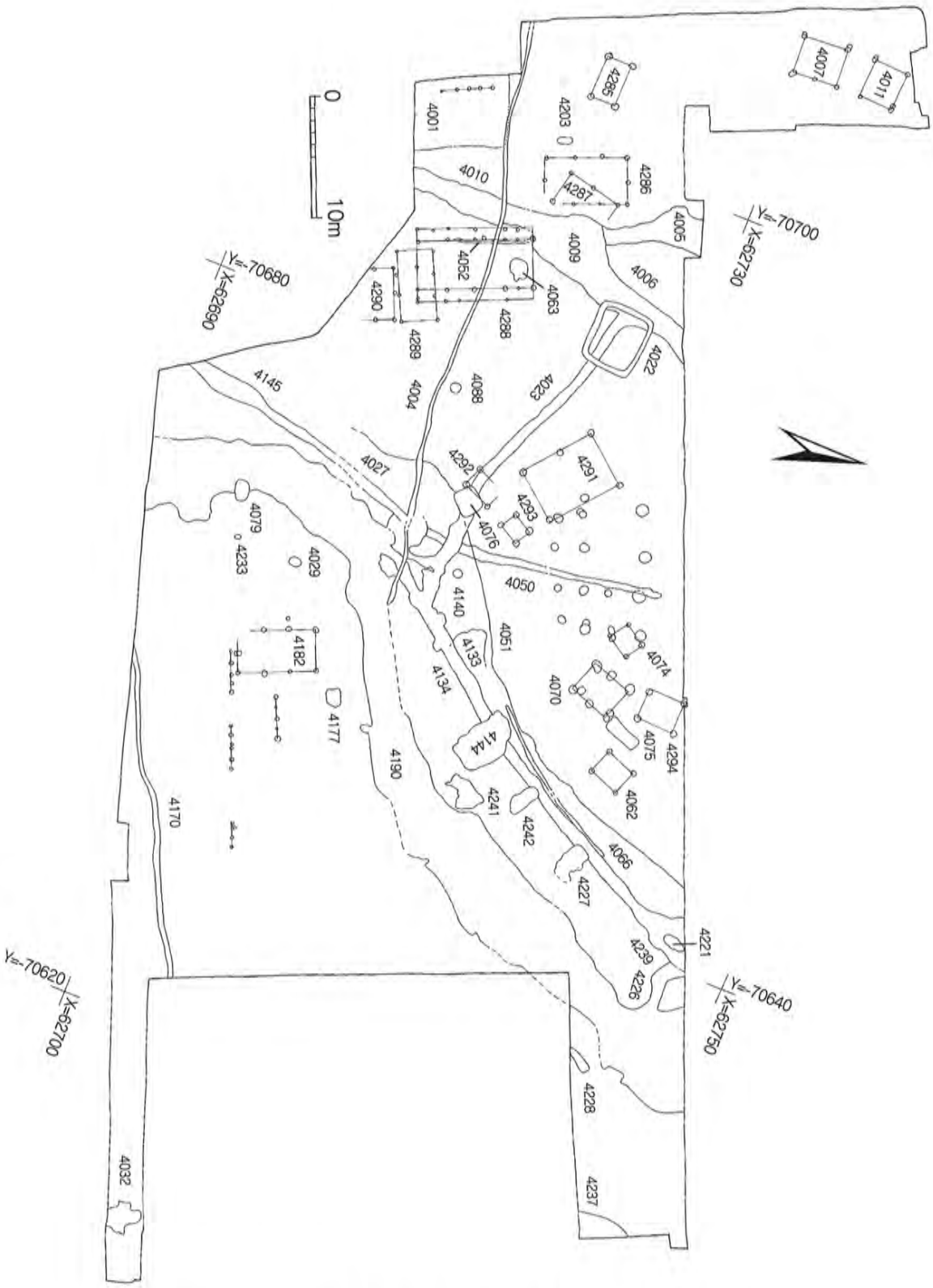
SD4052（第9-3・4図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-11図、図版9-10）

調査区西側、SD4009の南側で検出した北北西方向の溝である。幅は23cm、断面形はU字形で、深さは15cmを測る。溝の下面は北側に下がっている。埋土は灰色中・粗砂で、弥生土器小片と黒曜石が出土している。SD4009に連結する溝もしくはSD4005の続きの可能性がある。

24は、黒曜石の縦長剥片で、長さ5.5cm・幅2.4cm・厚さ0.7cm・重量9.4gを測る。打面調整が認められる。

SD4050（第9-3・4図、図版9-4）　**出土遺物**（第9-11図、図版9-10）

調査区中央北側で検出した南北方向の溝である。幅は60～83cm、断面形は逆台形で、深さは15cmを測る。溝の下面は南側に下がっている。埋土は灰色砂質シルトで、縄文時代晩期土器小片・黒曜石片が出土している。弥生時代中期後半のSD4023に切られており、縄文時代晩期の可能性が高い。



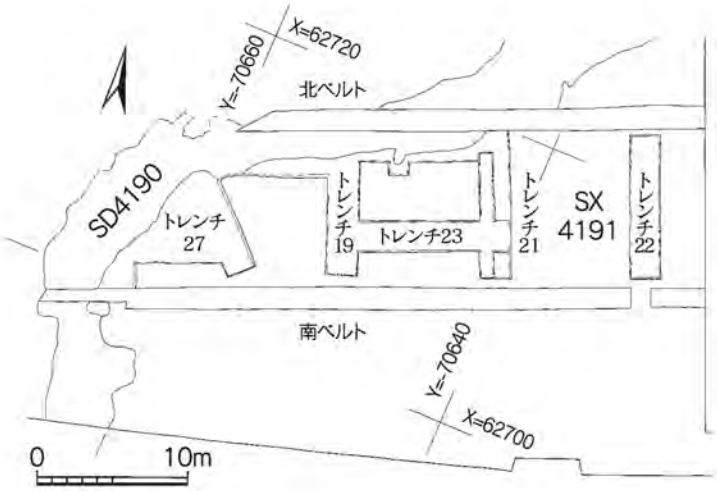
第9-1図　千里遺跡第1次調査4区の遺構配置図(S=1/500)

25は黒曜石の縦長剥片で、長さ5.1cm・幅1.8cm・厚さ0.9cm・重量6.5gを測る。

遺構検出面中・ピット出土遺物

（第9-10・11図、図版9-10）

縄文時代晩期以降の遺構検出面には遺物が散漫に含まれ、遺物包含層となっている。遺物が集中する範囲を中心に遺物の取り上げを行った。また、規模・埋土から中世と考えられるピットから縄文時代晩期の土器・石器が出土している。ピットの地山である遺物包含層からの混入であろう。これらの遺物は、調査区北側の帯状の範囲に集中している。



第9-2図　4区下面調査トレンチ位置図（S=1/500）

12はSB4062東側から出土した古閑式の鉢で、1/4が残存し、復元口径24cmを測る。口縁部はわずかに山形をなし、調整は貝殻条痕、口縁部に粗い波状沈線が描かれる。胎土は細～粗砂を多く含み、色調はにぶい褐色を呈す。**13**は深鉢口縁部片で、口唇部に棒状工具による刺突を施す。胎土は細～粗砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**14**はSD4005の西から出土した深鉢底部片で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**15**はSB4285北側から出土した深鉢底部で、2/3が残存し、復元底径7cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**16**は調査区中央北側から出土した黒川式新段階の浅鉢口縁部片で、胎土は細～粗砂、特に角閃石を少なく含み、色調はにぶい橙色を呈す。**17**はSP4139出土の黒川式深鉢胴部片で、胎土は細～粗砂を少なく含み、色調は暗褐色を呈す。調整は貝殻条痕である。**18**はSP4148出土の黒川式深鉢口縁部片で、胎土は細～粗砂をやや多く含み、色調は外面が明赤褐色、内面は黒色を呈す。内外面ともに貝殻条痕で仕上げる。**19**はSP4151出土の黒川式深鉢胴部片で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。内外面ともにヨコナデで仕上げ、外面下半に貝殻条痕を残す。**20**はSP4274出土の黒川式鉢口縁部片で、胎土は細砂をわずかに含み、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄褐色を呈す。**21**はSP4192出土の組織痕土器片で、胎土は細～粗砂を少なく含み、色調は明褐色を呈す。組織痕は幅0.7mmほどの紐が6～7mm間隔で編まれ、結節が認められる。**26**は調査区北西で出土した安山岩の打製石鏃で、長さ2.6cm・幅1.25cm・厚さ0.4cm・重量0.7gを測る。**27**は調査区中央北側から出土した玄武岩製の横刃型石器で、長さ15.1cm・厚さ5.3cm・厚さ1.6cm・重量106.2gを測る。**28**は調査区北西で出土した玄武岩製の打製石斧未成品で、長さ18.4cm・刃部幅7.54cm・基部厚1.53cm・重量248.5gを測る。**29**は調査区北西で出土した玄武岩製の打製石斧で、長さ16.3cm・刃部幅6.32cm・基部厚1.68cm・重量275.3gを測る。**32**は調査区北西で出土した玄武岩の横長剥片で、長さ8.4cm・幅24.6cm・厚さ2.0cm・重量315.7gを測る。**30**はトレンチ17から出土した結晶片岩製の切目石錘で、残存長2.5cm・幅3.05cm・厚さ0.75cm・残存重量7.8gを測る。**31**はSP4271から出土した黒曜石の縦長剥片で、長さ5.0cm・幅1.5cm・厚さ0.6cm・重量4.0gを測る。**33**はSP4185出土の黒曜石製石鏃で、長さ2.4cm・幅1.8cm・厚さ0.5cm・重量1.2gを測る。**34**はSP4039出土の黒曜石製石鏃で、先端が破損しており、残存長1.4cm・幅1.6cm・厚さ0.4cm・残存重量1.0gを測る。**35**はSP4218出土の黒曜石製有脚石鏃で、長さ2.4cm・残存幅1.4cm・厚さ0.45cm・残存重量0.7gを測る。

2．弥生～古墳時代

掘立柱建物（第9-12図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-13図、図版9-10）

柱穴堀方の埋土は褐灰色シルト質粘土で、地山の黄褐色土をブロック状に含む。柱穴堀方の径は28～46cm、深さは24～52cmで、径20cmほどの柱痕跡と下面での柱の当たりが認められた。柱穴と切り合う穴は、柱抜取穴というよりは、建て直しに関わる柱穴と考える。出土遺物はすべて柱穴堀方から出土した。時期は弥生時代中期後半である。

SB4011

調査区北西端で検出した桁行東西軸1×1間（3.2×2.9m）の建物である。弥生土器小片が出土した。

SB4007

調査区北西で検出した桁行南北軸の建物である。2×1間（3.7×3.1m）で、切り合う柱穴は建て直しに関わるものであろう。弥生土器小片と黒曜石片が出土した。

36はSP4018出土の器台下端片で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。

SB4285

調査区西端で検出した桁行東西軸1×1間（3.6×2.2m）の建物である。

SB4070

調査区中央北側で検出した桁行北東軸2×1間（3.7×2.9m）の建物である。縄文～弥生土器小片と黒曜石片が出土した。

37・**38**はSP4085出土の須玖Ⅱ式古段階の甕で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**37**は口縁部片である。**38**は底部で1/4が残存し、復元底径6.4cmを測る。**39**は、SP4090出土の須玖Ⅱ式古段階の甕で、1/6が残存し、復元口径26cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。

SB4294

調査区中央北側で検出した桁行南北軸1×1間（3.1×2.7m）の建物である。弥生土器小片と黒曜石片が出土した。

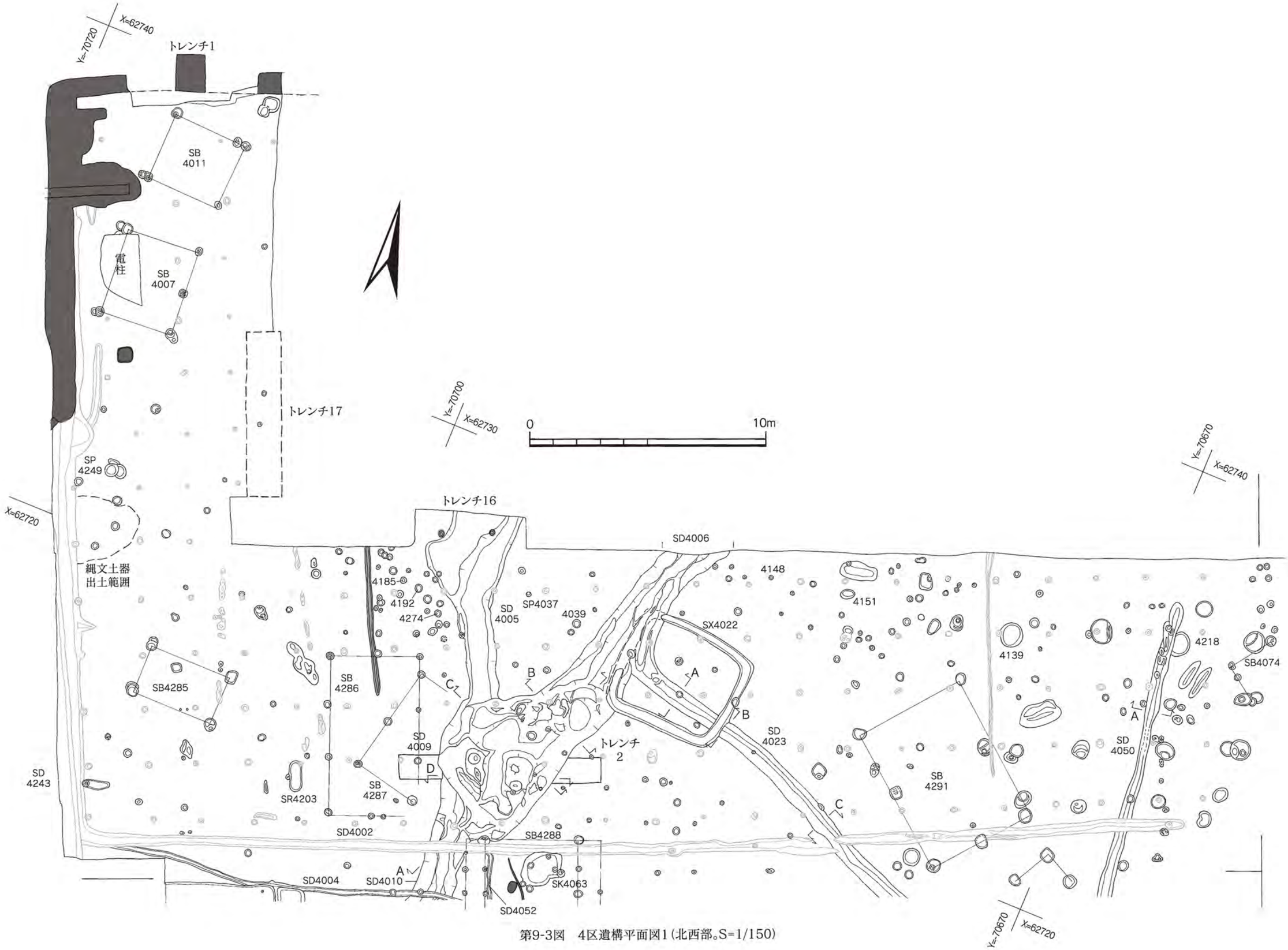
40はSP4107出土の須玖Ⅱ式古段階の甕口縁部で、1/10が残存し、復元口径24.2cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。

その他ピット（第9-3・4図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-13図、図版9-10）

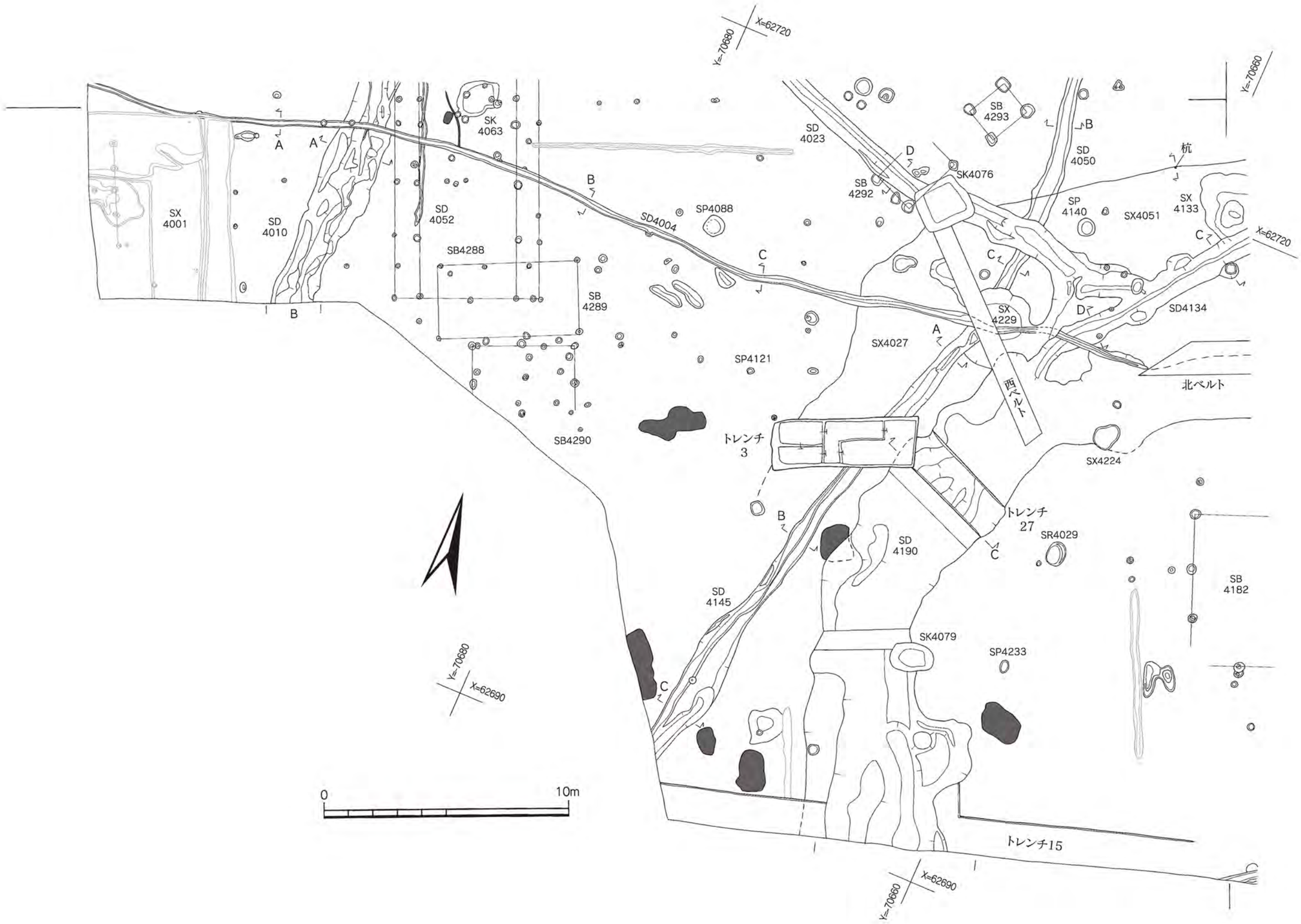
41は調査区中央西側のSP4121から出土した弥生時代後期の甕口縁部片で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**42**は調査区西端のSP4249から出土した古墳時代前期の甕口縁部片で、胎土は細砂を少なく含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**43**は調査区中央北西のSP4037から出土した須恵器坏身を模倣製作した土師器片である。外面はヨコミガキで、色調は内面が黒褐色、外面が灰褐色を呈す。

溝・溜井

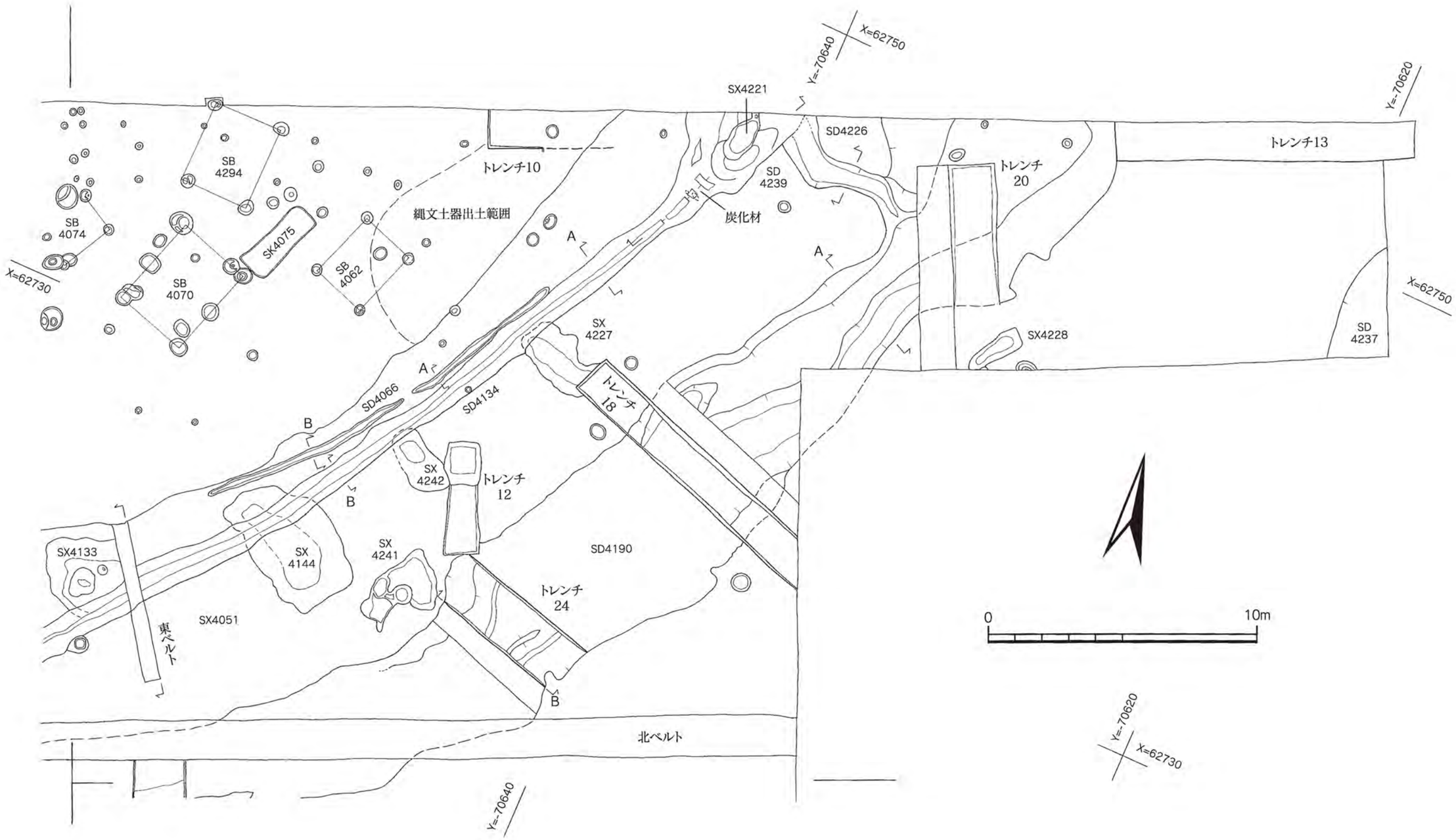
SD4190（第9-4～8・14図、図版9-1・2・4・5）　**出土遺物**（第9-16・27図、図版9-10・12）



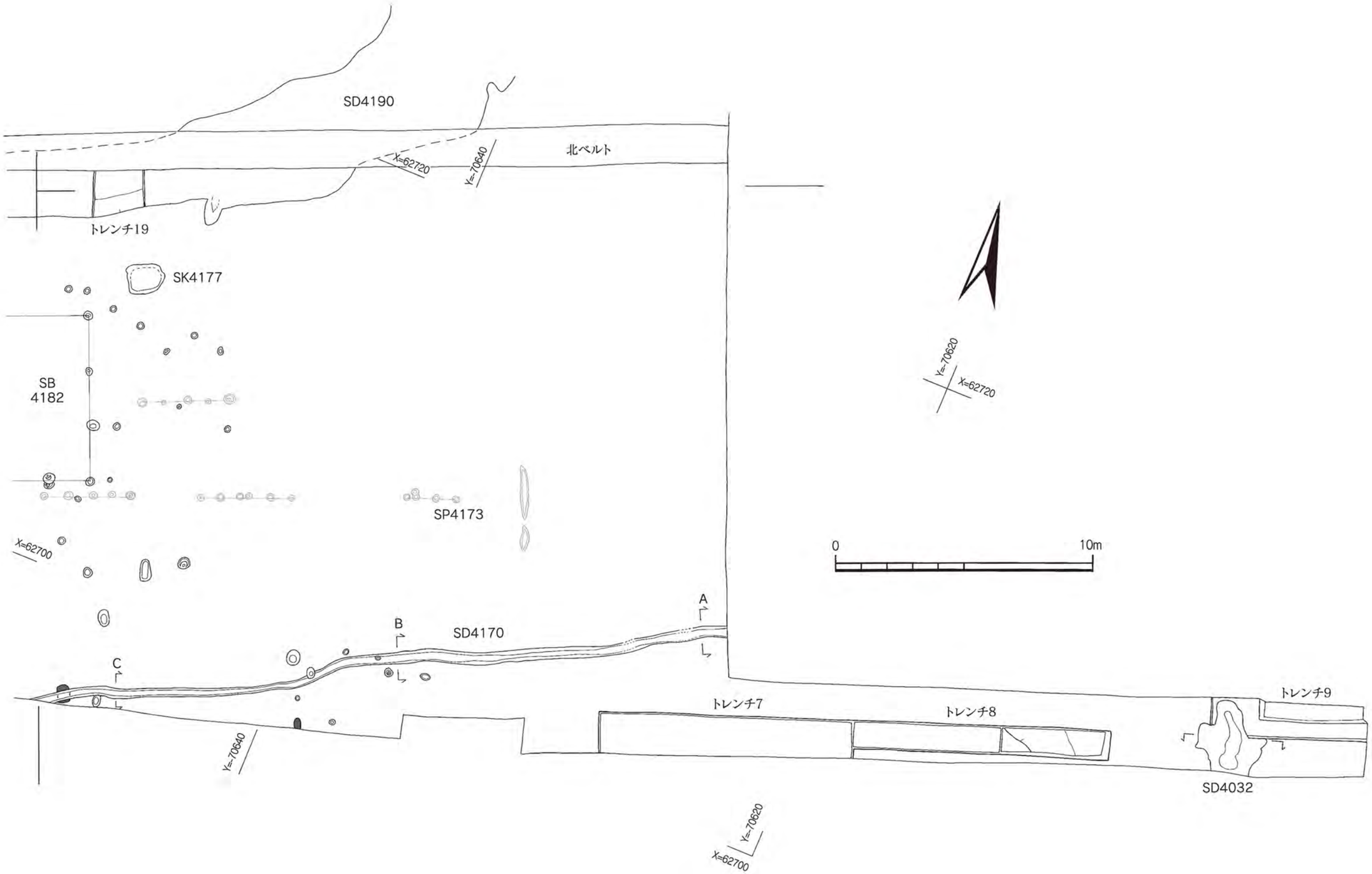
第9-3図　4区遺構平面図1（北西部。S=1/150）



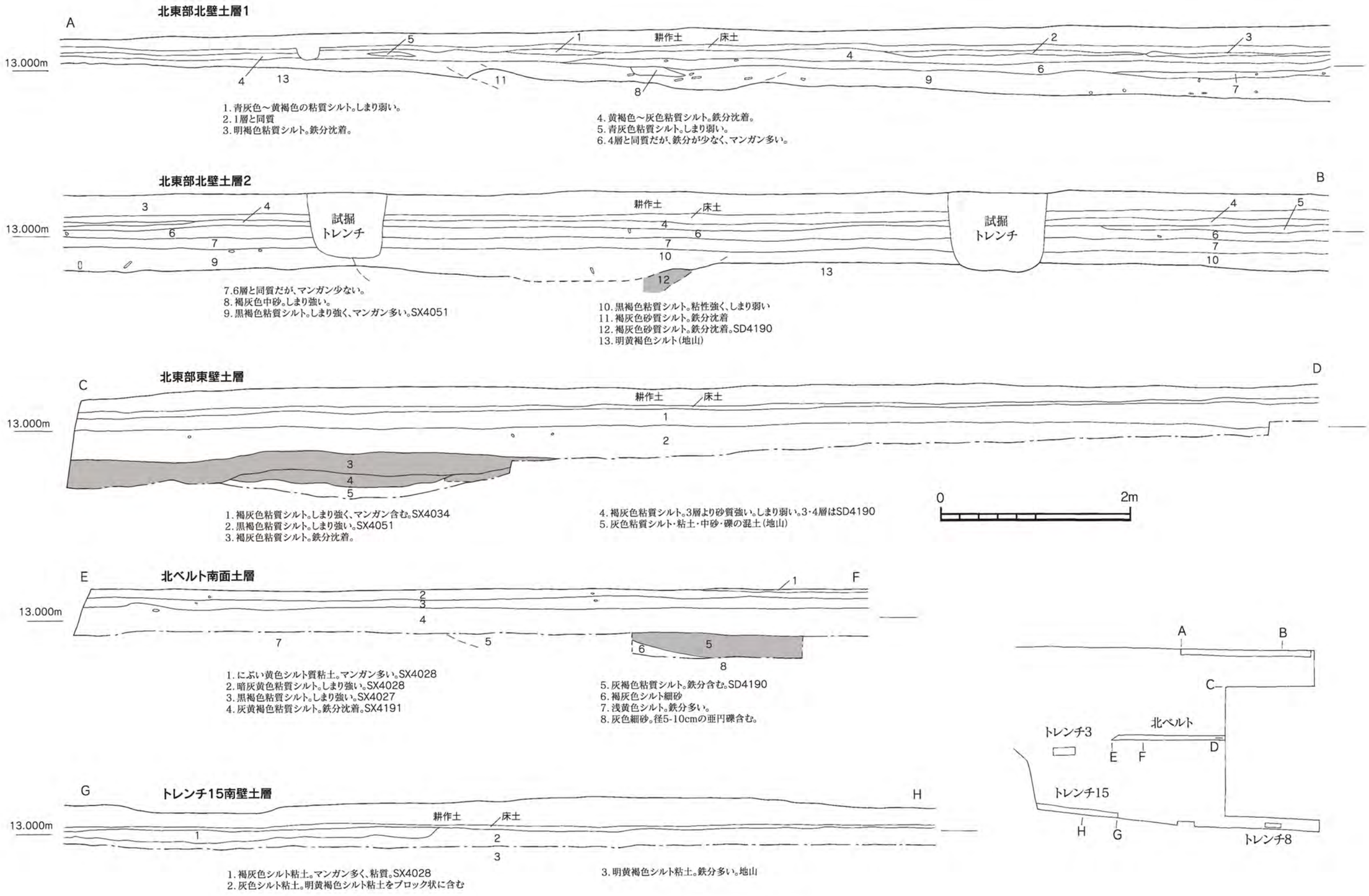
第9-4図　4区遺構平面図2（南西部。S=1/150）



第9-5図　4区遺構平面図3（北東部。S=1/150）

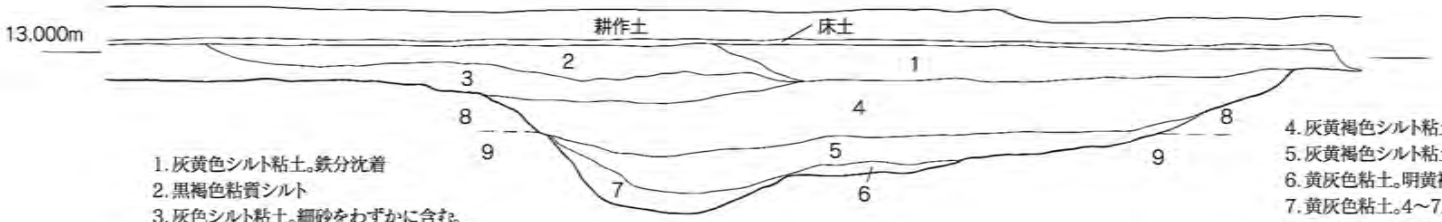


第9-6図　4区遺構平面図4（南東部。S=1/150）



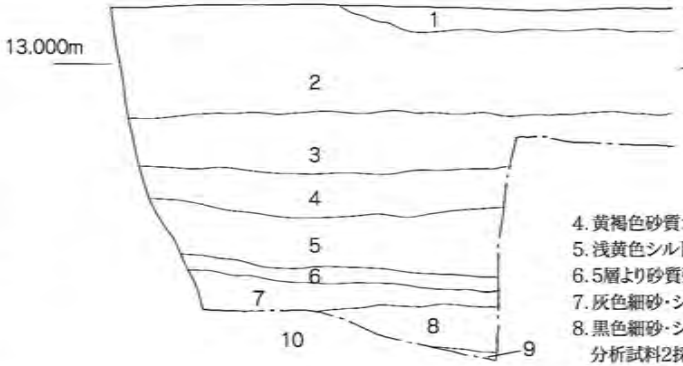
第9-7図　4区土層実測図1 (S=1/40)

トレンチ15南壁SD4190土層



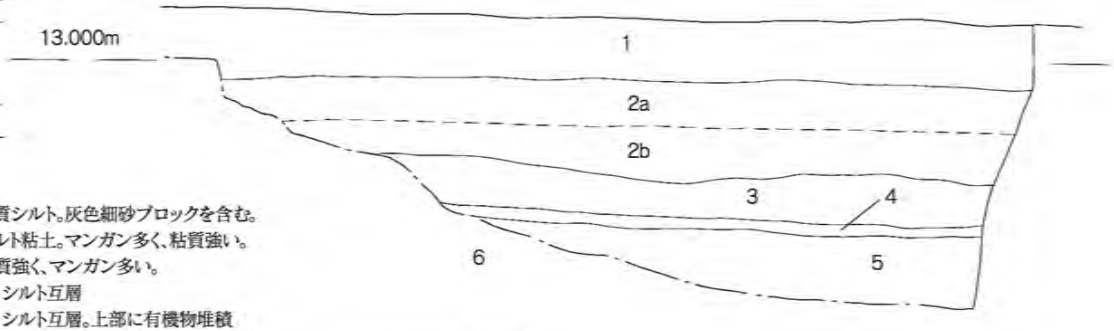
1. 灰黄色シルト粘土。鉄分沈着
2. 黒褐色粘質シルト
3. 灰色シルト粘土。細砂をわずかに含む。
4. 灰黄褐色シルト粘土。細砂をわずかに含む。
5. 灰黄褐色シルト粘土、細～中砂の互層。
6. 黄灰色粘土。明黄褐色シルト粘土をブロック状に含む
7. 黄灰色粘土。4～7層はSD4190
8. 明黄褐色シルト粘土。下部は砂質強まる。
9. 灰黄褐色砂礫混土。径1-3cm亜円礫含む。

トレンチ3北壁土層



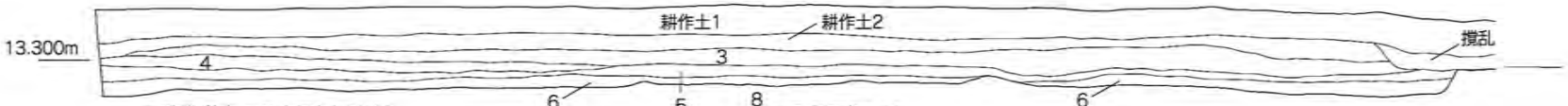
1. 褐灰色粘質シルト。SX4027
2. にぶい黄色砂質シルト。鉄分沈着
3. 明黄褐色砂質シルト。鉄分沈着
4. 黄褐色砂質シルト。灰色細砂ブロックを含む。
5. 浅黄色シルト粘土。マンガン多く、粘質強い。
6. 5層より砂質強く、マンガン多い。
7. 灰色細砂・シルト互層
8. 黒色細砂・シルト互層。上部に有機物堆積
分析試料2採取(ムクノキ。4,310±20calBP)
9. 灰色細砂。径1-5cm亜円礫含む。

トレンチ8北壁土層



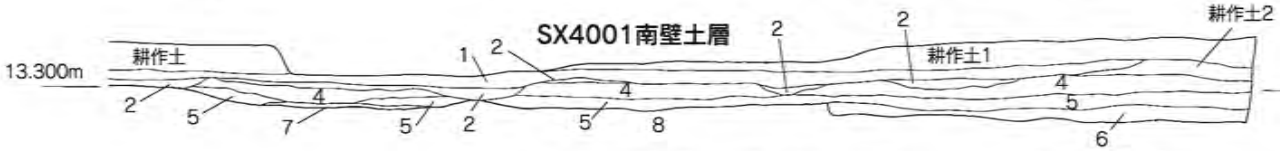
1. 浅にぶい黄色砂質シルト
2a. にぶい黄色砂質シルト。鉄分沈着
2b. にぶい黄色砂質シルト。灰色味強く、鉄分少ない
3. 黄灰色シルト粘土
4. 灰色細砂
5. 黒色細砂・シルト互層。有機物含む。
6. 灰色細砂。径1-5cm亜円礫含む。

SX4001西壁土層



1. 砂礫・粘土・マサ土混土(埋立土)
2. 黒灰色粘土
3. 緑灰色シルト
4. 3層よりシルト質強く、やや明るい

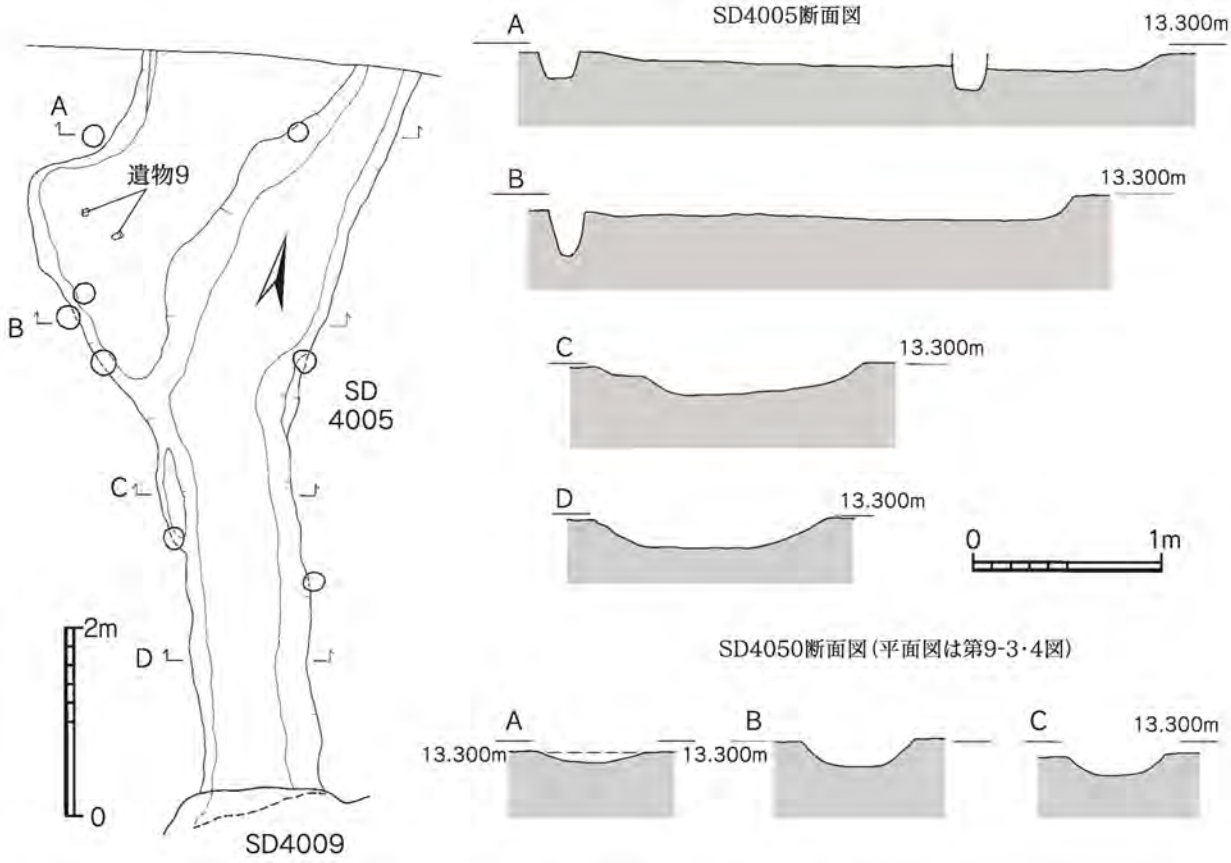
SX4001南壁土層



5. 6層に黄橙色シルトブロック(鉄分)混ざる
6. オリーブ灰色シルト
7. 黄橙色シルト。鉄分沈着
8. 明黄褐色シルト粘土(地山)

0 2m

第9-8図　4区土層実測図2(S=1/40)



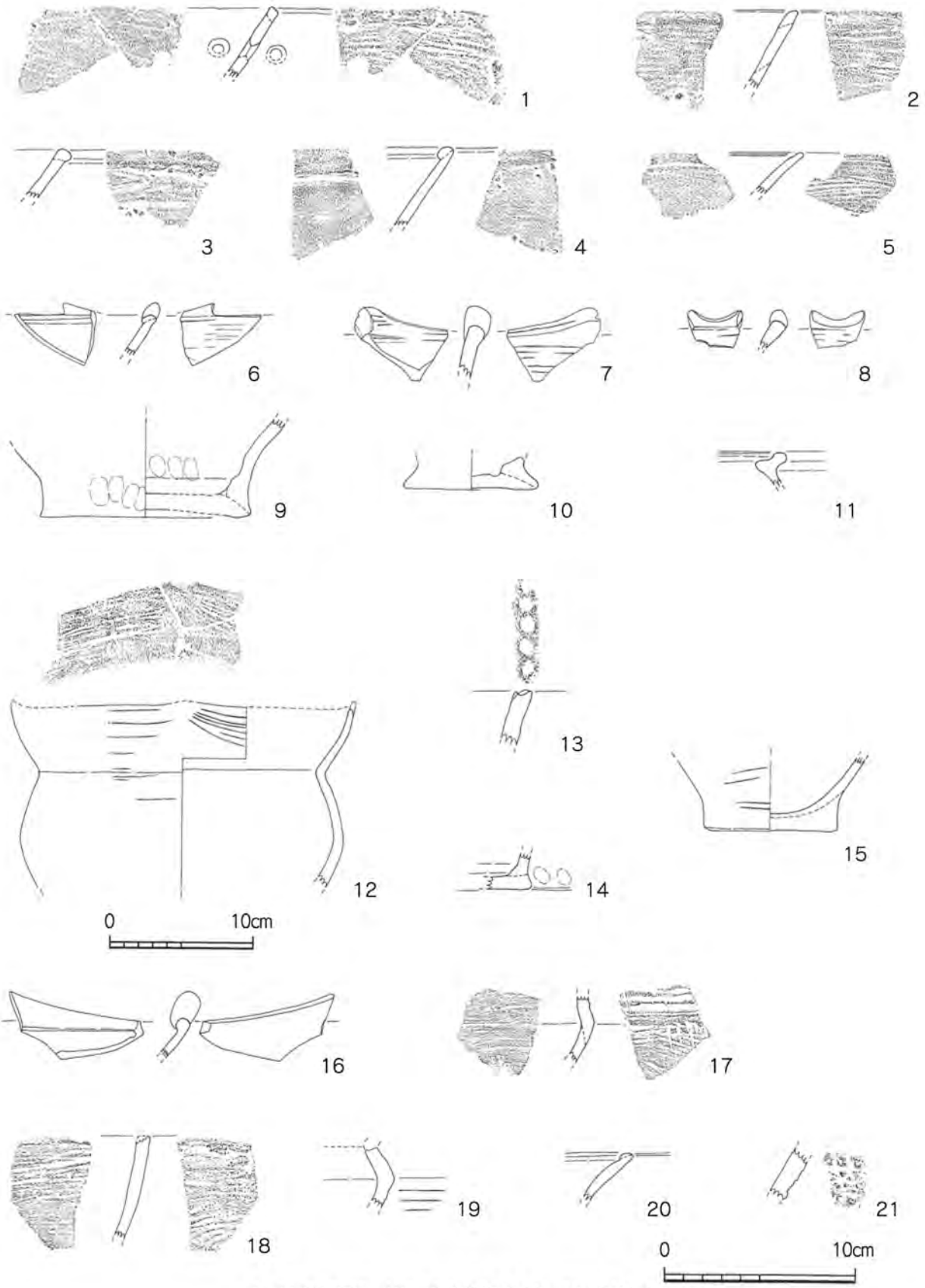
第9-9図　SD4005・SD4050実測図（平面図はS=1/80、断面図はS=1/40）

調査区中央を北東方向に走る大溝である。表土除去時は全体を包含層SX4051に覆われており、人力と重機でSX4051を除去して下面遺構として検出した。全体を一段掘削して平面形を明らかにし、内部は部分的に掘削した。幅は3.8～6mで蛇行し、東側が深くなる断面形で、深さは30～60cmを測る。調査区中央でSD4134と連結し、北東でSD4226と連結している。埋土は灰黄褐～黄灰色のシルト質粘土で、部分的に細～中砂の互層を含む。弥生前期末～弥生中期後半の土器片、黒曜石片など薄型コンテナ１箱分が出土した。

44・**45**は須玖Ⅱ式古段階の甕口縁部片で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色、にぶい橙色を呈す。**46**・**47**・**49**～**51**は板付Ⅱc式で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色～にぶい橙色、にぶい黄橙色を呈す。**46**は甕口縁部片で、口縁部端に浅い刻みをめぐらす。**47**は甕口縁部片で、口縁端部の刻みは認められないが、摩滅によって消失している可能性もある。**49**は甕胴部である。**50**は甕底部で、1/2が残存し、復元底径8cmを測る。**51**は底部で、1/3が残存し、復元底径8cmを測る。**48**は黒川式の深鉢口縁部片で、胎土は細砂を多く含み、アバタ状の小孔が目立つ。色調はにぶい黄褐色～灰黄褐色を呈す。**212**は黒曜石製石鏃で、長さ1.95cm・幅1.6cm・厚さ0.35cm・重量0.6gを測る。**213**は安山岩製石鏃で、長さ2.1cm・幅1.75cm・厚さ0.3cm・重量1.3gを測る。**214**は黒曜石の縦長剥片で、長さ5.7cm・幅1.9cm・厚さ1.1cm・重量8.0gを測る。

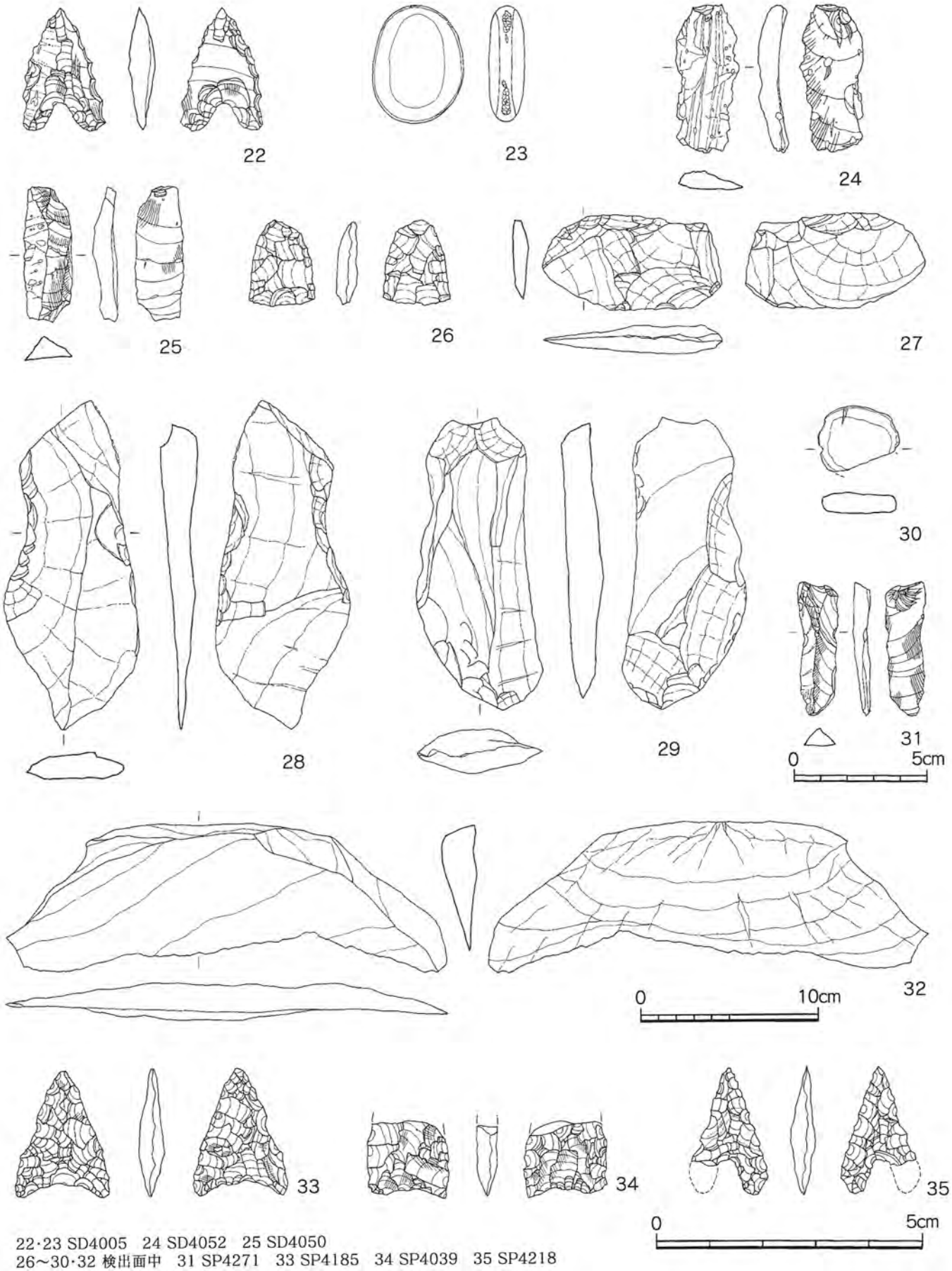
SD4006（第9-3・15図、図版9-1・4・5）　**出土遺物**（第9-16・27図、図版9-11・12）

調査区西側で検出した南北方向の溝である。幅は1.7～2.9mで、断面形は凹凸のあるV字状、深さは60cmを測る。下層に細～粗砂、上層に灰黄褐色シルト・褐色粘質シルトが堆積する。下層は板付Ⅱc式、上層は須玖Ⅱ式古段階が主体となる。SD4009とSD4023とは切り合いになく連結し、SX4022に



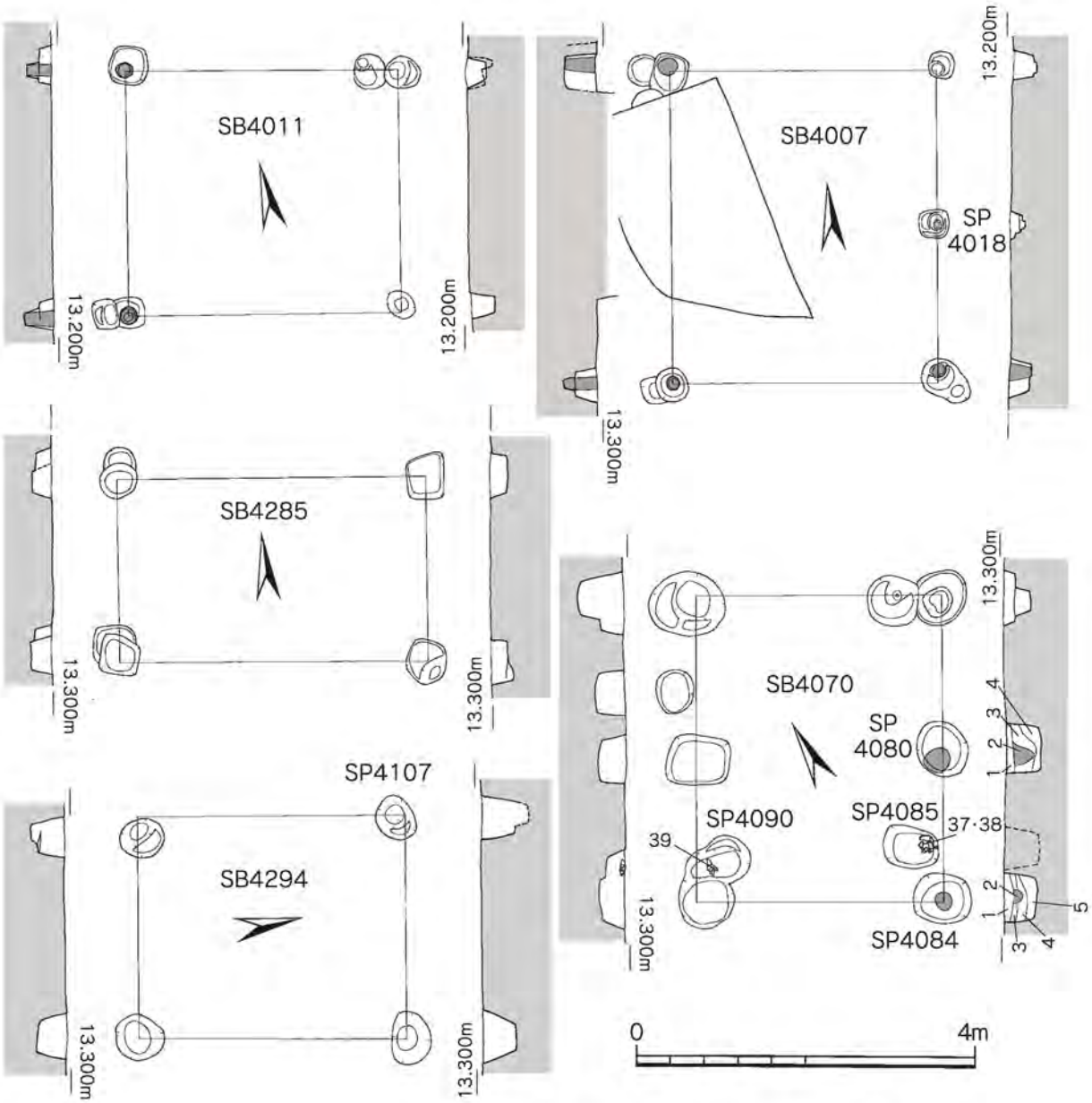
1～11 SD4005　12～16 遺構検出面中　17～21ピット

第9-10図　SD4005・遺構検出面中・ピット出土土器実測図（12はS=1/4、他はS=1/3）



22・23 SD4005　24 SD4052　25 SD4050
26～30・32 検出面中　31 SP4271　33 SP4185　34 SP4039　35 SP4218

第9-11図　SD・遺構検出面中・ピット出土石器実測図
(23～25・30・31はS=1/2、27～29・32はS=1/3、他はS=1/1)



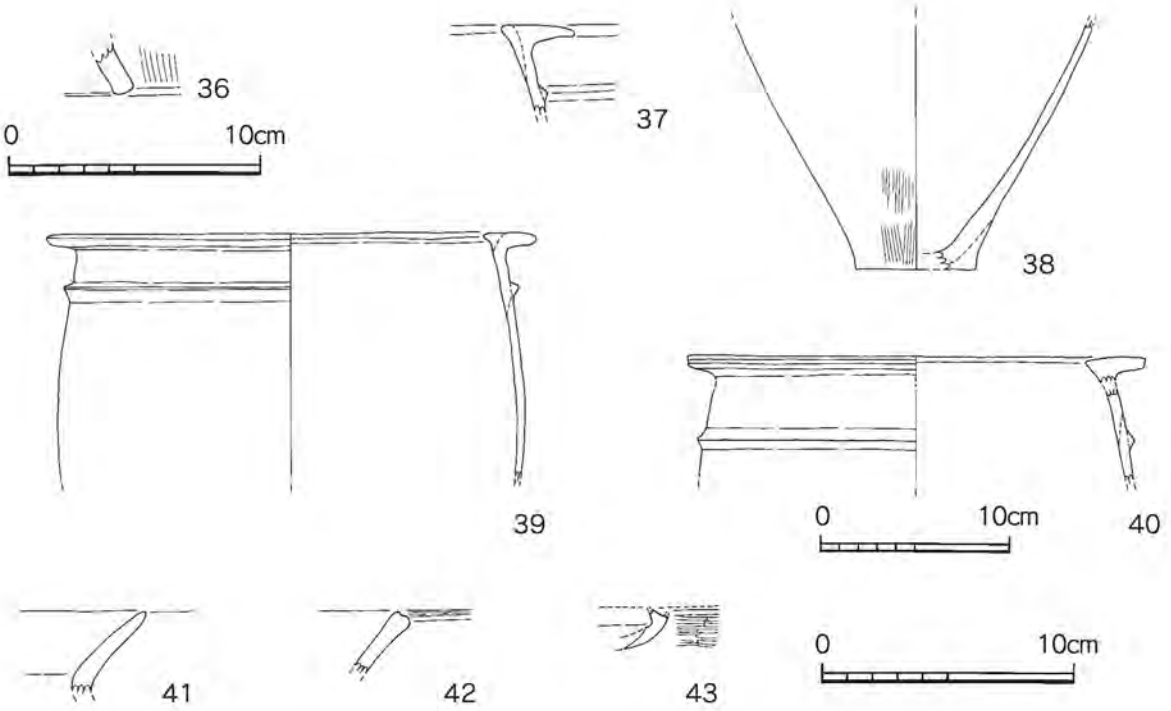
SP4080土層
1. 黄褐色・褐灰色シルト粘土
2. 褐灰色・黄褐色シルト粘土
3. 褐灰色シルト粘土
4. 3層に黄褐色シルト粘土混ざる

SP4084土層
1. 黄褐色(90%)・褐灰色シルト粘土
2. 黄褐色(80%)・褐灰色シルト粘土
3. 褐灰色(90%)・黄褐色シルト粘土
4. 黄褐色(70%)・褐灰色シルト粘土
5. 黒褐色シルト粘土

第9-12図　4区弥生時代SB実測図(S=1/80)

切られる。薄型コンテナ4箱分の遺物が出土した。

SD4006下層　**52**～**55**は、板付Ⅱ式の土器群で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調はにぶい橙色～にぶい黄橙色、灰黄褐色を呈す。**52**は甕口縁部で、く字形口縁で口唇部刻みは浅く雑に入れられる。**53**は甕口縁部で、口唇部に比較的小さい刻みが丁寧に入れられる。**54**は小壺口縁部で、1/6が残存し、復元口径10.4cmを測る。**55**は中型壺の口縁部である。**56**は黒川式の組織痕土器片で、胎土は細砂を多く含み、色調は黒色を呈す。組織痕は、幅0.7mmほどの紐が5～6mm間隔で編まれ、結節が認められる。**57**は黒川式の深鉢底部で、1/2が残存し、復元底径9.2cmを測る。胎土は細砂を多く含



36 SP4018　37·38 SP4085　39 SP4090　40 SP4107　41 SP4121　42 SP4249　43 SP4037
第9-13図　弥生時代SB·古墳時代SP出土土器実測図(38～40はS=1/4、他はS=1/3)

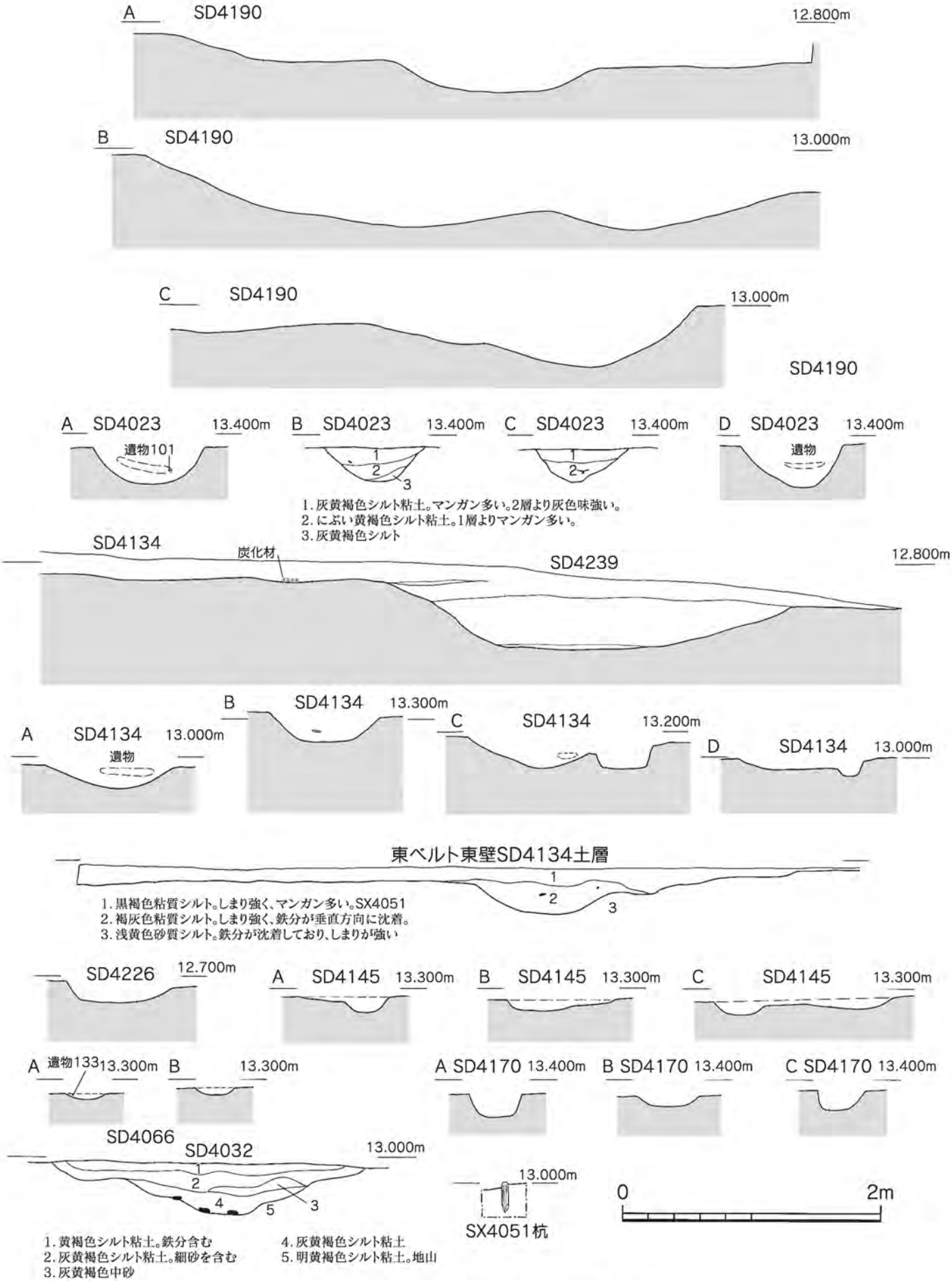
み、色調は橙色を呈す。器面にはアバタ状の小孔が目立つ。**58**は黒川式の深鉢口縁部で、胎土は細砂を多く含み、色調は黒褐色を呈す。山形口縁で、内外面ともに横位の貝殻条痕で調整される。

SD4006上層　**59～66**は須玖II式古段階の土器で、いずれも胎土は細～粗砂を多く含み、焼成は良好、色調は橙色～にぶい橙色を呈す。**59**は甕上部で、1/6が残存し、復元口径26cmを測る。**60**は甕上部で、1/6が残存し、復元口径29cmを測る。**61**は甕口縁部で、1/4が残存し、復元口径26.6cmを測る。**62**は甕底部で、1/2が残存し、復元底径10cmを測る。**63**は高坏の坏と脚の接合部である。**64**は器台の上半部で、1/4が残存し、復元径9cmを測る。**65**は器台下半部で、1/3が残存し、復元径9cmを測る。**66**は丹塗壺の底部で、底径は4.2cmを測る。

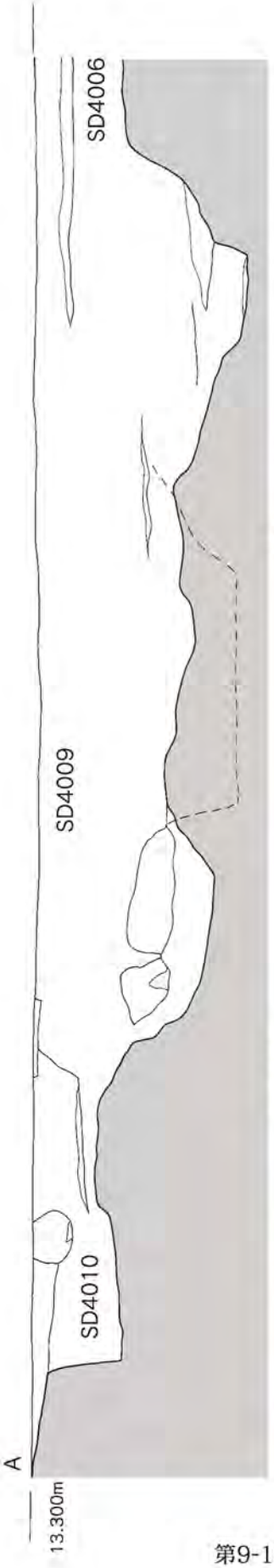
SD4006出土石器　**215**は黒曜石製の凹基石鏃で、残存長2cm・残存幅1.1cm・厚さ0.6cm・残存重量1.5gを測る。先端と右脚が欠損し、左脚部分は再加工されている。**217**は黒曜石製の石錐で、残存長1.45cm・幅1.2cm・厚さ0.25cm・残存重量0.4gを測る。先端縁辺に微細剥離が認められる。**216**は細粒砂岩製の砥石片で、重量は115.3gを測る。砥面は3面で、2～3cmと幅広に凹み、研ぎ方向はいずれも長軸方向である。

SD4009（第9-3・15図、図版9-1・3・6）　**出土遺物**（第9-17・27図、図版9-11・12）

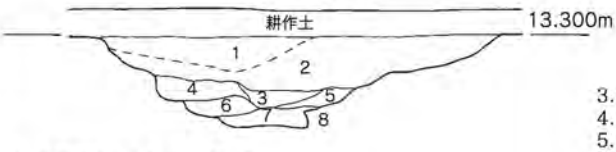
調査区西側で検出した長軸南北方向の溜井である。長さ8.3m・幅5mで、断面形は凹凸をなす逆台形で中央が深くなり、深さは1.5mを測る。壁には細かい凹凸がみられ、砂とグライ化したシルトが堆積している。堆積はシルトと砂の互層で、土坑部分の埋没後、少なくとも2時期の流路堆積が認められる（第9-15図土層D）。SD4006・SD4010とは切り合いになく連結している。上層には須玖II式古段階、下層には黒川・夜臼・板付式土器が堆積する。黒曜石・安山岩の大型剥片など薄型コンテ



第9-14図　4区SD断面・土層実測図(S=1/40)

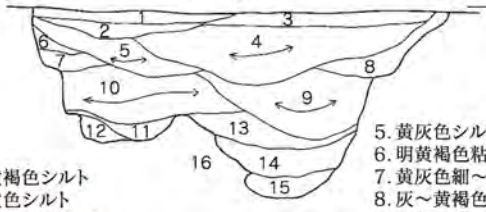


SD4006北壁



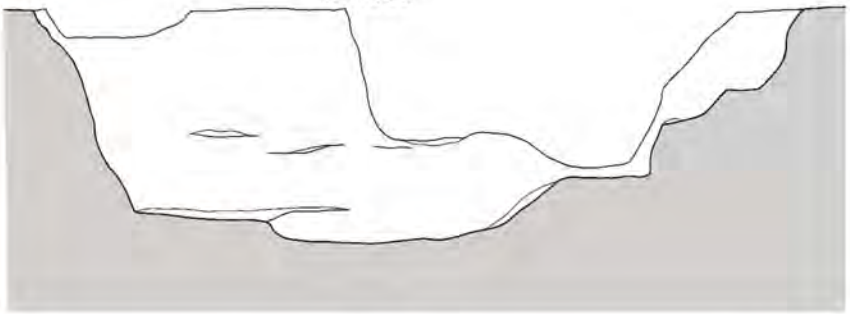
1. 灰黄褐色シルト。マンガン多い
2. 1層と同質だが、砂質強く、マンガン少ない
3. 褐色粘質シルト。しまり強い
4. 白色粗砂・黄褐色シルト互層
5. 白色中～粗砂
6. 白色中～粗砂。径7-8cm礫多い
7. 褐灰色細砂
8. 明黄褐色シルト(地山)

B　SD4009　13.300m

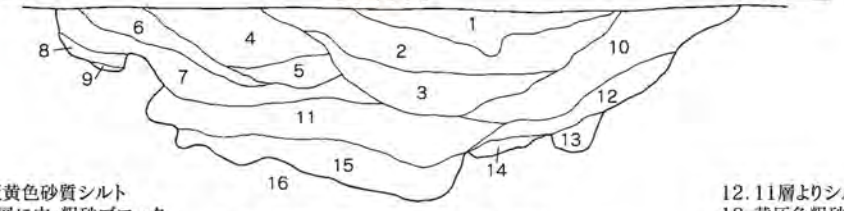


1. 灰黄褐色シルト
2. 灰黄色シルト
3. 1層より砂質強い
4. 灰白色中～細砂互層
5. 黄灰色シルト～粗砂互層
6. 明黄褐色粘質シルトと砂の混土
7. 黄灰色細～粗砂混土
8. 灰～黄褐色細砂
9. 白色砂礫～細砂互層
10. 暗灰色シルト～粗砂互層
11. 暗灰色細砂・シルト互層
12. 灰白色細～中砂互層
13. 白灰色細～中砂互層
14. 暗灰色粘質シルト・中砂互層
15. 14層にオリーブ灰色粘土混ざる。
16. 明黄褐色シルト粘土(地山)

C　SD4009　13.300m

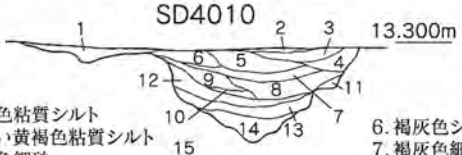


D　SD4009　13.300m



1. 灰黄色砂質シルト
2. 1層に中・粗砂ブロック
3. 暗灰黄色細～粗砂互層
4. 1層より砂質強い
5. 暗灰黄色シルト・中砂互層
6. 黄灰色細・中砂互層
7. 灰黄色シルト・細砂互層
8. 7層に地山土を含む
9. 灰黄色粗砂
10. 黄灰色・黄褐色シルト互層
11. 黄灰色シルト～白色粗砂互層
12. 11層よりシルト質強い。
13. 黄灰色粗砂
14. 黄灰色粗砂
15. 黄灰色中～粗砂互層
16. 明黄褐色シルト粘土(地山)

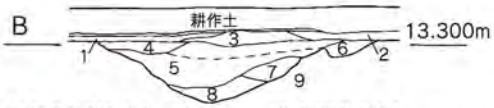
A　SD4010　13.300m



1. 褐灰色粘質シルト
2. にぶい黄褐色粘質シルト
3. 褐灰色細砂
4. 灰黄褐色砂質シルト
5. 褐灰色細砂
6. 褐灰色シルト質細砂
7. 褐灰色細砂
8. 灰色細～中砂互層
9. 褐灰色細砂
10. 明黄褐色シルト粘土
11. 黄灰色細砂。地山土混
12. 灰色細砂
13. 灰色砂質粘土
14. 灰色細～中砂細互層
15. 明黄褐色シルト粘土

SD4010

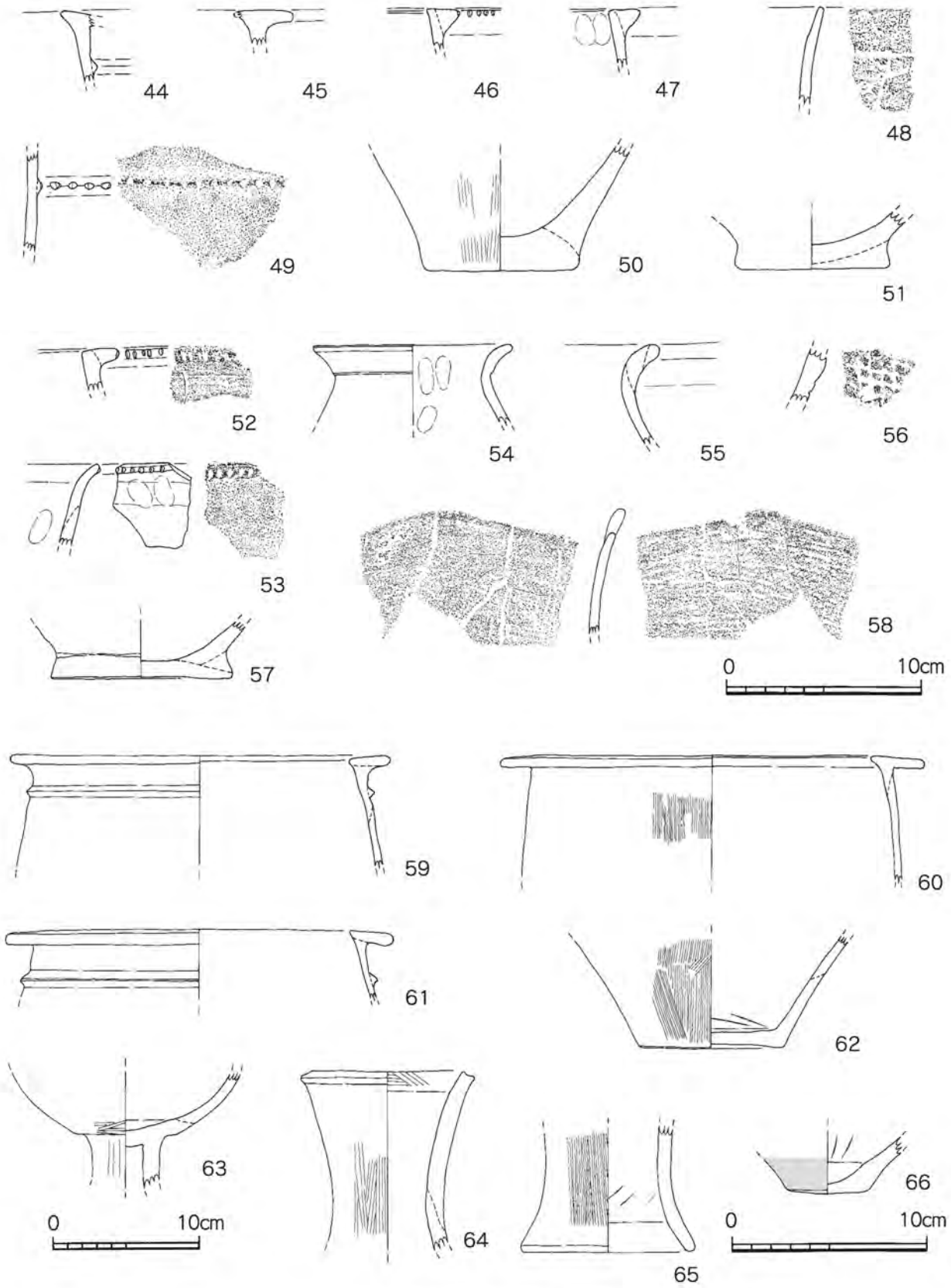
B　耕作土　13.300m



1. 灰色粘質シルト
2. 1層と同質
3. 緑灰色シルト
4. 5層に灰色中砂多く含む
5. 褐灰色細砂
6. 7層より砂質
7. 8層より砂質
8. 灰色中～粗砂互層
9. 明黄褐色シルト粘土

0　2m

第9-15図　4区SD4006・4009・4010断面・土層実測図(S=1/50)

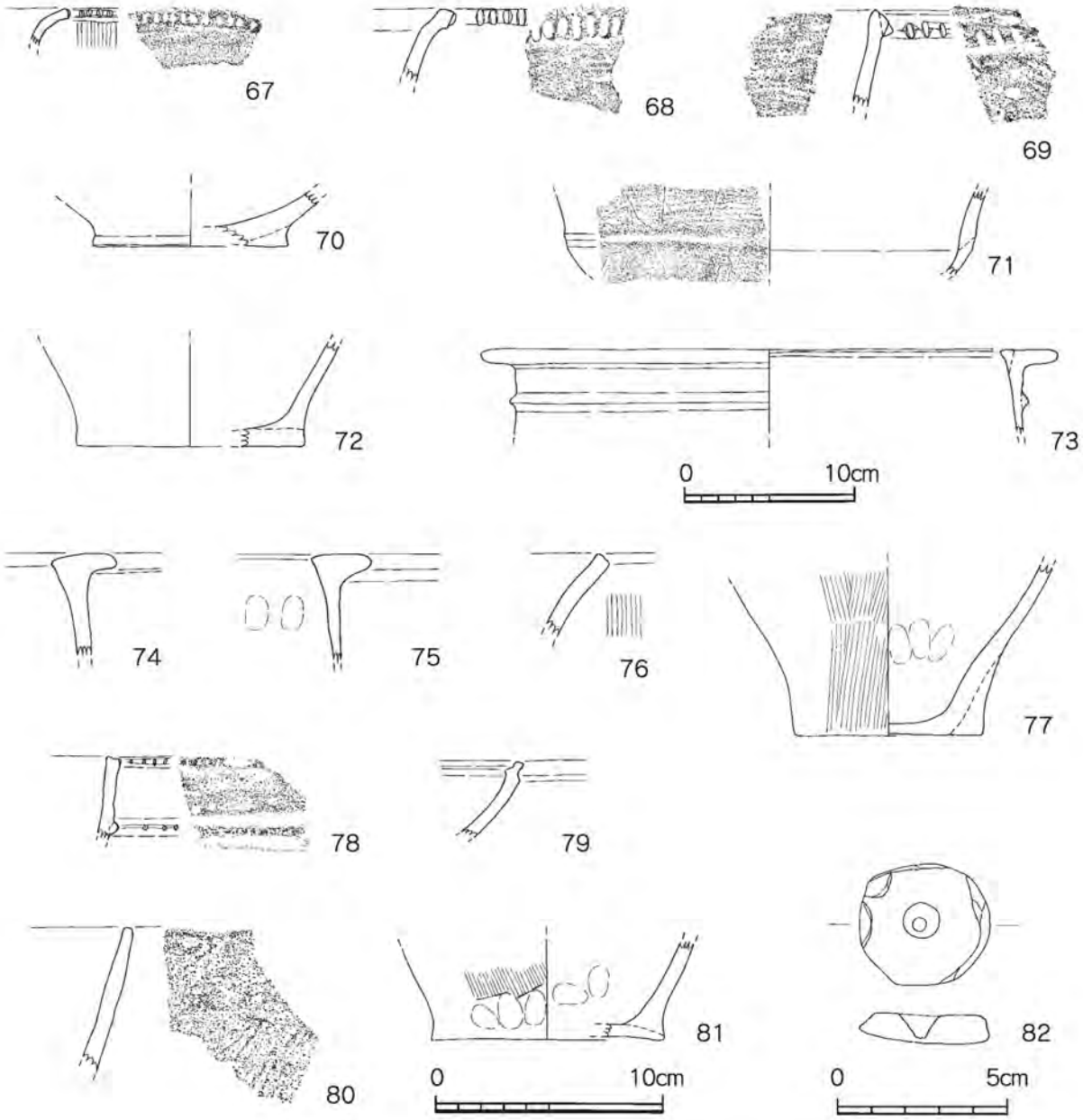


44～51 SD4190　52～66 SD4006

第9-16図　SD4190・4006出土土器実測図（59～66はS=1/4、他はS=1/3）

ナ1箱分が出土した。

SD4009下層　67・68は、板付Ⅰ式の甕口縁部片で、口唇部に刻みを有す。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は浅黄色～にぶい黄色、橙色を呈す。**69**は夜臼式の甕口縁部片で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色～褐灰色を呈す。**70**は壺底部で、1/4が残存し、復元底径8.4cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**71**は黒川式の鉢胴部で、1/8が残存し、復元胴径24cmを測る。細～粗砂、特に角閃石を多く含み、色調はにぶい黄橙色～灰黄褐色を呈す。**72**は縄文時代晩期の深鉢底部で、1/4が残存し、復元底径10cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、アバタ状の小孔が目立ち、色調は灰黄褐色～橙色を呈す。



67～72 SD4009下層　73～78 SD4009上層　79～82 SD4009南ベルト

第9-17図　SD4009出土土器実測図（71・73はS=1/4、82はS=1/2、他はS=1/3）

SD4009南ベルト　**79**は黒川式の浅鉢口縁部片で、胎土は細砂を多く含み、色調はにぶい黄褐色を呈す。**80**は黒川式の深鉢口縁部片で、胎土は細～粗砂、特に角閃石を多く含み、色調はにぶい黄褐色を呈す。**81**は板付式の甕底部で、1/4が残存し、復元底径10.2cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、色調はにぶい褐色を呈す。**82**は円盤状土製品で、径3.6～3.8cm・厚さ0.9cm・孔径1.1cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。胎土・色調より弥生前期の土器を転用したものと考えられる。穿孔は貫通していない。この他、白色花崗岩製の磨石片（残存重量372.6g）が出土した。

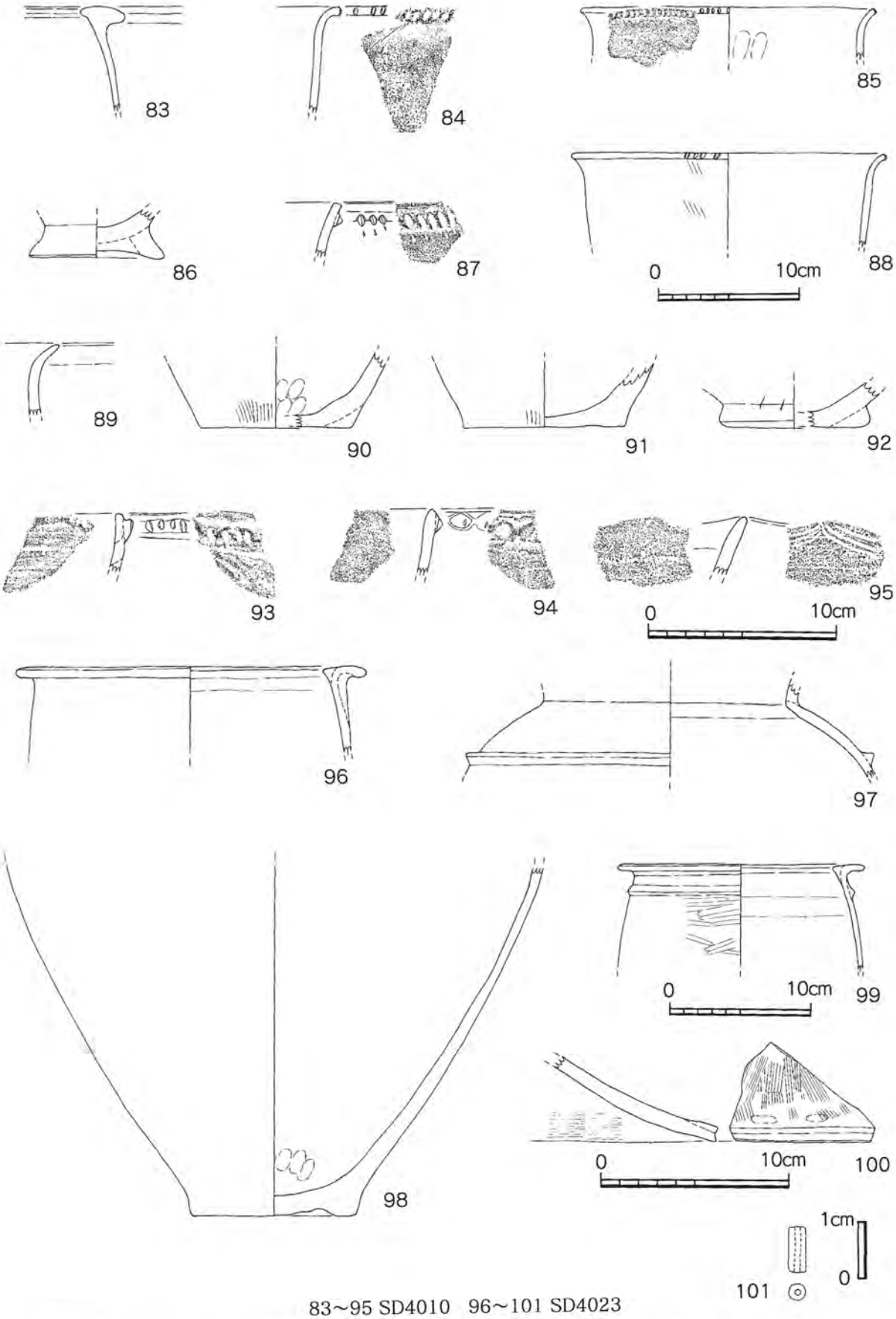
SD4009上層　**73**～**77**は須玖Ⅱ式古段階の土器で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**73**は甕口縁部で、1/10が残存し、復元口径34cmを測る。**74**・**75**は甕口縁部片である。**76**は器台の上部片である。**77**は甕底部で、1/4が残存し、復元底径8.4cmを測る。**78**は、甕口縁部片で、細い突帯上にごく浅い刻みを施す。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は黄褐色を呈す。**218**は安山岩製の石錐で、長さ1.6cm・幅1.35cm・厚さ0.3cm・重量0.4gを測る。

SD4009出土石器　**219**は黒曜石製の使用痕剥片石器で、長さ6.7cm・幅2.9cm・厚さ1.1cm・重量17.9gを測る。両側辺に片面微細剥離が認められる。**220**は安山岩剥片で、長さ7.0cm・幅4.2cm・厚さ1.5cm・重量54.4gを測る。**221**は安山岩の剥片で、長さ6.5cm・幅4.4cm・厚さ1.9cm・重量59.4gを測る。**222**は黒曜石の石核で、長さ2.9cm・幅6.7cm・厚さ2.4cm・重量36.9gを測る。**223**は黒曜石の横長剥片で、長さ3.05cm・幅5.7cm・厚さ1.5cm・重量14.9gを測る。

SD4010（第9-3・4・15図、図版9-1・4・6）　**出土遺物**（第9-18・27図、図版9-11・13）

調査区西側で検出した南北方向の溝である。幅は1.5～2.3mで、断面形は壁面が凹凸をなすV字状で深さ40～60cmを測る。埋土はシルトと細～中砂の互層状堆積である。SD4009とは切り合いになく連結する。全体に暗色で砂粒を多く含む胎土の土器片が多く、弥生中期の土器はほとんど含まない。

83～**92**は板付式で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**83**は甕口縁部片である。**84**は甕口縁部片で、口唇部に浅い刻みがめぐる。**85**は甕口縁部で、1/10が残存し、復元口径21cmを測る。口唇部の刻みは浅く比較的密に施される。色調はにぶい黄橙色を呈す。**86**は甕底部で、1/2が残存し、復元底径7.2cmを測る。**87**は甕口縁部片で、突帯は細く、刻みはヘラ状工具によるもので鋭い。突帯上への刻みを施した際に付いたと思われる刻み列が突帯下にみられる。色調は灰褐色を呈す。**88**は甕口縁部で、1/6が残存し、復元口径22.4cmを測る。摩滅により不明瞭であるが、口唇部に浅い刻みをめぐらしている。**89**は小型壺の口縁部片で、胎土は細砂を含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**90**は甕底部で、1/3が残存し、復元底径8cmを測る。**91**は甕底部で、1/4が残存し、復元底径8.6cmを測る。色調はにぶい橙色を呈す。**92**は甕底部で、1/3が残存し、復元底径8cmを測る。色調はにぶい橙色～橙色を呈す。**93**・**94**は夜臼式土器で、胎土は細～粗砂をやや多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**93**は甕口縁部片で、突帯は太く、刻みは細く深い。色調は浅黄色を呈す。**94**は甕口縁部片で、突帯は太く、刻みは指頭によるもので大きい。**95**は黒川式の深鉢口縁部片で、口縁部に3本沈線による大ぶりな連続円弧文がめぐる。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は褐灰色～黒色を呈す。**224**は安山岩製の横長石匙で、長さ6.3cm・体部幅1.5cm・つまみ長1.4cm・厚さ0.92cm・重量10.7gを測る。前面は比較的細かい二次調整を施すが、後面は礫面を残し、粗い二次調整にとどまる。**225**は玄武岩質の磨石片で、1/2が残存し、残存長6.8cm・幅12cm・厚さ6.2cm・残存重量769.1gを測る。図化していないが、幅6.2cm・長さ3.85cm・厚さ1.45cm・重量44.4gを測る安山岩製の横長剥片が出土している。



83～95 SD4010　96～101 SD4023

第9-18図　SD4010・4023出土遺物実測図(85・88・96～99はS=1/4、101はS=1/1、他はS=1/3)

SD4023（第9-3・4・14図、図版9-1・5）　**出土遺物**（第9-18図、図版9-11）

調査区中央を西西北に走る溝である。幅は75～90cmで、断面形は緩やかなV字状、深さは24～32cmを測る。埋土は褐灰粘質シルト・灰色シルトと地山（明黄褐色シルト）の混土で、上部に土器が堆積する。遺物は全体に摩滅し、接合しない土器小片・黒曜石片が、薄型コンテナ2箱分出土した。

96～**100**は須玖Ⅱ式古段階の土器で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**96**は甕口縁部で、1/8が残存し、復元口径25cmを測る。**97**は壺肩部で、1/6が残存し、復元頸径18cmを測る。摩滅による器面の劣化が著しい。**98**は甕下半部で、1/8が残存し、底径11.6cm・復元胴径38cmを測る。**99**は小型甕の上半部で、1/6が残存し、復元口径17.6cmを測る。色調は浅黄橙色を呈し、外面はヨコミガキ状に丁寧に仕上げられる。**100**は蓋裾部である。**101**は滑石質の管玉で、長さ8.5mm・外径3mm・孔径1mm・重量0.1gを測る。上下両方から穿孔している。

SD4134との合流地点　**102**は高坏口縁部である。**103**は甕底部で、1/2が残存し、復元底径6.8cmを測る。底部中央に外面から径2cmの孔を穿っている。**104**は蓋上部で、持ち手部径が6.2cmを測る。**105**は甕口縁部で、1/6が残存し、復元口径25cmを測る。**106**は壺頸部で、1/8が残存し、復元頸径20cmを測る。**107**は壺肩部で、4/5が残存し、復元頸径19cmを測る。

SD4134（第9-4・5・14図、図版9-1・5）　**出土遺物**（第9-19・28図、図版9-11・12）

調査区中央を北東方向に走る溝である。幅は75～120cmで、断面形は逆台形、深さは8～22cmを測る。埋土は褐灰色粘質シルトである。薄型コンテナ2箱分の遺物が出土した。

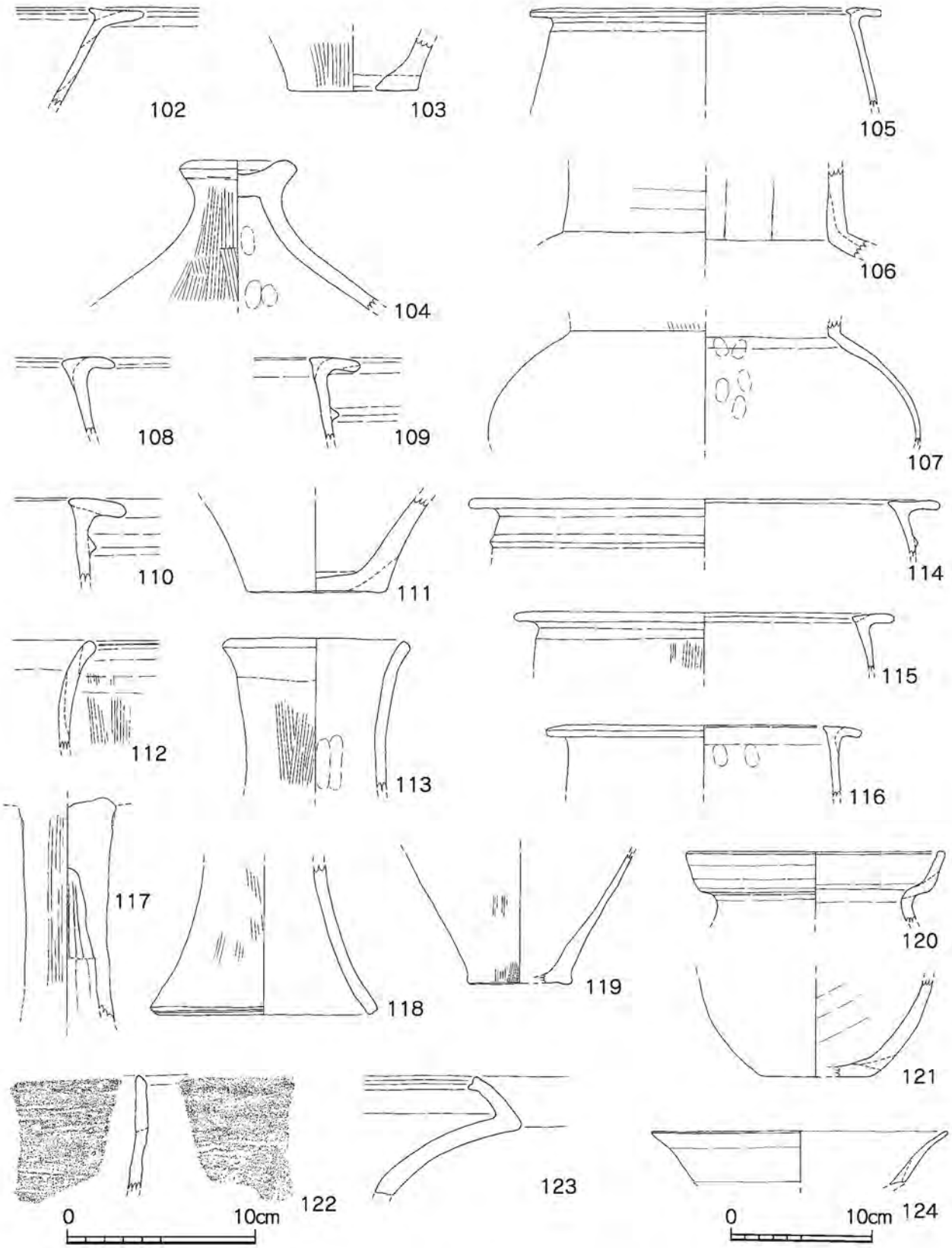
108～**119**は須玖Ⅱ式古段階の土器である。**108**・**109**・**110**は甕口縁部である。**111**は甕底部で、1/2が残存し、復元底径7.4cmを測る。**112**は器台上部片である。**113**は器台上半部で、1/6が残存し、復元径10cmを測る。**114**は甕口縁部で1/6が残存し、復元口径33.6cmを測る。**115**は甕口縁部で1/8が残存し、復元口径27cmを測る。**116**は甕口縁部で1/6が残存し、復元口径22.4cmを測る。**117**は高坏脚部である。**118**は器台下半部で、1/8が残存し、復元径12cmを測る。**119**は甕底部で、1/8が残存し、復元底径7.4cmを測る。**120**・**121**・**123**・**124**は、下大隈式段階の土器で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は灰黄褐色～橙色を呈す。上層のSX4051からの混入と考える。**120**は山陰系の二重口縁壺口縁部で、1/4が残存し、復元口径18.4cmを測る。胎土は目立って粗砂を多く含み、色調は外面が橙色を呈す。**121**は甕底部で、1/4が残存し、復元底径8cmを測る。**123**は袋状口縁壺口縁部片である。**124**は高坏坏部で、1/10が残存し、復元口径21cmを測る。**226**は黒曜石製の打製石鏃未成品で、長さ2.75cm・幅1.9cm・厚さ0.5cm・重量2.4gを測る。**227**は安山岩製の打製石鏃で、長さ2.65cm・幅1.15cm・厚さ0.4cm・重量1.0gを測る。**228**は黒曜石製の打製石鏃で、先端と脚端を欠損しており、残存長1.7cm・幅1.25cm・厚さ0.35cm・残存重量0.4gを測る。

SD4145（第9-4・14図、図版9-1・6）

調査区中央南側で検出した溝である。幅は40～75cmとなり、断面形は非対称なU字形で、深さは5～31cmを測る。図化に耐えないが、丹塗土器・弥生土器片、黒曜石片・安山岩砕片が出土した。SX4027・SX4229（西新式）を切り、SD4004（弥生終末～古墳初頭）に切られる。平面ではSD4050と連続的にも見えるが、時期の異なる溝である。

SD4226（第9-5・14図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-19図、図版9-11）

調査区北東で検出した溝である。幅は90～120cm、断面形は逆台形で、深さは16cmを測る。縄文・弥生土器片・黒曜石片が出土した。



102～107 SD4023･4134合流　　108～121･123･124 SD4134　122　SD4226

第9-19図　SD4023･4134･4226出土土器実測図
(105～107･114～116･119～121･124はS=1/4、他はS=1/3)

122は黒川式の深鉢口縁部片で、胎土は細～粗砂をやや多く含み、色調は赤みがかった橙色を呈す。

SD4239（第9-5・14図、図版9-1）

調査区北東で一部を検出した溜井状遺構で、長さ4m以上・幅3.3m・深さ60cmを測る。SD4134との連結部分に炭化材が残っていた。

出土遺物（第9-28図、図版9-13）

229は黒曜石の縦長剥片で、長さ5.6cm・幅2cm・厚さ0.6cm・重量8.6gを測る。その他、弥生土器片・玄武岩製石斧片が出土している。

SD4004（第9-3・4・20図、図版9-1・3・6）

調査区西側を東西方向に蛇行する溝である。幅は20～40cmで、断面形は方形、深さは16～32cmを測る。埋土は褐灰～黒褐色シルト質粘土で、SD4010・SX4027を切る。

出土遺物（第9-21図、図版9-11）

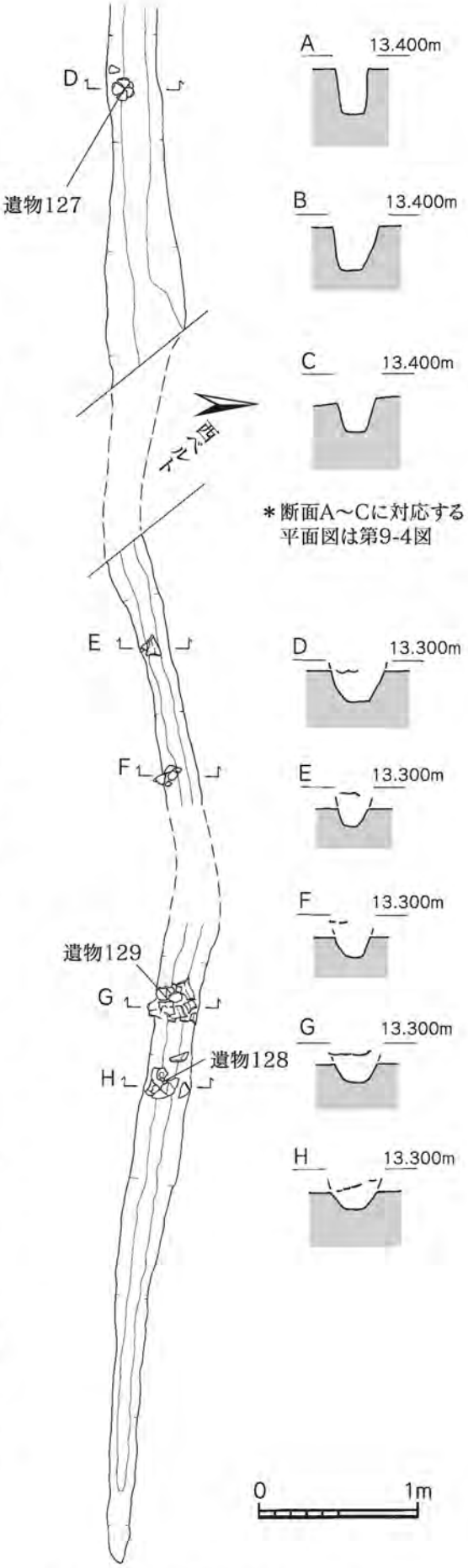
土器は弥生時代終末で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は浅黄色～にぶい橙色、灰褐色を呈す。**125**は甕口縁部片である。**126**は甕底部で、小平底をなし、底径5cmを測る。**127**はほぼ完形の小形鉢で、口径12.6cm・器高5.1cmを測る。**128**は高坏脚部で、復元脚径17cmを測る。**129**は甕で、1/3が残存し、復元口径21.6cmを測る。

SD4066（第9-5・14図、図版9-1・5）

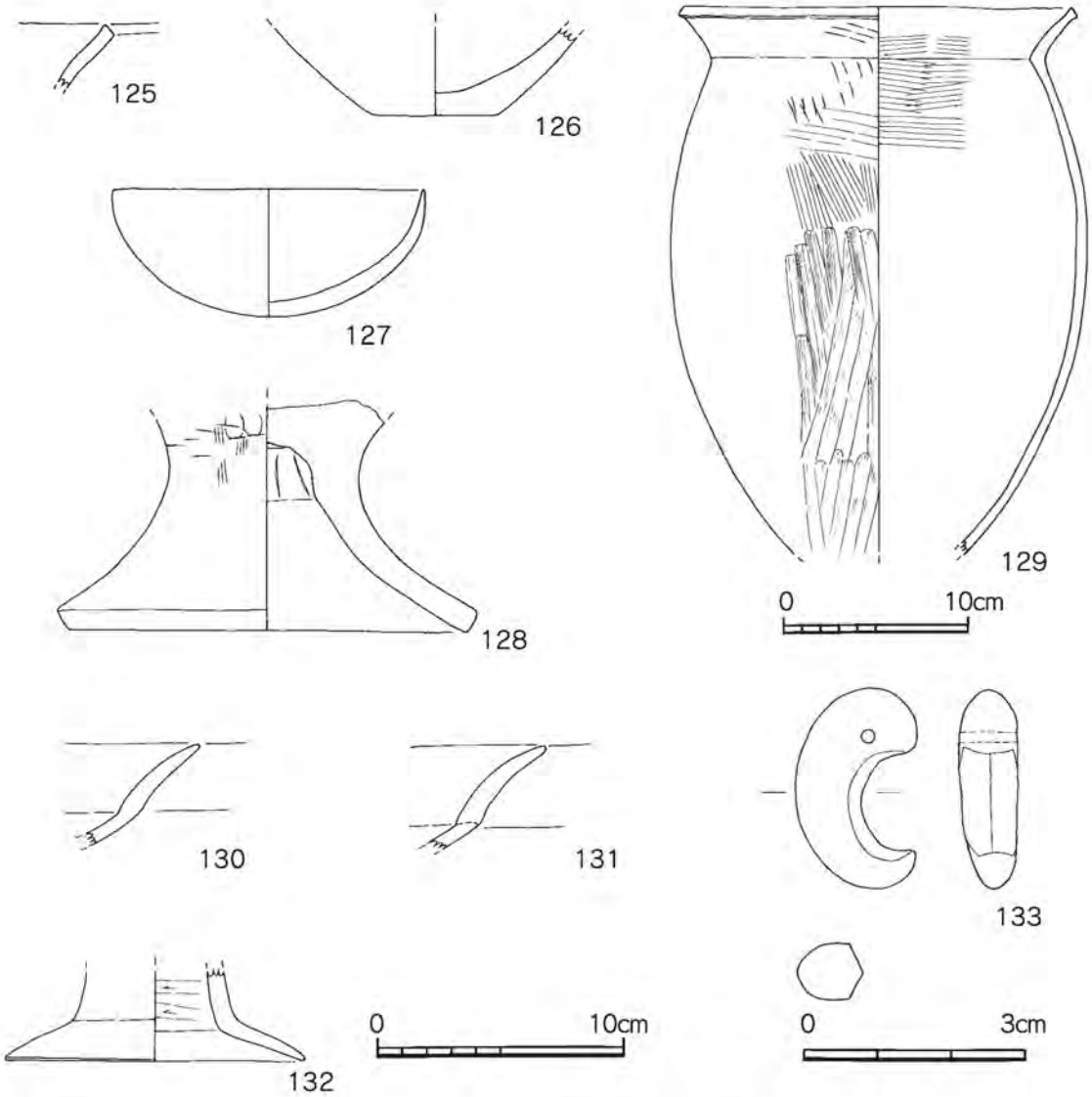
調査区東側を北東方向に走る溝で、幅30～38cm、断面形はU字形、深さ5cmを測る。埋土は灰黄色中砂である。

出土遺物（第9-21・28・29図、図版9-11～13）

土器の時期は弥生時代終末で、胎土は細～粗砂をやや多く含み、色調は橙色～にぶい橙色を呈す。**130**・**131**は高坏口縁部片である。**132**は高坏脚部で、1/3が残存し、復元脚径12.2cmを測る。**133**は蛇紋岩製の勾玉で、長さ2.7cm・幅1.6cm・厚さ0.8cm・重量3.9gを測る。腹部が両脇で面取されており、断面形が五角形状になる。**238**は安山岩製の打製石鏃で、長さ2.55cm・幅1.3cm・厚さ0.4cm・重量1.3gを測る。**242**は玄武岩の横長剥片で、長11.3cm・幅18.6cm・厚さ2.73cm・重量462.1gを測る。



第9-20図　SD4004実測図（S=1/40）



125～129　SD4004　　130～133　SD4066

第9-21図　SD4004･4066出土遺物実測図（129はS=1/4、133はS=1/1、他はS=1/3）

包含層

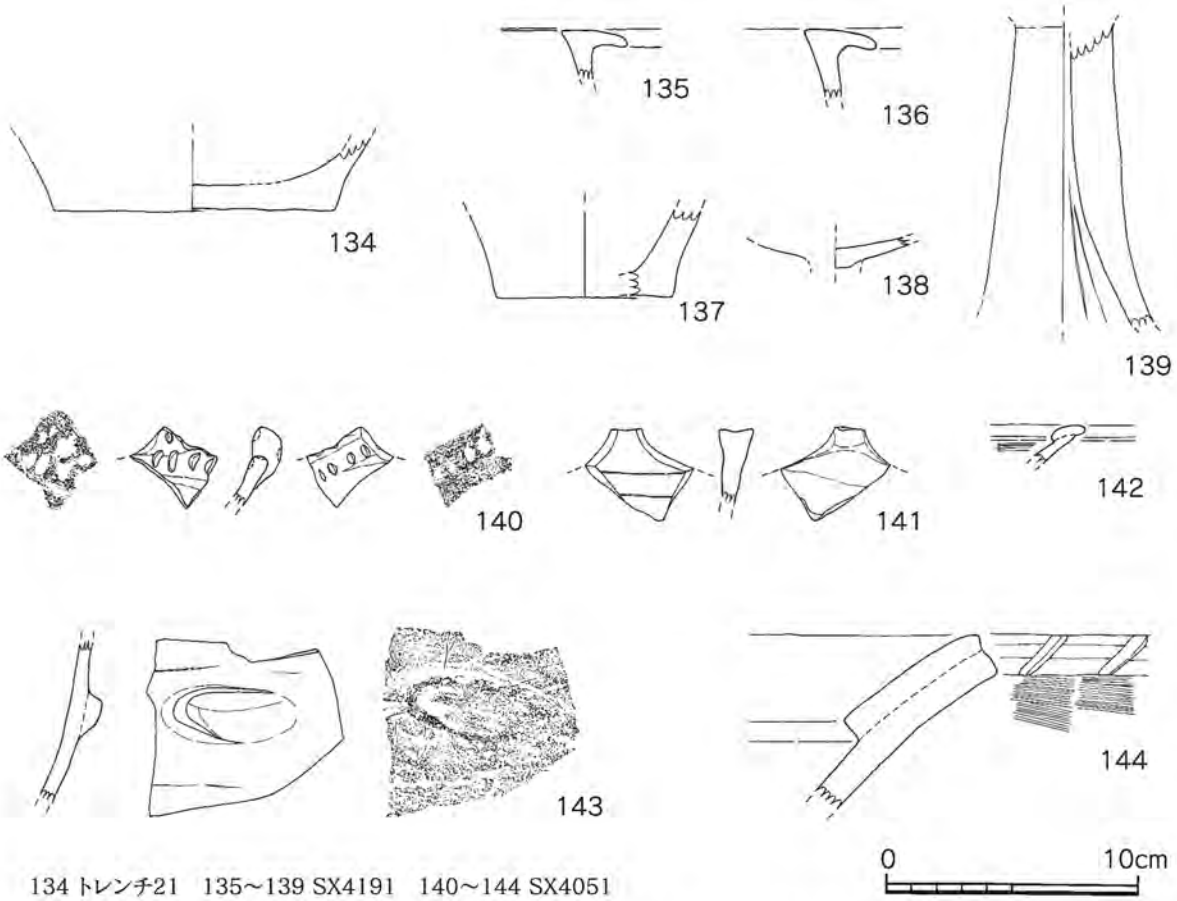
SX4191（第9-2・7図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-22図、図版9-12）

調査区南東部、SX4027の下に堆積する包含層である。厚さは約30cmで、大半を重機で除去し、一部に対してトレンチ調査を行った（第9-2図）。覆土は灰黄褐色粘質シルトで、弥生土器片・黒曜石片が、薄型コンテナ１箱分出土した。

134はトレンチ21の砂礫層上のにぶい黄色2.5Y6/3シルト質粘土（鉄分・マンガン含む）から出土した縄文時代後期後葉～晩期の深鉢底部である。底径11.2cmを測り、胎土は細～粗砂をやや多く含み、アバタ状の凹みが目立つ。色調はにぶい黄橙色を呈す。**135**～**139**は須玖Ⅰ式土器で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**135**・**136**は甕口縁部片である。**137**は甕底部で、1/6が残存し、復元底径7cmを測る。**138**は高坏坏部で、**139**は高坏脚部である。

SX4027・4051（第9-4・5・7・8図、図版9-1・7）　**出土遺物**（第9-22～24・28・29図、図版9-12・13）

調査区南東側に広く堆積した包含層である。覆土は径5-10cm亜円礫を少なく含む黒褐色粘質シル



134 トレンチ21　135～139 SX4191　140～144 SX4051

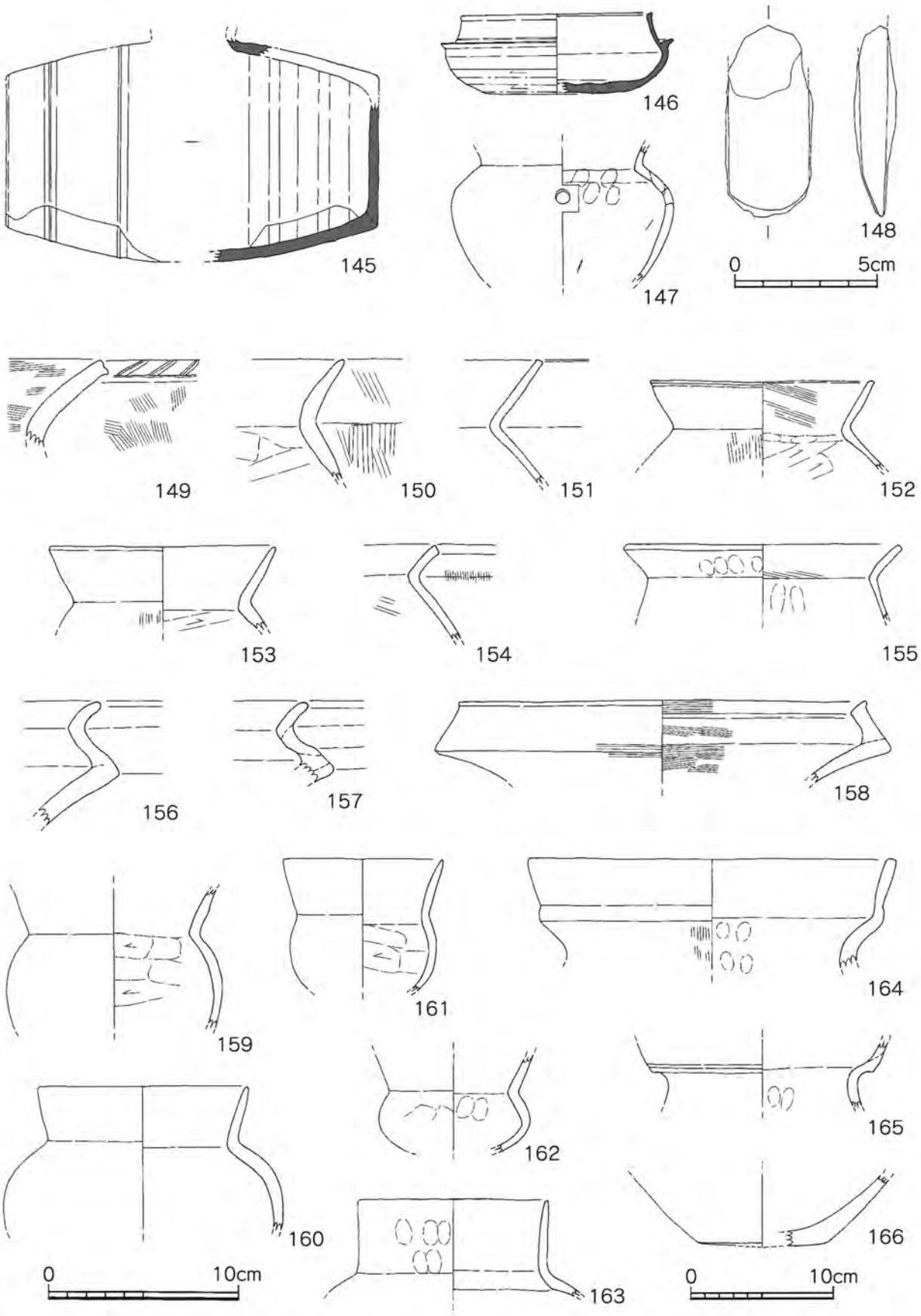
第9-22図　SX4191･4051出土土器実測図(S=1/3)

トで、南東方向へ傾斜して堆積し、56～64cmの厚さを測る。SD4023で分断された西側をSX4027、東側をSX4051としているが、同一の包含層である。包含層の落ち際に遺物が集中していたため、SD4134までを人力で掘削し（図版9-1-1）、それより南東部を重機で掘削した。弥生土器小片・黒曜石片・玄武岩片など薄型コンテナ19箱分が出土した。

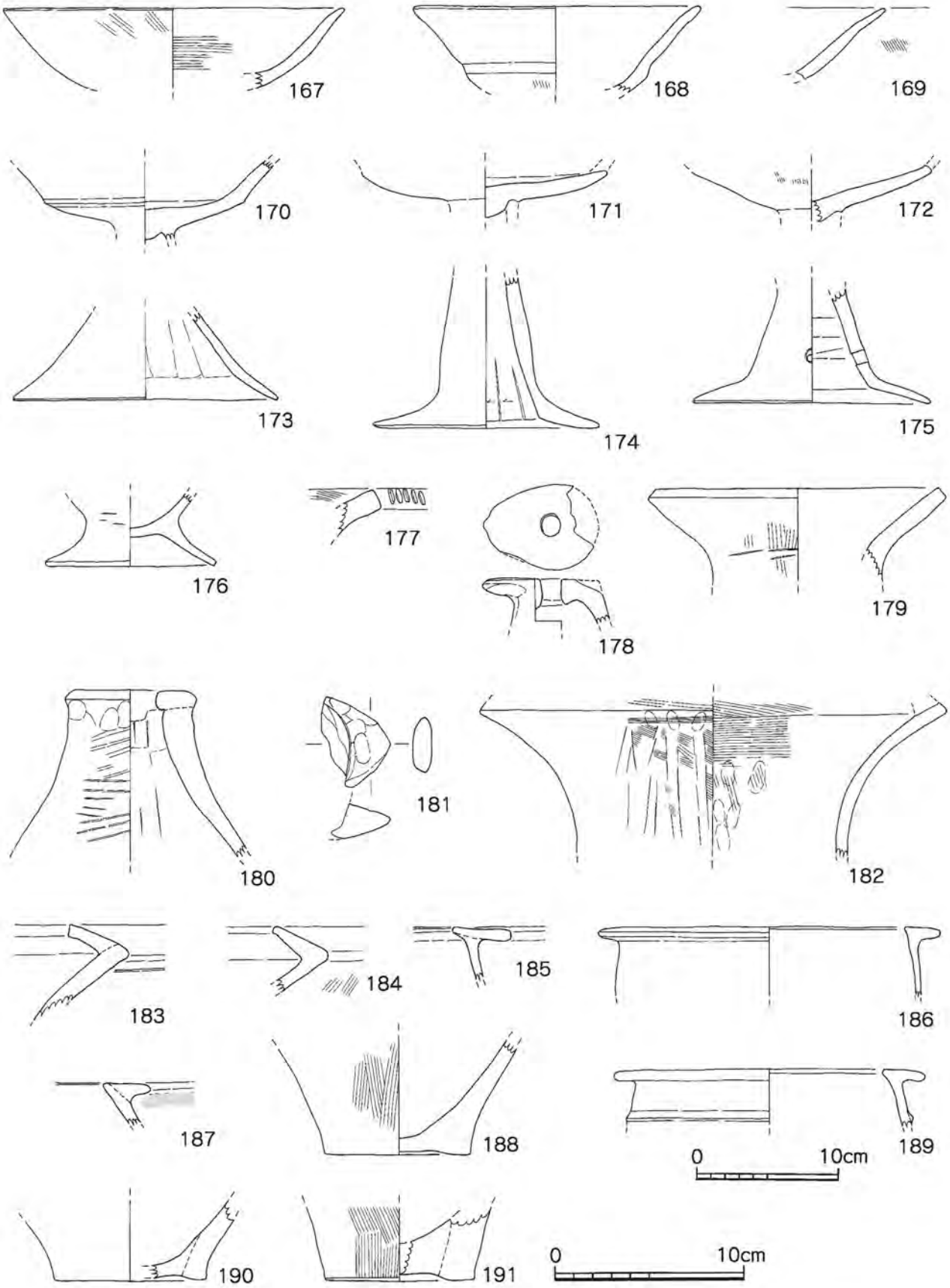
140は、縄文時代後期初頭・坂の下式の山形口縁突起部で、細砂を多く含み、色調は浅黄橙色～黒色を呈す。頂部には粘土粒を貼り付けて三角形状に成形し、口縁部上端は内外面ともに、棒状工具による連続刺突文が施される。**141**は、坂の下式の山形口縁突起部片で、胎土は細～粗砂をやや多く含み、焼成は良好、色調はにぶい黄橙色を呈す。**142**は黒川式の浅鉢口縁部片で、胎土は細砂を多く含み、色調は内面が黒色、外面が橙色を呈す。**143**は黒川式の深鉢頸部片で、横長のC字を呈す粘土紐貼り付けが認められる。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は灰黄褐色を呈す。**144**は弥生時代前期の伯玄式の大甕口縁部片である。

145は樽形ハソウの頸部と側面部で、1/2が残存し、復元側面径8cmを測る。素文で全体を回転ナデ、ナデで仕上げている。胎土は細砂をわずかに含み、色調は褐色がかった灰色を呈す。**146**は5世紀代の須恵器坏身で、3/4が残存し、復元口径10cm・受け部径12.2cm・器高4.3cmを測る。胎土は細～粗砂をわずかに含み、色調はやや青みがかった灰色を呈す。**147**は5世紀代の小型壺で、1/4が残存し、復元胴部最大径11.6cmを測る。胎土は細～粗砂を含み、色調はにぶい褐色～にぶい黄橙色を呈す。焼成後、肩部に外面から径7mmの穿孔を施している。**148**は袋部が欠損した小型袋状鉄斧で、残存長6.6cm・幅2.8cm・厚さ1.0cmを測る。

149～181は西新式土器で、胎土は細～粗砂を多く含み、焼成は良好、色調はにぶい橙色、にぶい黄橙色、灰黄褐色を呈す。**149**は器台受け部片で、口唇部にハケメ工具による刺突文が施される。



第9-23図　SX4051出土遺物実測図1（152・155・158・164～166はS=1/4、148はS=1/2、他はS=1/3）



第9-24図　SX4051出土遺物実測図2（179・182・186・189はS=1/4、他はS=1/3）

150・151・154は甕口縁部片である。**152**は甕口縁部で、1/3が残存し、復元口径15.8cmを測る。**153**は小型甕口縁部で、1/2が残存し、復元口径11.8cmを測る。**155**は甕口縁部で、1/6が残存し、復元口径19.6cmを測る。**156・157**は複合口縁壺の口縁部片である。**158**は複合口縁壺の口縁部で、1/8が残存し、復元口径28.6cmを測る。色調は浅黄橙色を呈す。**159～162**は小形壺である。**159**は1/4が残存し、復元胴部最大径13.2cmを測る。**160**は1/6が残存し、復元口径11cm、復元胴部最大径14.6cmを測る。**161**は1/6が残存し、復元口径8.4cmを測る。**162**は1/6が残存し、復元胴部最大径8cmを測る。**163**は直口壺口縁部で、1/6が残存し、復元口径10cmを測る。**164**は壺口縁部で、1/10が残存し、復元口径26cmを測る。**165**は壺口縁部で、1/6が残存し、復元頸径13.2cmを測る。**166**は壺底部で、1/6が残存し、復元底径9cmを測る。底外面にハケメが残る。**167～176**は高坏である。**167**は坏部で1/3が残存し、復元口径18cmを測る。**168**は坏部で1/6が残存し、復元口径15.2cmを測る。**169**は坏部口縁部片、**170・171・172**は坏部である。**173**は脚部で1/2が残存し、復元脚径14cmを測る。**174**は脚部で1/6が残存し、復元脚径12cmを測る。**175**は脚部で1/6が残存し、復元脚径12.6cmを測る。1カ所に焼成前の外側からの穿孔（径6mm）が認められる。**176**は脚部で、3/4が残存し、復元脚径9cmを測る。ヘラナデで仕上げ、胎土は細砂をわずかに含み、色調は橙色を呈す。**177**は器台受け部片で、口唇部に浅い刻みが入る。**178**は沓形支脚である。**179**は器台受け部で、1/4が残存し、復元径20cmを測る。**180**は支脚で、外面に横位の平行タタキを残す。**181**は甑の把手部で、胎土は細～粗砂を少なく含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。

182～184は下大隈式土器で、胎土は細～粗砂を少なく含み、色調は浅黄橙色～にぶい橙色、橙色を呈す。**182**は袋状口縁壺の口縁部で、1/6が残存し、復元口縁部最大径33cmを測る。口縁部は粘土帯接着面で剥落しており、その接着面にまで内面のハケメ調整が及んでいる。頸部外面はナナメハケメを約2cm間隔でタテユビナデにより消しており、暗文風に仕上げている。**183・184**は袋状口縁壺の口縁部片である。**185～191**は須玖式土器で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**185**は甕口縁部片である。**186**は甕口縁部で、1/8が残存し、復元口径24.2cmを測る。**187**は丹塗無頸壺の口縁部片である。口縁部下の外面にわずかに丹が残っている。**188**は甕底部で、底径7.6cmを測る。**189**は甕口縁部で、1/6が残存し、復元口径22cmを測る。**190**は甕底部で、1/4が残存し、底径8cmを測る。**191**は甕底部で、1/2が残存し、底径7.8cmを測る。

230～236は打製石鏃である。**230**は黒曜石製で、長さ2.9cm・幅1.25cm・厚さ0.4cm・重量1.4gを測る。**231**は黒曜石製で、長さ2.3cm・幅1.2cm・厚さ0.4cm・重量0.9gを測る。**232**は安山岩製で、基部が欠損しており、残存長1.8cm・幅1.08cm・厚さ0.27cm・残存重量0.6gを測る。**233**は黒曜石製で、基部が欠損しており、残存長1.65cm・残存幅0.9cm・残存厚0.3cm・残存重量0.3gを測る。**234**は安山岩製で、長さ2.25cm・幅1.7cm・厚さ0.3cm・重量1.0gを測る。**235**は黒曜石製で、基部左側が欠損しており、長さ2.4cm・残存幅1.7cm・厚さ0.34cm・残存重量1.0gを測る。**236**は黒曜石製の未成品で先端が欠損しており、残存長2.5cm・幅2.0cm・厚さ0.7cm・重量2.9gを測る。**237**は黒曜石製の石錐で、長さ2.1cm・幅1.6cm・厚さ0.5cm・重量1.1gを測る。**239**は玄武岩製の打製石斧基部片で、残存長6.4cm・残存幅4.95cm・厚さ1.83cm・残存重量75.8gを測る。**240**は玄武岩製の打製石斧で、長さ10.8cm・幅4.5cm・厚さ1.97cm・重量134.4gを測る。**241**は玄武岩製の打製石斧で、長さ14.15cm・刃部幅8.2cm・基部厚1.82cm・重量251.6gを測る。いずれも表面の摩滅が強い。

落ち込み状遺構（第9-5・25図、図版9-1・7）　**出土遺物**（第9-26図、図版9-12）

調査区中央部、SX4051の下、SD4134の上で複数の落ち込み・土器溜まりを検出した。平面形は

略楕円形で、浅い落ち込みとなり、底面は凹凸をなす。覆土は黒灰色シルトで、土器小片が密集する。遺物が少ないものもあるが、時期は5世紀代である。

SX4133

北西軸で、長さ2.6m以上・幅3m以上、深さ20cmを測る。土師器・須恵器・黒曜石片が薄型コンテナ1箱半出土した。

192は甕口縁部片である。**193**は小型壺で、1/4が残存し、復元口径9cm・復元胴部最大径10.4cmを測る。胴部内面にヘラオサエ痕が残る。**194**は甕上半部で、1/4が残存し、復元口径16.6cmを測る。胎土は細～粗砂をやや多く含み、色調は橙色～にぶい橙色、にぶい黄橙色を呈す。内面をケズリ、外面をハケメで調整し、口縁部内外面をナデで仕上げる。**195**は小型壺底部で、復元胴部最大径11.8cmを測る。**196**は高坏坏部で、脚部上端径4cmを測る。**197**は、5世紀代の須恵器坏身片で、1/8が残存し、復元口径11.4cmを測る。胎土は細砂をわずかに含み、色調は灰色を呈す。**198**は、須恵器高坏坏部で、1/4が残存し、復元脚部上端径6cmを測る。胎土は細砂をほとんど含まない精選土で、色調は灰色を呈す。**199**は、須恵器甕胴部片で、胎土は細砂をわずかに含み、色調はオリーブ色がかった灰色を呈す、外面に縄蓆文タタキが認められる。

SX4144

北西軸で、長さ5m・幅3.2m・深さ20cmを測る。土師器・須恵器・黒曜石片が出土した。

200～205は、5世紀代の土師器で、胎土は細～粗砂をやや多く含み、色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色、にぶい橙色、灰黄褐色を呈す。**200**は甕口縁部で、1/8が残存し、復元口径19cmを測る。**201**は高坏坏部で、1/8が残存し、復元口径20cmを測る。**202**は高坏坏部で、1/8が残存する。**203**は小型壺頸胴部で、1/8が残存し、復元胴部最大径14.1cmを測る。**204**は高坏坏部で、1/4が残存する。**205**は高坏脚部である。

SX4241

北東軸で、長さ3m・幅1.3～2.2m・深さ10～30cmを測る。

206は二重口縁壺の上半部で、1/6が残存し、復元口径18.4cmを測る。胎土は細砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**207**は甕口縁部で、1/4が残存し、復元口径16.6cmを測る。胎土は細砂をやや多く含み、色調は浅橙色を呈す。

SX4242

北西軸で、長さ2.7m以上・幅1.4m・深さ9cmを測る。弥生土器・土師器片・黒曜石片が出土した。

SX4227

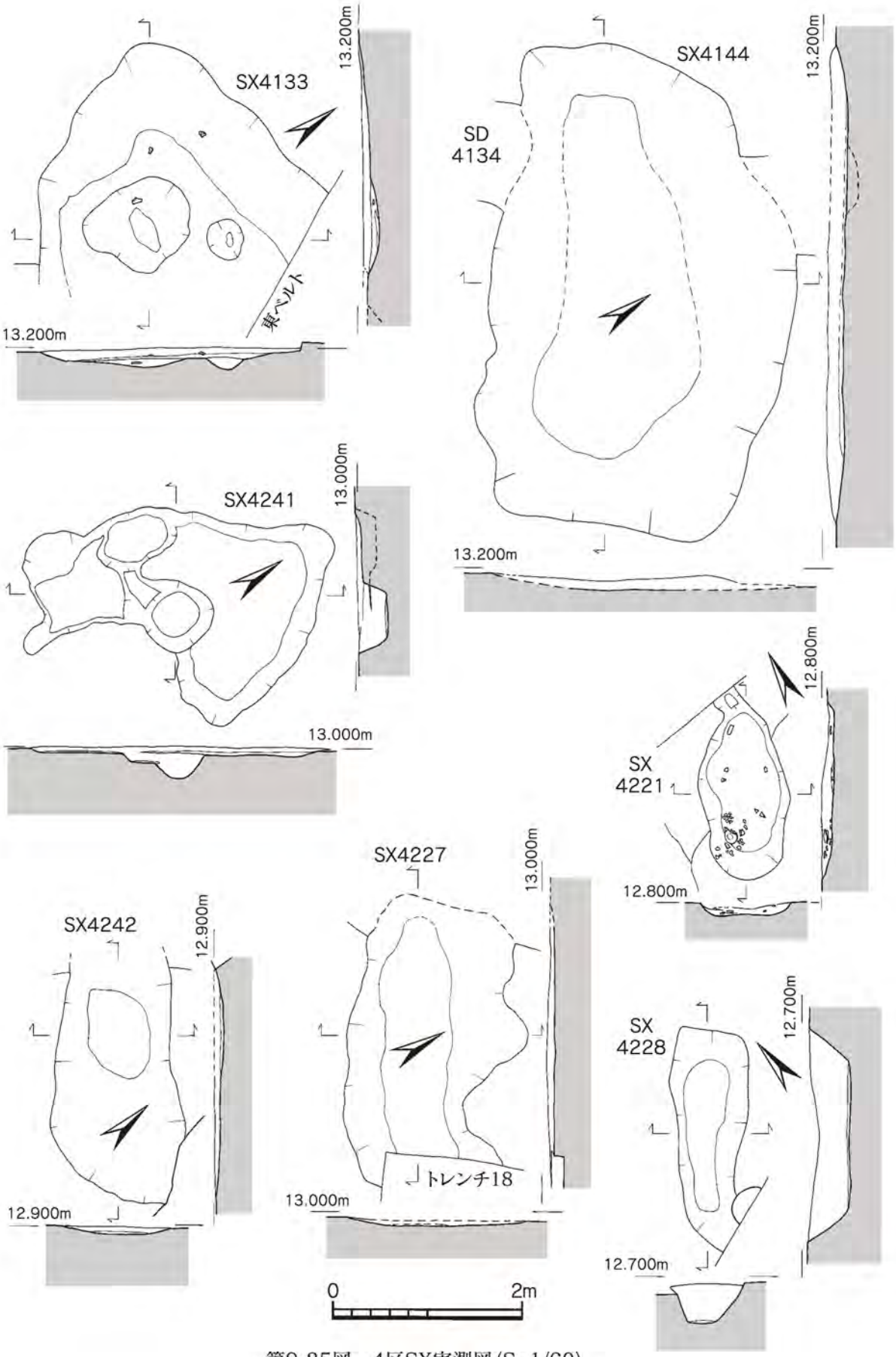
東西軸で、長さ3m・幅1.3～1.9m・深さ6cmを測る。弥生土器・土師器・黒曜石剥片が出土した。

208は甕口縁部で、1/3が残存し、復元口径15.2cmを測る。胎土は細砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。強いケズリのため、肩部内面に段ができる。

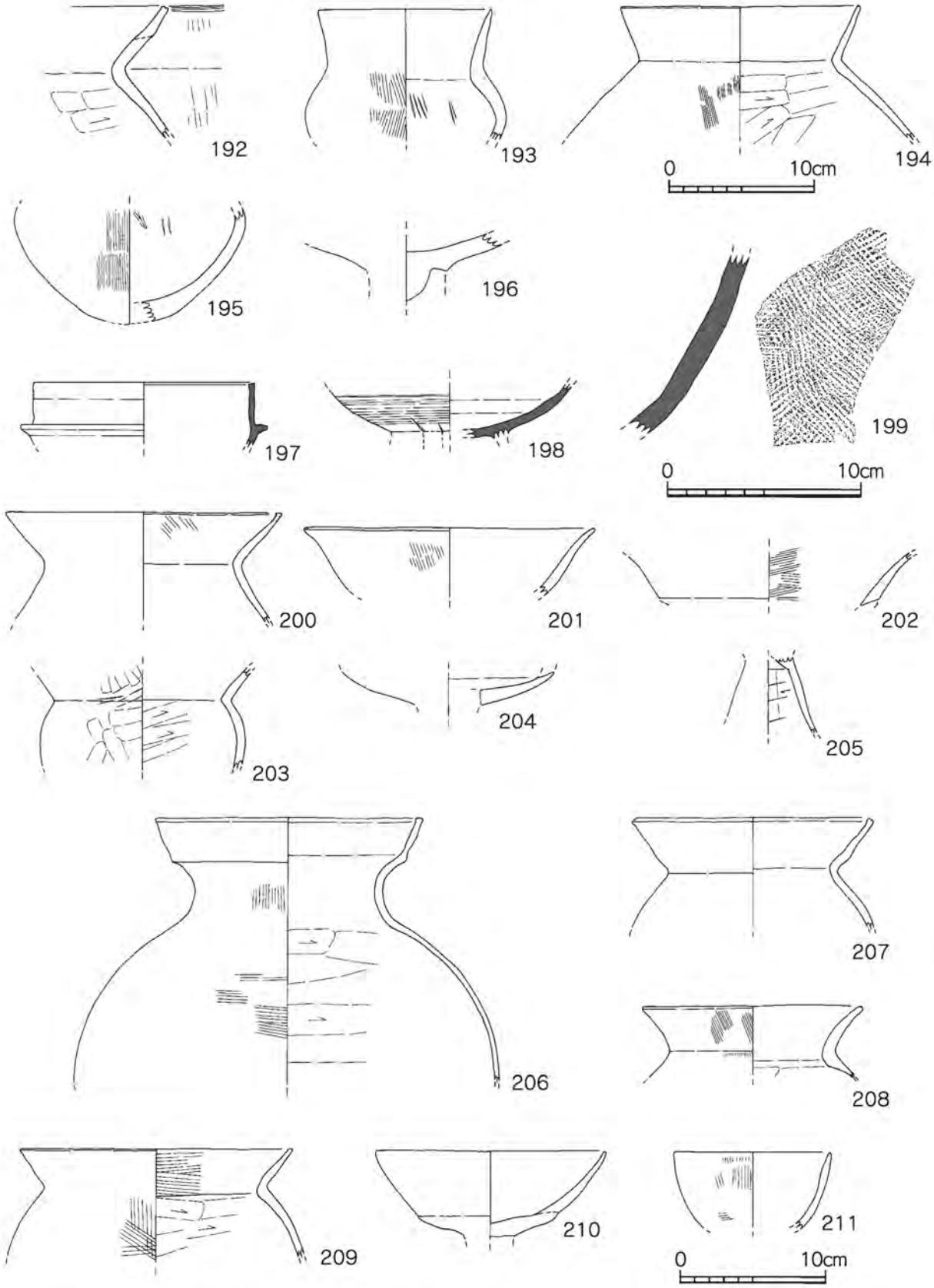
SX4221

北東軸で、長さ2m・幅0.96m・深さ12cmを測る。土師器・黒曜石片が出土した。

209～211は、5世紀代の土師器で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色～にぶい黄橙色を呈す。**209**は甕口縁部で、1/8が残存し、復元口径18.8cmを測る。**210**は高坏坏部で、口径16cmを測る。**211**は鉢で、1/6が残存し、復元口径10.8cmを測る。

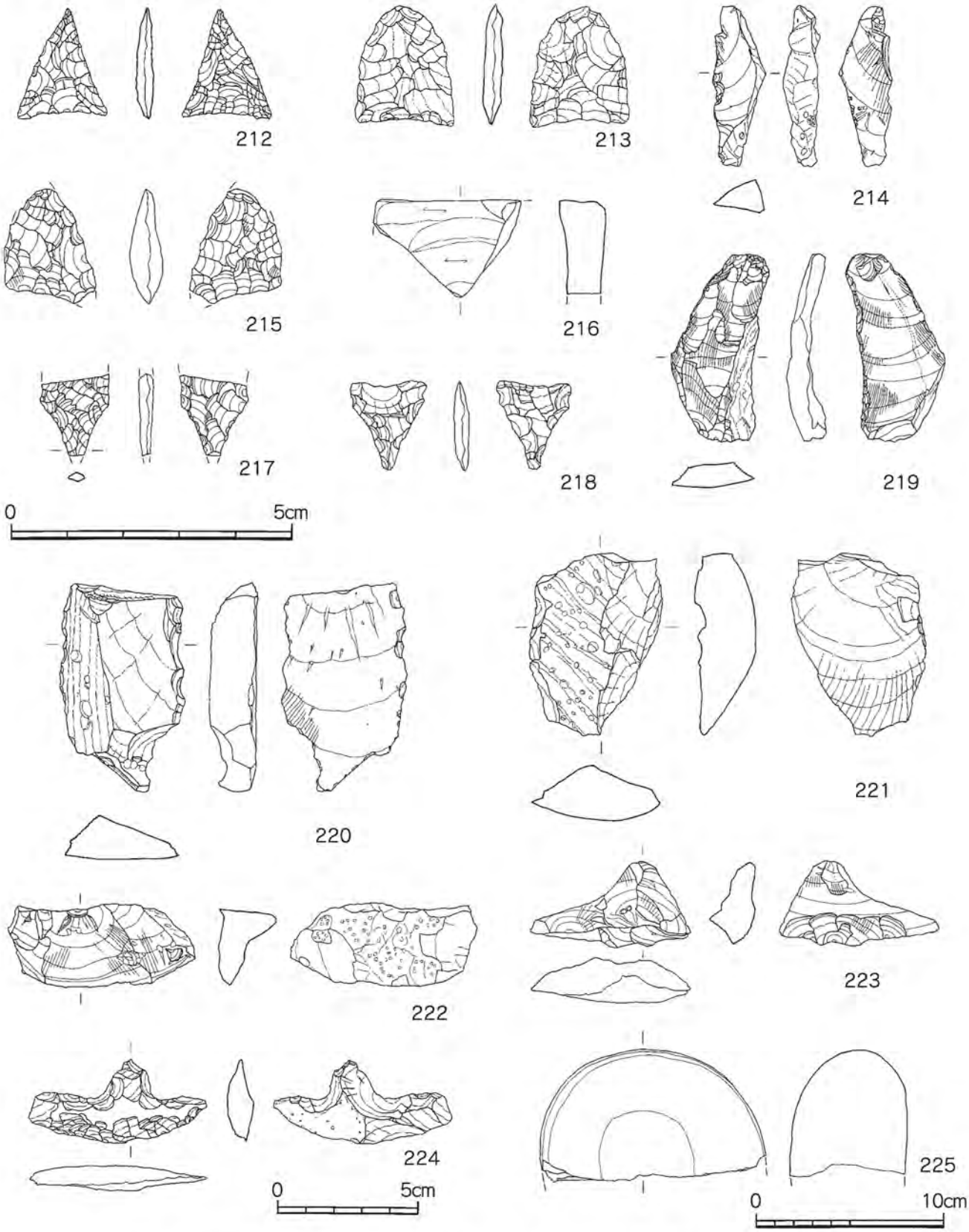


第9-25図　4区SX実測図(S=1/60)



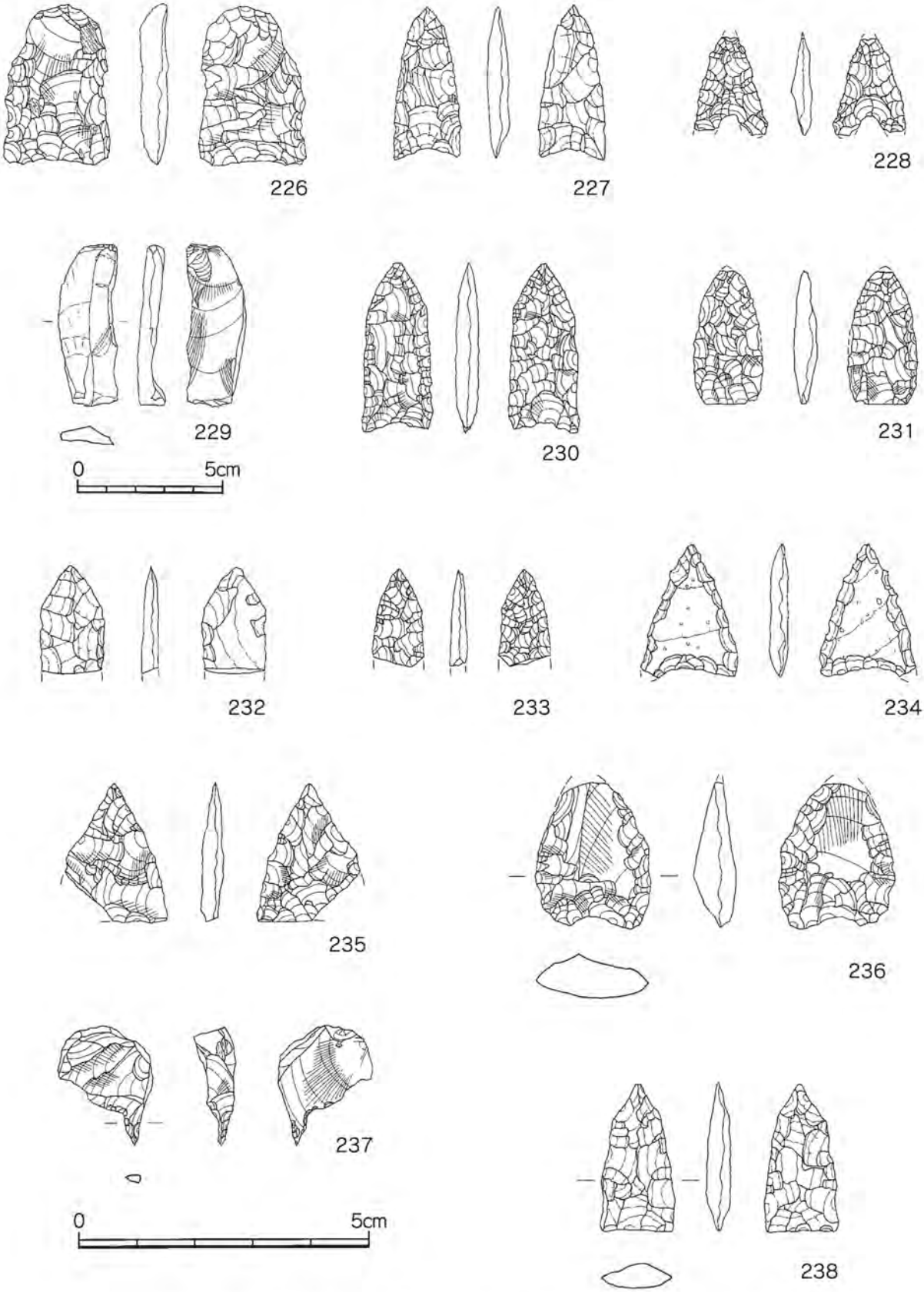
192～199 SX4133　200～205 SX4144　206･207 SX4241　208 SX4227　209～211 SX4221

第9-26図　4区SX出土土器実測図（194･200～211はS=1/4、他はS=1/3）



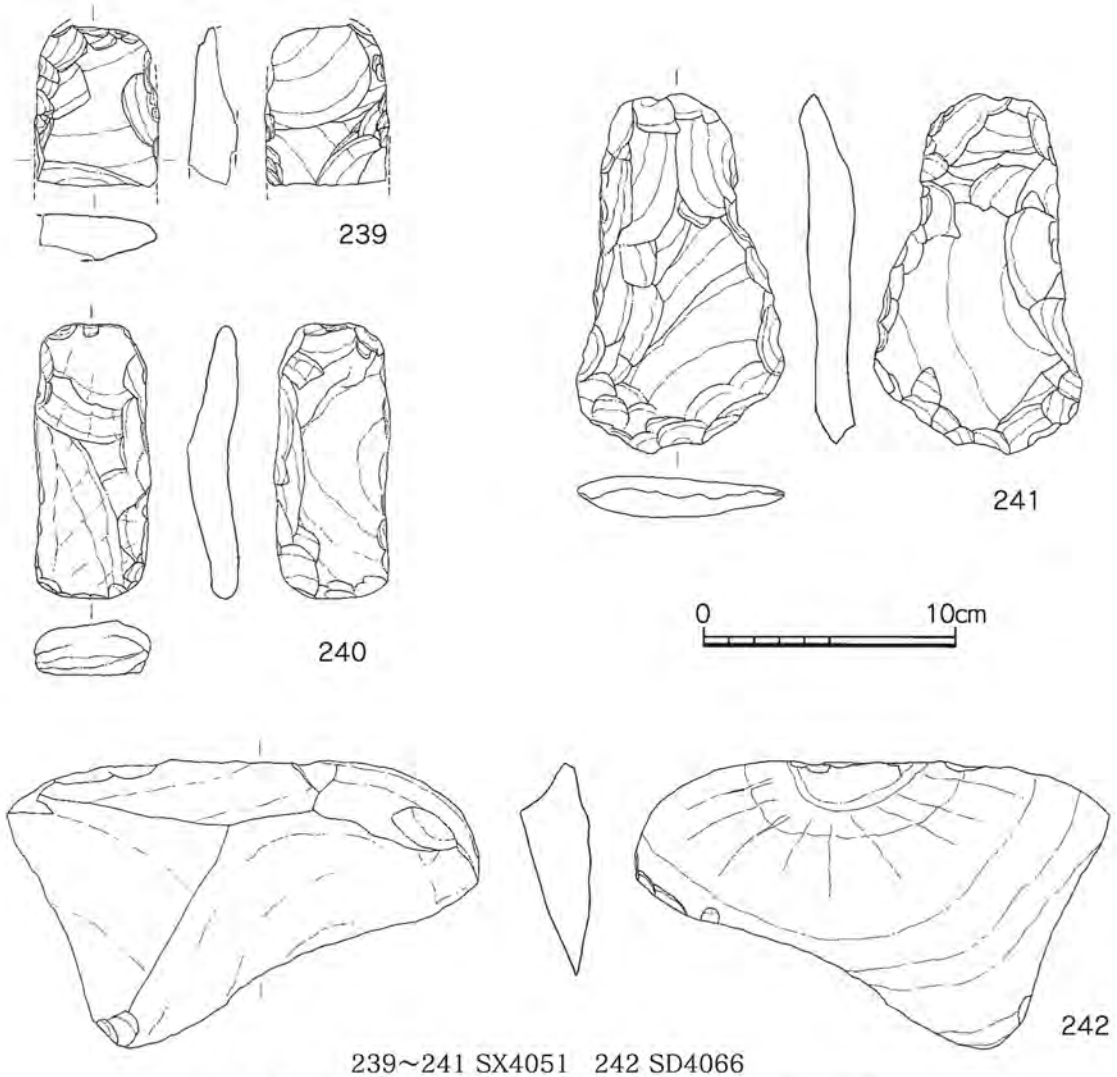
212～214 SD4190　215～217 SD4006　218～223 SD4009　224･225 SD4010

第9-27図　SD4190･4006･4009･4010出土石器実測図
(214･219･220～224はS=1/2、216･225はS=1/3、他はS=1/1)



226～228 SD4134　229 SD4239　230～237 SX4051　238 SD4066

第9-28図　SD4134・SX4051・SD4239・SD4066出土石器実測図（229はS=1/2、他はS=1/1）



239～241 SX4051　242 SD4066

第9-29図　SX4051･SD4066出土石器実測図(S=1/3)

SX4228

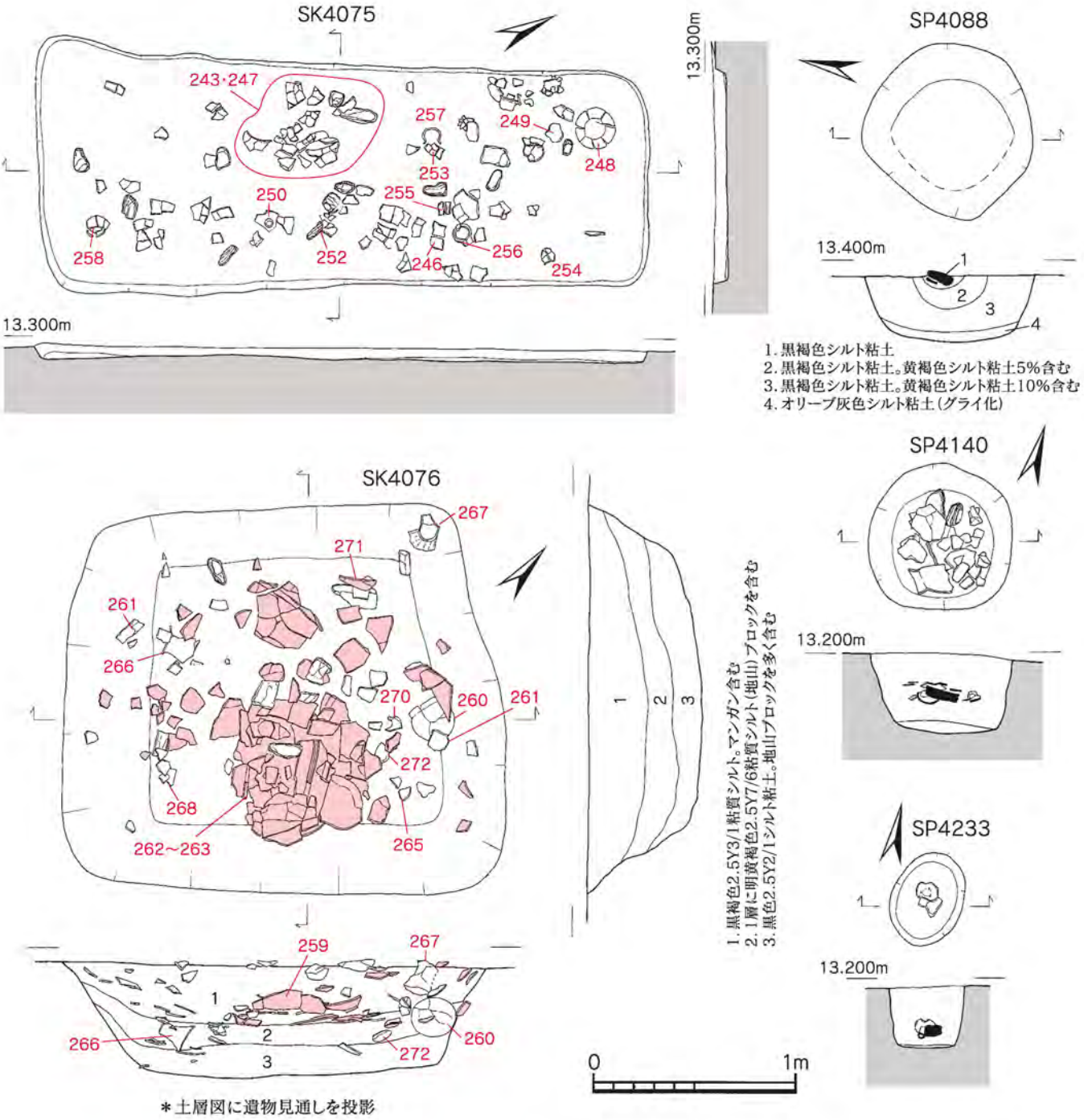
北西軸で、長さ2.3m・幅0.8m・深さ42cmを測る。弥生土器・土師器片・黒曜石片が出土した。

祭祀土坑

SK4075（第9-5・30図、図版9-7）　**出土遺物**（第9-31図、図版9-13）

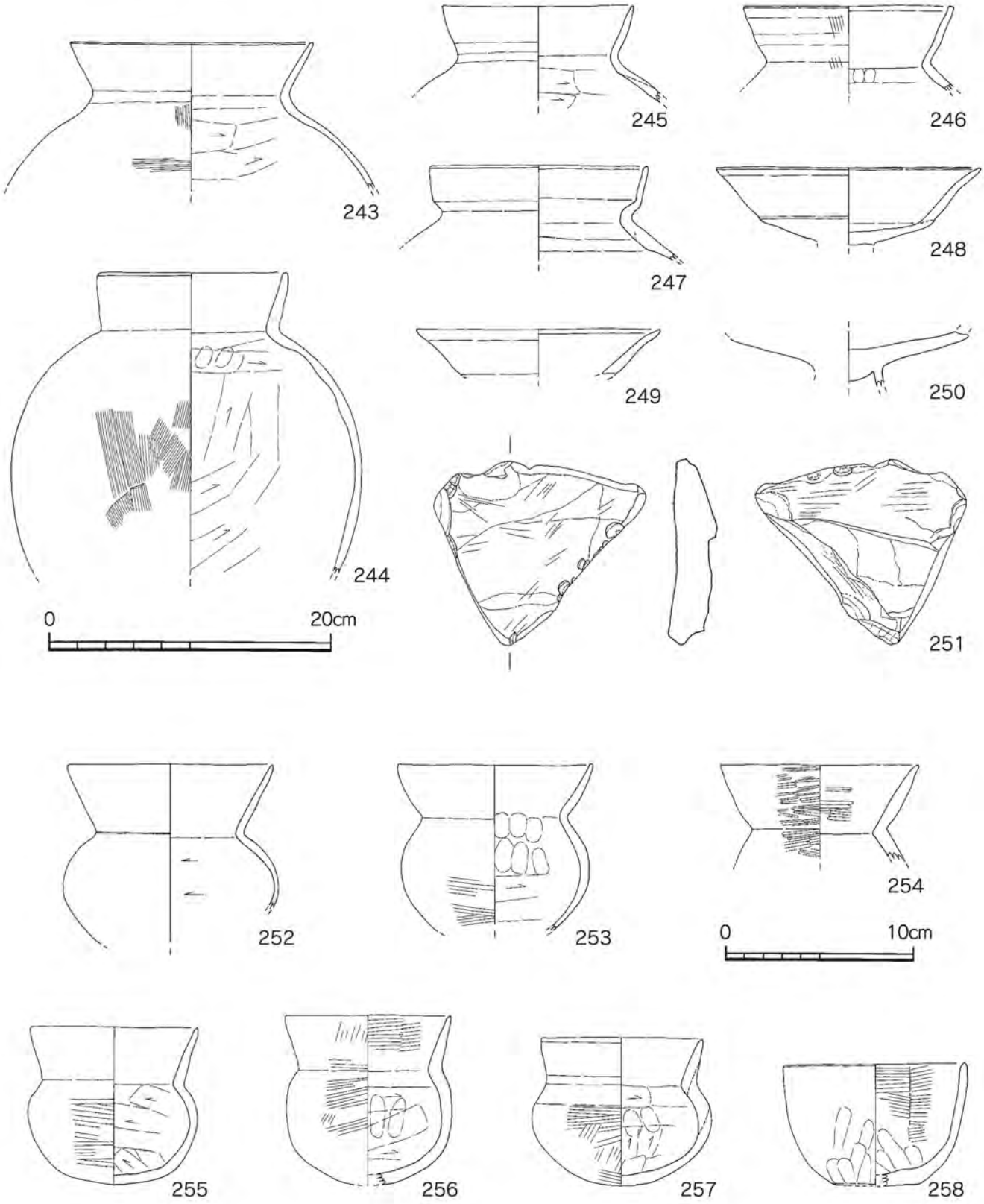
調査区中央北東で検出した北東軸の長方形土坑である。長さ3m・幅1～1.2m・深さ5～6cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粘土で、マンガン粒が多く、黄褐色シルトブロック含む。土器が充填された状態で、薄型コンテナ3箱分が出土した。

出土土器は下大隈式で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は黄橙色～橙色を呈す。内面体部はヘラケズリ、外面体部はハケメやナデ、口縁部内外面はナデで仕上げる。**243**は甕口縁部で、1/3が残存し、復元口径17.2cmを測る。**244**は直口壺で、復元口径14.6cm・復元最大胴径24.9cmを測る。出土位置は、土坑内に広く散らばった状態であった。**245**は甕口縁部で1/4が残存し、復元口径13.6cmを測る。**246**は甕口縁部で、復元口径15cmを測る。**247**は山陰系甕で、口径15.6cmを測る。**248**は高坏の坏部完形で、口径18.7cmを測る。**249**は高坏坏部で、1/4が残存し、復元口径17.4cmを測る。**250**は高坏坏部である。**252**～**257**は小型丸底壺である。**252**は2/3が残存し、復元口径11cmを測る。**253**は1/3が残存し、復元口径10.4cmを測る。**254**は1/3が残存し、復元口径10.6cmを測る。色調は灰黄



第9-30図　4区弥生時代後期～古墳時代前期SK·SP実測図(S=1/30)

褐色～黒色で、口縁部内外面と胴部外面に細かいヨコミガキが施される。**255**はほぼ完形で、口径8.8cmを測る。**256**は3/4が残存し、口径8.8cmを測る。**257**は1/2が残存し、復元口径8.6cmを測る。**258**は小型平底鉢で、ほぼ完存し、口径9.8cm・底径4.8cm・器高6.6cmを測る。胎土は細～粗砂をやや多く含み、色調は橙色～褐色を呈す。**251**は、頁岩製の砥石で、長さ13.2cm・幅15cm・厚さ3cm・重量600.3gを測る。素材面を生かしつつ側面を面取によって三角形に成形している。前後面の研面はともに平滑で、研ぎ方向や擦痕は一定方向ではない。



第9-31図　SK4075出土遺物実測図（243～251はS=1/4、他はS=1/3）

SK4076（第9-4・30図、図版9-3・7）　**出土遺物**（第9-32図、図版9-13）

調査区中央で検出した方形土坑である。平面形は2.2×1.9mで、断面形は逆台形、深さは55cmを測る。下層に黒色土が堆積した後、**266**・**272**・**270**・**260**が中層に堆積し、上層に**259**（赤アミ部分）他の土器が投棄されている。径15～20cmの花崗岩亜角礫が土器の上に投げ入れられた状態で、緑色鉱物が入った花崗閃緑岩も認められた。薄型コンテナ5箱分の遺物が出土した。

土器は西新式で、胎土は細～粗砂を多く含み、焼成は良好、色調は橙色を呈す。**259**はほぼ完形の大甕で、口径57.2cm・胴部最大径58.8cm・器高76.3cmを測る。内外面をタテ・ナナメハケメで調整している。比較的平底の特徴を残している。**260**は直口壺で、2/3が残存し、復元口径14.6cm・胴部最大径20.6cmを測る。全体をミガキに近い強いヘラナデで仕上げている。**261**は壺底部で、底外面が剥落している。**262**は甕底部で、外面にタテハケメが残る。底内面には炭化物が付着している。**263**は鉢で1/6が残存し、復元口径15cmを測る。内面はタテヘラミガキ、外面はナデで丁寧に仕上げる。**264**は高坏脚部で、外面はタテヘラミガキで仕上げる。焼成前に外側から径7.5mmの孔を3カ所穿っている。**265**は下端部を欠いた器台で、復元受け部径15cmを測る。脚部は内外面にハケメを残し、受け部は内外面をナデで仕上げる。**266**は器台下半部で、脚部径17.6cmを測る。内面はハケメ後強いタテユビナデ、外面は丁寧なタテヘラナデで、裾部は横位の平行タタキ後ヨコナデで仕上げている。**267**は器台で、復元受け部径17cm・復元脚部径18cm・器高20.9cmを測る。脚部内面に丁寧なナナメハケメを残し、受け部内面と外面を強いタテヘラナデで丁寧に仕上げている。**268**は壺胴部である。**269**は長頸壺胴部で、復元頸径5.2cm・復元胴部最大径16cmを測る。ミガキ風のハケナデで仕上げる。**270**は支脚脚部片で、内面はナデ、外面には横位の平行タタキを残す。**271**は支脚で、1/3が残存し、復元上部径6.8cm・復元脚径12.6cmを測る。内面はユビオサエ・ナデ、外面には斜位の平行タタキを残す。**272**は白色花崗岩製の敲石で、残存長8cm・幅7.6cm・厚さ3.9cm・残存重量340.6gを測る。前後面と縁辺に浅い敲打痕が認められる。

SP4088（第9-4・30図、図版9-7）　**出土遺物**（第9-33図、図版9-14）

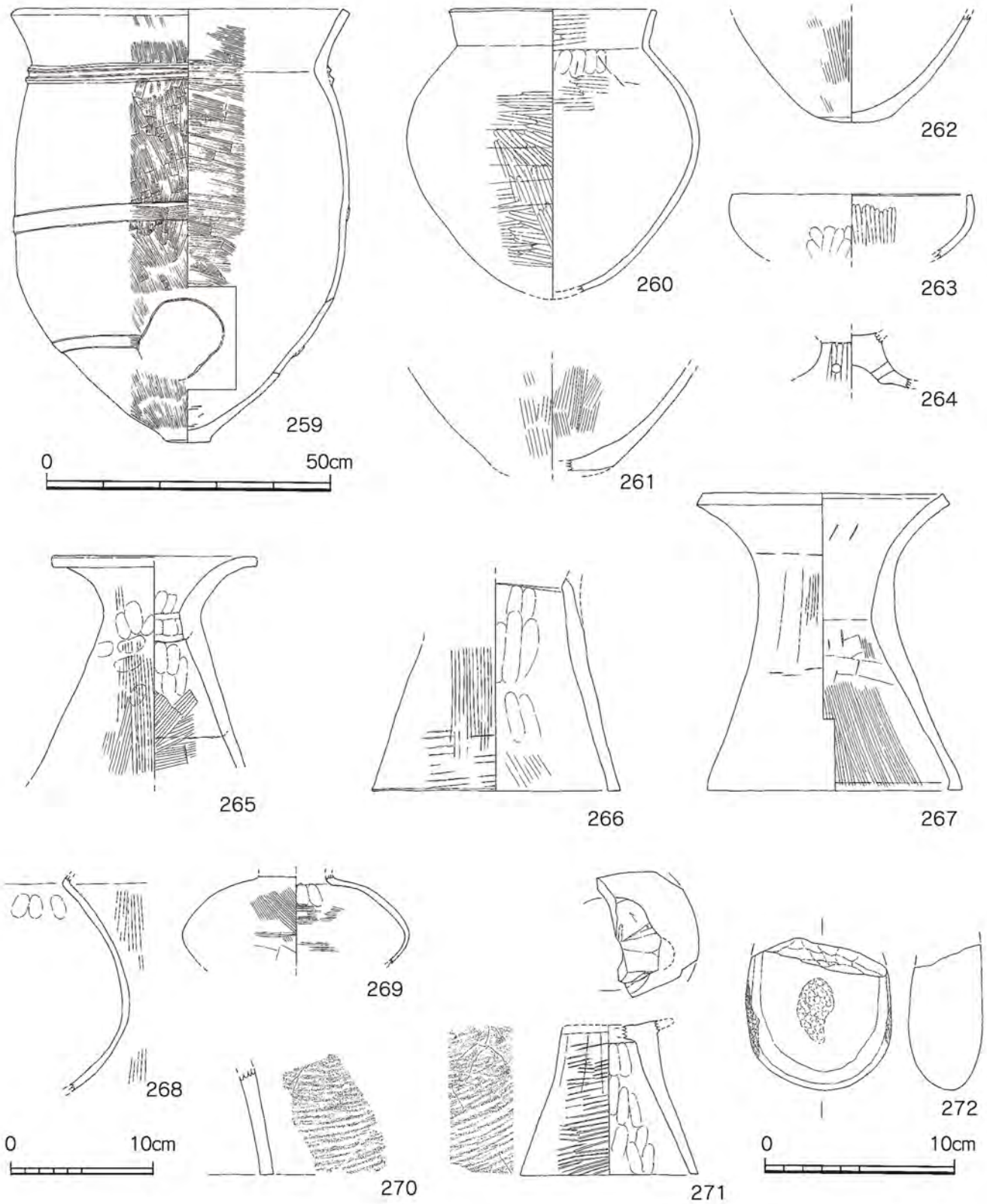
調査区中央西で検出した小土坑である。径84～87cm・深さ33cmの円筒状で、埋土は黒褐色シルト質粘土である。

280～**282**は古墳時代前期の土器で、胎土は細砂をわずかに含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**280**は小型甕口縁部片で、**281**は小型壺口縁部片である。**282**は高坏口縁部で、1/4が残存し、復元口径23cmを測る。色調は橙色を呈す。

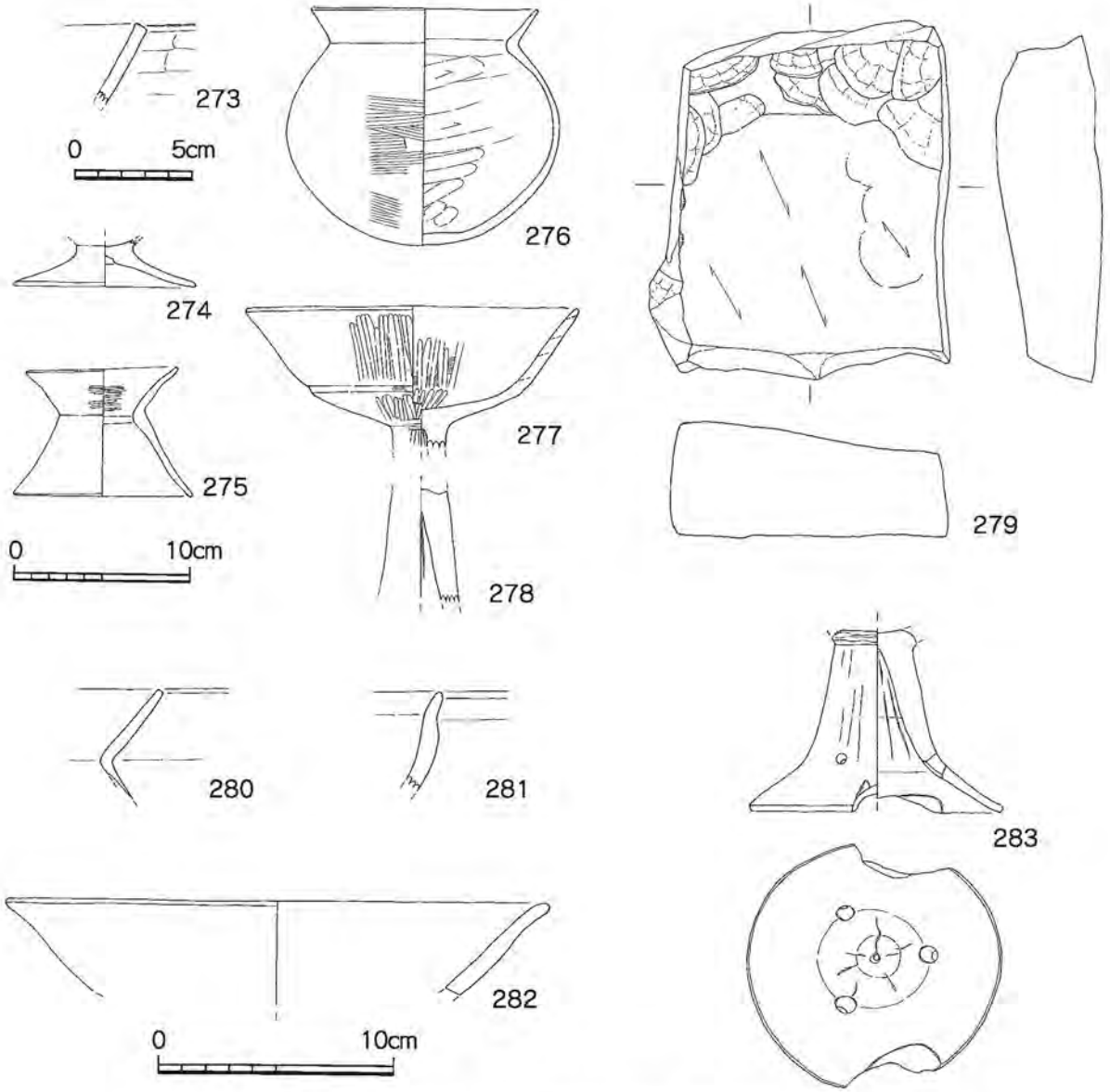
SP4140（第9-4・30図、図版9-7）　**出土遺物**（第9-33図、図版9-14）

調査区中央で検出した小土坑である。径72cm・深さ40cmの円筒状で、埋土は褐灰色10YR4/1～黒褐色10YR3/1シルトに灰黄色シルトをブロック状に含む。

273～**278**は古墳時代前期の土器で、胎土は細～粗砂をわずかに含み、色調は橙色～にぶい橙色を呈す。**273**は甕口縁部片である。**274**は高坏脚部で、1/2が残存し、復元脚径10.4cmを測る。脚部内面中央に軸を当てた痕跡が残る。**275**は鼓形器台で、5/6が残存し、復元上部径8.7cm・下部径10.2cm・器高7.4cmを測る。内外面ヨコミガキで丁寧に仕上げている。**276**は小型甕で、1/2が残存し、復元口径13cm・復元胴部最大径15.5cm・器高13.5cmを測る。**277**は高坏坏部で、口径19cmを測る。内面は細かいヨコハケメ後タテミガキ、外面はタテミガキを丁寧に施し、暗文風に仕上げている。**278**は高坏脚部である。**279**は硬質砂岩製の砥石で、長さ21.5cm・幅17.3cm・厚さ6.5cm。重量3.4kgを測る。前面と右側面にきめ細かい砥面が形成される。



第9-32図　SK4076出土遺物実測図(259はS=1/10、272はS=1/3、他はS=1/4)



273～279 SP4140　280～282 SP4088　283 SP4233

第9-33図　SP4140･4088･4233出土遺物実測図(274～279はS=1/4、他はS=1/3)

SP4233（第9-4・30図、図版9-8）　**出土遺物**（第9-33図、図版9-14）

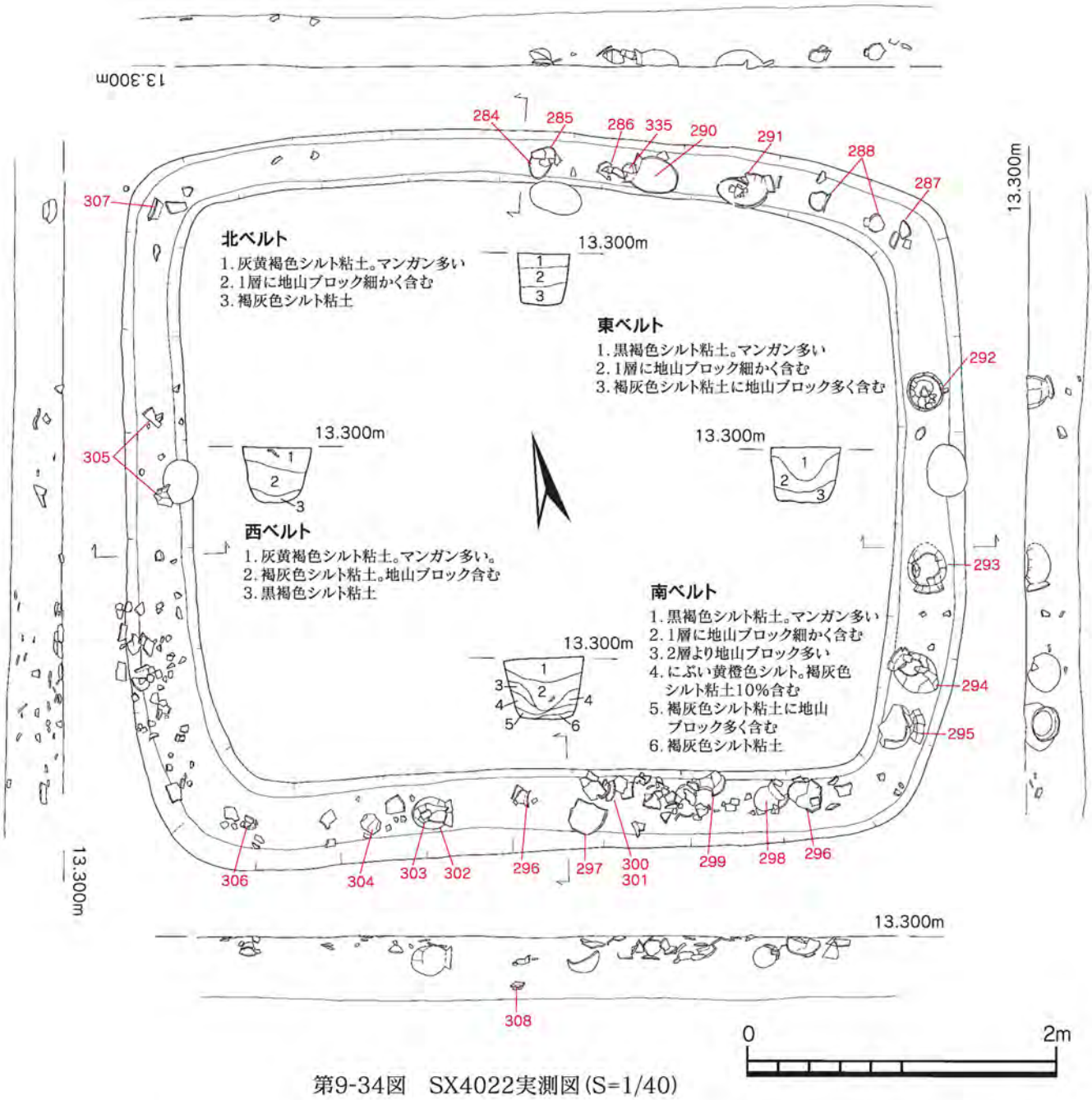
調査区中央南でSX4027除去後に検出した小土坑である。48×36cmの楕円形で、深さは30cmを測る。埋土は灰色5YR4/1シルトと黄褐色シルトの混土である。

283は高坏脚部で、脚径10.8cmを測る。3カ所に径6mmの焼成前穿孔が認められ、脚裾の2カ所が打ち欠かれている。胎土は細～粗砂をわずかに含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。共伴する花崗閃緑岩**336**（図版9-14）は、6～7cm角の亜角礫で、重量は407gを測る。

方形周溝遺構

SX4022（第9-3・34図、巻頭図版3、図版9-3・8）　**出土遺物**（第9-35～37図、図版9-14・15）

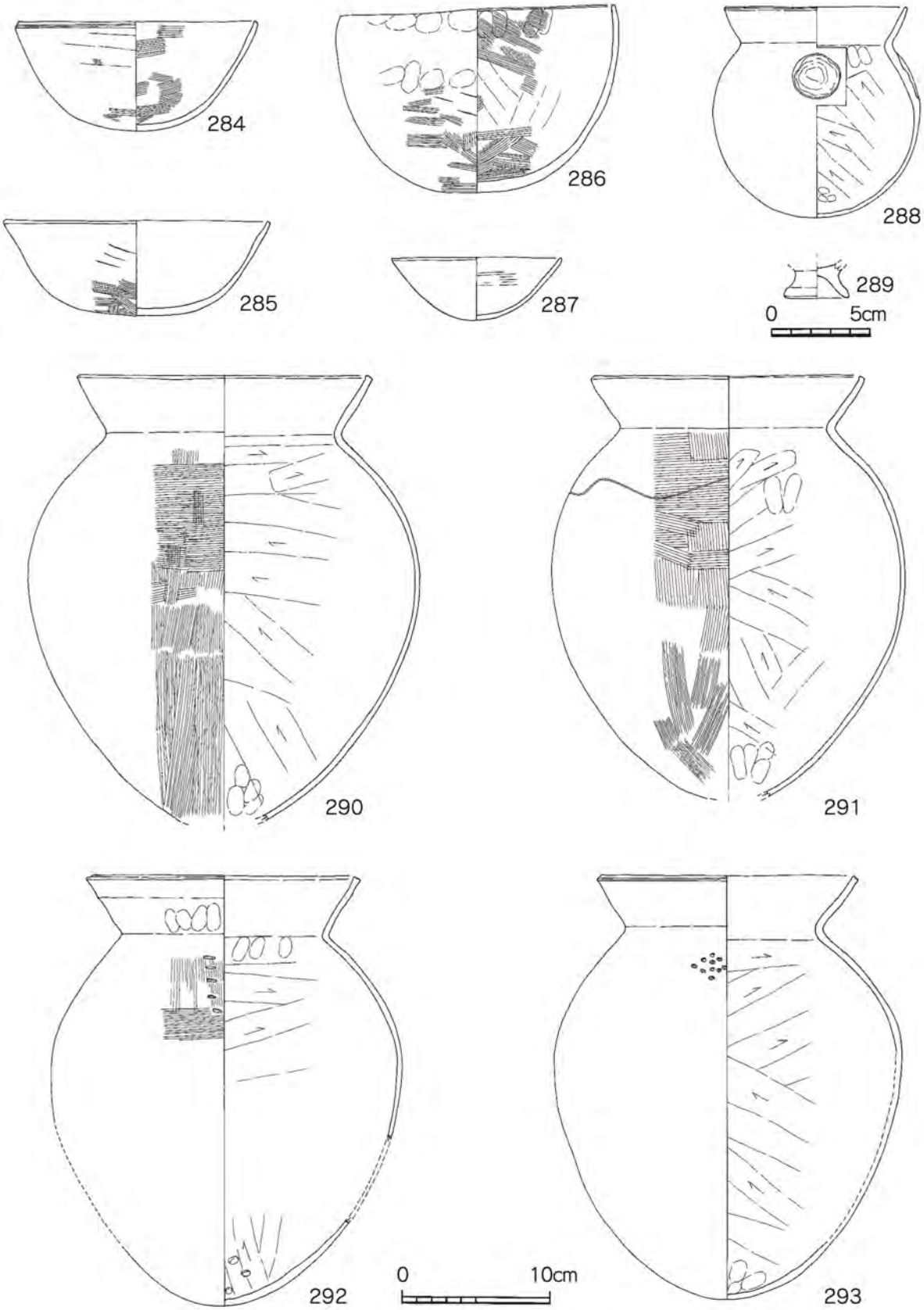
調査区中央北西で確認した長方形の周溝遺構である。西側がわずかに幅広で平面外形5.4m×4.7m、溝幅34～56cm、溝の深さ32～40cmを測る。溝の埋土は、灰黄褐色または黒褐色



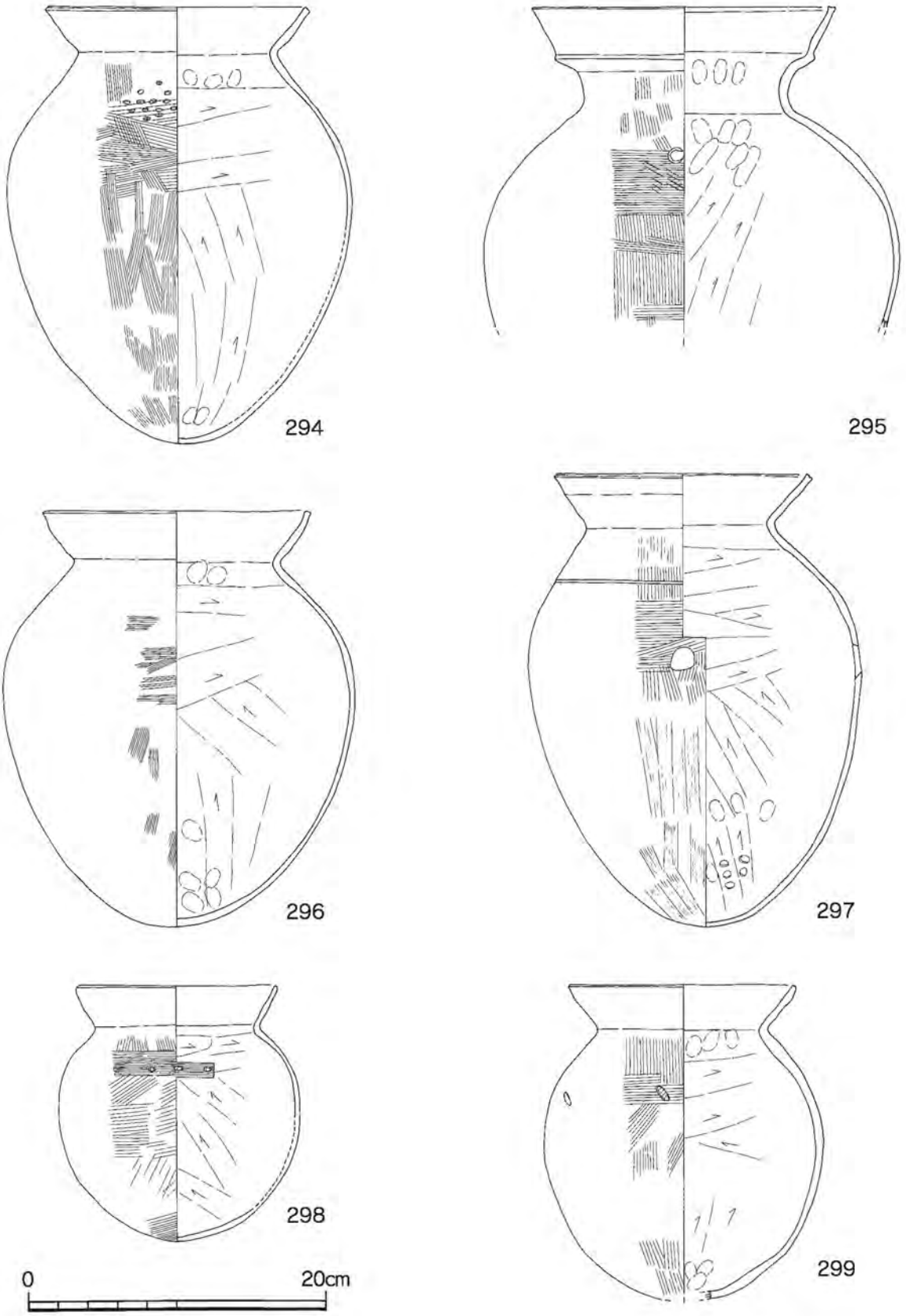
第9-34図　SX4022実測図(S=1/40)

のシルト質粘土で、上層に土器が投棄された状態であった。ただし、西側はSD4006の上層土器群と隣接しており、一部その遺物が混入している。周溝内側に土坑などの関連遺構は認められなかった。土器の出土範囲は、北溝、東溝、南溝東部、南溝西部、西溝のまとまりで分けることができる。

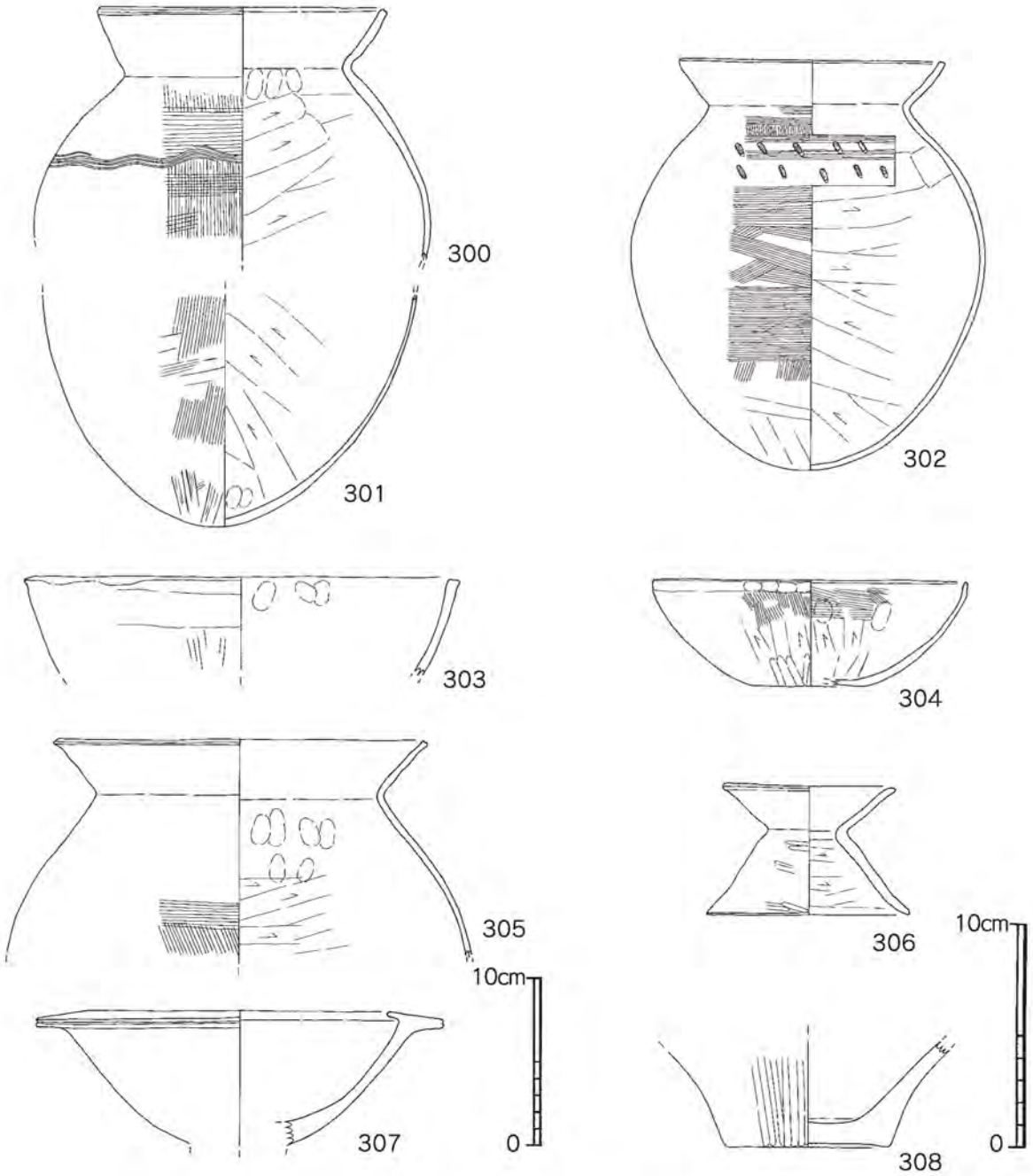
出土した甕は、胴部内面にはヘラケズリとユビオサエ、外面には密～粗なハケメが残り、口縁部は内外面ともにヨコナデで仕上げられる。色調は橙色～にぶい橙色を呈す。鉢は、胴部は内外面ともにハケメとヘラナデで粗く調整され、口縁部はナデで仕上げられる。色調は橙色～にぶい橙色、にぶい褐色を呈す。北溝から時計回りに出土遺物を報告する。**284**は小型鉢で、完存し、胎土は細～粗砂を少なく含む。口唇部が面取されて、内側が尖る。**285**は1/4が残存する小型鉢で、胎土は細～粗砂をわずかに含む。**286**は素口縁の半球形鉢で、完存し、胎土は細～粗砂を少なく含む。**287**は1/3が残存



第9-35図　SX4022出土土器実測図1（289はS=1/3、他はS=1/4）



第9-36図　SX4022出土土器実測図2(S=1/4)



第9-37図　SX4022出土土器実測図3（306・308はS=1/3、他はS=1/4）

する小型鉢で、胎土は細砂をわずかに含む。**288**はほぼ完形の小型甕で、胎土は細砂をわずかに含む。肩に円形の剥落痕が残る。**289**は脚付坏の脚部である。色調はにぶい黄橙色を呈す。**290**は甕で、1/2が残存し、胎土は細～粗砂をやや多く含む。花崗閃緑岩**335**（図版9-14）が口縁部内から出土した。**291**は甕で、2/3が残存し、胎土は細～粗砂をやや多く含む。肩部に波状沈線をめぐらす。**292**は甕で2/3が残存し、胎土は細～粗砂をやや多く含む。肩部に縦位の刺突連点文が施される。**293**は完形の甕で、胎土は細～粗砂をやや多く含む。肩に菱形状の刺突連点文が施される。**294**は完形の甕で、胎土は細～粗砂をやや多く含む。頸部が締まる形態で、肩に菱形状の刺突連点文が施される。**295**は1/2残存の壺で、胎土は細～粗砂を少なく含み、色調はにぶい橙色を呈す。胴部内面はヘラケズリと

第9-38図　SX4028·4034出土土器実測図(S=1/3)

ユビオサエ、外面はハケメと部分的にタタキ痕が残る。口縁部は内外面ともにヨコナデで仕上げる。肩に円形の竹管刺突文が3カ所施される。**296**は1/2残存の甕で、胎土は細～粗砂をやや多く含む。**297**はほぼ完形の甕で、胎土は細～粗砂をやや多く含む。**298**はほぼ完形の小型甕で、胎土は細～粗砂をやや多く含む。肩に横3点の刺突連点文を施す。**299**はほぼ完形の小型甕で、胎土は細～粗砂をやや多く含む。肩に8～11cm間隔でハケメ工具による刺突がめぐらされる。**300**は1/3が残存する甕で、胎土は細～粗砂を少なく含む。肩にハケメ工具による波状文が施される。**301**は接合しないが、**300**の下半部である。**302**はほぼ完形の甕で、胎土は細～粗砂をやや多く含む。肩にハケメ工具による2段の連続刺突文が施される。**303**は1/6残存の鉢で、胎土は細砂を少なく含む。**304**は1/4が残存する鉢で、胎土は細砂を少なく含む。**305**は1/6が残存する甕で、胎土は細～粗砂をやや多く含む。**306**は2/3残存の鼓形器台で、胎土は細～粗砂をやや多く含み、色調は橙色を呈す。内面にはヘラケズリ、外面にはヘラミガキの痕跡がみられる。**307**は須玖Ⅱ式の高坏口縁部で、1/3が残存する。胎土は細～粗砂を少なく含み、色調は橙色を呈す。摩滅が著しく、溝内への混入資料である。**308**は須玖Ⅱ式の壺底部で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。溝内への混入資料である。

3. 古代

包含層

SX4028・SX4034（第9-4・7図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-38図、図版9-15）

調査区東半で検出したSX4027・SX4051上層の遺物包含層である。覆土は黄灰色シルトで、薄型コンテナ1箱分の遺物が出土した。奈良～平安時代の遺物が出土している。

309は8世紀代の須恵器坏身で、1/6が残存し、復元高台径6.8cmを測る。胎土は細～粗砂をごくわずかに含み、色調は灰色を呈す。**310**は8世紀末～9世紀初頭の須恵器の高台付き椀で、胎土は細砂をやや多く含み、色調は淡灰色を呈す。**311**は10世紀代の黒色土器B類椀で、1/4が残存し、復元高台径7.2cmを測る。胎土は細砂を多く含む。

4. 中世

以下の陶磁器・土師器の時期記述には、下記文献を参照した。

宮崎亮一編（2000）『大宰府条坊跡ＸＶ：陶磁器分類編』（第49集）太宰府市教育委員会
山本信夫（1990）「統計上の土器」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
中世土器研究会編（1995）『概説中世の土器・陶磁器』　真陽社

掘立柱建物

調査区西側で多数の柱穴を検出した。大半が中世の柱穴であり、堀方径が20～40cmと小さく、埋土はしまりの強い灰黄褐色粘質シルトである。これに対し、調査区中央北側で検出した柱穴は、堀方径が40～60cmと一回り大きく、埋土は黒灰～黒褐色シルト質粘土と黄褐色土の混土であった。出土遺物からこれらの時期も中世と考えられる。また、堀方径が50～100cmで、地山との区別が困難な黄灰色シルトの柱穴も確認したが、出土遺物が少なく、時期は不明である。わずかに出土した土師器

片を評価すれば、古墳時代～中世と考えられる。図化した遺物はすべて柱穴堀方から出土した。

SB4286（第9-3・39図、図版9-1）

調査区西側で確認した桁行北北西軸、3×2間（6.9×3.8m）の無廂建物である。西側の2柱穴に焼土からなる柱痕跡が認められた。柱穴からは土師器・須恵器小片が出土している。

SB4287（第9-3・39図、図版9-1）

調査区西側で確認した桁行北北東軸、2×1間（4.6×2.8m）もしくは2×2間の無廂建物である。西北隅の柱穴に柱の当たりが認められた。柱穴からは土師器小片が出土している。

SB4288（第9-3・4・40図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-44図、図版9-15）

調査区中央西側で確認した桁行北北東軸、4×2間（9.4×5.9m）の両廂建物である。屋内柱穴の性格は不明であるが、SK4063については建物と同時存在で、土坑付建物を構成していた可能性もある。

313は、側柱穴SP4043出土の白磁皿Ⅲ-2類（D期：12世紀中頃）で、口径10cm・器高2.4cmを測る。胎土は灰白色で、釉は薄く貫入がわずかにみられ、ややオリーブ色がかった灰白色を呈す。胴部下半は露胎で、内面見込みの釉は掻き取っていない。**314**は、側柱穴SP4087出土の白磁碗口縁部片で、胎土は淡黄色、釉は薄く細かい貫入がみられ、ややオリーブ色がかった透明を呈す。**315**は、側柱穴SP4129出土の土師器小皿で、1/2が残存し、復元口径9.2cm・器高1.1cmを測る。底外面には回転糸切り痕と板状圧痕が認められる。**316**は、側柱穴SP4049出土の東播系須恵器の捏鉢で、1/6が残存し、復元口径30cm・復元底径13cmを測る。胎土は細～粗砂を少なく含み、色調は灰色を呈す。12世紀中頃と考える。**317**は、間柱SP4201出土の土師器坏で、1/6が残存し、復元口径16.2cm・器高3.2cmを測る。底外面には静止糸切り痕が認められる。土師器の時期も12世紀代である。

SB4289（第9-4・39図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-44図、図版9-15）

調査区中央西側で確認した桁行東東北軸、3×1間（5.7×3.0m）の無廂建物である。

318はSP4059出土の土師器坏で、1/8が残存し、復元口径16cmを測る。**319**はSP4060出土の土師器小皿で、1/4が残存し、復元口径8.6cm、器高1.1cmを測る。底外面に回転糸切り痕が認められる。いずれも12世紀代と考える。

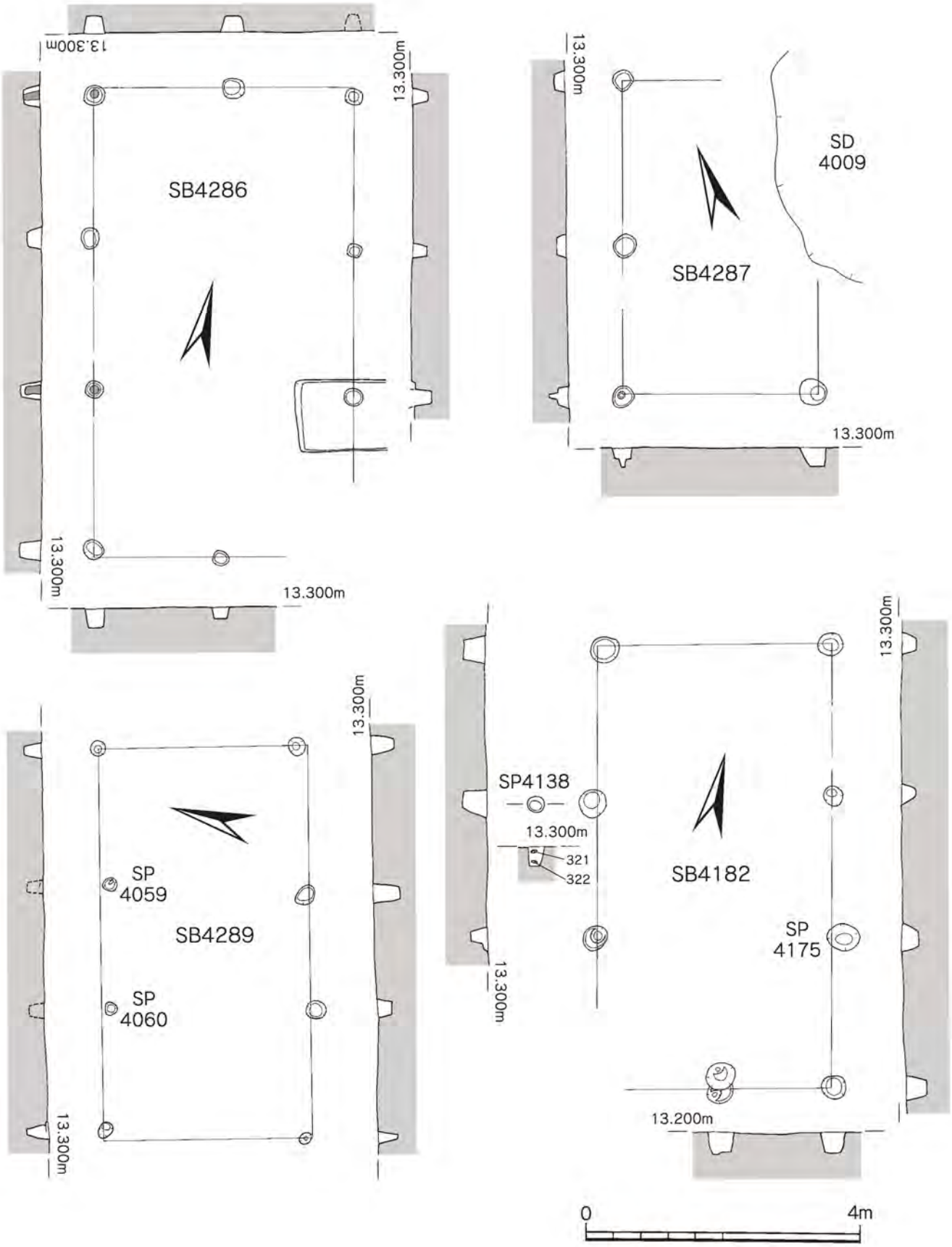
SB4290（第9-4・40図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-44図、図版9-15）

調査区中央西側で一部を確認した桁行北北西軸、梁行2間（4.2m）の無廂建物である。柱穴からは土師器小片が出土した。

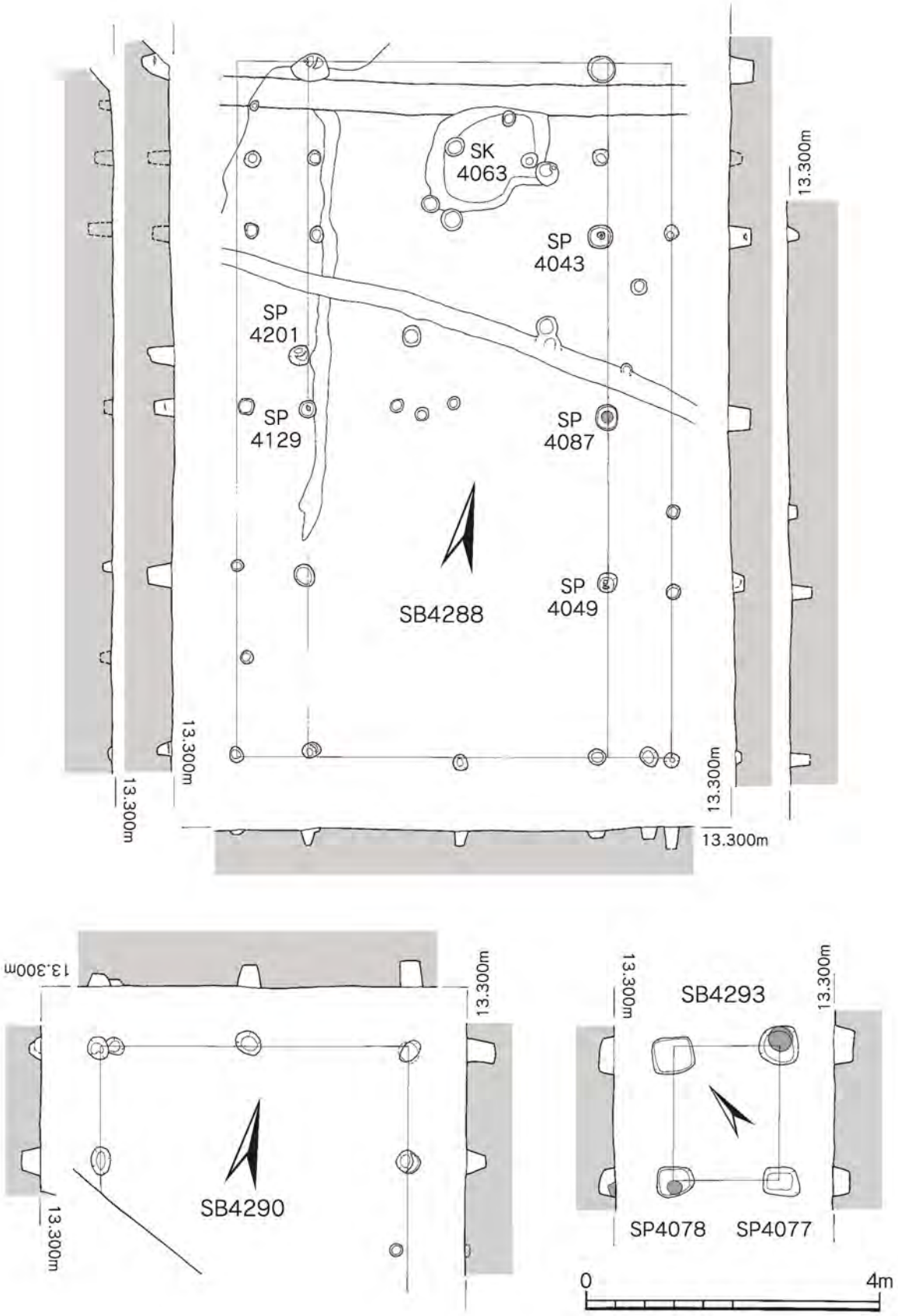
SB4182（第9-4・6・39図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-44図、図版9-15）

調査区中央南側で確認した桁行北北東軸、3×1間（6.5×3.4m）の無廂建物である。SP4138は建物における機能は不明であるが、下部で土師器小皿**322**が伏せた状態で、上部で**321**が正置状態で出土した。地鎮め遺構の可能性もある。

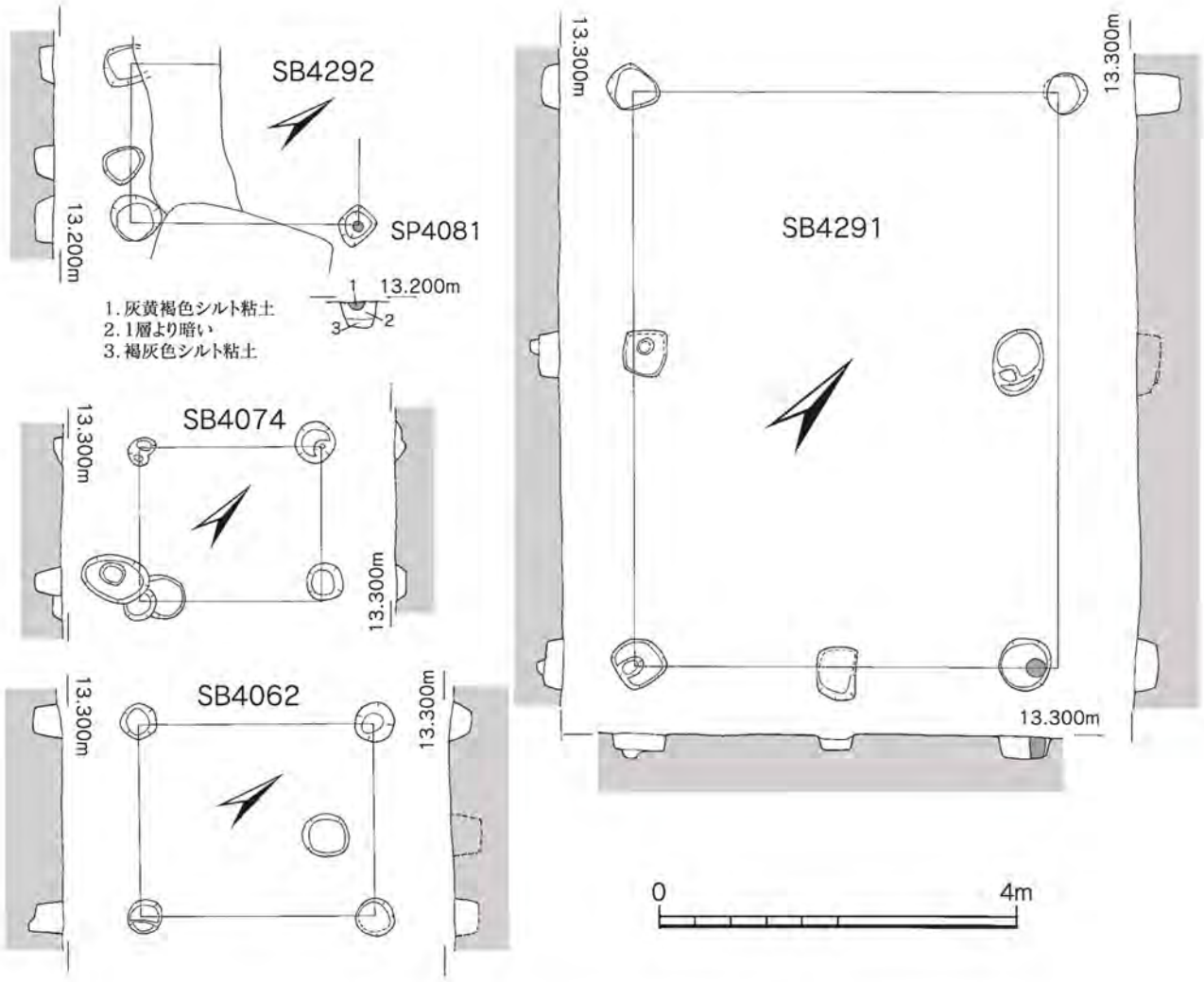
320はSP4175出土の土師器小皿で、1/6が残存し、復元口径9.6cm・器高0.9cmを測る。底外面の切り離し痕跡は摩滅により消失している。**321**・**322**はSP4138出土の土師器小皿である。**321**は口径9.5cm・器高1.2cm、**322**は口径9cm・器高1.4cmを測る。いずれも底外面に回転糸切り痕と板状圧痕が認められる。いずれも12世紀代と考える。



第9-39図　4区中世SB実測図1 (S=1/80)



第9-40図　4区中世SB実測図2(S=1/80)



第9-41図　4区時期不明SB実測図(S=1/80)

SB4293（第9-4・40図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-44図、図版9-15）

調査区中央で確認した桁行北東軸、1×1間（1.8×1.4m）の建物である。柱穴埋土は黄褐色土の細かいブロックを含む黒灰色シルト質粘土で、柱痕跡も認められる。

312は、SP4078出土の白磁皿V-1類（C期：11世紀後半～12世紀前半）の口縁部片で、胎土は灰白色、釉は薄く青色がかった透明を呈す。その他柱穴からは、弥生土器・土師器小片・黒曜石片が出土している。

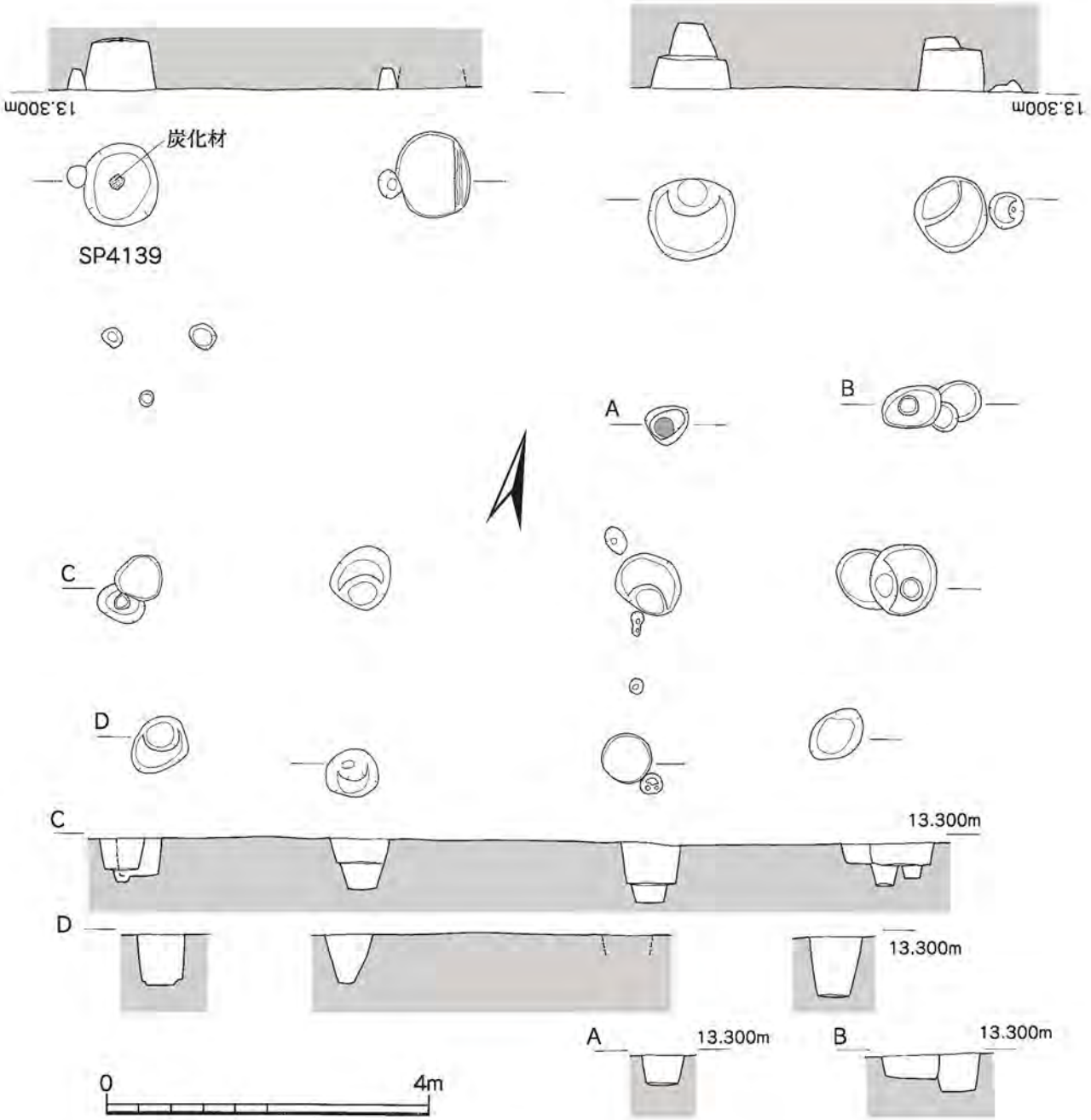
時期不明の掘立柱建物

SB4291（第9-3・41図、図版9-1）

調査区中央北側で確認した桁行北東軸、3×2間（6.4×4.8m）の建物である。柱穴埋土は黄褐色土の細かいブロックを含む褐灰～暗灰色シルト質粘土である。柱痕跡や柱の当たりが認められる。弥生土器片が出土した。

SB4292（第9-4・41図、図版9-1）

調査区中央で確認した桁行北東軸、1×1間（2.6×1.8m）の建物である。柱穴埋土は黄褐色土の細



第9-42図　4区時期不明柱穴群実測図(S=1/80)

かいブロックを含む褐灰～暗灰色シルト質粘土で、柱痕跡も認められる。弥生土器・土師器小片が出土した。

SB4074（第9-3・5・41図、図版9-1）

調査区中央北側で確認した桁行北東軸、1×1間（2.0×1.8m）の建物である。柱穴埋土は黄褐色土の細かいブロックを含む褐灰～暗灰色シルト質粘土である。弥生土器・土師器小片が出土した。

SB4062（第9-5・41図、図版9-1）

調査区中央北東で確認した桁行北東軸、1×1間（2.6×1.8m）の建物である。柱穴埋土は黄褐色土の細かいブロックを含む褐灰～暗灰色シルト質粘土である。弥生土器・土師器小片・黒曜石片が出土した。

その他ピット（第9-3・5・42図、図版9-1）

調査区中央北側で確認した柱穴群である。埋土は炭を散漫に含む黄灰色シルトで、地山（黄褐色シルト質粘土）との区別が容易ではなく、土のわずかなしまり具合を頼りに掘削した。よって、平面で検出したものの、土のしまりが強いものについてはそれ以上掘削できなかった。また、柱筋の通りも悪く、明確に建物として立てられるものはなかった。ただし、SP4139のように礎板と思われる炭化材が検出されたり、柱の当たりらしきものが認められたりするピットもあるため、これらは柱穴であったと考えたい。縄文～弥生土器・土師器小片・黒曜石片が出土している。

溝（第9-6・14図、図版9-9）　**出土遺物**（第9-44図、図版9-15）

SD4170

調査区南端で検出した東東北方向に蛇行する溝である。幅40cm・深さ10～15cmを測り、埋土は褐灰色砂質シルトである。時期は12世紀代である。

325は土師器小皿で、2/3が残存し、口径9.2cm・器高1.4cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈す。底外面に回転糸切り痕を残す。

SD4032

調査区南東で確認した北北西方向の溝である。幅2.4m・深さ40cmを測り、埋土は灰色砂・シルトの互層で、拳～人頭大礫が堆積する。青磁・白磁・土師器・弥生土器小片・黒曜石片が出土した。時期は12世紀代であろう。

324は東播系須恵器甕の胴部片で、胎土は細砂をやや多く含み、色調は灰赤色を呈す。外面には細かい長方形の格子目のタタキ痕、内面には粗い平行の当て具痕が認められる。

土坑墓（第9-3・4・43図、図版9-9）　**出土遺物**（第9-44図、図版9-15）

SR4203

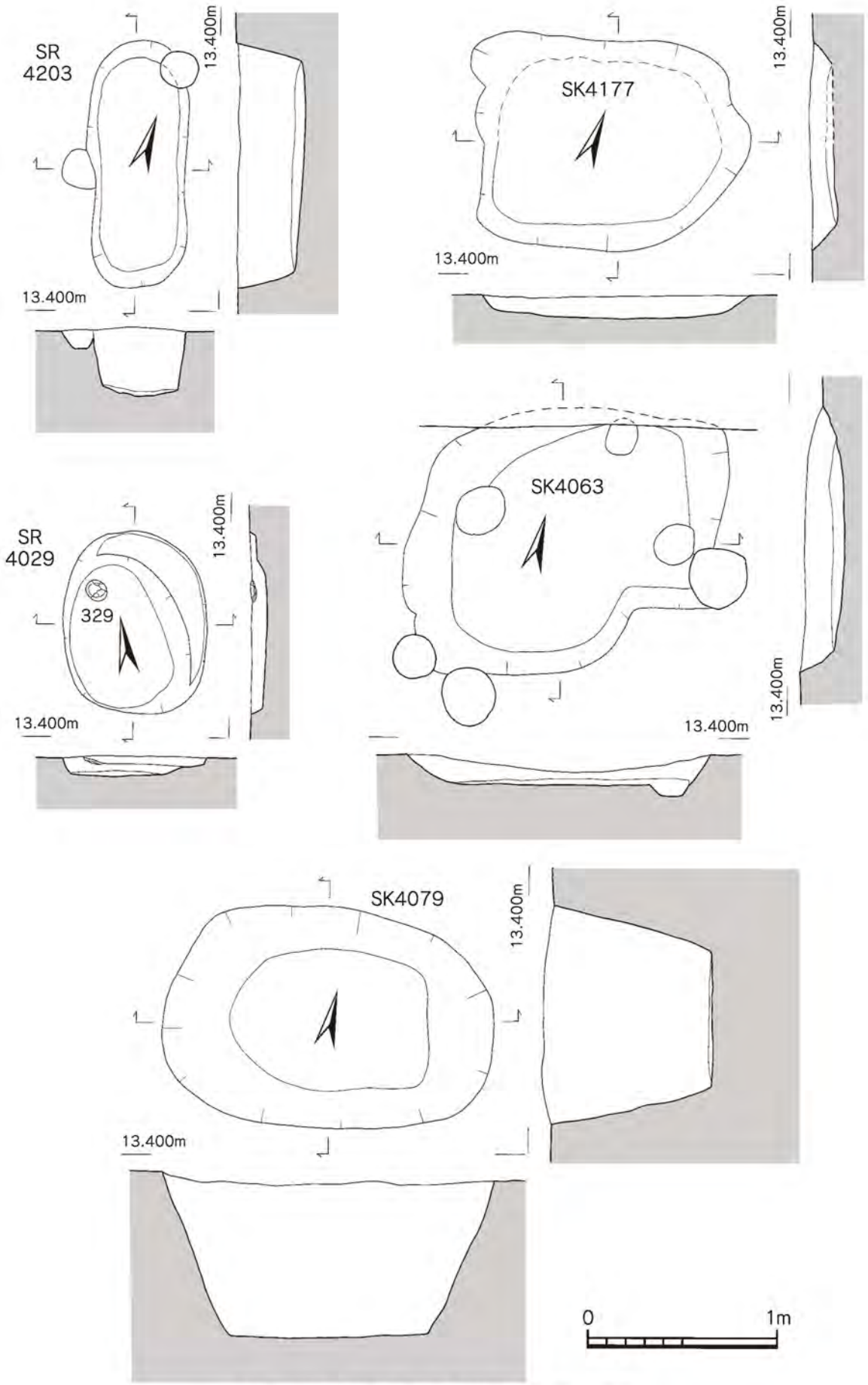
調査区西側で確認した北北西軸の楕円形土坑である。長さ1.3m・幅54cm・深さ36cmを測る。埋土は褐灰色シルト質粘土である。形態と陶磁器の出土から土坑墓とした。時期は12世紀中頃～後半であろう。

327・328は同一個体の可能性が高い、同安窯系青磁碗の胴部片である。胎土はやや黄みがかった灰白色、釉は灰オリーブ色を呈す。内面には線刻文、外面には片切彫の粗い櫛描文を縦位に施す。**326**は土師器の坏口縁部片で、胎土は細砂をわずかに含む精選土で、色調はにぶい黄橙色を呈す。

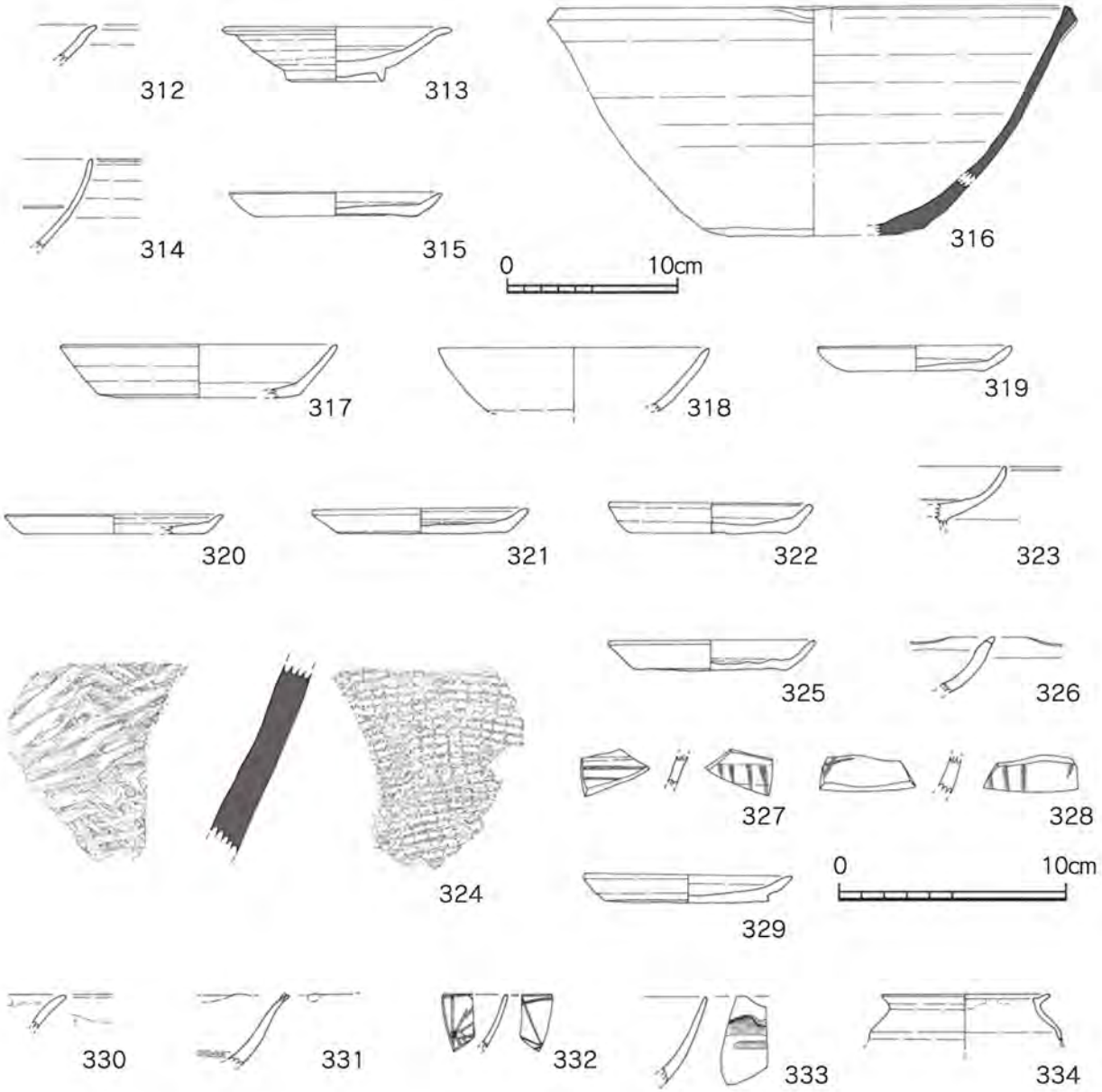
SR4029

調査区中央南側で確認した北北東軸の楕円形土坑である。長さ96cm・幅75cm・深さ10cmを測る。埋土はオリーブ灰色シルトで、上層に土師器小皿、中層に焼土が堆積していた。焼土の堆積は説明が難しいが、完形の土師器小皿の出土を重視して、土坑墓としておきたい。時期は12世紀代である。

329は完形の土師器小皿で、口径9.2cm・器高1.3cmを測る。底外面には回転糸切り痕が残る。



第9-43図　4区中世SR・SK実測図(S=1/30)



312 SP4078　313 SP4043　314 SP4087　315 SP4129　316 SP4049　317 SP4201
318 SP4059　319 SP4060　320 SP4175　321·322 SP4138　323 SP4046　324 SD4032
325 SD4170　326～328 SR4203　329 SR4029　330 SP4173　331～334 SX4001

第9-44図　4区中世SB·SD·SR、近世SP·SX出土遺物実測図(316～318はS=1/4、他はS=1/3)

土坑（第9-3・4・6・43図、図版9-9）

出土遺物が少なく、時期や性格が明確でないが、中世と考えられる土坑を3基検出した。

SK4177

調査区中央南側で検出した東西軸の楕円形土坑である。長さ1.4m・幅1.1m・深さ12cmを測る。埋土は褐灰色シルト質粘土で、土器小片が出土している。古代のSX4028上から掘り込まれている。

SK4063

調査区中央西側で検出した不成形土坑である。長さ1.6m・幅1.4m・深さ15cmを測る。埋土は褐灰

色シルト質粘土と明黄褐色シルト質粘土（地山）の混土で、土師器小片が出土した。SB4288と同時存在で土坑付建物を構成していた可能性もある。

SK4079

調査区南側で確認した東西軸の楕円形土坑である。長さ1.7m・幅1.1m・深さ84cmを測る。埋土は灰黄色シルト・黒褐色シルト質粘土・灰色中砂ブロックの混土で、土師器小片・黒曜石片が出土した。井戸の可能性もある。

5．近世

柵SA（第9-4・6図、図版9-1）　**出土遺物**（第9-44図、図版9-15）

3～5つの柱穴からなる柵で、調査区西側に南北軸で1列、調査区南側に東西軸で4列確認した。柱穴埋土は、いずれもしまりの弱い暗褐色粘質土で、近世陶磁器片が出土した。

330は調査区中央南東で検出した柵柱穴SP4173出土の褐釉陶器片で、胎土はやや黄色がかった灰色、褐色釉の上に黒褐色不透明釉がかかる。

水田SX4001・4003（第9-4・8図、図版9-1・4）　**出土遺物**（第9-44図、図版9-15）

調査区西側で一部を確認した方形遺構である。埋土は緑灰色シルトで、一段（7～10cm）下げた面で溝状・筋状のプランを確認した。鉄分の沈着がみられる。遺構内の段差は畦畔と考えられる。いぶし瓦片・鉄滓・鉄釘・染付・色絵・陶器類・土師質土器の小片などが出土した。

331は白磁碗口縁部片で、胎土は淡灰色、釉は灰白色透明で、貫入はみられない。口縁部は輪花で、内面下半に目跡を残す。**332**は肥前系白磁染付碗口縁部片で、胎土は白色、釉は透明で、貫入はみられない。**333**は肥前系白磁染付碗口縁部片で、胎土は白色、釉はやや青みがかった透明で、貫入はみられない。**334**は青磁小瓶口縁部で、1/8が残存し、復元口径8.4cmを測る。胎土は橙色をおびた灰白色、釉は明緑色を呈す。口唇部から内面は釉剥ぎの露胎で、外面には細かい貫入がみられる。その他、**337**～**340**（図版9-15）などの近世陶磁器片が出土した。

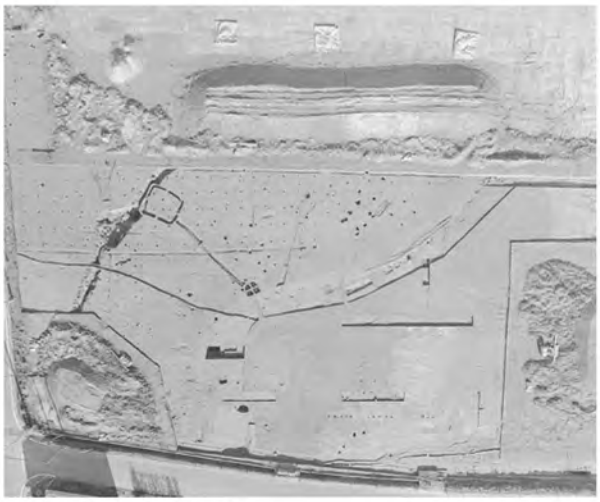
6．近現代

SD4002とそれより北側に等間隔に位置する小柱穴列は、近現代の遺構である（第9-3図・アミフセ部分）。小柱穴の埋土は、しまりの弱い灰色粘質シルトで、印判磁器などが出土した。柱列の性格は、果樹栽培用の棚などが考えられる。**323**（第9-44図、図版9-15）は、小柱穴SP4046出土の白磁皿で、胎土は白色、釉は薄く貫入がみられず、白色透明を呈す。口縁部外面上端に細沈線を施し、内面見込みの釉は掻き取っている。

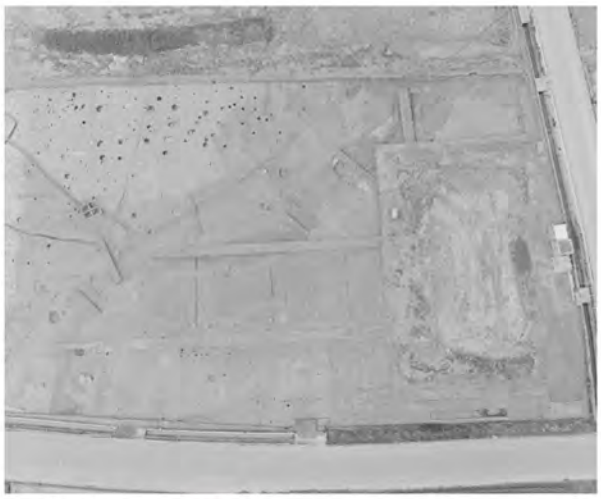
第3節　小結

4区では、縄文時代晩期・古墳式期の河成堆積層を遺構面として、黒川式期～弥生時代前期の水路が構築される。弥生時代中期後半には、水路SD4190に対して導水用の水路が張り巡らされ、微高地には掘立柱建物が建てられる。弥生時代後期～古墳時代前期には、水路とSK4075・SK4076・方形周溝遺構SX4022・小土坑などの祭祀的性格をもつ遺構が構築される。5世紀代には湿地状態にあった調査区東半に不成形の落ち込みが複数形成される。6世紀以降は生活痕跡の空白期間となり、SX4051上に奈良時代～平安時代の遺物が少量堆積する。12世紀代になると掘立柱建物や土坑墓が形成されるが、それも13世紀代には続かない。近世以降は耕地として利用され、今日にいたるようである。

図版9-1



1. 4区上面全景（南から）

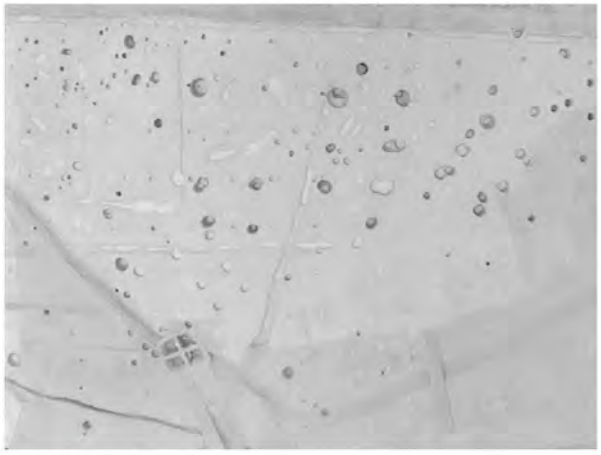


2. 4区下面全景（南から）

3. 4区北西部全景（北から）

4. 4区西部全景（南から）

5. 4区北部全景1（南から）



6. 4区北部全景2（南から）

7．4区鳥瞰1（北西から高祖山を臨む）

8．4区鳥瞰2（南東から可也山を臨む）

9．トレンチ3北壁土層

10．トレンチ8北・東壁土層

11．SD4005ベルト土層（南から）

12．SD4005北壁土層

13．SD4190南壁土層

14．トレンチ18北壁土層

図版9-3

15. SD4009土層B（南西から）

16. SD4009土層D（北から）

17. SD4023土層C（北西から）

18. SD4004土層A（東から）

19. SK4076（南西から）

20. SX4022　遺物290出土（南から）

21. SX4022南ベルト東面土層

22. SX4022東ベルト北面土層

23. 北ベルト南面土層

24. トレンチ27南壁SD4190土層

25. SD4006北壁土層

26. SD4010土層A（南から）

27. SD4010土層B（北から）

28. SX4001西壁土層

29. SD4005（南から）

30. SD4050（北から）

図版9-5

31．SP4085　遺物37・38出土（北東から）

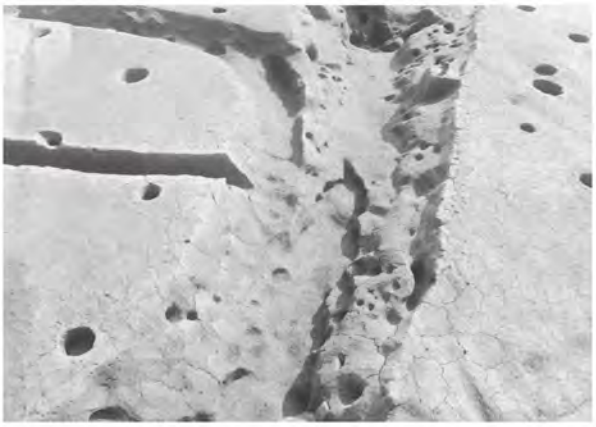
32．SP4090　遺物39出土（東から）

33．SD4006（北から）

34．SD4134（南西から）

35．SD4066（北東から）

36．SD4190北東部（北から）

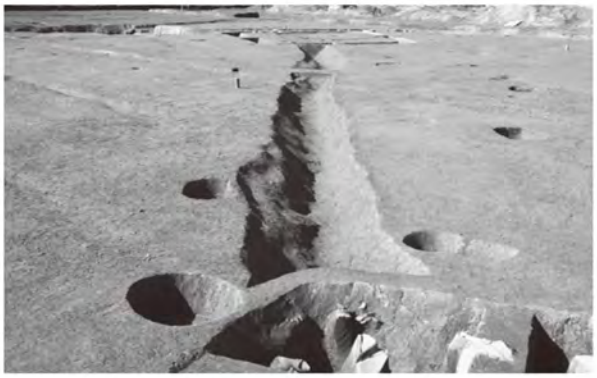


37．SD4023・SD4006合流点（北から）

38. SD4009（東から）

39. SD4009冠水状況（南から）

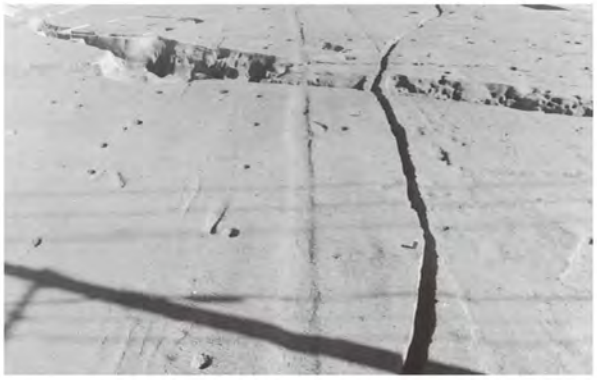
40. SD4010（北から）



41. SD4023（南東から）

42. SD4023遺物出土（西から）

43. SD4145（南から）



44. SD4002・SD4004（西から）

45. SD4004土器出土（北西から）

図版9-7

46. SX4051遺物出土（南から）

47. SX4133遺物出土（北西から）

48. SX4221遺物出土（南東から）

49. SK4075遺物出土（北から）

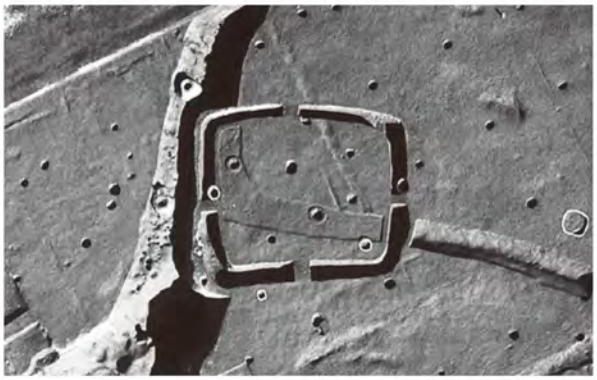
50. SK4076遺物出土（北東から）

51.SK4076（南東から）

52. SP4088土層（西から）

53. SP4140遺物出土（東から）

54. SP4233　遺物283出土（東から）



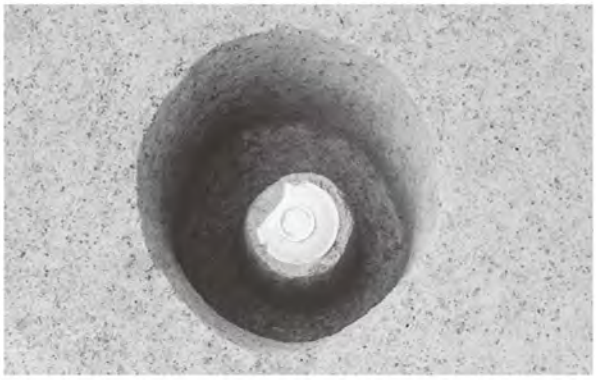
55. SX4022（南から）

56. SX4022北溝土器出土（西から）

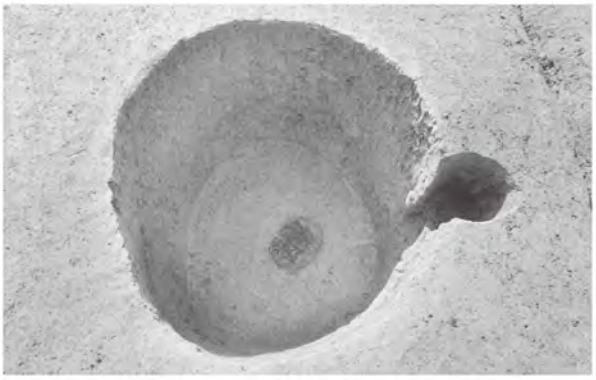
57. SX4022東溝土器出土（西から）

58. SX4022南溝土器出土（南東から）

59. SX4022　遺物295・294出土（東から）



60. SP4043　遺物313出土（東から）

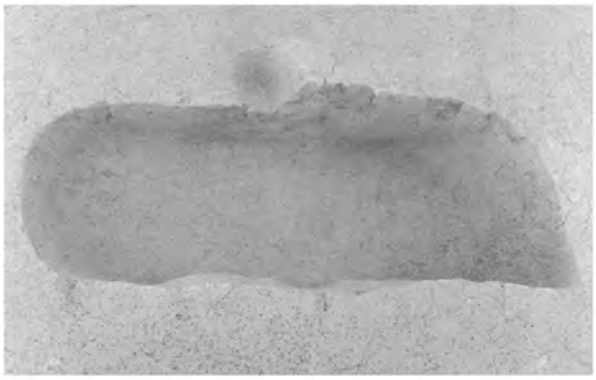


61. SP4139　炭化材出土（北西から）

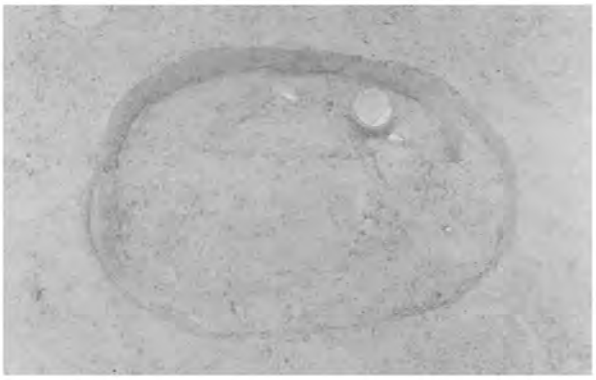
図版9-9

62. SP4138　遺物321出土（北から）

63. SP4138　遺物322出土（北から）



64. SR4203（東から）



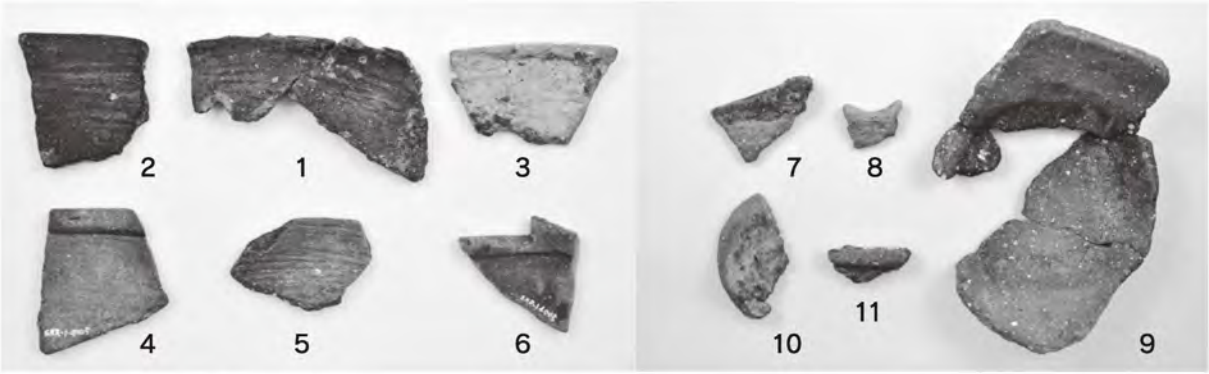
65. SR4029（東から）

66. SK4177（西から）

67. SK4079（北から）

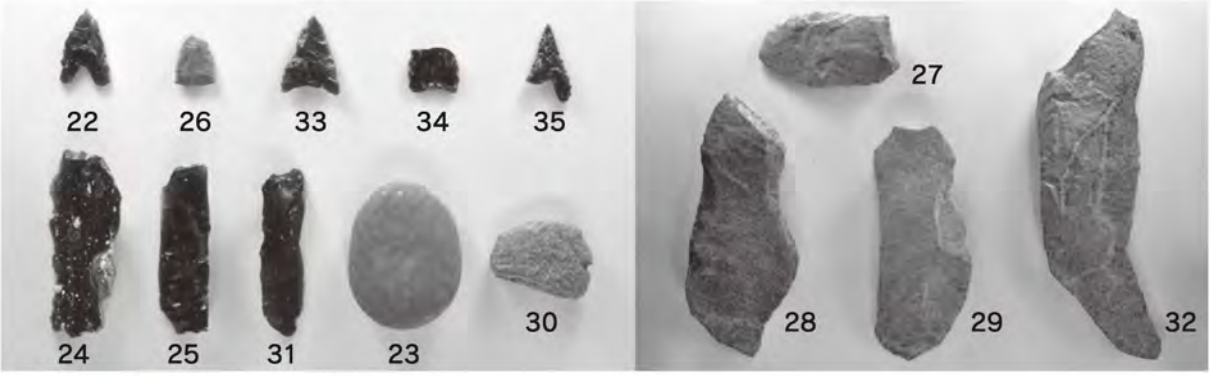
68. SD4170（東から）

69. SD4032（北から）



70. SD4005出土土器

71. 遺構検出面中・ピット出土土器



72. SD・遺構検出面中・ピット出土石器

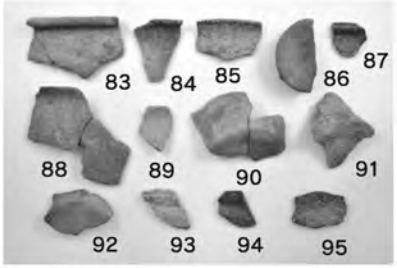
73. 弥生時代SB・古墳時代SP出土土器

74. SD4190出土土器

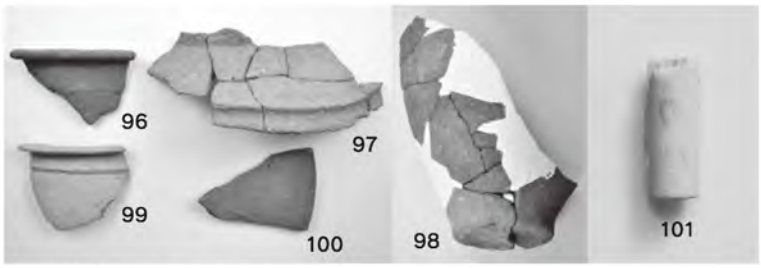
図版9-11

75. SD4006出土土器

76. SD4009出土遺物



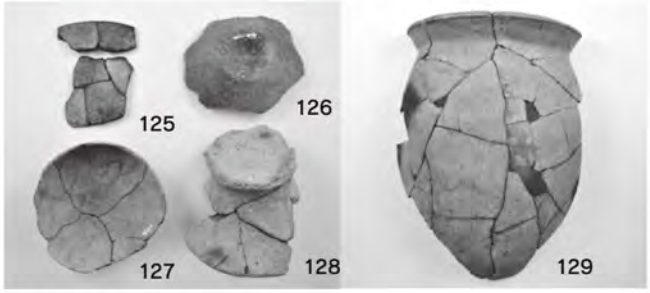
77. SD4010出土土器



78. SD4023出土遺物

79. SD4023・4134合流出土土器

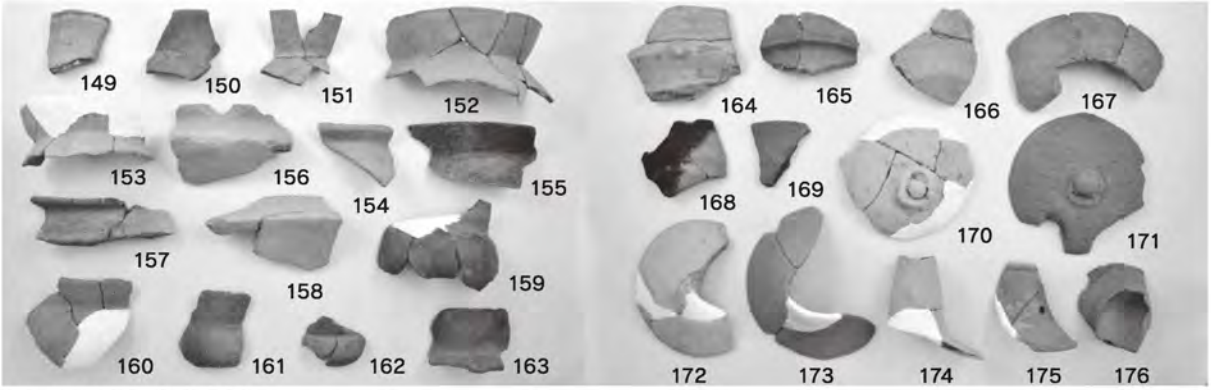
80. SD4134・4226出土土器



81. SD4004出土土器

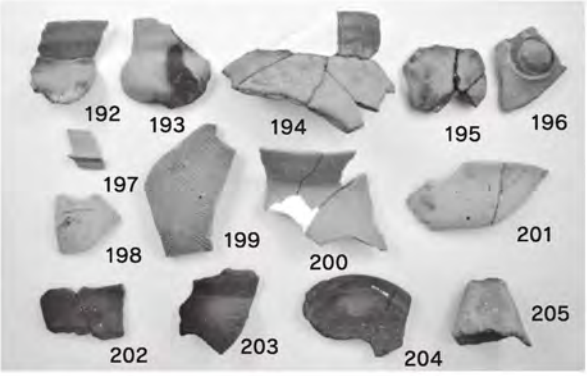
82. SD4066出土遺物

83. SX4191・SX4051出土土器

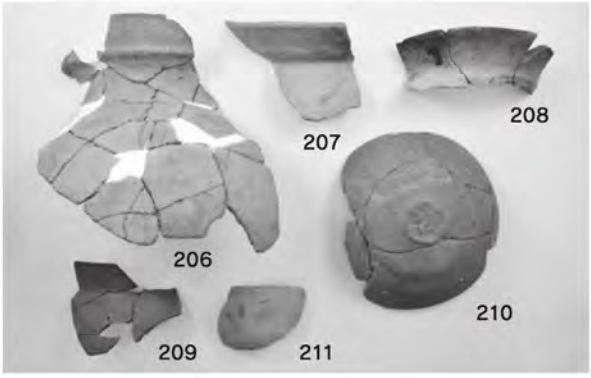


84. SX4051出土土器1

85. SX4051出土土器2



86. 古墳時代SX出土土器1



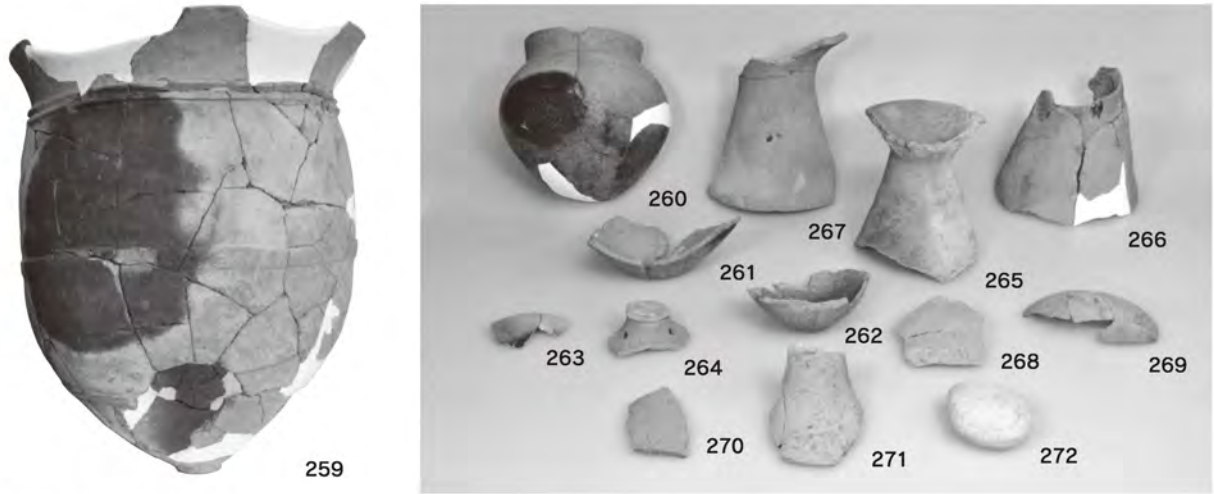
87. 古墳時代SX出土土器2

88. 4区SX・SD出土石器1

図版9-13

89. 4区SX・SD出土石器2

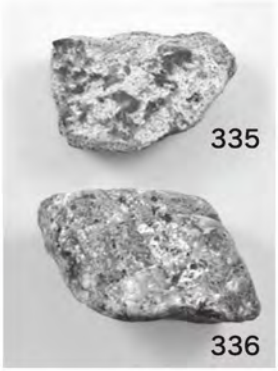
90. SK4075出土遺物



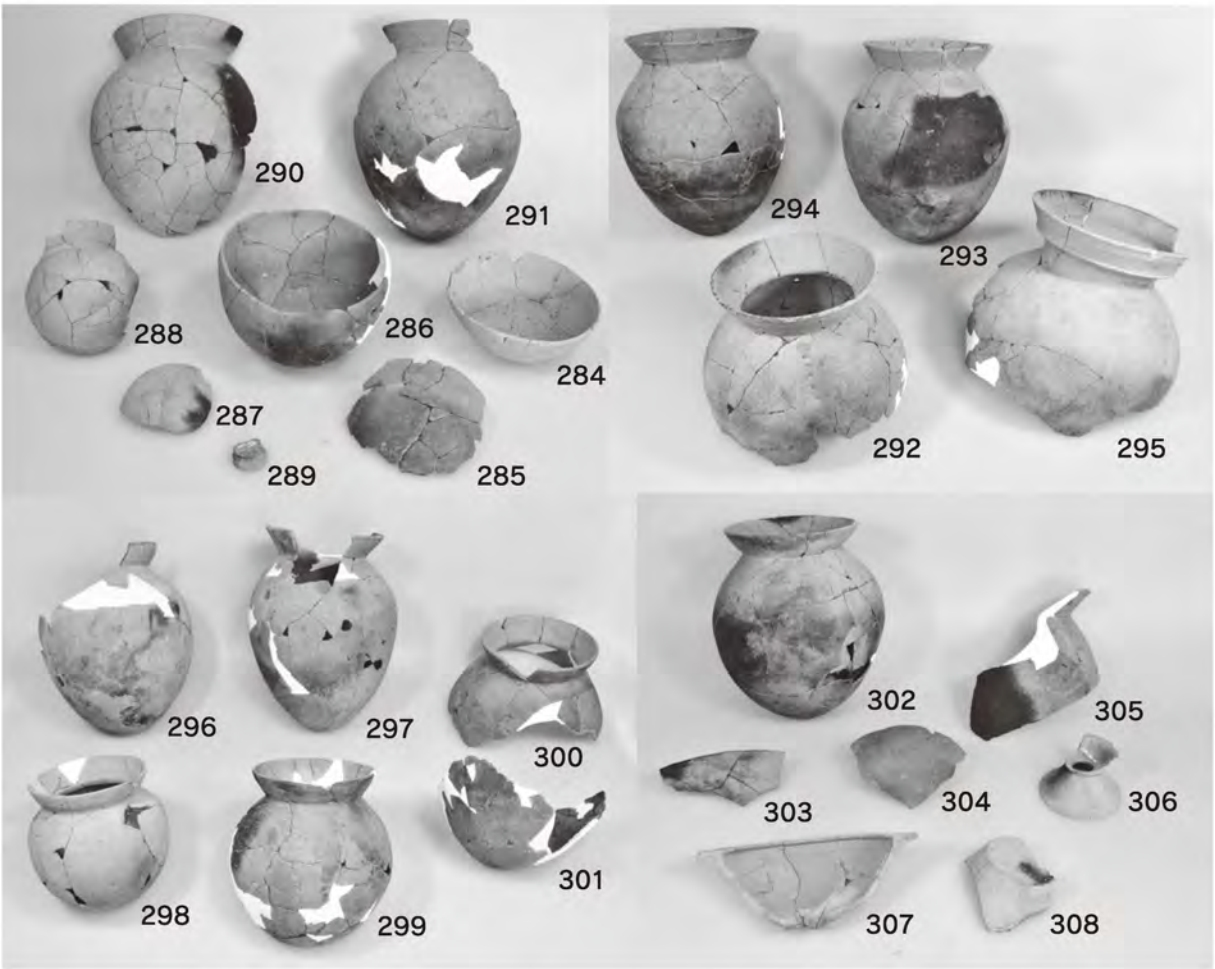
91. SK4076出土遺物

92. SP4140出土遺物

93. SP4088・SP4233出土土器

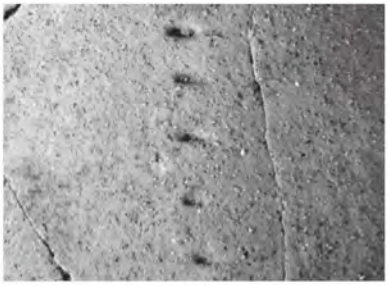


94. SX4022・SP4233出土礫



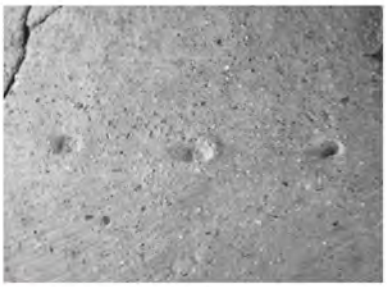
95. SX4022出土土器

図版9-15


292

293

294


298

302

96. SX4022出土甕　肩部刺突文

97. 古代SX出土土器

98. 中世SP出土土器

99. 中世SD・SR出土土器

100. 近世SP4173・SX4001出土土器

第X章　千里遺跡第1次調査5区

第1節　調査の概要（第10-1図、図版10-1-1）

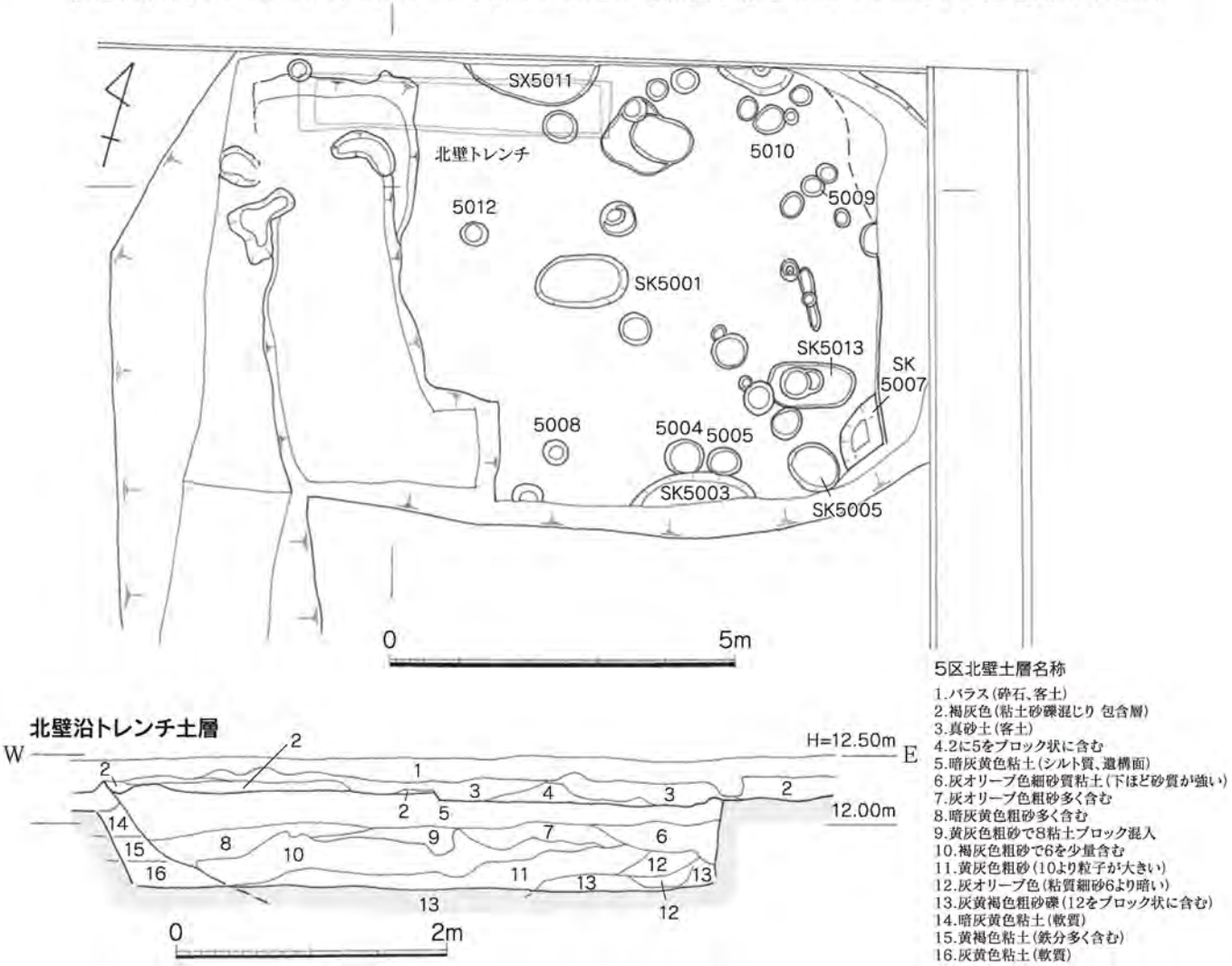
5区は区画整理地内の北西部、西九州自動車道福岡前原道路南側に位置する。北側道路に沿って新たに水路が建設される部分について調査を実施した。調査期間は平成22年2月19日～3月8日迄。調査面積は76㎡である。５区は開始時には水田面より１ｍ程盛土造成されていた。遺構面は暗灰黄色粘土～シルトで、この面は若干遺物を含む包含層となる。標高は遺構面で12.2ｍ前後を測る。主な検出遺構は土坑5基、ピット群であるが、出土遺物は少なく、実測出来る遺物も少ない。出土遺物の時期は縄文時代晩期から古墳時代前期頃である。

第2節　遺構と遺物

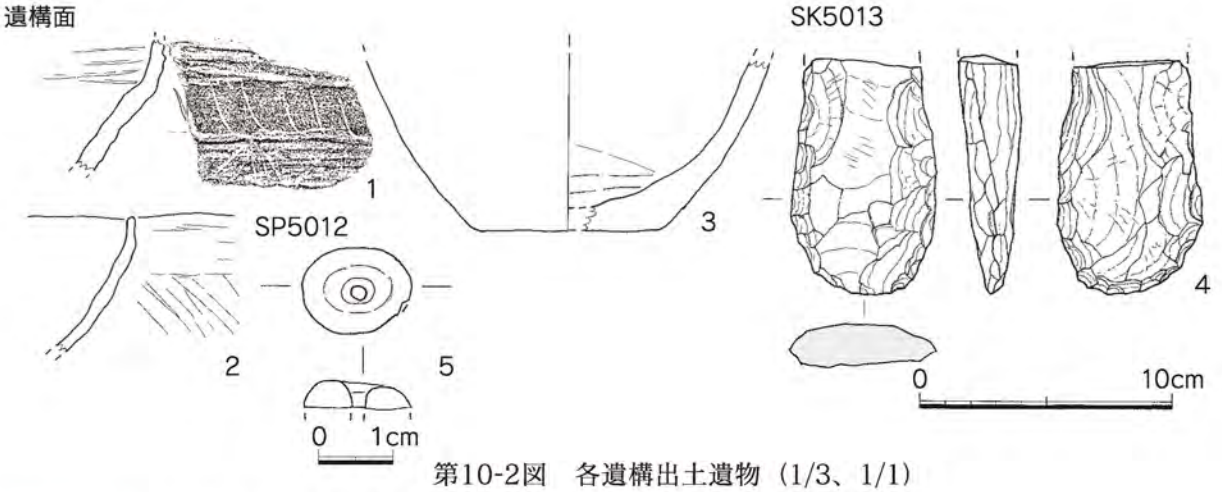
①　土坑（第10-1図）

SK5001　平面小判形を呈す土坑。規模は長軸長1.34ｍ、短軸幅0.80ｍ、深さ0.22ｍを測る。埋土は暗灰黄色粘土。縄文土器の鉢などが出土したが、細片で図示出来ない。

SK5003　調査区南壁にかかる土坑。平面楕円形状を呈すと思われるが、一部で全容は不明。確認規模は長軸長で1.80ｍ、深さ0.12ｍを測る。埋土は暗灰黄色粘土で粗砂を含む。**出土遺物**は縄文時



第10-1図　遺構全体図とトレンチ土層（1/100、1/50）



第10-2図　各遺構出土遺物（1/3、1/1）

代晩期頃の土器らしき細片が1点出土した。

SK5007　調査区南東隅で検出した。平面形状は不明。深さは0.3m程である。埋土は暗灰黄色粘土。**出土遺物**は縄文土器らしき細片が5点。いずれも図示出来ない。

SK5013　平面小判形を呈す形状。規模は長軸長1.26m、短軸幅0.68m、深さ0.08mと浅い。底面中央部はピット状に一段下がる。埋土は黒褐色粘質シルトである。**出土遺物**は縄文時代晩期頃の鉢などの細片、黒曜石剥片、打製石斧などが出土した。**4**は打製石斧片。基部は欠損する。石材は玄武岩で、剥片の周縁に二次調整を加え成形している。表面は風化が進み、また表面にはガジリ痕が残る。残存長9.5㎝、最大幅5.7㎝、最大厚2.5㎝を測る。

② ピット・遺構面出土遺物（第10-2図）

1・**2**は縄文土器。**1**は鉢形土器の口頸部片か。外面は条痕後ナデで線刻文様が入る。遺構面中出土。**2**は口縁が直立する鉢の口縁部小片。表面は摩滅があるが、外面下半はケズリ、口縁部はナデ。胎土に石英粒など粗砂多く含む。**1**・**2**とも縄文時代晩期初頭頃か。**3**は底部片。内外面ナデ。**5**はSP5012から出土した丸玉。1/2存で形状はやや楕円形。直径は1.4×1.1㎝、残存厚は0.4㎝、中心に径1.5㎜の孔が空く。色調は淡青色で、石材は天河石(ｱﾏｿﾞﾅｲﾄ)。分析結果については第XII章参照。

図版10　1.全景（西から）

2.SP5012出土丸玉（縮尺不統一）

第XI章　周船寺遺跡第19次調査

第1節　調査の概要

幅1.6～3mという狭い範囲での調査となった。全面が近現代造成によって削平された状態で、地表下約30cmが遺構面となる。西側は縄文時代晩期～弥生時代中期前半の河成堆積層・流路で、東側は微高地となり、弥生時代中期後半の掘立柱建物2棟、それに切られる溝1条を確認した。

第2節　遺構と遺物

1．縄文時代晩期～弥生時代中期前半

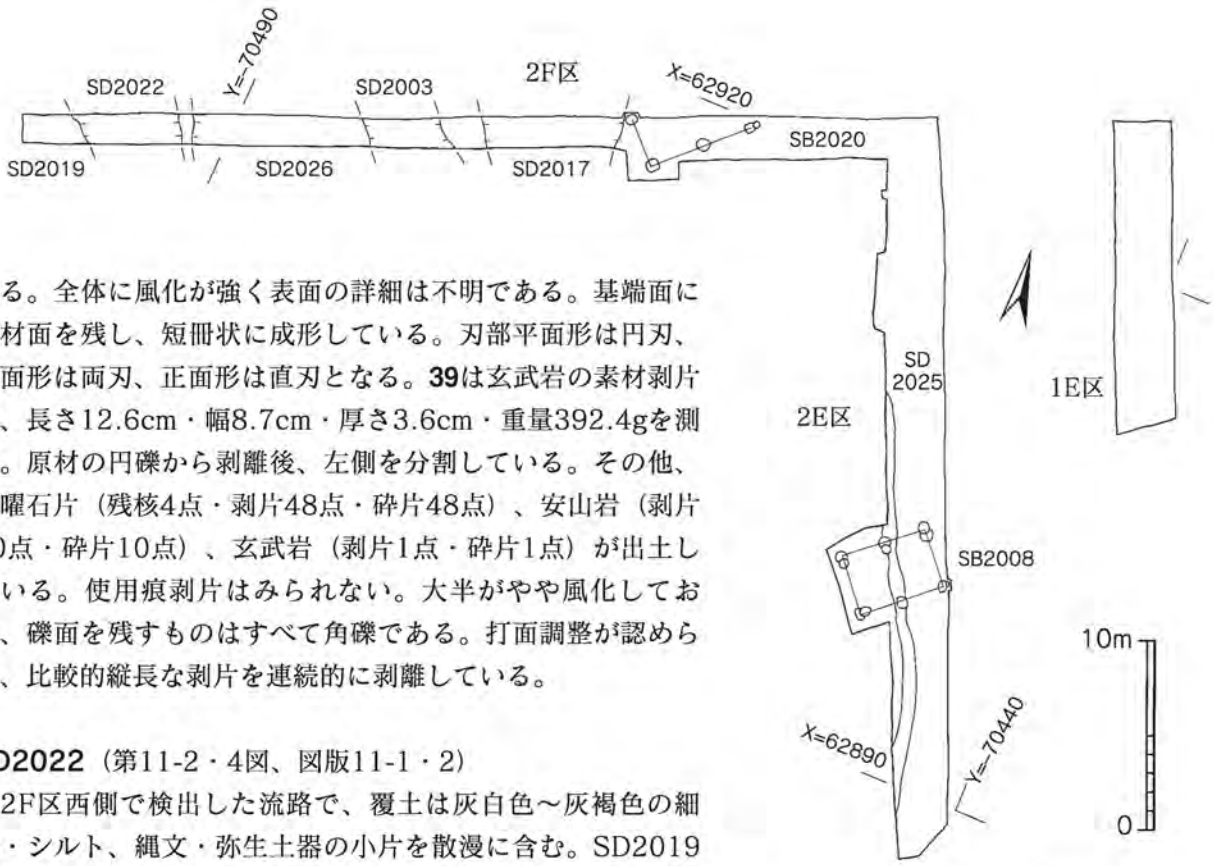
河成堆積層・流路

SD2019（第11-2・4図、図版11-1・2）

2F区西端で検出した河成堆積層である。覆土は砂質が強く炭を含む灰褐色粘土層で、上部15cmほどに遺物が集中する。東側でSD2022に切られており、時期は縄文時代晩期（黒川式新段階）である。

SD2019出土遺物（第11-6・7図、図版11-3・4）

1～6・8は浅鉢、**7・9**は鉢、**10～17**は深鉢で、黒川式でも夜臼式に近い特徴をもつ。浅鉢・鉢は、細砂の少ない胎土のものもあり、ミガキ調整を主体とする。深鉢は、細砂を多く含む胎土で、横位の貝殻条痕後ヨコナデで仕上げている。**1・2**は同一個体の可能性が高い浅鉢口縁部で、胎土は細砂を多く含み、色調は内面が黒色、外面がにぶい黄橙色を呈す。御領～黒川式の特徴をもつ。**3**は浅鉢頸部で、胎土は細砂を含み、色調は黒色を呈す。**4**は浅鉢頸部で、胎土は細砂を少なく含む精選土で、色調は橙色を呈す。**5**は浅鉢頸部で、胎土は細砂を少なく含み緻密、色調は内面がにぶい褐色、外面が橙色を呈す。**6**は浅鉢頸部で、胎土は細砂を多く含み、色調は内面が暗灰黄色、外面がにぶい橙色を呈す。**7**は鉢口縁部で、胎土は細砂を少なく含む精選土で、色調は内面が黒色、外面が橙色を呈す。**8**は浅鉢口縁部で、胎土は細砂を少なく含む精選土で、色調はにぶい橙色を呈す。**9**は鉢口縁部で、胎土は細砂を少なく含む精選土で、色調はにぶい黄橙色を呈す。**10**は深鉢口縁部で、胎土は細砂を多く含み、色調は灰褐色を呈す。**11**は深鉢口縁部で、胎土は細砂を多く含み、色調は内面が黒色、外面がにぶい黄橙色を呈す。**12**は深鉢口縁部で、胎土は細砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**13**は、深鉢口縁部で、胎土は細砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**14**は深鉢口縁部で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色～黒色を呈す。**15**は深鉢胴部で、胎土は細砂を多く含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈す。**16**は深鉢底部で、1/6が残存し、復元底径8.6cmを測る。底部成形は円盤貼り付けで、外側に張り出す。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**17**は深鉢底部で、1/3が残存し、復元底径9cmを測る。底部成形は円盤貼り付けで、高台状をなす。胎土は細～粗砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**32**は安山岩製の打製石鏃で、長さ2.35cm・幅1.45cm・厚さ0.2cm・重量0.7gを測る。**33**は安山岩製の打製石鏃で、長さ3.1cm・幅1.9cm・厚さ0.5cm・重量2.1gを測る。平面形は五角形を呈す。**34**は黒色黒曜石製の打製石鏃未成品で、長さ2.8cm・幅2.45cm・厚さ0.9cm・重量4.8gを測る。前面右側に礫面を残している。**35**は安山岩製の打製石槍で、基部は破損しており、残存長3.9cm・幅1.4cm・厚さ0.85cm・残存重量7.5gを測る。右側辺に製作時に形成されたと考えられる潰れ痕が認められる。**36**は安山岩製の打製石槍で基部が破損しており、残存長4cm・幅2.15cm・厚さ0.6cm・残存重量3.8gを測る。**37**は安山岩製の打製石槍の基部片で、残存長2.5cm・残存幅1.9cm・厚さ0.4g・残存重量1.4gを測る。36と同質で、接合はしないが同一個体であった可能性が高い。破断部分は再加工されており、石鏃への転用も指向されている。**38**は玄武岩製の打製石斧で、長さ11.7cm・刃部幅5.96cm・基部厚1.25cm・重量153.7gを



第11-1図　周船寺遺跡第19次調査
遺構配置図（S=1/400）

測る。全体に風化が強く表面の詳細は不明である。基端面に素材面を残し、短冊状に成形している。刃部平面形は円刃、断面形は両刃、正面形は直刃となる。**39**は玄武岩の素材剥片で、長さ12.6cm・幅8.7cm・厚さ3.6cm・重量392.4gを測る。原材の円礫から剥離後、左側を分割している。その他、黒曜石片（残核4点・剥片48点・砕片48点）、安山岩（剥片10点・砕片10点）、玄武岩（剥片1点・砕片1点）が出土している。使用痕剥片はみられない。大半がやや風化しており、礫面を残すものはすべて角礫である。打面調整が認められ、比較的縦長な剥片を連続的に剥離している。

SD2022（第11-2・4図、図版11-1・2）

2F区西側で検出した流路で、覆土は灰白色～灰褐色の細砂・シルト、縄文・弥生土器の小片を散漫に含む。SD2019を切っており、時期は弥生時代早期～前期と考える。

SD2022出土遺物（第11-6図、図版11-3）

18は夜臼式の鉢口縁部で、胎土は細砂を多く含み、色調は黒褐色を呈す。内外面ともに横位の貝殻条痕後ヨコナデで、口縁上端外面に突帯を貼り付ける。その他黒曜石片が少量出土している。

SD2017（第11-2・4図、図版11-1・2）

２Ｆ区中央で検出した河成堆積層である。覆土は灰褐色中砂・亜円礫の互層で、遺物を散漫に含む。時期は弥生時代前期である。

SD2017出土遺物（第11-6図、図版11-3）

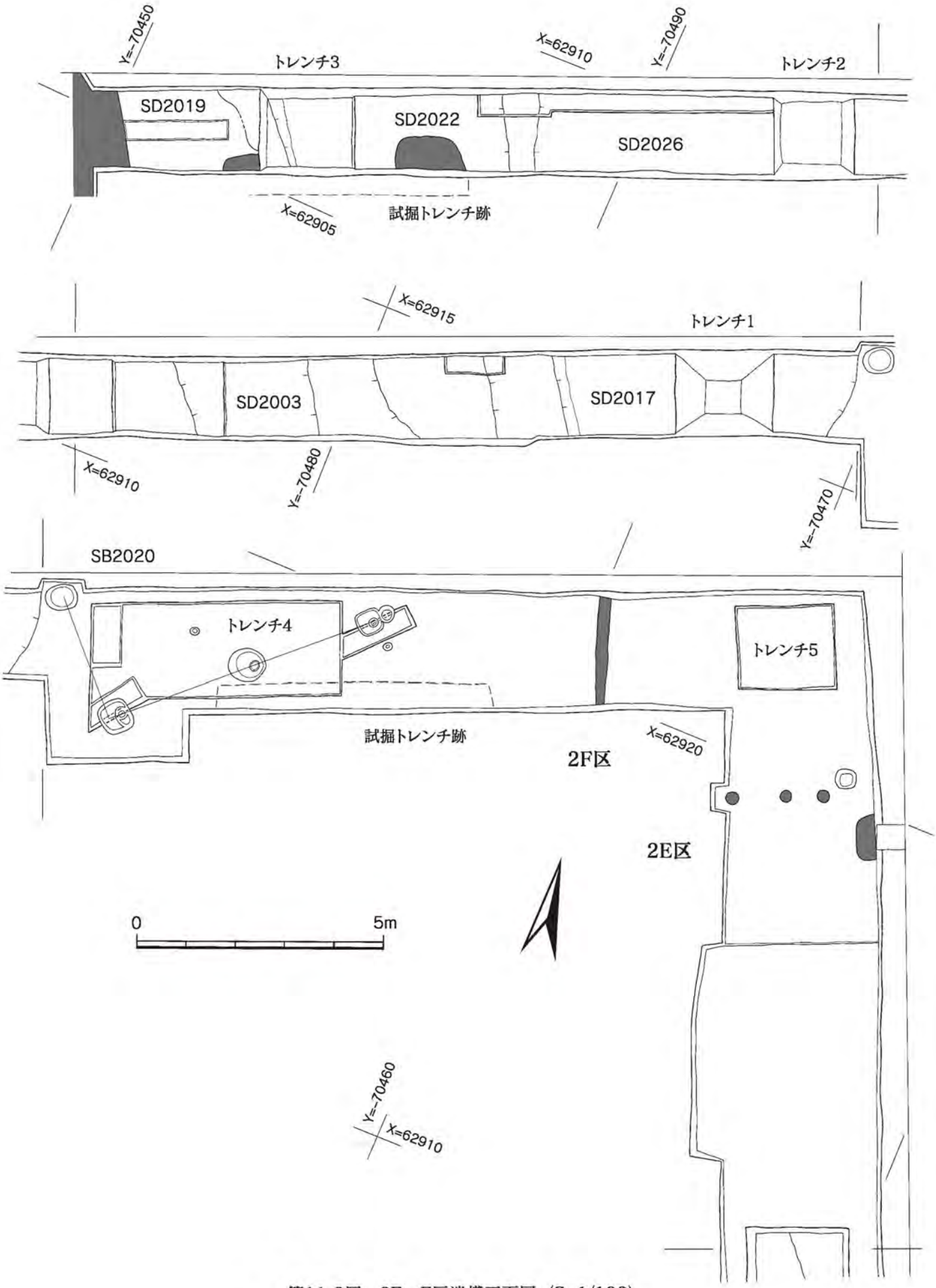
19は黒川式の浅鉢頸部で、胎土は細砂を多く含み、色調はにぶい褐色を呈す。**20**は鉢口縁部で、胎土は細砂を多く含み、色調はにぶい黄褐色を呈す。上端部に貼り付けられた粘土帯は上方への伸びが意識されている。黒川式～夜臼式の特徴をもつ。**21**は板付式の甕胴部で、胎土は細砂を多く含み、色調は内面が黒色、外面がにぶい橙色を呈す。その他、黒曜石の使用痕剥片が１点出土している。切子打面の円形剥片で掻器・切削器様の微細剥離が認められる。

SD2026（第11-2・4図、図版11-1・2）

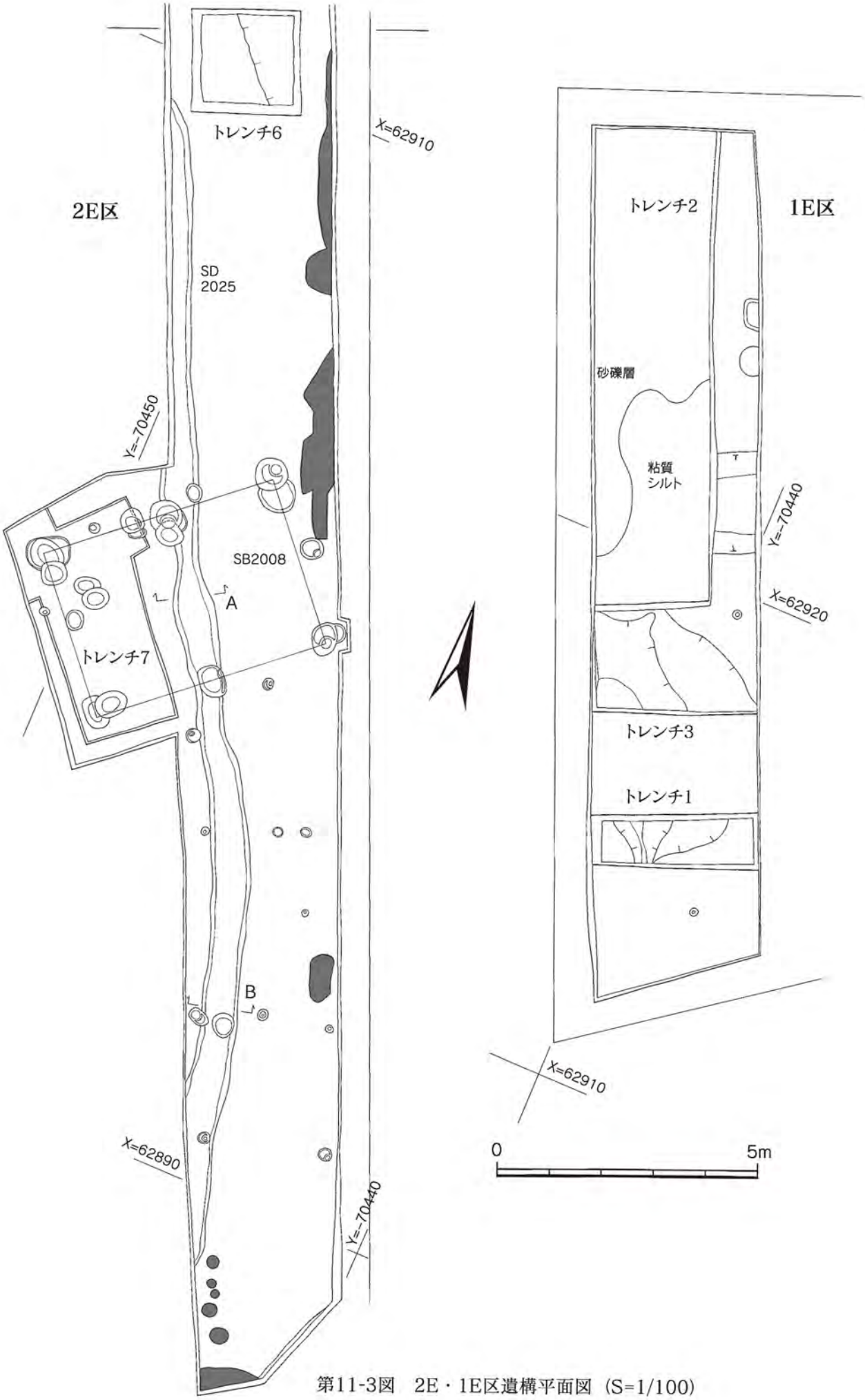
２Ｆ区中央で検出した河成堆積層である。覆土は、下層から灰褐色シルト・暗灰色粘質シルト・中砂と砂礫・灰褐色細砂の順で堆積する。弥生時代中期の土器が少量・小片で出土する。

SD2003（第11-2・4図、図版11-1・2）

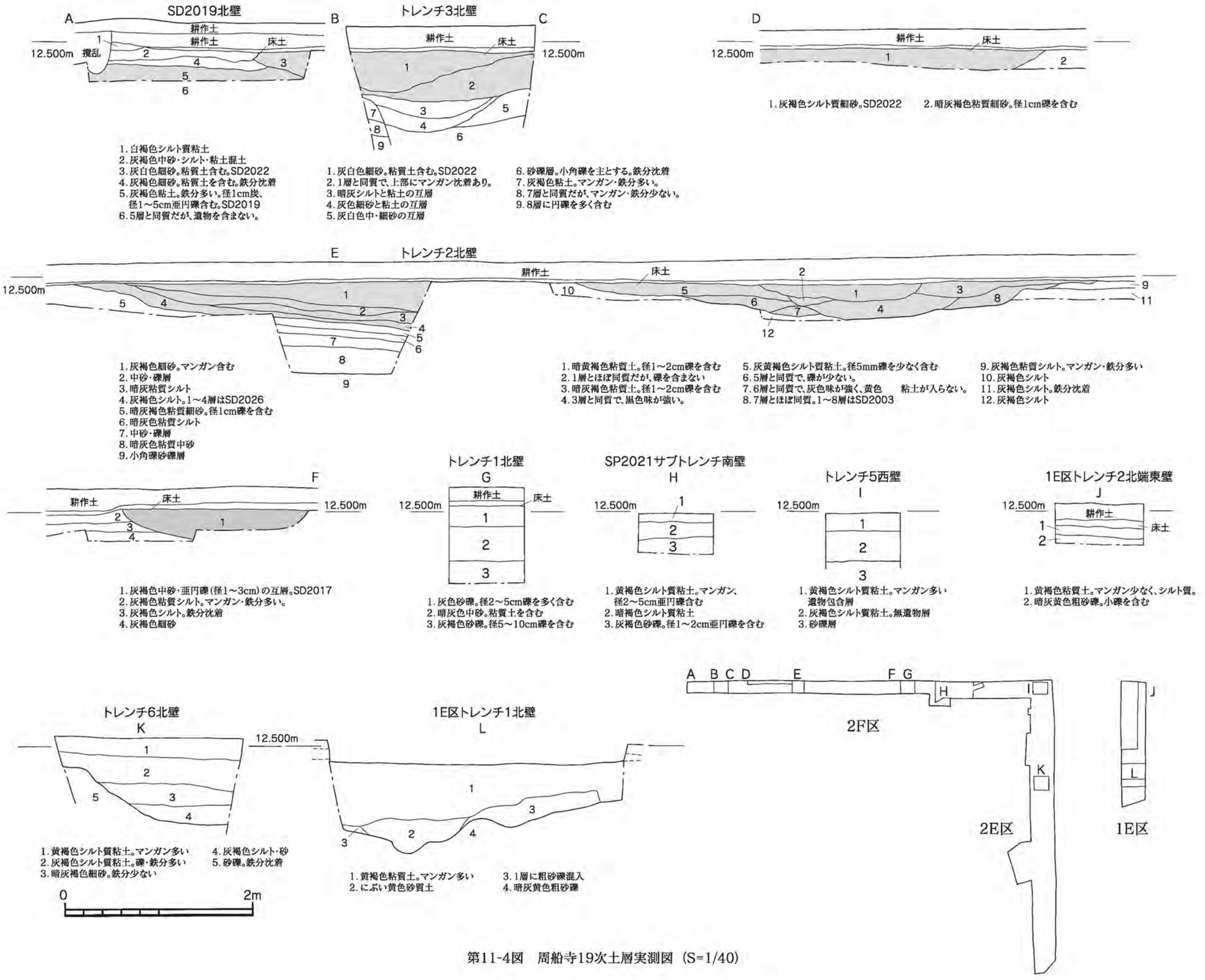
２Ｆ区中央で検出した流路である。覆土は暗黄褐色、暗灰褐色、灰黄褐色の粘質土で砂礫を含む。



第11-2図　2E・F区遺構平面図（S=1/100）



第11-3図　2E・1E区遺構平面図（S=1/100）



第11-4図　周船寺19次土層実測図（S=1/40）

遺物は小片・少量であるが、時期は弥生時代中期前半である。

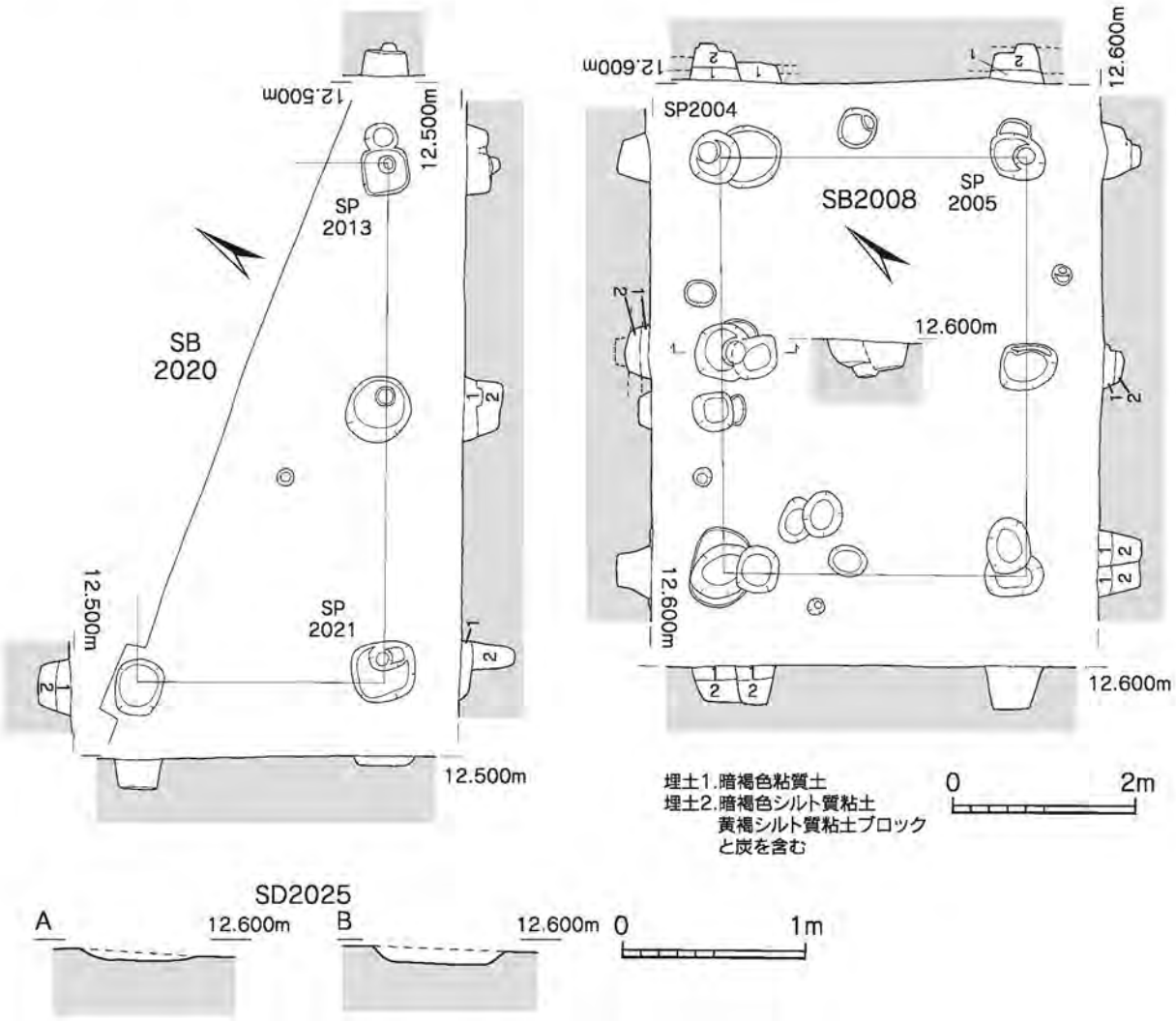
SD2003出土遺物（第11-6・7図、図版11-4）

22～**25**は須玖Ⅰ式土器で、胎土は細～粗砂を多く含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈す。**22**は鉢口縁部、**23**は甕口縁部である。**24**は甕底部で、1/2が残存し、復元底径7.4cmを測る。色調は内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈す。**25**は器台で、下部の1/5が残存し、復元下部径10.4cmを測る。**40**は黒色良質黒曜石製の打製石鏃で、長さ3cm・幅2.05cm・厚さ0.55cm・重量2.6gを測る。後面に礫面がわずかに残っている。この他、黒色良質黒曜石の石核・残核・剥片・砕片が出土している。使用痕剥片は認められず、すべて角礫で、剥片・石核の最大長は3cmを超えない。

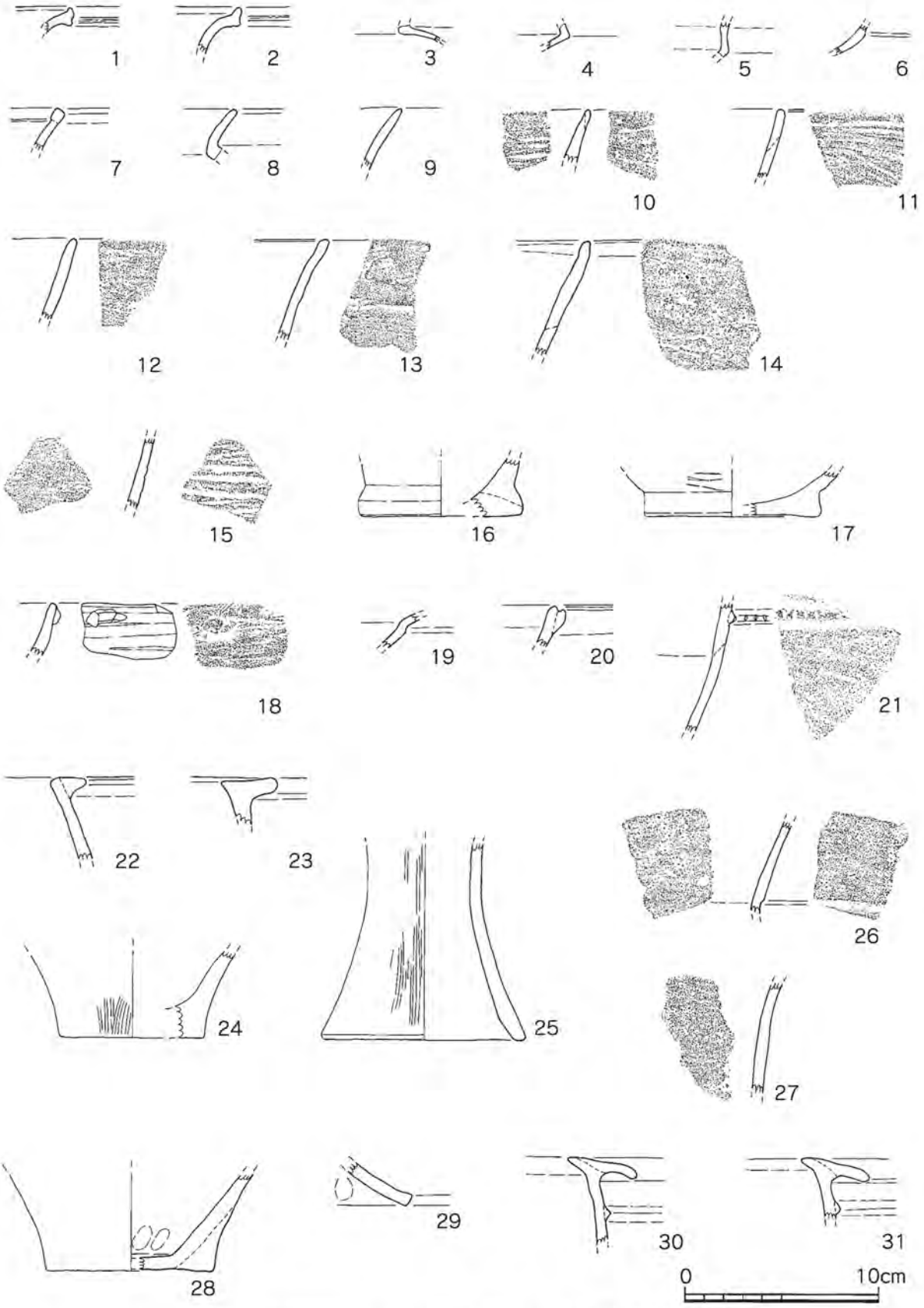
1．弥生時代中期

掘立柱建物　SB2020（第11-2・5図、図版11-1）

2F区東側で検出した建物である。西側で1間、南側で2間を確認しているが北側は未掘で、規模や桁行軸は不明である。柱間寸法は2.6～2.9cm、柱穴径は50～70cm、柱穴の深さは36～60cmである。柱痕跡は確認できないが、底面で柱の当たりが3カ所で認められる。柱穴埋土は、下層：黄褐色シルト質粘土（地山）ブロックと炭を含む暗褐色シルト質粘土、上層：暗褐色粘質土となる。

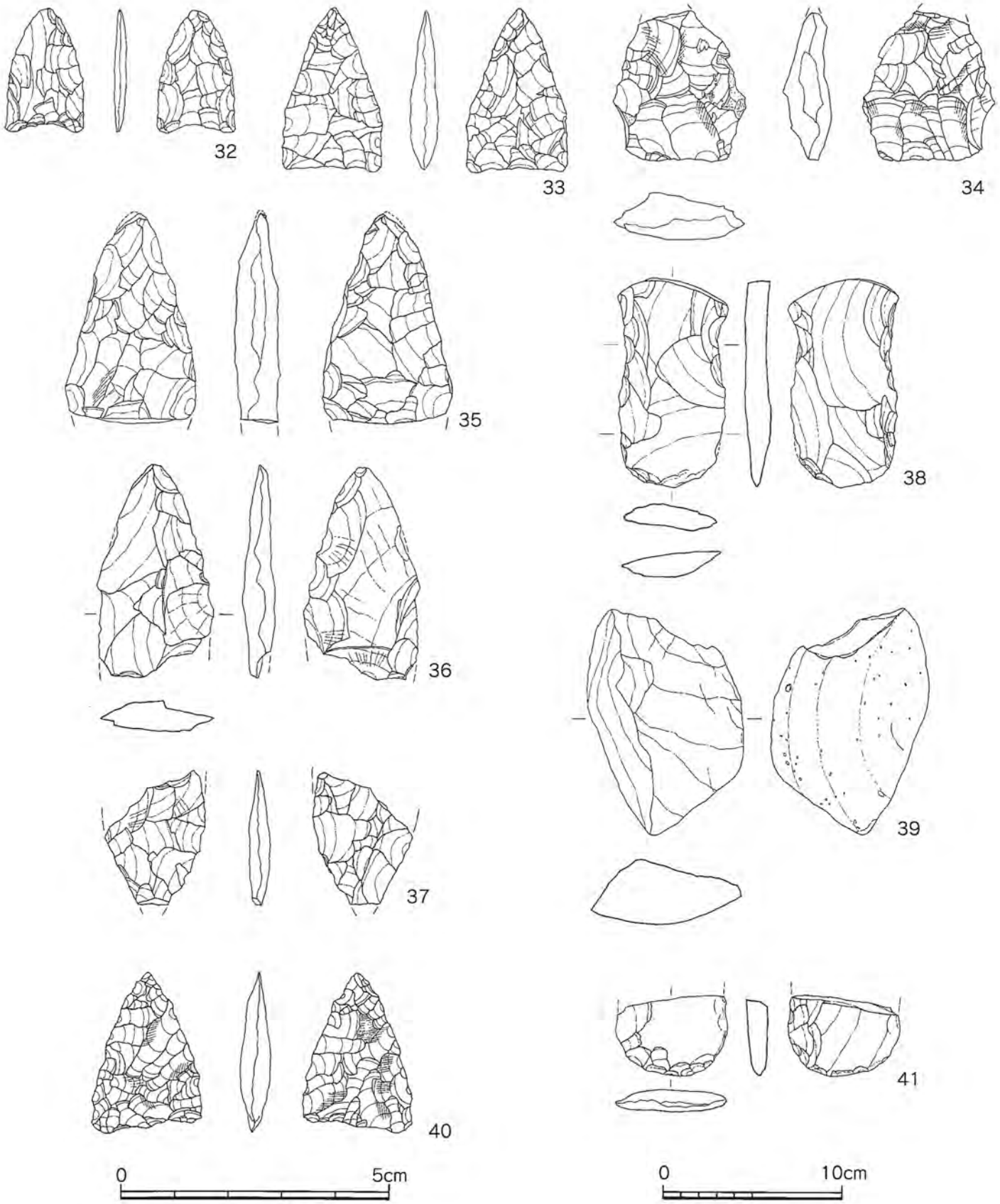


第11-5図　周船寺19次 SB・SD実測図（SBはS=1/80、SDはS=1/40）



1～17 SD2019　18 SD2022　19～21 SD2017　22～25 SD2003
26 SB2020検出面　27 SP2021サブトレンチ　28 SP2013　29 SP2004　30·31 SP2005

第11-6図　周船寺19次出土土器実測図（S=1/3）



32～39 SD2019　40 SD2003　41 SD2025

第11-7図　周船寺19次出土石器実測図（38・39・41はS＝1/3、他はS=1/1）

SB2020出土遺物（第11-6図、図版11-4）

28はSP2013出土の須玖式の甕底部で、1/4が残存し、復元底径8.6cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。その他柱穴から、少量の弥生土器・縄文土器・黒曜石片が出土している。

SB2008（第11-3・5図、図版11-1）

2E区中央で検出した北東軸の建物である。2×1間（4.6×3.3m）で、柱間寸法は桁行で2.2m、梁行で3.3mである。側柱穴間のピットは間柱の可能性もある。柱穴径は48～64cm、柱穴の深さは20～48cmである。柱痕跡は確認できないが、3つの柱穴の底面で柱の当たりが認められた。柱穴埋土は、下層：黄褐色シルト質粘土（地山）ブロックと炭を含む暗褐色シルト質粘土、上層：暗褐色粘質土である。側柱穴を切っているピットは柱抜取穴と考える。SP2004については、切り合いが逆で南東のピットが柱抜取穴であった可能性もある。時期は弥生時代中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

SB2020出土遺物（第11-6図、図版11-4）

29はSP2004出土の蓋裾部片で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**30**・**31**は、SP2005出土の甕口縁部で、同一個体の可能性が高い。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。須玖Ⅱ式古段階の土器である。その他の柱穴から弥生土器・黒曜石片が出土している。

溝　SD2025（第11-3・5図、図版11-1）

2E区西端で検出した南北方向の溝である。南北端でわずかに西へ曲がっており、幅50～70cm、断面形は逆台形で深さ4～8cmを測る。埋土は上層：灰白色細・中砂、下層：灰白色粗砂・小礫である。SB2008に切られているため、時期は弥生時代前期～中期後半と考えたい。

SD2025出土遺物（第11-7図、図版11-4）

41は玄武岩製の打製石斧刃部片で、残存長4.5cm・幅6.2cm・厚さ1.2cm・残存重量46gを測る。横長剥片を素材として、刃部平面形は円刃、断面形は両刃、正面形は直刃である。刃端部右側に微細剥離と摩滅が集中している。

遺構検出面出土遺物（第11-6図、図版11-3）

26はSB2020検出面から出土した黒川式の深鉢口縁部で、胎土は細～中砂を多く含み、色調は内面が黄褐色、外面がにぶい褐色を呈す。内外面ともに横位の貝殻条痕後ヨコナデで仕上げている。**27**はSP2021サブトレンチの砂礫層から出土した御領式～黒川式の深鉢頸部で、胎土は細砂を多く含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい褐色を呈す。内面は横位の貝殻条痕後ヨコナデ、外面は縦位の貝殻条痕後丁寧なヨコナデで仕上げている。その他、黒曜石・安山岩片が少量出土している。黒曜石剥片は打面調整が認められるものもあり、縦長剥片作出の指向性も窺える。

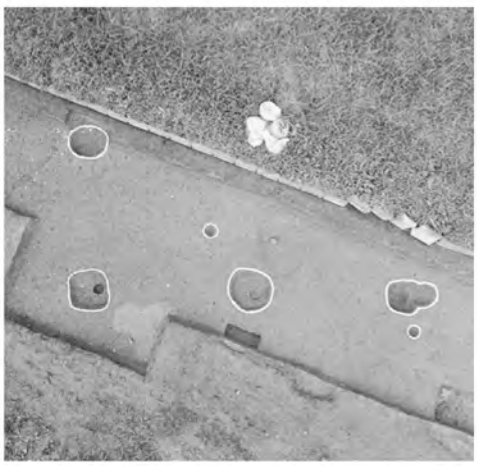
第3節　小結

調査区西側では、縄文時代晩期後半（黒川式新段階）に形成された河成堆積層上に弥生時代早期～中期前半（夜臼式～須玖Ⅰ式）の遺物を含む複数の流路が確認された。東側の微高地は、縄文時代晩期（黒川式）の遺物を含む包含層にもなっており、地盤が安定して溝や掘立柱建物が形成されるのは弥生時代中期後半（須玖Ⅱ式古段階）からである。中期後半の居住域は、北側で行われた周船寺遺跡第6次調査と本報告内の千里遺跡第1次調査1・2区で確認された居住域と連続的に捉えられる。北西方向に延びる狭い微高地上に掘立柱建物が並んだ当時の景観が復元できそうである。

1．周船寺遺跡第19次調査全景（南から）

2．SD2025=（南から）

3．SB2008（南から）



4．SB2020（南から）

5．SD2019遺物出土（南から）

図版11-2

6. トレンチ3西壁土層

7. トレンチ3北壁土層

8. トレンチ2北壁土層

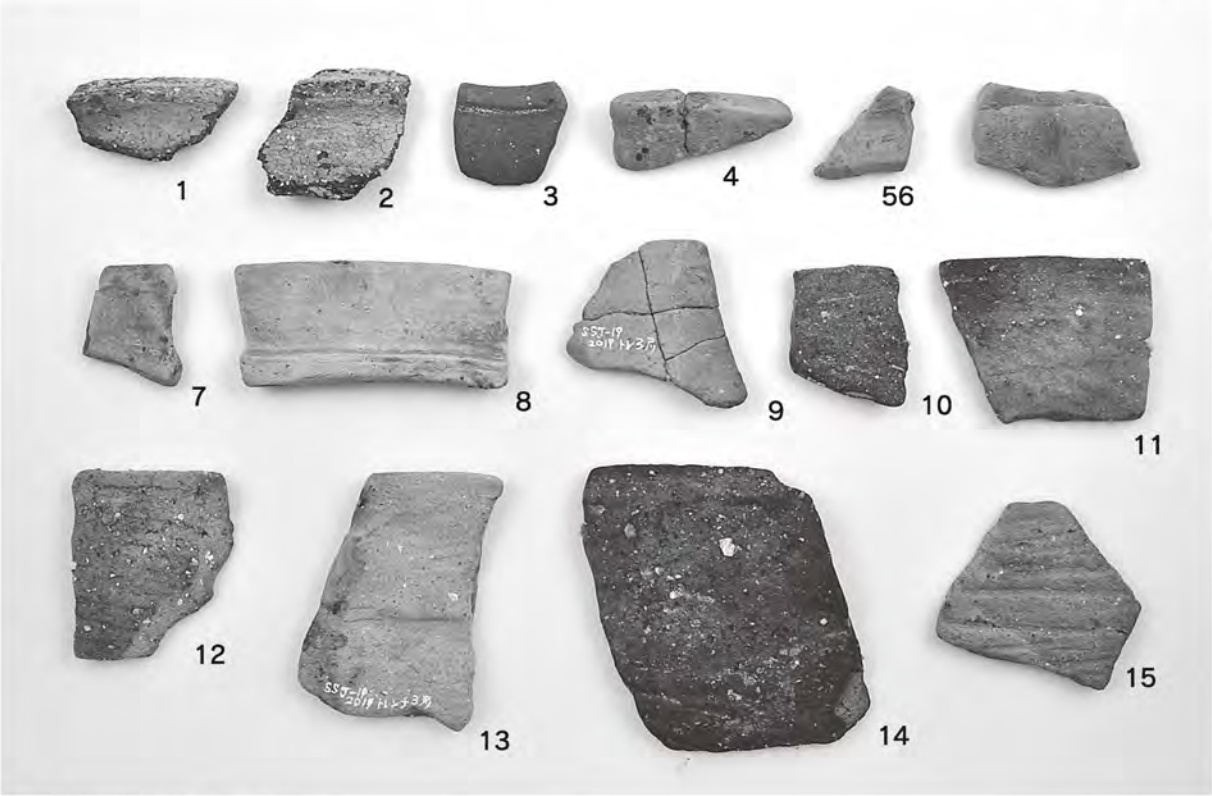
9. トレンチ2（南西から）

10. 2F区北壁土層E～F

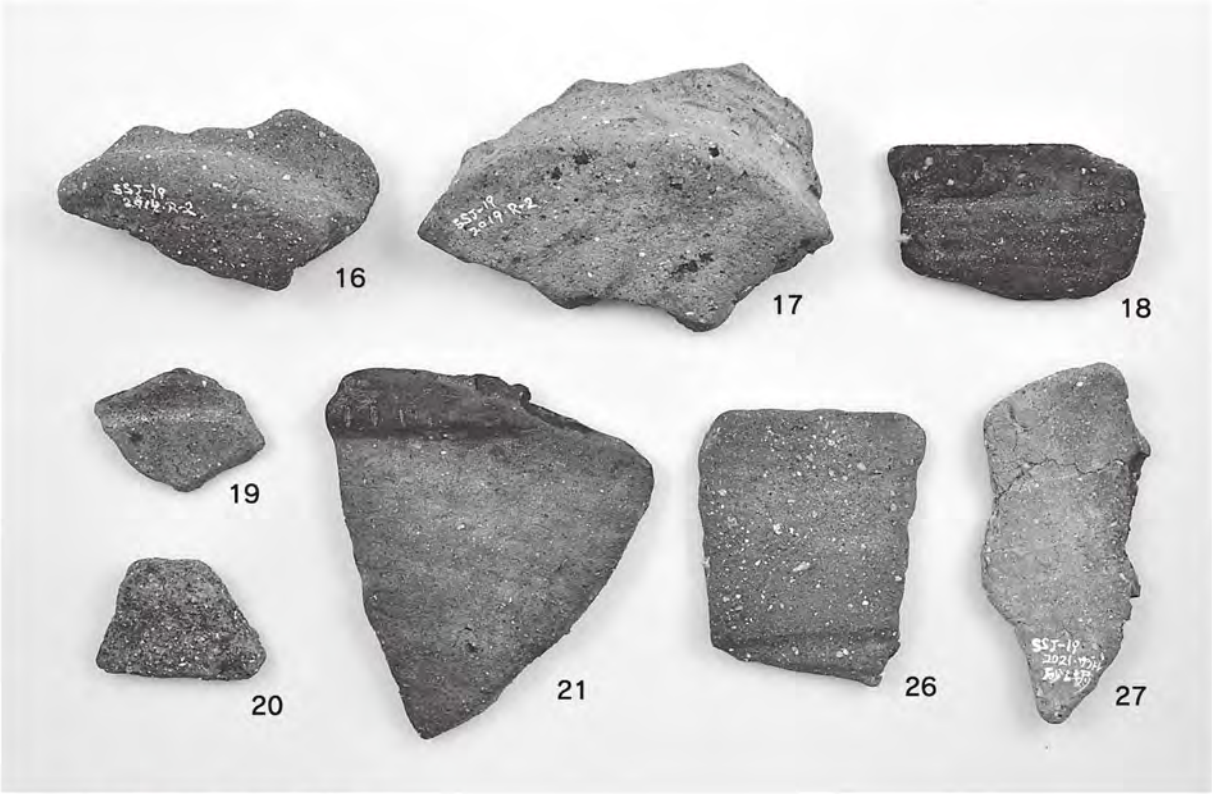
11. トレンチ5（北から）

12. トレンチ6北壁土層

13. 1E区トレンチ1北壁土層

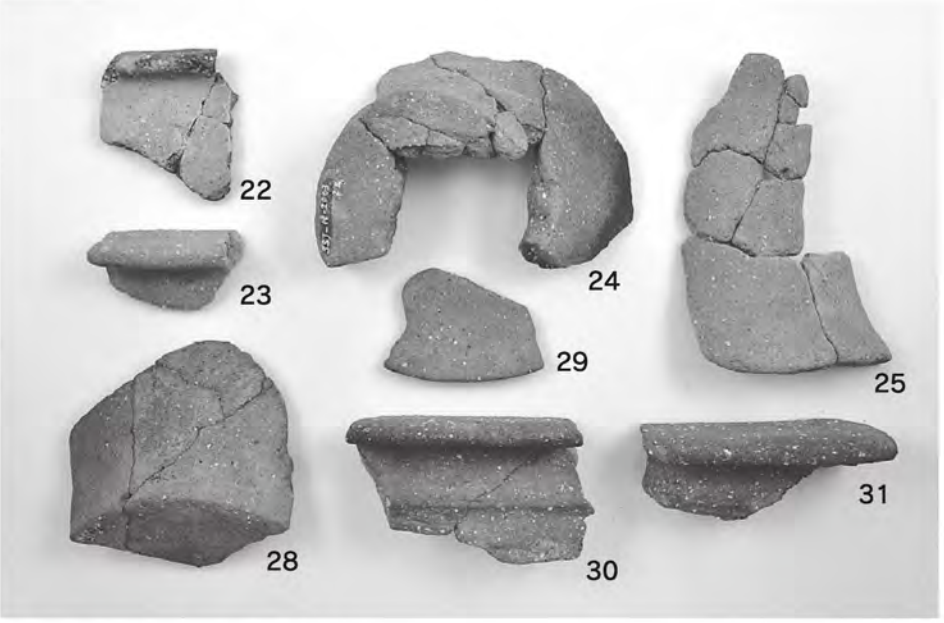


14. SD2019出土土器

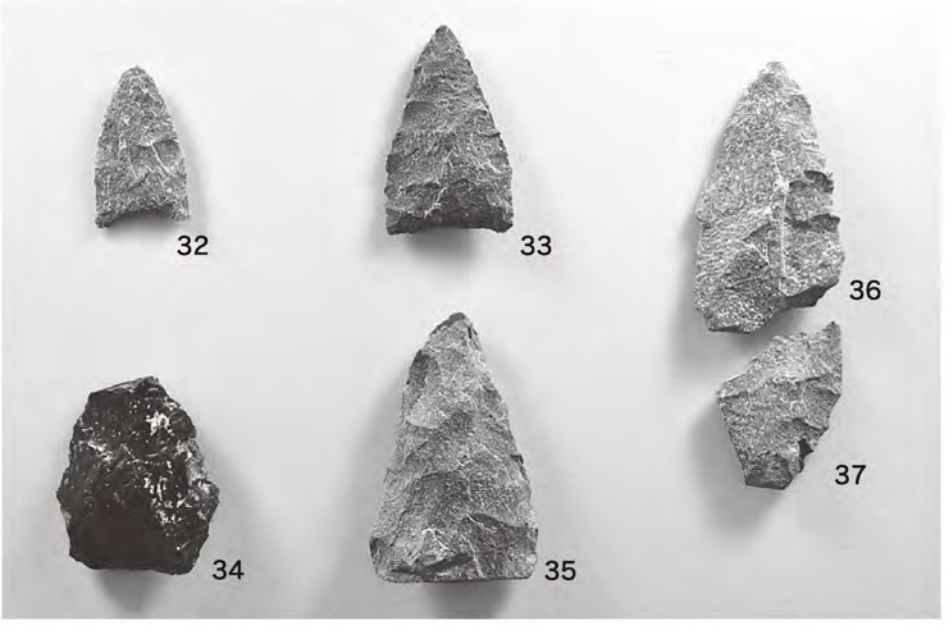


15. SD・遺構検出面出土土器

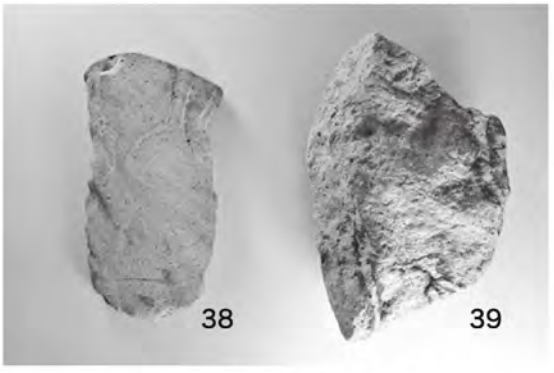
図版11-4



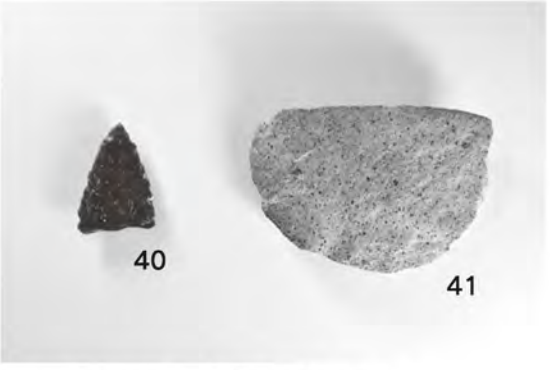
16. SD2003・SP出土土器



17. SD2019出土石鏃・石槍



18. SD2019出土打製石斧・玄武岩片



19. SD2003・SD2025出土石器

第XII章　自然科学分析

第1節　放射性炭素年代測定、樹種・種実同定、土壌分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、縄文時代晩期以前～古墳時代前期頃の試料を対象に、その年代観や古環境、植物資源利用などに関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、樹種同定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実遺体分析を実施する。

1．試料

木質試料は、3A区SK3026より検出された倒木(試料番号1)と、4D区トレンチ3より検出された木片(試料番号2)の計2点である。これら2点について、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。

土壌試料は、3A区SK3026の第10層より採取された1試料(試料番号3)、縄文時代晩期以前に比定される2F区SD2019の1層～3層より採取された3試料(試料番号4～6)の計4点である。これら4点について珪藻分析・花粉分析を、2F区SD2019の3点について植物珪酸体分析を実施する。

種実試料は、1A区SK1792、SC1826、SC1990、3A区SK3026、4E区SX4022の各層より出土した種実遺体9試料(試料番号7～15)であり、各試料には複数の種実遺体が含まれている。これら9試料について種実遺体分析を実施する。

2．分析方法

(1)放射性炭素年代測定

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。

なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

(2)樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称と特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(3)珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法(4時間放置)の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。 検鏡は、光学顕微

鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)、渡辺ほか(2005)、小林ほか(2006)などを参照し、分類基準はRound et al.(1990)に、壊れた珪藻殻の計数基準は柳沢(2000)に従う。

同定結果は、中心類(Centric diatoms;広義のコアミケイソウ綱Coscinodiscophyceae)と羽状類(Pennate diatoms)に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類(Araphid pennate diatoms:広義のオビケイソウ綱Fragilariophyceae)と有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms;広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae)に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & deWolf(1993)を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe(1974)に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。堆積環境の解析にあたり、淡水生種(貧塩性種)については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については渡辺ほか(2005)の環境指標種を参考とする。

(4)花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛，比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の散布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(5)植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、植物珪酸体含量を図示する。

(6)種実遺体分析

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実を抽出する。抽出された種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種実遺体を種類毎に容器に移し、70%

程度のエタノール溶液を入れて保管する。

3. 分析結果

(1)放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第12-1表に、暦年較正結果を第12-2表に示す。3A区のSK3026出土倒木は3,555±20BP、4D区のトレンチ3黒色土出土木材は4,310±20BPを示す。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差をσとして計算させた結果、SK3026出土倒木はcalBC 1,932-1,884、トレンチ3の黒色土出土木材はcalBC 2,916-2,898である。

第12-1表　放射性炭素年代測定結果・樹種同定結果

番号	区	遺構	層	内容	樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	Code No.
1	3A	SK3026		倒木	タブノキ属	3,555± 20	-26.53±0.15	PLD-16295
2	4D	トレンチ3	黒色土	木片	ムクノキ	4,310± 20	-27.19±0.15	PLD-16296

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第12-2表　暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
SK3026	3,555± 20	σ	cal BC 1,932 - cal BC 1,884	cal BP 3,881 - 3,833	1.000	PLD-16295
		2σ	cal BC 1,955 - cal BC 1,875	cal BP 3,904 - 3,824	0.882	
			cal BC 1,843 - cal BC 1,817	cal BP 3,792 - 3,766	0.076	
			cal BC 1,798 - cal BC 1,779	cal BP 3,747 - 3,728	0.042	
トレンチ3 黒色土	4,308± 21	σ	cal BC 2,916 - cal BC 2,898	cal BP 4,865 - 4,847	1.000	PLD-16296
		2σ	cal BC 3,008 - cal BC 2,987	cal BP 4,957 - 4,936	0.047	
			cal BC 2,934 - cal BC 2,887	cal BP 4,883 - 4,836	0.953	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2)樹種同定

結果を第12-1表に合わせて示す。3A区SK3026の倒木は常緑広葉樹のタブノキ属、4D区トレンチ3黒色土の木片は落葉広葉樹のムクノキに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・ムクノキ(*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon)　ニレ科ムクノキ属

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲

状およびターミナル状。

・タブノキ属(*Persea*)　クスノキ科

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2-3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔(稀に階段穿孔)を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は上下縁辺部が方形細胞となる異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。

(3)珪藻分析

結果を第12-3表に示す。珪藻化石の産状は、3A区SK3026の第10層(試料番号3)からは極少なく、

第12-3表　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境指標種	3A SK3026 第10層	2F SD2019採土		
	塩分	pH	流水		3	1層 4	2層 5	3層 6
Bacillariophyta(珪藻植物門)								
Araphid Pennate Diatoms(無縦溝羽状珪藻類)								
Meridion constrictum Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	1	–	–	–
Ulnaria ulna (Nitzsch)Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	–	–	–
Ulnaria spp.					6	–	–	–
Raphid Pennate Diatoms(有縦溝羽状珪藻類)								
Monoraphid Pennate Diatoms(単縦溝羽状珪藻類)								
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	T	1	–	–	–
Biraphid Pennate Diatoms(双縦溝羽状珪藻類)								
Amphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	–	–	–
Cymbella tumida (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	–	–	–
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		6	–	–	–
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	–	–	–
Craticula spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	1	–	–
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		5	–	–	–
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	2	–	–	–
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		1	–	–	–
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	–	–	–
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	–	–	–
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		9	–	–	1
Sellaphora americana (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		2	–	–	–
Sellaphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	–	–	–
管縦溝類								
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	–	–	–
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	1	–	–	–
短縦溝類								
Eunotia biseriatoides H.Kobayasi,K.Ando & T.Nagumo	Ogh-ind	ind	ind	T	1	–	–	–
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	–	–	–
海水生種					0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0
淡水～汽水生種					1	0	0	0
淡水生種					47	1	0	1
珪藻化石総数					48	1	0	1

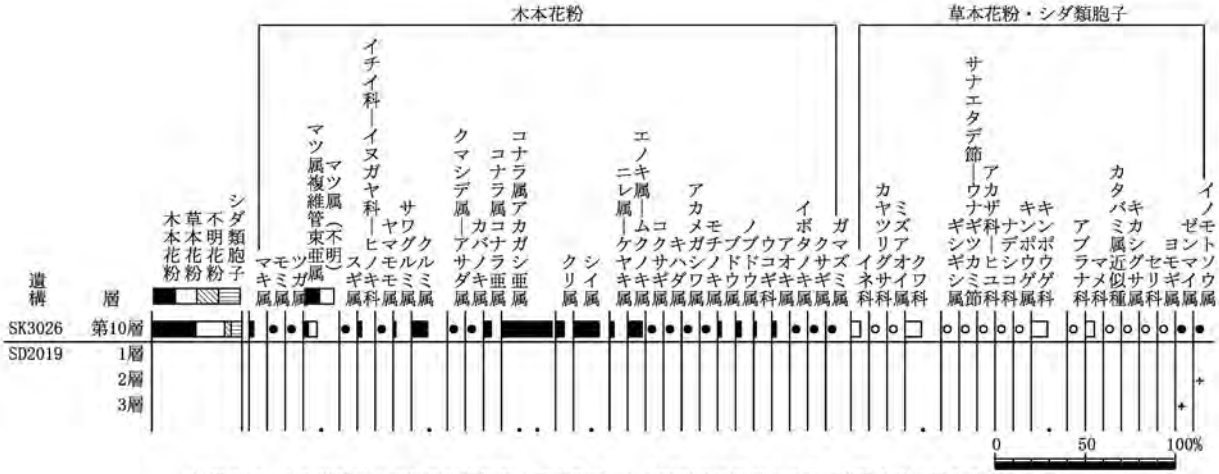
凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
Ogh-Meh　:淡水ー汽水生種
Ogh-ind　:貧塩不定性種
Ogh-hob　:貧塩嫌塩性種
Ogh-unk　:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
al-il　:好アルカリ性種
ind　:pH 不定性種
ac-il　:好酸性種
unk　:pH 不明種

C.R.:流水に対する適応性
l-bi　:真止水性種
l-ph　:好止水性種
ind　:流水不定性種
r-ph　:好流水性種
r-bi　:真流水性種
unk　:流水不明種

環境指標種群
K:中～下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種(以上は安藤,1990)
S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(以上はAsai & Watanabe,1995)
R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内,1991)



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第12-1図　花粉化石群集

縄文時代晩期以前に比定される2F区SD2019の1層～3層(試料番号4～6)からはほとんど産出しない、あるいは無化石である。なお、少量ながら産出する珪藻化石の保存状態は悪く、ほとんどが壊れていた。

3A区SK3026の第10層から産出した種類をみると、流水域に生息する*Meridion constrictum*、湿地や沼沢地などに生息する*Pinnularia rupestris*、止水域に生息する*Sellaphora americana*、流水にも止水にも生息する*Ulnaria ulna*、*Cymbella tumida*、陸上のコケや土壌表面など湿り気のある好気的環境に生息する*Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys*などが認められる。

(4)花粉分析

結果を第12-4表、第12-1図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

3A区SK3026の第10層は、花粉化石が豊富に産出し、保存状態も比較的良好である。木本花粉についてみると、コナラ属アカガシ亜属が最も多く産出し、シイ属、クルミ属、エノキ属－ムクノキ属もやや多く認められる。その他では、マキ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、ニレ属－ケヤキ属、ノブドウ属、アオキ属等を伴う。

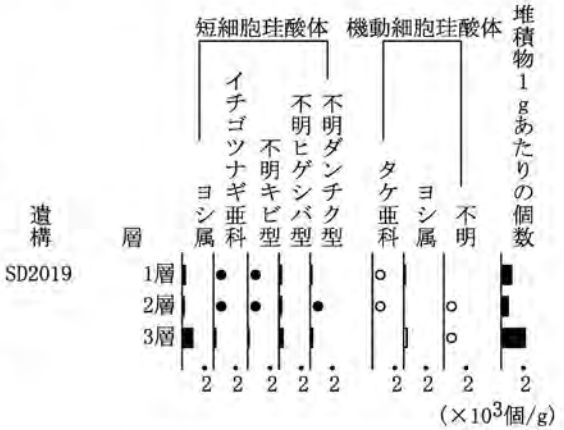
草本花粉ではイネ科、クワ科、キンポウゲ科、マメ科が比較的多く産出し、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属等を伴う。

2F区のSD2019の1層～3層からは、花粉化石は1個体も検出されず、ゼンマイ属、イノモトソウ属といったシダ類胞子が、わずかに認められる。

(5)植物珪酸体分析

結果を第12-5表、第12-2図に示す。2F区のSD2019の1層～3層のいずれからも植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

1層～3層で検出される分類群は少なく、ヨシ属、



堆積物1ｇあたりに換算した個数を示す。
●○は100個/g 未満を示す。

第12-2図　植物珪酸体含量

第12-4表　花粉分析結果

種　類	3A区 SK3026 第10層	2F区 SD2019採土 1層	2層	3層
	3	4	5	6
木本花粉				
マキ属	5	-	-	-
モミ属	2	-	-	-
ツガ属	1	-	-	-
マツ属複維管束亜属	6	-	-	-
マツ属（不明）	10	-	-	-
スギ属	1	-	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	5	-	-	-
ヤマモモ属	1	-	-	-
サワグルミ属	3	-	-	-
クルミ属	19	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	1	-	-	-
カバノキ属	1	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	9	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	59	-	-	-
クリ属	10	-	-	-
シイ属	30	-	-	-
ニレ属－ケヤキ属	5	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	17	-	-	-
コクサギ属	1	-	-	-
キハダ属	1	-	-	-
アカメガシワ属	1	-	-	-
モチノキ属	1	-	-	-
ブドウ属	4	-	-	-
ノブドウ属	6	-	-	-
ウコギ科	3	-	-	-
アオキ属	5	-	-	-
イボタノキ属	1	-	-	-
クサギ属	1	-	-	-
ガマズミ属	1	-	-	-
草本花粉				
イネ科	21	-	-	-
カヤツリグサ科	4	-	-	-
ミズアオイ属	1	-	-	-
クワ科	36	-	-	-
ギシギシ属	3	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	4	-	-	-
ナデシコ科	2	-	-	-
キンポウゲ属	1	-	-	-
キンポウゲ科	36	-	-	-
アブラナ科	1	-	-	-
マメ科	20	-	-	-
カタバミ属近似種	3	-	-	-
キカシグサ属	1	-	-	-
セリ科	1	-	-	-
ヨモギ属	4	-	-	-
不明花粉	30	-	-	-
シダ類胞子				
ゼンマイ属	1	-	-	1
イノモトソウ属	2	-	1	-
他のシダ類胞子	49	3	3	1
合　計				
木本花粉	210	0	0	0
草本花粉	139	0	0	0
不明花粉	30	0	0	0
シダ類胞子	52	3	4	2
総計（不明を除く）	401	3	4	2

第12-5表　植物珪酸体含量

(個/g)

種　類	2F区 SD2019採土 1層	2層	3層
	4	5	6
イネ科葉部短細胞珪酸体			
ヨシ属	300	200	1,000
イチゴツナギ亜科	<100	<100	200
不明キビ型	<100	<100	100
不明ヒゲシバ型	200	200	400
不明ダンチク型	100	<100	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケ亜科	<100	<100	-
ヨシ属	100	-	300
不明	-	<100	<100
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	800	500	1,800
イネ科葉身機動細胞珪酸体	200	100	300
総　計	1,000	600	2,100

1)含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。
2)合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。
3)<100：100個/g未満。

タケ亜科、イチゴツナギ亜科などである。また、植物珪酸体含量は、1層で約1,000個/g、2層で約600個/g、3層で約2,100個/gと概して少ない。

(6)種実遺体分析

結果を第12-6表に示す。裸子植物1分類群(針葉樹のイヌガヤ)の葉2個、被子植物4分類群(広葉樹のオニグルミ、イチイガシ、コナラ属、草本のイネ) 64個の種実が検出された。種実や葉以外では、炭化材、植物の地下茎、不明(動物?)、岩片、土粒が確認された。

栽培種は、イネの炭化した胚乳48個(1A区SK1792の第2層から1個、第4層から15個(3個穎付着)、SC1826の炉から3個、焼土から29個(1個穎付着)が確認された。1A区SK1792の第4層から確認された胚乳1個の表面には、穎以外の植物片が付着しており、イネの稈や葉に由来する可能性がある。

栽培種を除いた分類群は、常緑低木～小高木のイヌガヤの針葉2個(3A区SK3026の第10層)、落葉高木のオニグルミの核3個(3A区SK3026の第10層)、常緑高木のイチイガシの炭化した子葉6個(1A区SK1792の第2層)、常緑(または落葉)高木のコナラ属の炭化した子葉7個(1A区SK1792の第2層;5個、第4層;2個)が確認された。以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

＜木本＞

・イヌガヤ(*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch)　イヌガヤ科イヌガヤ属

第12-6表　種実遺体分析結果

番号	区	遺構	層	分類群	部位	状態		個数	備考
7	1A	SK1792	第2層	イチイガシ	子葉	完形	炭化	1	
						破片	炭化	5	
				コナラ属	子葉	破片	炭化	5	
				イネ	胚乳	完形	炭化	1	
8	1A	SK1792	第4層	コナラ属	子葉	破片	炭化	2	
				イネ	穎・胚乳	完形	炭化	2	
						破片	炭化	1	
					胚乳	完形	炭化	9	1個穎以外の植物付着
						破片	炭化	3	
				植物の地下茎				1	
				土粒				1	
9	1A	SC1826	炉	イネ	胚乳	完形	炭化	1	
						破片	炭化	2	
				土粒				2	
10	1A	SC1826	焼土	イネ	穎・胚乳	完形	炭化	1	
					胚乳	完形	炭化	15	
						破片	炭化	13	
				不明		破片		1	
				炭化材		破片	炭化	2	
				岩片				2	
				土粒				2	
11	1A	SC1990	灰層	炭化材		破片	炭化	23	
				岩片				1	
				土粒				1	
				不明(動物?)				1	
12	3A	SK3026	第10層	イヌガヤ	葉	破片		2	
				オニグルミ	核	破片		3	
13	4E	SX4022	土器290内	不明(動物)		破片		3	ミミズ類卵包の可能性あり
14	4E	SX4022	土器292内	不明(動物)		完形		2	ミミズ類卵包の可能性あり
						破片		1	ミミズ類卵包の可能性あり
15	4E	SX4022	土器294内	不明(動物)		完形		1	ミミズ類卵包の可能性あり

葉は灰褐色、長さ5.0mm以上、幅2.5mm程度の線形で偏平。先端部は針状に短く尖る。基部はねじれるように楔形に細まり、葉痕(茎に接着する部分)は切形。葉上面は突出し、裏面には中肋の両側に白色の幅広い気孔帯が配列する。

・オニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura)　クルミ科クルミ属

核は灰褐色、長さ3-4cm、径2.5-3cm程度の頂部が尖る広卵体。縦に1周する縫合線があり、縫合線に沿って割れた半分以下の破片がみられる。核は硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・イチイガシ(*Quercus gilva* Blume)　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

子葉は炭化しており黒色、長さ1.0-1.3cm、径0.8-0.9cm程度の楕円～広卵体。2枚からなる子葉は極端に不揃いで、合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。幼根は頂端からずれた位置にある。表面には、1本の深い溝が基部から頂部に向かい2/3程度まで発達している。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には小さな孔(主根)がある。

岡本(1979)は、日本産ブナ科植物の子葉について、イチイガシには子葉の離れにくさ、著しい異形性、頂端が尖らず幼根の位置がずれている、中軸の圧痕が確認できるなどの特異性があることから、イチイガシのみが種まで同定できる場合があることを述べている。今回確認された6個は、これらの特徴を典型的に示していることから、イチイガシに同定されると判断した。なお、イチイガシの特徴が明瞭に確認されない7個を、コナラ属(*Quercus*)にとどめているが、おそらくイチイガシに由来すると思われる。

＜草本＞

・イネ(*Oryza sativa* L.)　イネ科イネ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ4-5mm、幅2-3mm、厚さ1-1.5mm程度のやや偏平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。表面に穎の破片が付着する個体がみられる。胚乳を包む穎(果)は、長さ6.5-7.3mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

4. 考察

(1)遺構・堆積物の年代観

4D区トレンチ3の黒色土より検出された木片(試料番号2)は、放射性炭素年代測定の結果、4,310±20BPの値が得られている。この木片は落葉広葉樹のムクノキに同定された。ムクノキは、温暖な地域に生育する種類である。

一方、3A区SK3026より検出された倒木(試料番号1)は、常緑広葉樹のタブノキ属に同定された。タブノキ属は、スダジイと共に暖温帯性常緑広葉樹林を構成し、特に沿海地に多い。倒木は、年代測定から3,555±20BPの値が得られている。

(2)各遺構の分析結果からみた古環境

3A区SK3026の第10層(試料番号3)からは珪藻化石がほとんど検出されず、少量ながら産出する珪藻化石の保存状態も悪く、ほとんどが壊れていた。よって、珪藻化石の生態的特徴に基づいて、遺構内の堆積環境などについて検討することは困難である。珪藻化石が少なかった理由として、遺構内が常に乾燥した状況下にあり珪藻が生息する環境として不適であった、あるいは堆積後の土壌化作用や続成作用によって珪藻化石が分解・消失してしまった可能性がある。今回の試料の場合、珪藻化石の保存が悪かったことや、好気的環境下で分解される花粉化石の産出が良好であったことから、後者の可能性が高い。ただし、わずかに検出される種類をみると、流水域、湿地や沼沢地、止水域、流水にも止水にも生息する種類、陸上のコケや土壌表面など湿り気のある好気的環境など、様々な生育環境を示す種類が産出した。このことから、SK3026の第10層には、生育環境の異なる場所に堆積した土壌が混入している可能性が指摘される。

花粉分析結果をみると、SK3026の第10層からはアカガシ亜属が多く産出し、マツ属、クルミ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、シイ属、エノキ属－ムクノキ属等を伴う。最も多く産出するアカガシ亜属は、シイ属等と共に暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であり、その他にもヤマモモ属、キハダ属、アカメガシワ属、ブドウ属、ノブドウ属、ウコギ科、アオキ属等暖温帯性常緑広葉樹林の構成要素や林縁要素が多く認められる。よって、当時の本遺跡周辺には、アカガシ亜属を主体とし、多くの広葉樹やマキ属、マツ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科等の針葉樹を伴う、豊富な樹種構成からなる森林が存在していたと推測される。また、渓谷沿いや河畔、低湿地等の適湿地に生育するサワグルミ属、クルミ属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属等が検出されることから、これらは周辺の河畔や集水域に生育していたものに由来すると可能性がある。

九州における既存の調査事例をみると、約6,000年前の縄文海進最大期前後にアカガシ亜属、シイ属を主体とする常緑広葉樹林が最盛期に達したとされており、その後約1,500年前頃まではアカガシ亜属、シイ属がマキ属、ヤマモモ属等を随伴して高率に出現するとされている(畑中ほか,1998など)。同遺構より検出された倒木の年代が約3,500年前の値を示すことも考慮すると、今回の結果は既存の

調査事例とも調和的である。

一方草本類をみると、イネ科、クワ科、キンポウゲ科、マメ科等が多く認められ、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属等を伴う。これらは、明るい場所に生育する「人里植物」を多く含む分類群である。よって、SK3026周辺の草地や遺跡周辺の開けた場所に、これらの草本類が生育していたと推測される。

一方、発掘調査所見から縄文時代以前と想定されている2F区SD2019の1層～3層(試料番号4～6)では、珪藻化石、花粉化石はほとんど産出せず、植物珪酸体も検出された分類群や含量が少なかった。この要因については、堆積時に取り込まれる量が少なかった、あるいは堆積後の風化作用の影響などが想定されるものの、今回の微化石の産状から明確にすることは難しい。今後、遺構内の詳細な堆積状況や立地条件などを含めて検討することが望まれる。なお、検出された植物珪酸体がSD2019埋積時に取り込まれたものとすれば、遺構の周辺にヨシ属、タケ亜科、イチゴツナギ亜科などのイネ科が生育していたと思われる。

(3)種実遺体分析結果からみた植物資源利用

弥生時代前期後半とされる1A区SK1792の第2層、第4層と、古墳時代前期とされるSC1826の炉、焼土からは、栽培種のイネの炭化した胚乳が確認された。イネは、表面の縦溝が確認されるなど明瞭に胚乳の形をとどめている個体が多く、穎付着個体もみられることから、調理前の状態で火を受けたことが推定される。

イネを除いた分類群は、3,555BPの年代が得られた3A区SK3026の第10層から、耐陰性が強く、暗く湿った広葉樹林内に生育する常緑低木～小高木のイヌガヤの針葉、河川沿いなどの湿潤な場所を好んで生育する落葉高木のオニグルミの核、弥生時代前期後半とされる1A区SK1792の第2層、第4層から常緑高木のイチイガシを含むコナラ属の炭化した子葉が確認されており、本遺跡周辺域の森林に生育していた樹木に由来すると考えられる。

オニグルミは、核内部の種子が生食可能な遺跡出土例が多い有用植物であることから(渡辺,1975など)、植物質食糧として利用されていた可能性が考えられる。

イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する種で、現在は、紀伊半島、四国、九州の山麓地に広く分布する。また、子葉はコナラ属の中でも渋みが少なく、アク抜きせずに生食可能で収量も多いため、西南日本の遺跡出土例が多い(渡辺,1975;岡本,1979など)。1A区SK1792から出土したイチイガシの子葉は、当時の遺跡周辺の森林から成熟果実を選択的に採取して植物質食糧として利用されていたことが推定される。また、全て炭化していることから、採取・保管・利用の過程で何らかの理由で火熱を受け、子葉のみが残存したことが考えられる。また、イチイガシの出土例は、弥生時代には稲作と共にみられ、イネと共にイチイガシも重要な植物質食料であったことが指摘されている(那須,1975)。今回弥生時代前期後半とされる1A区SK1792でイネとイチイガシが確認されたことは、これと調和する結果といえる。

＜引用文献＞

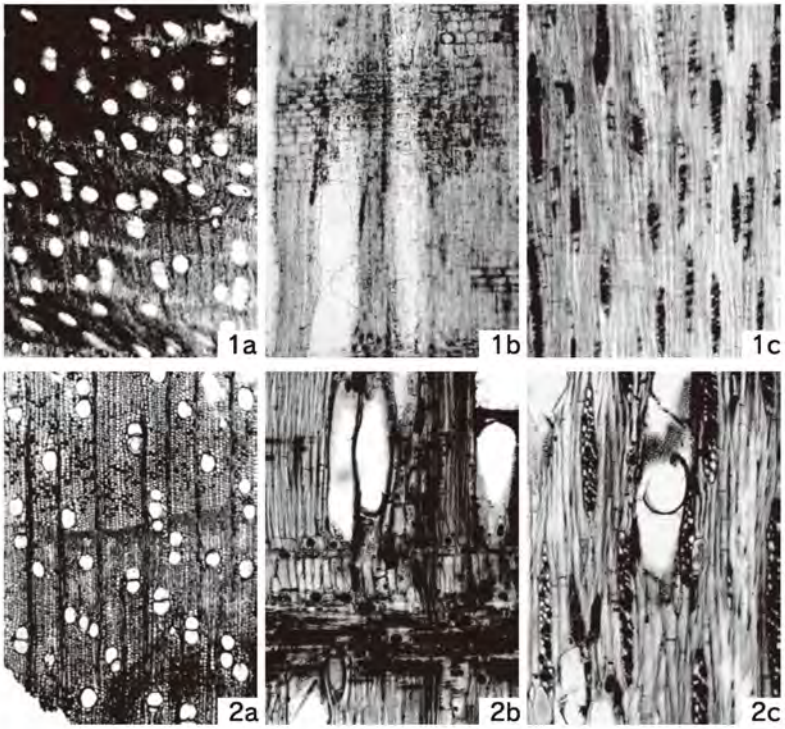
安藤　一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.

Asai,K.& Watanabe,T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.

原口　和夫・三友　清史・小林　弘,1998,埼玉の藻類　珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.

畑中　健一・野井　英明・岩内　明子,1998,九州地方の植生史.安田　喜憲・三好　教夫(編著),図説　日本列島植

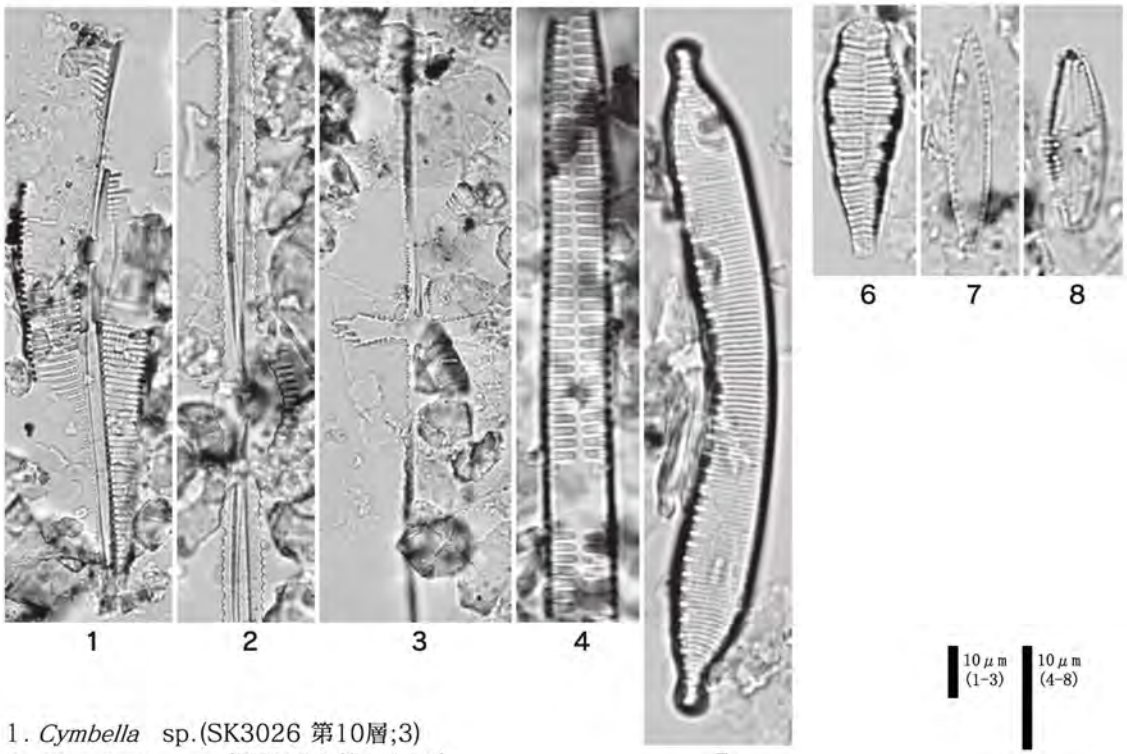
生史,朝倉書店,151-161.
林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
石川　茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
伊東　隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東　隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
伊東　隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東　隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東　隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
伊藤　良永・堀内　誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.
小林　弘・出井　雅彦・真山　茂樹・南雲　保・長田　啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.第1巻,㈱内田老鶴圃,531p.
近藤　錬三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.
Krammer,K.& Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.
Krammer,K.& Lange-Bertalot,H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil:Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae.In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.
Krammer,K.& Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.
Krammer,K.& Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav FischerVerlag,248p.
Lowe,R.L,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005.Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop.,U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.
中山　至大・井之口希秀・南谷　忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
那須　孝悌,1975,山口市萩峠遺跡貯蔵穴中の植物遺体および花粉(予報).山口市教育委員会.
岡本　素治,1979,遺跡から出土するイチイガシ.大阪市立自然史博物館業績,第230号,31-39.
Round,F.E..,Crawford,R.M.&Mann,D.G.1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
島地　謙・伊東　隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
Vos,P.C.& H.de Wolf,1993,Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects.Hydrobiologica,269/270,285-296.
渡辺　誠,1975,縄文時代の植物食.雄山閣出版,187p.
渡辺　仁治・浅井　一視・大塚　泰介・辻　彰洋・伯耆　晶子,2005,淡水珪藻生態図鑑.内田老鶴圃,666p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩(日本語版監修),海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P.and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.
柳沢　幸夫,2000,Ⅱ-1-3-2-(5)計数・同定.化石の研究法－採集から最新の解析法まで－,化石研究会,共立出版株式会社,49-50.



1. ムクノキ(SK3026;1)
2. タブノキ属(トレンチ3 第10層;2)
a:木口,b:柾目,c:板目

300 μm:a
200 μm:b, c

1. 樹種同定木材

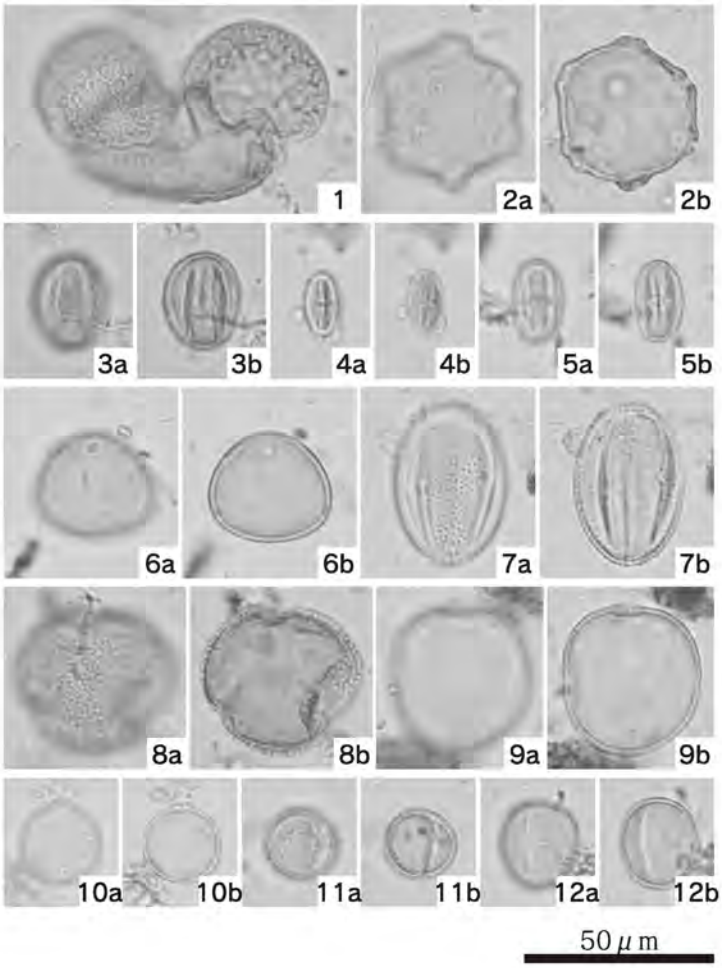


10 μm (1-3)
10 μm (4-8)

1. *Cymbella* sp.(SK3026 第10層;3)
2. *Pinnularia* sp.(SK3026 第10層;3)
3. *Sellaphora* sp.(SK3026 第10層;3)
4. *Ulnaria* sp.(SK3026 第10層;3)
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(SK3026 第10層;3)
6. *Meridion constrictum* Ralfs(SK3026 第10層;3)
7. *Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith(SK3026 第10層;3)
8. *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(SK3026 第10層;3)

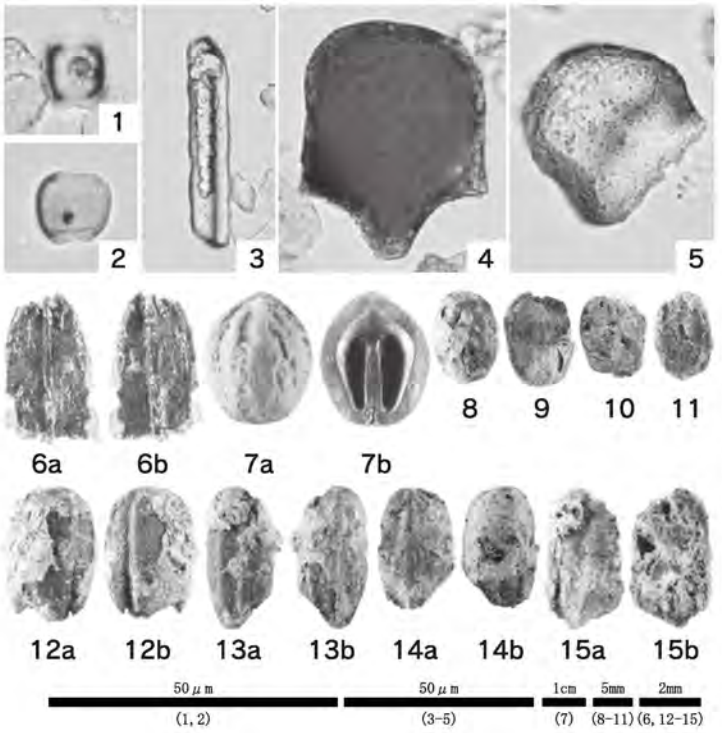
2. 珪藻化石

図版12-2



1.マツ属(SK3026 第10層;3)
2.クルミ属(SK3026 第10層;3)
3.コナラ属アカガシ亜属(SK3026 第10層;3)
4.クリ属(SK3026 第10層;3)
5.シイ属(SK3026 第10層;3)
6.エノキ属－ムクノキ属(SK3026 第10層;3)
7.ノブドウ属(SK3026 第10層;3)
8.アオキ属(SK3026 第10層;3)
9.イネ科(SK3026 第10層;3)
10.クワ科(SK3026 第10層;3)
11.キンポウゲ科(SK3026 第10層;3)
12.マメ科(SK3026 第10層;3)

3. 花粉化石



1.ヨシ属短細胞珪酸体(SD2019 採土1層;4)
2.ヨシ属短細胞珪酸体(SD2019 採土3層;6)
3.イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体
(SD2019 採土3層;6)
4.ヨシ属機動細胞珪酸体(SD2019 採土1層;4)
5.ヨシ属機動細胞珪酸体(SD2019 採土3層;6)
6.イヌガヤ 葉(SK3026 第10層;12)
7.オニグルミ 核(SK3026 第10層;12)
8.イチイガシ 子葉(SK1792 第2層;7)
9.イチイガシ 子葉(SK1792 第2層;7)
10.イチイガシ 子葉(SK1792 第2層;7)
11.イチイガシ 子葉(SK1792 第2層;7)
12.イネ 穎･胚乳(SK1792 第4層;8)
13.イネ 胚乳(SC1826 焼土;10)
14.イネ 胚乳(SC1826 焼土;10)
15.イネ 胚乳
(表面:植物片付着)(SK1792 第4層;8)

4. 植物珪酸体･大型植物遺体

第2節　石製丸玉の石材同定

西澤千絵里（福岡市埋蔵文化財センター）

千里遺跡1次調査5区出土の玉は楕円状の石製の丸玉で、孔に対して垂直方向に半裁されたように欠損している。色調は全体的に明るい青緑色で、微細に走る筋の部分は白色を呈している。

古代の装身具に使用される緑色系の石材には、硬玉や碧玉、滑石などが挙げられ、多様である。福岡市では、緑色系の玉類について蛍光X線分析装置を使用した材質分析をおこなっており、資料から検出される元素の差異やピークの強弱などから石材を同定し、市内出土の緑色系玉類がクロム白雲母、滑石、硬玉、アマゾナイト（天河石）、玉髄系などから製作されたものであることを明らかにしている〔比佐2007〕。

本稿では上記の調査成果をもとに千里遺跡1次調査5区出土の石製玉の蛍光X線分析をおこない、石材の同定を試みた。分析は、福岡市埋蔵文化財センター所蔵のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用して、表面分析による非破壊の定性分析をおこなった（エダックス社製　Eagle μ probe／対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧：35kV・電流値：325μA／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3㎜φ／測定時間120秒）。

過去の調査は、事前に鉱物標本を分析して検出された元素の種類や蛍光X線強度を調査、そのうえで対象資料を分析し、検出結果を鉱物標本のものと比較することで、石材を判別する方法を採用している〔比佐2011〕。今回の千里遺跡1次調査5区出土の資料についても、鉱物標本から得られたデータを参考に比較をおこなうことで材質を調査した。

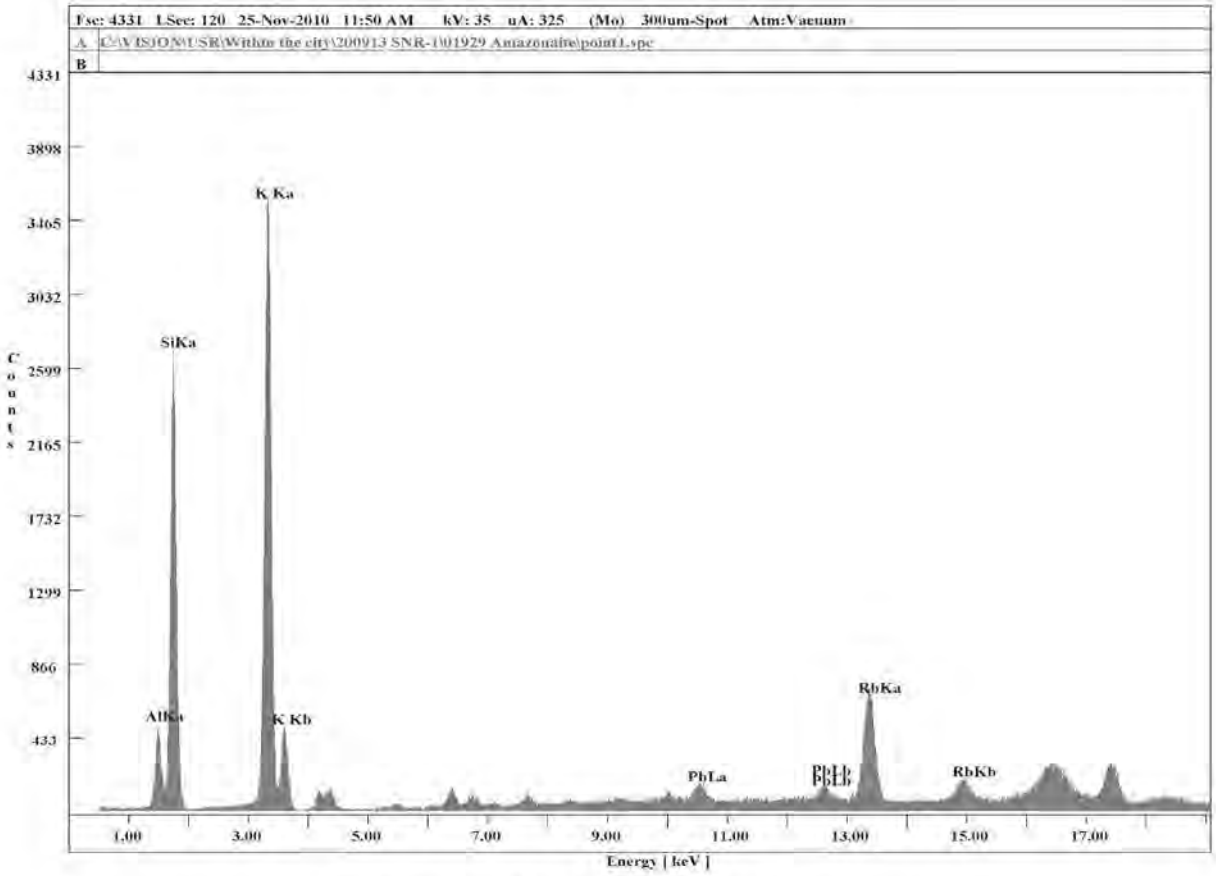
蛍光X線分析の結果、千里遺跡1次調査5区出土資料からはアルミニウム（Al）・ケイ素（Si）・カリウム（K）・ルビジウム（Rb）が検出され、明瞭なピークとしてあらわれた。これらの元素のピークは、基礎データとして使用したアマゾナイトの鉱物標本の分析結果と類似しており、本資料もアマゾナイトであると思われる。

アマゾナイトは微斜長石と呼ばれる鉱物の一種で、本来は青～緑色を呈する微斜長石に対して呼ばれる俗称である〔山田1994、木下・小川1967〕。化学組成は$K[AlSi_3O_8]$ とあらわされ、これらの元素は蛍光X線分析によって検出された元素と一致している。ルビジウムは化学組成にあらわされていないが、他の緑色系石材に比較して強く検出される点が指摘されており、これは微斜長石の特徴であると考えられている〔藁科・東村1995、比佐2007〕。

考古学の出土遺物としてアマゾナイトをみてみると、日本では北部九州や四国地方などで弥生時代の丸玉や勾玉などの玉類として出土が確認されている。しかしながら、出土事例は少なく、朝鮮半島から日本に持ち込まれた渡来系遺物であると指摘されている〔木下2002、深田編2009〕。

これまで福岡市内では、有田遺跡36次、今宿遺跡5次、諸岡遺跡3～5次調査出土の勾玉片、免遺跡3次調査出土丸玉片の計4点が、蛍光X線分析装置を使用した調査によって、アマゾナイト製であると考えられており、本調査出土品は5例目である。北部九州では、このほかにも福岡県筑前町大木遺跡などの出土資料が、分析によってアマゾナイトと考えられている[註]。これらの資料は、北部九州という地域的に見ても渡来系遺物との考古学的な指摘を裏付けるものである。しかし、一方で、アマゾナイトの科学分析による石材の同定は緒についたばかりであり、他地域の情勢が十分に確認されているものではない。また、渡来系遺物とされながらも、鉱物学的に日本と朝鮮半島の資料が比較検討されている状況にもない。

装身具に用いられる石材は、考古学と自然科学が共同で取り組むべき課題の一つであり、本事例の紹介が今後の研究の布石になれば幸いである。



第12-3図　石製丸玉の蛍光X線分析チャート

註）福岡市教育委員会の比佐陽一郎氏のご教示による。

＜参考文献＞

木下亀城・小川留太郎1967「標準原色図鑑全集6岩石鉱物」保育社

山田滋夫1994「第二章 兵庫県の鉱物一覧」「兵庫鉱業史の研究Ⅰ」妙見山麓遺跡研究会

藁科哲男・東村武信1995「持田町3丁目遺跡出土の管玉の産地分析」「持田町3丁目遺跡」財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

木下尚子2002「細形（韓国式）銅剣文化の装身具－農民的装身具の成立－」「細形銅剣文化の諸問題」九州考古学会・嶺南考古学会

比佐陽一郎2007「4.元岡・桑原遺跡群第27次調査出土石製小玉の石材について」「元岡・桑原遺跡群9」福岡市埋蔵文化財調査報告書第963集　福岡市教育委員会

今井隆博編2009「第4章（1）天河石（アマゾナイト）について」「免遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1059集　福岡市教育委員会

深田浩編2009「輝く出雲ブランド－古代出雲の玉作り－」島根県立古代出雲歴史博物館

比佐陽一郎2011「石製玉類の分析－九州地方の事例を中心として－」「古代の玉－最新の保存科学的研究の動向－」独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

第XIII章　総括

本調査では、遺構密度の濃淡はあるものの、縄文時代から近世まで多岐にわたる内容の遺構・遺物が確認された。以下では、調査成果報告を部分的に補足し、調査の総括に代えたい。

沖積層の形成と縄文時代の居住

本調査地点から約400m北で行われた周船寺遺跡第13次調査では、遺構検出面の下約150cmの砂礫層から出土した木本遺体で4200±70年cal.BP（δ13C：-27.0‰　Beta-148325）の^{14}C年代が得られている（池田編2001：45）。本調査・千里遺跡4区トレンチ3では、遺構検出面下約170cmの黒色細砂・シルト層中のムクノキ片で4310±20cal.BP（δ13C：-27.19±0.15‰　PLD-16296）という^{14}C年代が得られた。これらの成果から、この地域ではいわゆる沖積層上部砂層上に陸成堆積層が形成されはじめるのが縄文時代中期後半頃であると言える。周辺の飯氏遺跡・周船寺遺跡でも、中期後半～後期前葉の土器片の出土が複数確認されており、この時期の確実な居住痕跡が認められる。本調査・千里遺跡4区SX4051でも縄文時代後期初頭の坂の下式土器小片が出土している（第9-22図140・141）。また、本調査・千里遺跡3区SK3026では、タブノキ属片で縄文時代後期中葉併行の3555±20年cal.BP（δ13C：-26.53±0.15‰　PLD-16295）の年代が得られた。周船寺遺跡10次調査では、縄文時代後期中葉・北久根山式と考えられる土器が出土した落ち込み状のSX02出土炭化材で4000±60年cal.BP（δ13C：-27.6‰　Gak-20080）、3680±60年cal.BP（δ13C：-29.8‰　Gak-20081）の^{14}C年代が得られている（池田・久住編2000）。ただし、周辺調査では後期中葉の遺構・遺物は確認されていない。次段階の縄文時代後期後葉・三万田式期については、千里シビナ遺跡（周船寺遺跡第1次調査）の3号溝と包含層IIIa層（塩屋ほか編1982）、本調査・千里遺跡1B区の落ち込みSX1023などが挙げられるが、確認事例は少ない。より安定した遺物・遺構が確認されるのは縄文時代晩期・古閑式～黒川式期である。この段階は、自然堤防の河成・陸成堆積層中に御領式～黒川式土器が包含された状態でもあり、縄文時代晩期～弥生時代の遺構はその層を遺構面としている。

以上を整理すると、周船寺・千里地域ではおそらくは数m～数十mの層厚をもつ沖積層上部砂層の堆積が一段落し、その上に自然堤防と後背湿地の形成が進む環境に対して、縄文時代中期後半段階から人為的利用が開始されたと考えられる。ただし、縄文時代後期後葉までは、いまだ安定した土地利用とは言えない。自然堤防周辺の段丘化がある程度進んで、居住空間が安定するのが縄文時代晩期からであり、さらに安定した生活痕跡が認められるのは、弥生時代前期後半からと言えそうである。

縄文時代晩期の水路

本調査・千里遺跡4区では、縄文時代晩期・黒川式期の溝SD4005と縄文時代晩期の可能性が高い溝SD4052・4050の3条を確認した。周辺調査では、千里シビナ遺跡（周船寺遺跡第1次調査）の三万田式～夜臼式期の2号溝（上端幅0.7～1.6m、下端幅0.3～1.1m、深さ15～24cm。断面形U字形。最下層は砂層、上層は粘土層で多量の縄文土器を含む）（塩屋ほか編1982）、糸島市広田遺跡の三万田式～御領式期の大溝状遺構（上端幅10～13m、下端幅6.5～9.5m、深さ20～50cm。小規模な谷をもとにした自然形成的な溝）（中間ほか編1980）などが確認されている。北部九州の初期水田を検討した吉留秀敏氏は、福岡市の晩期遺跡を中心に確認される断面V字形・U字形で、水成堆積物を含む幅1m以下の直線的水路について、突帯文期以前の灌漑水路の可能性を指摘している（吉留2004・2008）。本調査の溝は砂の堆積から水路であるとは言えるが、削平が著しく、水田と関わる積極的な特徴は確認できなかった。今後の周辺での調査でも注意が必要である。

縄文時代晩期の剥片石器群

本調査では、縄文時代～弥生時代の溝・包含層を中心に、黒曜石・安山岩の剥片・砕片・残核が比較的多く出土した。鈴桶型石刃技法とその変異技法にもとづく縦長剥片も一定量出土している。千里遺跡1次調査2・4区、周船寺遺跡19次調査の未図化資料のうち主要なものの概要を第13-1表に示す。剥片剥離技術、剥片サイズ、石材利用等から本資料は縄文時代晩期を主体として一部弥生時代の資料を含むと考えられる（吉留2002・板倉2008）。また本調査出土資料のうち、縄文時代晩期・御領式土器に伴うSD2019出土剥片石器類と黒川式土器に伴うSD4005出土剥片石器類は、縄文～弥生時代における剥片剥離技術の数量的な比較に有効な資料と考えるため、計測表を第13-2表に示しておく。

古墳時代前期の方形周溝遺構

本調査・千里遺跡4区で確認した方形周溝遺構SX4022は、山岸良二氏が「方形周溝状遺構」とする形式に近い。これは、「方台部がほぼ平坦で主体部はなく、溝も弥生時代の方形周溝墓によくみられる凹凸はなく、壁面鋭角に掘り込まれ、平面プランも整然としている」もので、近畿・関東では弥生時代末～古墳時代の方形周溝墓の終末期の姿の１つと考えられている（山岸1982：49）。片岡宏二氏による九州地方の周溝状遺構の整理によると、最古例は中期で、大体は後期にはじまり後期の内で終わる。分布は筑紫平野北部に多く、玄海灘沿岸には少ない。平面プランは円形・楕円形・隅丸方形・方形で、規模は径7m未満に集中する。溝の断面形はほぼ逆台形である。畿内と北部九州の間に弥生時代後期にさかのぼる例が少ないことから方形周溝墓からの系譜でない、とされる（片岡1989）。SX4022は、筑紫平野北部の「周溝状遺構」よりは、山岸氏が指摘する「方形周溝状遺構」に関連すると思われる。肩に特殊な刺突文のある甕、緑色鉱物の目立つ糸島花崗閃緑岩の投棄など、象徴的な意味が付与されていると考えられる遺物が出土しており、祭祀遺構的性格が強いと考える。

その他、弥生時代早期の韓国無文土器文化との関係を示す遺物の評価（柳葉形磨製石鏃、口唇部刻目土器（第9-10図13）、天河石製丸玉）、弥生時代前期～古墳時代前期の灌漑技術の変遷（4区）、弥生時代中期後半の集落形態（1・4区）、中世集落の変遷（11世紀後半～12世紀前半の1区と12世紀中頃～後半の2・4区）など、多くの検討課題を残した。今後の調査・研究に期したい。

＜参考文献（五十音順）＞

板倉有大（2008）「五十川遺跡10次調査B調査区出土の剥片石器群について」吉武学編『五十川遺跡5』（福岡市報1019集）福岡市教育委員会

海津正倫（1994）『沖積低地の古環境学』　古今書院

池田祐司編（2001）『周船寺遺跡群4』（福岡市報692集）　福岡市教育委員会

池田祐司・久住猛雄編（2000）『JR筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』（福岡市報654集）　福岡市教育委員会

塩屋勝利ほか編（1982）『千里シビナ遺跡』（福岡市報88集）　福岡市教育委員会

片岡宏二（1989）「「周溝状遺構」の検討（その1）」『福岡考古』第14号

中間研二ほか編（1980）『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』　福岡県教育委員会

山岸良二（1982）「Ⅳ　方形周溝墓の諸問題」『方形周溝墓』　ニューサイエンス社

吉留秀敏（2002）「北部九州弥生時代中期の剥片石器」『究班Ⅱ』　埋蔵文化財研究会

吉留秀敏（2004）「水稲農耕導入期の灌漑技術」『福岡大学考古学論集：小田富士雄先生退職記念』　同記念事業会

吉留秀敏（2008）「北部九州縄文時代後期から晩期社会の特質」『月刊文化財』11

第13-1表　千里遺跡第1次（2・4区）・周船寺遺跡第19次調査出土未図化石器概要

＊UF＝使用痕剥片石器。RF=調整剥片石器

＊SD4005・SD4019出土石器については計測表も参照（第13-2表）

遺構・層位	黒曜石							安山岩						その他
	原石	残核	剥片	砕片	UF・RF	サイズ（最大・cm）	備考	原石	残核	剥片	砕片	UF・RF	サイズ（最大・cm）	
SD2031（2001）		4	10	10	掻器UF1、RF（石鏃未成品？）1					1				
SD2093		7	31	28	切削器UF1、楔UF2									
SX2032		1	11	7										
SD2089		2	5	10	掻器UF1	4.45				1				
2C区検出面上盛土		4	16	12	切削器UF4、掻器UF5、ノッチUF1	4-5								
4区北西検出面（4G区）		3	23	7	RF1、掻器UF2、楔UF1、ノッチUF1	3.5-4	剥片に牟田産？1							
4区北西検出面（4F区）	1	2	18	5	掻器UF1、切削器UF1	5.5-6	残核に牟田産1			1				
4区西検出面（4E区）			42	3	RF1、掻器UF1	4.5				4				
4区西・中央検出面（4E・D区）		1	10	1	掻器UF2					2				
4区中央検出面（4D区）		1	10	9		4.5				1				
4区北西地山中（4G区）			8	3										
4区北西地山中（4G区ﾄﾚﾝﾁ）		2	12	10		5				1		RF1	5	
4区ﾄﾚﾝﾁ17		2	5	5	掻器UF2、切削器UF1	3.5				1				
4区ﾄﾚﾝﾁ25	2	2	10	9		4								
4区西地山中（4E区ﾄﾚﾝﾁ）			5	12	掻器UF1、切削器UF1、ノッチUF2		剥片に針尾産1							
4区中央地山中（4D区）		1	2	1										
4区中央地山中（SX4051西）		2	1		楔UF1	4								
SP4039		2	4	9		4.5					1			
SD4190・1区		3	1	2		4.5								
SD4190・2区		1	2	6		4				1				
SD4190・3区		2	7	15	切削・掻器UF1	4								
SD4190・4区			13	24	RF1	3.5	剥片に針尾産1			1				玄武岩片1
SD4190・5区		3	18	24		4.5				1				玄武岩円礫1、研磨痕あり砂岩（磨斧片？）2
SD4190・6区		2	3	9						2				
SD4190・ﾄﾚﾝﾁ19（礫層含む）			5	7										
SD4190・ﾄﾚﾝﾁ24			5	3										
SD4190・ﾄﾚﾝﾁ27				2										
SD4006	2	2	10	5	切削器UF1、掻器UF1	3				1	1			
SD4006土器群①～③		1	10	6	掻器UF1	3				2			5	
SD4006北区上層			17	8	掻器UF1					1				
SD4006下層		5	7	8	切削器UF3、掻器UF3	3.5-4				1				
SD4009上層		4	24		掻器UF2	3.5-4				1				玄武岩剥片1
SD4009北ﾍﾞﾙﾄ		1	9											赤色頁岩片1
SD4009南ﾍﾞﾙﾄ	1	3	10		切削器UF1					1				
SD4009下層		1	11	2		4				1				頁岩剥片1

遺構・層位	黒曜石							安山岩						その他
	原石	残核	剥片	砕片	UF・RF	サイズ（最大・cm）	備考	原石	残核	剥片	砕片	UF・RF	サイズ（最大・cm）	
SD4010北区		1	5	2		3.5-4				1			6.2	
SD4010南区		8	27			3.5	ｺｱ多い、摩滅強い			2				
SD4023・1区		1	6	18		3.5-5			1	3			3.5-5	
SD4023・2区		2	7	2	切削器UF1	4								
SD4023・3区		2	5	3		4				2			2.5	
SD4023・4区		2	5	2	掻器UF1	3.5								
SD4023（旧SD4132）		1	3	21		3.5				2				頁岩剥片2
SD4134・1区		3	7	15		4					1			
SD4134・2区		2	1	10		3								
SD4134・3区		4	22	10	切削器UF1、ノッチUF1	4.3	剥片に針尾産3		1	2				
SX4239		7	34	23						3				玄武岩片1
SX4191上面			2	6										
SX4191・1区		1	2	4	RF2	4								
SX4191・2区		1	28	40		5	礫面残す剥片が目立つ（10点）			2				玄武岩片3
SX4191ﾄﾚﾝﾁ19		2	3	3		4								
SX4191ﾄﾚﾝﾁ23		1	1	1										
SX4027・1区		11	27	11		4								
SX4027・2区		3	3	7		4	残核に熱変							
SX4027・3区			8	8		4			1				4	
SX4051上層	1	24	28	55	掻器UF4、RF（石鏃未成品？）1	3.5			1	3	2		8.37	
SX4051上層2区			7	6										
SX4051上層3区（ﾄﾚﾝﾁ10）		4	28	31	掻器UF3、切削器UF1	4				2				
SX4051上層3区（ﾄﾚﾝﾁ11）		2	8	10	掻器UF6、切削器UF2	4.5				1				
SX4051上層3・4区		3	11	3	掻器UF1					1				
SX4051・1・2区		12	69	77	掻器UF（RF）1	4			1	9	3		5	
SX4051下層2区		1	2	4						1			5.5	
SX4051・3区		29	130	173	掻器UF1	5				7	15		5.5	
SX4051下層3・4区		2	7	2	RF1	4								
SX4051下層・4区（ﾄﾚﾝﾁ13）		1	23		RF1、掻器UF1、切削器UF1、ノッチUF1	4-5								
SD4005		5	70	81	掻器UF2				1	14	20			玄武岩砕片5
SD4005拡張上層		1	4	18	切削器UF？1	3.5				1	3			
SD4005拡張東側			8	31	RF1				1	1	10			
SD4005清掃		2	1	1	石鏃未成品1						2			
SD4005拡張床面凹部				5							1			玄武岩片2
周船寺19次SD2019		4	48	49						10	10			玄武岩剥片1、砕片1
小計	7	206	1015	994	RF12、掻器UF43、切削器UF20、楔UF4、ノッチUF6　（計85）			0	7	92	69	RF1		玄武岩10、頁岩3、赤色頁岩1、砂岩1
合計	2307							169						15

第13-2表　SD4005・SD2019出土剥片石器計測表

＊計測値の単位は最大長・最大幅・最大厚（cm）、重量（g）、剥離角（°）
＊礫面残存率は目分量

番号	出土遺構・層位	種類	石材	礫面残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	打面形状	剥離角ポジ面	剥離角ネガ面	備考
1	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2	2.67	1.2	6.1	平坦	105	—	
2	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	4.85	1.5	0.55	3.6	平坦	102	—	
3	SD4005	剥片	黒曜石	—	3.25	2.1	0.55	2.7	点	—	—	
4	SD4005	剥片	黒曜石	1/3	3.9	2.15	1.07	6.5	礫面	—	—	
5	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.8	2.8	1.15	4.4	平坦	110	—	
6	SD4005	剥片	黒曜石	1/2	3.25	2.07	0.8	4.4	礫面	—	—	
7	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	3.4	2.75	0.85	6.7	礫面	—	—	
8	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	2.9	2.9	0.55	4.1	礫面	105	—	
9	SD4005	剥片	黒曜石	—	2.5	1.65	0.4	1.5	平坦	100	—	
10	SD4005	剥片	黒曜石	—	3.4	2.65	0.9	5.7	平坦	105	—	
11	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.9	1.6	0.62	2.4	平坦	105	—	
12	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.8	3.45	1.2	9.7	礫面	120	—	
13	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.1	1.5	0.4	1.1	礫面	105	—	
14	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.44	2.3	0.65	2.2	礫面	75	—	
15	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.6	2.8	0.65	3.8	礫面	105	—	
16	SD4005	剥片	黒曜石	1/2	2.3	1.8	0.42	1.4	礫面	110	—	
17	SD4005	剥片	黒曜石	—	2.3	2.95	0.58	2.7	切子	75	—	
18	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2	2.6	0.65	1.8	点	—	—	
19	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	3.75	2.93	0.73	3.1	礫面	105	—	
20	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	2.55	3.1	1.1	6.5	平坦	110	—	
21	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	3.6	2.85	0.7	4	礫面	105	85	
22	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.85	3	0.9	5.3	礫面	75	—	
23	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	1.5	2.8	1.1	4.4	平坦	85	—	
24	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.9	1.8	0.7	3.2	点	—	—	
25	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	2.15	3.25	0.8	5.1	礫面	115	—	
26	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	3.6	1.85	0.75	3.8	礫面	—	—	
27	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	3.5	3.9	1.25	9.0	—	—	—	
28	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.6	3.1	1.07	6.4	礫面	130	—	
29	SD4005	剥片	黒曜石	1/3	2.4	2.55	1.2	6.0	平坦	90	—	
30	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	2.45	3.3	1.0	5.8	礫面	70	—	
31	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	3.85	2.77	1.2	8.8	点	—	—	
32	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	2.12	2.8	0.65	2.9	礫面	115	—	
33	SD4005	使用痕剥片	黒曜石	1/5	3.2	3.5	1.2	10.2	平坦	—	—	片面微細剥離・刃先角80～90°
34	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	3.0	2.9	0.97	7.8	礫面	110	—	
35	SD4005	剥片	黒曜石	—	3.3	2.3	1.08	4.8	平坦	75	—	
36	SD4005	剥片	黒曜石	—	2.66	1.94	0.57	2.5	点	—	—	
37	SD4005	剥片	黒曜石	1/2	3.1	2.04	0.45	1.9	礫面	—	—	
38	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	3.06	2.95	1.35	5.8	平坦	120	—	
39	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	2.1	3.25	0.95	4.8	礫面	95	—	
40	SD4005	剥片	黒曜石	1/2	2.3	1.85	0.95	3.8	—	—	—	
41	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	3.16	2.5	0.7	2.7	平坦	90	85	
42	SD4005	剥片	黒曜石	1/2	2.5	2.2	0.7	3.2	礫面	90	—	
43	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	3.3	3.25	0.8	6.2	礫面	115	—	
44	SD4005	剥片	黒曜石	1/2	2.4	3.0	1.08	5.7	平坦	110	—	
45	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.45	2.35	1.25	5.2	平坦	100	—	
46	SD4005	剥片	黒曜石	1/3	(2.03)	2.83	1.1	5.2	—	—	—	
47	SD4005	剥片	黒曜石	—	2.63	2.7	0.73	3.4	平坦	105	—	
48	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	(2.06)	1.92	0.73	2.9	礫面	100	—	
49	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.45	2.4	0.7	3.2	平坦	85	—	
50	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	3.7	1.85	0.77	3.4	礫面	80	—	
51	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	1.6	2.7	4.3	4.3	平坦	115	—	

番号	出土遺構・層位	種類	石材	礫面残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	打面形状	剥離角ポジ面	剥離角ネガ面	備考
52	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.7	2.05	0.5	2.3	平坦	130	—	
53	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	2.0	1.2	0.8	2.8	礫面	115	—	
54	SD4005	剥片	黒曜石	—	3.26	1.4	0.75	2.2	点	—	—	
55	SD4005	剥片	黒曜石	2/3	2.5	2.05	0.45	1.8	点	—	—	
56	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.0	2.3	0.72	3.6	礫面	120	—	
57	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	1.8	2.05	0.5	1.8	礫面	120	—	
58	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	1.75	2.2	0.45	1.5	点	—	—	
59	SD4005	剥片	黒曜石	—	2.06	1.67	0.42	1.5	—	—	—	
60	SD4005	剥片	黒曜石	—	(1.6)	2.5	0.8	(2.8)	—	—	—	
61	SD4005	剥片	黒曜石	1/2	(1.95)	2.15	0.33	(1.3)	—	—	—	
62	SD4005	剥片	黒曜石	—	2.8	2.0	0.5	1.8	点	—	—	
63	SD4005	剥片	黒曜石	1/5	2.3	2.1	0.3	1.1	点	—	—	
64	SD4005	剥片	黒曜石	—	1.95	2.4	0.6	2.4	平坦	110	—	
65	SD4005	剥片	黒曜石	—	2.46	1.9	0.42	1.1	平坦	100	—	
66	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	2.35	2.0	0.4	1.5	平坦	80	—	
67	SD4005	剥片	黒曜石	1/2	2.65	1.60	0.67	1.9	点	—	—	
68	SD4005	剥片	黒曜石	—	2.35	1.75	0.45	1.4	平坦	110	—	
69	SD4005	剥片	黒曜石	1/10	(1.75)	2.2	0.45	(1.5)	礫面	110	—	
70	SD4005	剥片	黒曜石	—	(2.2)	2.0	0.5	2.0	平坦	110	—	
71	SD4005	剥片	黒曜石	—	2.65	1.8	0.3	1.4	—	—	—	
72	SD4005	残核	黒曜石	1/3	3.9	3.2	1.9	13.9	礫面	—	75、80	
73	SD4005	残核	黒曜石	1/5	3.6	3.1	1.3	16.3	礫面	—	55、65	
74	SD4005	残核	黒曜石	1/5	3.6	2.0	2.5	14.6	平坦	—	70	
75	SD4005	残核	黒曜石	1/5	4.0	3.35	2.3	25.5	平坦	—	110	
76	SD4005	残核	黒曜石	1/10	4.54	3.1	1.44	17.5	—	—	—	
77	SD4005	使用痕残核	黒曜石	1/3	3.3	1.9	1.5	5.9	—	—	—	片面微細剥離・刃先角75～80°
78	SD4005	剥片	安山岩	—	2	2.3	0.25	1.2	平坦	—	—	
79	SD4005	剥片	安山岩	—	2.7	(1.6)	0.82	(3.0)	平坦	125	—	
80	SD4005	剥片	安山岩	—	1.6	2.4	1.0	2.3	風化素材面	90	—	
81	SD4005	剥片	安山岩	—	2.3	1.97	0.24	1.1	平坦	125	—	
82	SD4005	剥片	安山岩	1/10	1.4	2.55	0.6	1.7	礫面	105	—	
83	SD4005	剥片	安山岩	—	2.7	2.1	0.22	1.2	平坦	—	—	
84	SD4005	剥片	安山岩	—	2.13	2.7	0.35	1.6	平坦	—	—	
85	SD4005	剥片	安山岩	—	2.18	3.6	0.45	3.0	点	—	—	
86	SD4005	剥片	安山岩	1/10	3.75	2.3	0.85	3.8	礫面	105	—	
87	SD4005	剥片	安山岩	1/10	2.5	2.7	0.57	4.2	点	—	—	
88	SD4005	剥片	安山岩	1/10	3.1	3.3	0.5	5.0	礫面	78	—	
89	SD4005	剥片	安山岩	1/10	2.5	3.45	0.5	4.3	礫面	110	—	
90	SD4005	剥片	安山岩	—	2.76	3.75	0.7	7.2	平坦	120	—	
91	SD4005	剥片	安山岩	1/10	4.4	2.5	0.77	6.0	平坦	125	—	横長剥片を縦に折断している
92	SD4005	残核	安山岩	1/5	4.14	2.9	1.67	26.9	—	—	—	
93	SD4005拡張上層	剥片	黒曜石	1/10	2.5	2.2	0.5	2.1	礫面	115	—	
94	SD4005拡張上層	剥片	黒曜石	1/10	2.94	1.7	0.45	2.3	平坦	110	—	
95	SD4005拡張上層	剥片	黒曜石	1/2	2.7	1.9	0.6	2.7	切子	110	—	
96	SD4005拡張上層	剥片	黒曜石	1/10	1.95	2.85	0.3	1.1	礫面	95	—	
97	SD4005拡張上層	使用痕剥片	黒曜石	—	3.5	2.13	0.55	3.8	平坦	95	85	両面微細剥離・刃先角30～35°
98	SD4005拡張上層	残核	黒曜石	1/2	3.0	2.45	2.1	15.6	礫面・平坦	—	80-85	
99	SD4005拡張上層	剥片	安山岩	—	2.0	4.25	0.78	4.7	点	—	—	
100	SD4005拡張東側	剥片	黒曜石	—	2.7	3.35	0.65	4.3	平坦	—	—	

番号	出土遺構・層位	種類	石材	礫面残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	打面形状	剥離角ポジ面	剥離角ネガ面	備考
101	SD4005拡張東側	剥片	黒曜石	1/10	2.93	2.2	0.57	2.6	平坦	97	—	
102	SD4005拡張東側	剥片	黒曜石	1/5	2.95	1.6	0.78	2.8	礫面	105	—	
103	SD4005拡張東側	剥片	黒曜石	1/2	2.7	2.1	0.55	2.3	礫面	102	—	
104	SD4005拡張東側	調整剥片	黒曜石	1/2	2.27	1.83	0.56	2.1	—	—	—	押圧剥離・石鏃への成形を指向
105	SD4005拡張東側	剥片	黒曜石	1/10	1.85	2.2	0.47	1.4	礫面	105	75	
106	SD4005拡張東側	剥片	黒曜石	—	1.8	2.3	0.27	1.2	点	—	—	
107	SD4005拡張東側	剥片	黒曜石	—	2.46	1.67	0.27	1.0	点	—	—	
108	SD4005拡張東側	剥片	黒曜石	1/10	1.71	1.94	0.42	1.1	点	—	—	
109	SD4005拡張東側	剥片	安山岩	—	3.25	1.8	0.45	2.1	切子	50	—	
110	SD4005拡張東側	残核	安山岩	1/2	3.2	2.67	1.05	9.6	—	—	—	
111	SD4005清掃	剥片	黒曜石	1/10	2.95	1.34	0.24	0.9	平坦	130	—	
112	SD4005清掃	石鏃未成品	黒曜石	—	(2.2)	2.1	0.47	(2.3)	—	—	—	全面押圧剥離
113	SD4005清掃	残核	黒曜石	1/3	3.21	2.3	1.5	7.4	礫面	—	75	
114	SD4005清掃	残核	黒曜石	1/3	4.5	1.93	1.9	15	礫面	—	80	
115	SD2019・R-1	残核	黒曜石	1/2	2.45	4.6	1.6	15.5	礫面	—	75	
116	SD2019・R-1	剥片	黒曜石	—	3.7	2.25	0.5	3.3	平坦	90	—	
117	SD2019・R-1	剥片	黒曜石	1/10	2.75	1.57	0.45	1.9	点	—	—	
118	SD2019・R-1	剥片	黒曜石	1/10	3.17	1.42	0.59	1.7	礫面	100	—	
119	SD2019・R-1	剥片	黒曜石	1/10>	2.85	1.4	0.3	1.1	平坦	90	—	
120	SD2019・R-1	剥片	黒曜石	1/3	1.85	1.85	0.5	1.1	礫面	60	—	
121	SD2019・R-1	剥片	黒曜石	1/3	2.6	0.9	0.28	0.5	—	—	—	
122	SD2019・R-1	剥片	安山岩	—	2.09	3.45	0.55	3.4	平坦	65	—	
123	SD2019・R-1	剥片	安山岩	—	1.4	1.7	0.3	0.7	—	—	—	
124	SD2019・R-1	剥片	安山岩	—	1.45	1.0	0.2	0.2	—	—	—	
125	SD2019・R-2	剥片	黒曜石	1/10	3.74	2.85	0.6	6.2	平坦	100	—	受熱？
126	SD2019・R-2	剥片	黒曜石	1/2	2.65	1.85	0.57	3.8	切子	125	—	受熱？
127	SD2019・R-2	剥片	黒曜石	1/3	3.1	1.35	0.92	2.4	—	—	—	
128	SD2019・R-2	剥片	黒曜石	1/5	2.87	1.4	0.3	1.5	平坦	100	75	
129	SD2019・R-2	剥片	黒曜石	1/5	1.55	2.4	0.59	1.7	礫面	100	85	
130	SD2019・R-2	剥片	黒曜石	1/10	2.43	1.23	0.43	1.3	平坦	90	—	
131	SD2019・R-2	剥片	黒曜石	—	2.07	1.16	0.3	0.7	平坦	80	—	
132	SD2019・R-2	剥片	安山岩	—	2.75	1.39	0.49	1.7	—	—	—	
133	SD2019・R-1・2	剥片	黒曜石	—	2.97	1.75	0.28	1.5	平坦	100	75	
134	SD2019・R-3	残核	黒曜石	4/5	4.3	3.1	3.45	49.6	礫面	—	120	
135	SD2019・R-3	剥片	安山岩	1/10>	5.1	5.9	1.05	28.1	平坦	125	50	
136	SD2019・R-3	剥片	玄武岩	—	2.77	7.25	0.65	16.0	—	—	—	
137	SD2019・R-3	剥片	黒曜石	1/10	2.9	3.75	1.48	9.6	平坦	140	—	
138	SD2019・R-3	剥片	黒曜石	2/3	4.35	1.7	0.48	3.5	礫面	100	—	
139	SD2019・R-3	剥片	黒曜石	1/3	3.3	1.9	0.45	2.6	平坦	85	—	
140	SD2019・R-3	剥片	黒曜石	1/3	2.1	3.3	0.75	3.1	礫面	90	55	
141	SD2019・R-3	剥片	黒曜石	1/2	1.85	2.06	0.62	2.5	平坦	145	—	
142	SD2019・R-3	剥片	黒曜石	1/10	1.9	2.1	0.25	1.1	点	—	—	
143	SD2019・R-3	剥片	黒曜石	—	1.87	1.4	0.38	0.8	礫面	95	—	
144	SD2019・R-3	剥片	安山岩	—	1.9	2.5	0.47	1.6	切子	120	—	
145	SD2019・2層	残核	黒曜石	1/3	2.65	2.7	0.9	6.4	礫面	—	70	
146	SD2019・2層	剥片	黒曜石	1/4	3.1	1.8	0.67	4.2	切子	85	—	
147	SD2019・2層	剥片	黒曜石	1/5	3.43	1.07	0.37	1.5	礫面	40	—	

番号	出土遺構・層位	種類	石材	礫面残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	打面形状	剥離角ポジ面	剥離角ネガ面	備考
148	SD2019トレンチ・3層	残核	黒曜石	1/2	2.65	3.58	1.58	13.8	礫面	—	70	
149	SD2019トレンチ・3層	剥片	黒曜石	1/5	4.77	2.2	0.77	7.2	切子	90	—	
150	SD2019トレンチ・3層	剥片	黒曜石	1/10>	2.95	2.75	0.95	5.0	礫面	110	—	
151	SD2019トレンチ・3層	剥片	黒曜石	1/10	2.65	1.75	0.75	3.1	点	—	—	
152	SD2019トレンチ・3層	剥片	黒曜石	—	2.95	1.77	0.35	1.4	切子	72	—	
153	SD2019トレンチ・3層	剥片	黒曜石	1/10>	1.45	2.65	0.65	1.8	切子	90	—	
154	SD2019トレンチ・3層	剥片	安山岩	—	2.3	2.5	0.3	1.7	不明	—	—	
155	SD2019トレンチ・4層	剥片	黒曜石	1/7	3.15	4.4	1.2	15.1	礫面	65	—	
156	SD2019トレンチ・4層	剥片	黒曜石	1/7	4.09	1.9	1.2	8.0	礫面	120	—	
157	SD2019トレンチ・4層	剥片	黒曜石	1/5	1.78	2.53	0.7	2.2	礫面	86	—	
158	SD2019・南側3・4層	剥片	黒曜石	1/10	4.3	3.0	0.85	11.5	礫面	110	—	
159	SD2019・南側3・4層	剥片	黒曜石	1/10>	2.85	3.4	0.93	7.2	礫面	85	—	
160	SD2019・南側3・4層	剥片	黒曜石	1/10>	2.89	2.43	0.77	4.9	切子	117	—	
161	SD2019・南側3・4層	剥片	黒曜石	1/2	(2.57)	1.87	0.35	1.6	平坦	90	—	
162	SD2019・南側3・4層	剥片	黒曜石	1/6	(2.34)	2.1	0.82	3.3	—	—	—	ノッチ状使用痕？
163	SD2019・南側3・4層	剥片	安山岩	—	2	2	1.73	2.7	平坦	122	—	
164	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/10	3.47	2.77	0.92	6.8	平坦	95	—	
165	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/10>	3.42	3.37	0.44	4.2	礫面	100	—	
166	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/10>	3.28	2.9	0.25	2.6	礫面・点	—	—	
167	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/10>	2.6	2.6	0.5	2.9	切子	102	—	
168	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/10>	2.7	1.77	0.48	2.5	平坦	100	—	
169	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/2	2.42	1.67	0.54	1.4	礫面	90	—	
170	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/2	(1.8)	(2.36)	(0.9)	(2.7)	平坦	106	—	
171	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/2	2.48	1.5	0.67	1.8	切子	110	—	
172	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/10>	(2.48)	1.85	0.29	(1.7)	—	—	—	
173	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	—	3	1.14	0.53	1.3	平坦	110	—	
174	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/10>	2.7	1.17	0.29	1.0	礫面	105	—	
175	SD2019・北側3・4層	剥片	黒曜石	1/2	(1.5)	2.8	(0.2)	(0.8)	—	—	—	
176	SD2019・北側3・4層	剥片	安山岩	—	4.7	2.75	0.6	5.7	点	—	—	
177	SD2019・090810	剥片	安山岩	—	1.75	1.65	0.3	0.6	平坦	145	—	

報 告 書 抄 録

ふりがな	せんり
書名	千里
副書名	千里遺跡第１次調査・周船寺遺跡第１９次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1117集
編著者名	板倉有大(編)　山崎龍雄　パリノ・サーヴェイ株式会社　西澤千絵里
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号　電話：（092）711-4667
発行年月日	2011年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
せんりいせき 千里遺跡	ふくおかし 福岡市 にしくせんり 西区千里	40132	020745	33度33分49秒	130度14分26秒	20090611 ～ 20100331	10,304	記録保存調査
すせんじいせき 周船寺遺跡	ふくおかし 福岡市 にしくせんり 西区千里	40132	020689	33度33分54秒	130度14分28秒	20090611 ～ 20090731	301	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項
千里遺跡 第1次調査	集落	縄文時代晩期	埋甕・溝・包含層	縄文土器・石器	黒川式期の可能性が高い溝を3条確認した
	集落	弥生時代	竪穴住居・掘立柱建物・溝・貯蔵穴・土坑・土器溜まり・柱穴	弥生土器・石器	市内5例目の天河石製丸玉が出土した
	集落	古墳時代	竪穴住居・方形周溝遺構・祭祀土坑・土坑・溝・柱穴・落ち込み状遺構	土師器・石器・鉄器	比較的遺存状態のよい方形周溝遺構を確認した
	集落	中世前期	掘立柱建物・井戸・土坑墓・土坑・柱穴・流路	土師器・須恵器・陶磁器・滑石製品・鉄器	
	集落	中世後期	区画溝・溝	土師器・須恵器・陶磁器・鉄滓	
	集落	近世	溝・水田・柵	土師器・陶磁器・瓦	
周船寺遺跡 第19次調査	集落	縄文時代晩期～弥生時代中期	掘立柱建物・溝・流路	縄文～弥生土器・石器	

要約

本調査では、千里地区内において、縄文時代晩期から近世にいたるまで集落と耕地が営まれてきたことが明らかになった。縄文時代後期後葉～晩期（三万田式～黒川式期）の遺構・遺物は、日本列島における水稲農耕の導入をめぐる議論に重要な資料を提供する。弥生時代から古墳時代の遺構・遺物は、魏志倭人伝に記された伊都国の形成・展開を考える上で貴重な資料となる。古代には怡土城下、中世には高祖城下の集落という性格を有し、古代・中世の怡土郡・怡土荘の姿を復元する上でも重要である。また、本調査は千里遺跡としては第1次の発掘調査であり、千里遺跡が縄文時代晩期から近世にいたる複合遺跡として周船寺遺跡の南側に広がることが明らかとなった。本調査の成果を活かして、今後も千里地区内における埋蔵文化財の保護が一層図られることが期待される。

千里

千里遺跡第1次・周船寺遺跡第19次調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1117集

2011年（平成23年）3月18日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話：（092）711-4667

印刷　大成印刷（株）
福岡市博多区東那珂3丁目6-62
電話：（092）472-2621